

GIFU
KEIZAI
UNIVERSITY
50TH
ANNIVERSARY

創立 50 周年記念誌



岐阜経済大学
GIFU KEIZAI UNIVERSITY

岐阜経済大学 学歌

作詞／花田鶴彦 作曲／網代栄三

- 1 伊吹嶺に 陽は射し映えて
青雲の 光り飛ぶ朝
いまわれらここに集いて
経国の 息吹き強く
こぞり起つ使命は聖し
おお 仰げ岐阜経済大学
- 2 大垣の 薫る歴史に
たゆみなき揖斐の流れと
世を興す ゆめも愉しく
友愛の 花咲く窓に
究めゆく 真理のとびら
おお 勢え岐阜経済大学
- 3 吹きかようみどりの風も
虹を吹ぶ 濃尾平野に
自主の旗 たかくかざして
盛りあがる国の明日を
担い立つ 理想栄光あり
おお 謳え岐阜経済大学

学章



1967（昭和42）年4月の本学の開学にあわせ、開学の前年度に一般公募により選定された、恵那郡の丹羽幸三氏の作品に一部修正を加え、学章として決定。
岐阜県の県木「イチイ」の葉を図案化したもので、たゆまない躍進を象徴している。

建学の精神

1966（昭和41）年9月「設立趣意書」より

「社会事態に対処するためには、まづ有為な人材育成に着目し、一は**創造発見**の能力伸長を図り、一は社会指導の負荷に耐えうる**知才の涵養**に留意し、もって**人間資質の真価を發揚**せしめることがもっとも肝要とします。」

「ここに青年学徒の教育地はもつばら都座をさけ自然の環境にめぐまれた大垣市の中心部より北部にはなれること三、〇〇〇米、文化においては昔日大垣城下古献豊かな適地に校地を求めて大学を設立し、もって一面近代的広域行政にもとずく学園都市形成をめざす**地元先覚の要望**に**応えて**、中部岐阜県独自の壮大なる気宇を培い理想に燃えつつも現実より遊離せず他日内外に雄飛する気魄をもつ青年社会人を育成しようとするものであります。」

設立趣意書の文言と内容から、本学の「建学の精神」を示す言葉として、次の4つの言葉を導き出すことができます。

創造発見
知才涵養
資質發揚
地域貢献

- **創造発見** … 新たな価値を創造・発見するよろこびのあるキャンパスを実現します。
次代を切り拓く価値創造により、これからの経済社会を構想します。
- **知才涵養** … 座学と実践の連関のなかで主体的に学び続ける人を育てます。
生涯にわたり学び続けることのできる基礎を築きます。
- **資質發揚** … 自らの真価を發揮できる実践的な人を育てます。
グローバルな視野をもつ地域リーダーを養成します。
- **地域貢献** … 地域創生とその持続的発展に貢献します。
地域に有為な人材育成と、地域の知の拠点として社会の課題に果敢に挑戦し、西濃学園都市の実現を目指します。

社会的使命

建学の精神の語句の内容をさらに簡潔にまとめる場合、建学の精神の4つの頭文字「創知資地」を読み下せば、「知を創り、地に資する」となり、これこそが本学の社会的使命であると考えます。

「**創知資地**」**知を創り、地に資する**

教育目的

「**地域に有為の人材を養成する**」

教育理念

本学がこれまで実践してきた教育、また今後果たすべき役割を踏まえ、教育目的である「地域に有為の人材を養成する」をいかに実現するかを手法的、理念的に規定したものです。

自主創造教育（新たな価値をうむ）

さまざまな先入観や偏見などに捉われず、自主的に学び、自由に考え、新たな価値を生む精神を育てます。

地域実践教育（地域で学び、地域をつくる）

講義等で得た知識をもとに、「地域」の課題を発見し、解決策を考え、提案・行動し、再び理論的な考察にまで結びつける力を養成します。

キャリア形成教育（キャリアを拓く）

専門教育に加え、豊かな人間性を涵養する教養教育と学生自身のキャリアを拓くための就職支援教育を有機的に総合させた教育を展開します。





創立50周年記念事業実行委員会 会長
(学校法人 岐阜経済大学 第7代理事長)

土屋 嶠

創立50周年を迎えて

岐阜経済大学は、本年、創立50周年の節目の年を迎えました。また同時に、大学の設置者である学校法人岐阜経済大学は、設立の経緯を同じくする学校法人大垣女子短期大学と法人合併し、新法人「学校法人大垣総合学園」としてスタートいたしました。

学校法人大垣総合学園の役員・評議員には、従前の学校法人岐阜経済大学と同様、地元自治体、経済界、教育界、医療機関など、各界トップの方々にご参画いただいております。このような体制で法人運営ができますのも、大垣の風土、文教を尊ぶ町である証であり大変うれしく思います。

新法人におきましても、引き続き岐阜経済大学創立50周年記念事業を推進してまいります。皆様からのご支援やご協力により本事業が円滑に実施されていることに、学校法人を代表して深く感謝申し上げます。

創立50周年記念事業の基本コンセプトは、「re-Birth - 西濃学園都市に新たな“いぶき”を起こす-」です。教育の一層の充実を図るとともに、ハード事業として新体育館、新食堂、そして新2号館の建設、既存施設設備の改修による学習環境の改善事業を進めており、創立50周年を機に「re-Birth」、すなわち生まれ変わるにふさわしい様相となっております。私たちは、将来をしっかりと見据えた大学づくりに邁進いたします。

今回の記念事業を実施するにあたり、大垣市をはじめとする経済界、卒業生、在学生、教職員など、多くの方々より浄財をいただきました。誠にありがとうございました。今後も、これまで以上に地域貢献を推進し、常に地域での存在感を示すとともに、この岐阜県西濃地方における高等教育機関と公私立の高等学校などの教育機関が集う学園都市＝「西濃学園都市」の実現に向け努力していきたいと考えています。その中核を担うのが岐阜経済大学でございます。今後ともご支援ご厚情を賜りますようお願いを申し上げ、お礼の挨拶といたします。



創立50周年記念事業実行委員会 委員長
(第11代学長)

石原 健一

1967(昭和42)年4月、岐阜経済大学は、地元住民は元より、政財界、教育界の期待と支援を受け、大垣の地にその産声をあげました。当時の設立趣意書には、設立の経緯から今日的な課題までの本質的な主旨が叙述されています。

「社会事態に対処するためには、まず有為な人材育成に着目し、一は創造発見の能力の伸長を図り、一は社会指導の負荷に耐えうる知才の涵養に留意し、もって人間資質の真価を発揚せしめることが最も肝要」と、本学が中心課題と位置付けている有為な人材の養成を目指し、責任ある立場にあっても怯まない人間力の育成を伴って推進されねばならないと述べられています。趣意書はさらに続き、大垣の地において学園群を形成し、その中心として、岐阜県全体に理想に燃えた将来のリーダー層を輩出すること、そして、「内外に雄飛する気魄をもつ青年社会人の育成」により、今日のグローバル社会での人材養成の課題を予見しています。本学先人の正鵠を射た趣意書の文言には唯唯身が引き締まる思いがします。

しかし、この壮大にして、挑戦の志溢れる文書に比し、今日の本学には未だ足らざるところが多いと言わざるをえません。それ故、2017(平成29)年6月1日、創立50周年という記念すべき日を迎えるにあたり、今日の人口減少期において、地域創生に貢献する高等教育機関としての役割と使命を果たすべく、一層の努力を致す決意であります。その気概を改めて世に問うために、事業の基本コンセプトを「re-Birth(再び生まれ変わる)」とし、創立時の先達の高い志に想いを馳せ、趣意書から別出した「創造発見」「知才涵養」「資質発揚」「地域貢献」の四つの文言を建学の精神として再定義しました。さらに建学の精神の頭文字「創知資地」を読み下し、「知を創り、地に資する」を本学の社会的使命として新たに掲げました。

本学は、この50周年を機に、本学の課題、本学への期待、本学の可能性を再確認し、学びの内実において、地域社会のリーダー養成という初発からの課題と期待に応えるべく、環境を整え、充実した教育への挑戦を進め、新たな支持者を得たいと考えます。そのためにも、50周年を機に大垣女子短期大学という新たなパートナーを得(法人合併、2017年1月11日、文科省認可新法人名 大垣総合学園)、設立趣意書の初期の目的、西濃学園都市構想を実現すべく邁進していく所存であります。

創立50周年記念事業を実施 するにあたって



岐阜経済大学 学長
山田 武司

50年の歴史から、 次の50年に向けた新たな 扉を開く

このたび岐阜経済大学は50周年を迎えることができ、この50周年記念誌を教職員のご尽力により発刊できたことに大きな喜びを感じております。さらに、この50年の歳月の中で、本学にこれまで関係していただいた多くの皆様に心より感謝を申し上げます。

本学が創立されたのは1967（昭和42）年であり、当時の大垣市長である山本庄一氏に学園長を、この後1978（昭和53）年に文部大臣に就任された内藤誉三郎氏に理事長を、文学博士の大友抱璞先生に学長を務めていただきました。開学当初の「大学案内」には、本学の創立に関して、中部経済圏の一翼をなす当地方経済界の発展の中で「社会指導の負荷に耐える有為な人材を育成する必要から、県下教育界・財界に大学設置の機運が醸成され、（中略）県・大垣市の支援のもと岐阜経済大学の設置を見るに至った」と記されています。

このように本学は、地元自治体、経済界、教育界の熱意により社会科学系の公設民営大学として始まり、「地域に有為の人材を養成する」ことを教育目的に掲げてまいりました。そして、創立当初は経済学部経済学科の単科大学でありましたが、学部学科の新設や改組を経て現在は経済学部経済学科と公共政策学科を、経営学部スポーツ経営学科と情報メディア学科を、さらに、大学院経営学研究科、留学生別科を擁する総合大学となりました。

本学は、創立50周年を期に、本学建学の理念を再定義するべく、1966（昭和41）年に文部省（現：文部科学省）に提出した学校法人岐阜経済大学寄附行為認可申請書にある「設立趣意書」を改めて読み解き、建学の精神を「創造発見」「知才涵養」「資質発揚」「地域貢献」として再定義しております。

この50年の年月を経て、学校法人岐阜経済大学は学校法人大垣女子短期大学と法人合併を行い、2017（平成29）年4月より学校法人大垣総合学園となり、さらなる少子化時代に向け、経営基盤の強化が図られたところです。岐阜経済大学は、「re-Birth 西濃学園都市に新たないぶきを起こす」ことを使命に、次の50年に向けて新たな扉を開いていく所存であります。

このたび、岐阜経済大学が創立50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

岐阜経済大学は、「地域に有為の人材を育成する」ことを教育目的とし、岐阜県下初の社会科学系大学として創立されて以来半世紀に亘り、約2万5千人の優秀な人材を輩出してこられました。卒業生の皆様には、岐阜県内はもちろん全国各地においてご活躍いただいております。人材育成や高等教育の推進に御尽力された歴代の理事長や学長をはじめ、関係者の皆様方に深く敬意を表するものであります。

さて、我が国そして本県においても、人口減少、少子高齢化の進展はとどまるどころかさらに加速し、私たちの生活に影響を及ぼしています。こうした厳しい社会情勢の中、大学はその魅力や特色のある教育により、若者を呼び込む機能を有していることから、本県では大学との連携をより一層推進し、将来を担う人材を育成するための施策や、県内で就職・定住し活躍していただける社会を作っていくことが大切だと考えております。

また、本県には、誇るべき地域資源がたくさんございます。私たちは本県を「清流の国ぎふ」と呼び、先人より引き継がれてきた『知』『創』『伝』の精神を未来に大きく展開していく必要がございます。これらの精神を引き継いでいくのが若者であり、若者を育て、地域に密着しながら連携している大学には大きな役割を期待しておりますところ、岐阜経済大学におかれましては、早くから地域との連携、地域の将来を担う人材の育成を進められ、本県に多大なご貢献をいただいております。これからも引き続き「清流の国ぎふ」である本県の発展にご協力賜りますようお願い申し上げます。

最後に、岐阜経済大学が創立50周年を契機に、100年先、200年先を見据えながら一層発展されていくことを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



岐阜県知事
古田 肇

創立50周年を祝して



大垣市長
小川 敏

創立50周年を祝して

岐阜経済大学が記念すべき創立50周年を迎えられましたことに心からお祝い申し上げます。

貴学は、県内初の社会科学系の大学として、1967(昭和42)年に創設されて以来、「自主と自由」・「全人教育」・「地域との共生」の教育理念のもと、地域に有為な人材の養成にご尽力されるとともに、輝かしい伝統を築き上げてこられました。

これまで2万5千人以上の学生がこの大学で学び、多くの優秀な人材を輩出されており、いずれも地元や全国各地において、幅広い分野でご活躍しておられます。

大学関係者の皆様におかれましても、審査会をはじめ様々なところで市政運営や地域社会活動において格別のご支援、ご協力をいただいております、大変ありがたく思っております。

こうした歩みを顧みますとき、歴代の理事長、学長をはじめ、関係各位のご尽力に対し、深く敬意と謝意を表する次第でございます。

大垣市も来年、市制100周年という記念すべき節目の年を迎えますが、現在本市では、「子育て日本一」や「安全・安心」など、誰もが暮らしやすいまちづくりとともに、観光や産業振興にも力を入れ、魅力と活力あるまちづくりに取り組んでおります。

その中でも、少子高齢化、人口減少が進む中、地域社会を担う若く優秀な人材の育成は、最も優先すべき重要な課題の一つでございます。

本市といたしましては、郷土大垣の更なる飛躍に向けて、引き続き人材育成の拠点である貴学との連携を密にさせていただきながら、産学官一体となって、夢と希望あふれる「楽しい大垣」を創ってまいりたいと考えておりますので、今後とも一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、創立50周年を契機として、岐阜経済大学が益々の発展を遂げられますことを心から祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。



大垣商工会議所 会頭
堤 俊彦

岐阜経済大学が創立50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴学は、1967(昭和42)年に岐阜県下初の4年制の社会科学系大学として、地域経済を担う人材の育成を目的に、地元自治体、産業界及び教育界の熱い期待を一身に担い公設民営の大学として創立されました。以来、50年間にわたり約2万5千人の有為な人材を全国に輩出されております。

この間、常に時代の変化を的確に捉え、地域における社会的使命を果たすため、建学の精神を「創造発見」「知才涵養」「資質発揚」「地域貢献」の4つに再定義され、学部・学科の増設、施設の整備・充実に努められるとともに、学術、教育振興はもとより、文化、スポーツ振興に力を傾注し、全国に名を轟かせるなど、地域における学術、教育機関として、確固たる基盤を確立、形成されました。歴代の理事長、学長をはじめとする関係者の皆様方のこうしたたゆまぬご努力に対し深く敬意を表する次第であります。

当商工会議所では、依然として厳しい地域経済情勢が続く中、「活かせ英知 地域に元気と活力を!」をキャッチフレーズに掲げ、中小企業・小規模事業者への伴走型経営支援やIT活用の推進、人材の確保・育成支援を柱に、中心市街地活性化や交流産業の創出、産業基盤の整備促進などに精力的に取り組んでいます。

こうした中、貴学におかれましては、当商工会議所が推進する産学連携事業に積極的に関わっていただき、マイスター倶楽部による中心市街地活性化事業をはじめ、産業振興や人材育成・確保、交流産業戦略を推進するための調査研究事業などに多大なご貢献をいただきました。今後も、引き続き、地域経済の振興・発展に向けた諸事業にご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、岐阜経済大学がその建学の精神を強く貫き、地域になくてはならない大学として更なる躍進・発展をされますことを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

岐阜経済大学50周年に 寄せて



岐阜経済大学親和会 会長
中村 謙一郎

受け継がれてきた 建学の精神のもとで

岐阜経済大学が創立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

岐阜経済大学は、1967（昭和42）年に地元自治体、経済界、教育界の要望と支援のもと、岐阜県下初の社会科学系の公設民営大学として誕生されました。「地域に有為の人材を養成する」ことを教育目的として、これまでに約2万5千人の人材を各界各層に送り出されています。

めまぐるしく変化する時代の中で、社会のニーズを的確にとらえ、大学施設環境の整備・充実に努められますとともに、教育はもちろんのこと、文化やスポーツに対しても注力し、岐阜経済大学の名を全国に轟かせております。創立以来、歴代の理事長や学長をはじめ、岐阜経済大学に携わる関係者のたゆまぬご努力の賜であると、深く敬意を表するものであります。

親和会では、大学教育・学生生活を後援することを第一の目的としており、現在は、社会福祉実習室やPAC支援室などへの図書寄贈、通学バスへの助成、クラブ活動や大学祭への助成出展、食生活応援事業、父母懇談会の開催、親和会だよりの発行等、多様な事業を展開しています。

さて、近年の大学を取り巻く環境は非常に厳しいものがありますが、50年間脈々と受け継がれてきた建学の精神のもと、地域社会と積極的に関わり、社会の様々な分野で活躍できる人材の育成を60周年に向けて努めていただきたいと思います。親和会といたしましても、精一杯ご協力をさせていただき所存です。

最後に、岐阜経済大学が、この創立50周年を契機とし、これまでに築かれた歴史と伝統のもと、更なる発展をされることを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



岐阜経済大学校友会 会長
安田 良邦

岐阜経済大学が開学50周年の節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

貴学は、1967（昭和42）年4月、大垣市を中心とする自治体、経済界、教育界の熱い要望と支援を受け、多くの期待の下、西濃圏域の中心地大垣市に県下初の社会科学系大学として誕生しました。

校友会も約2万5千名となり、脈々と伝統を築きつつあります。それぞれの職種も企業経営者、自治体首長、地方議員、教員、公務員、元プロボクシング世界チャンピオン等、全国各地の各分野で活躍をされています。

学生の後輩達がスポーツ指導やまちづくり等、地域に溶け込み、得意分野で活躍されている姿に接すること、また、その様子を報道で目や耳にすることは、頼もしい限りです。

しかし、この50年間の世の中を見ると、移り変わりが激しく、先行き不透明な状態であると感じております。

少子化が進み学生数が減少傾向であるにも関わらず、大学の設置は増えており、この先、優秀な学生をいかに確保するかという課題があります。

校友会としましては、既に問題意識を持ち、校友会設立40周年記念事業で、大学設立の主旨である「有為な人材を育成し、理想に燃えたりーダー層を輩出する」を実現するために「母校興隆に関する提言書 ～私立大学の公立化による持続的なまちづくりへの提言～」として、提案しております。公設民営化で設立された岐阜経済大学が公立化されることをOBも待ち望んでいます。

今後、70周年・100周年時に岐阜経済大学の卒業生が全国で活躍し、日本経済に大きく貢献する姿を想像し、さらなる岐阜経済大学の発展を心からご祈念申し上げます。

岐阜経済大学50周年に 寄せて

学歌・学章 02
建学の精神・社会的使命 04

挨拶

創立50周年記念事業実行委員会 会長 土屋 嶋 06
創立50周年記念事業実行委員会 委員長 石原 健一 07
岐阜経済大学 学長 山田 武司 08

祝辞

岐阜県知事 古田 肇 09
大垣市長 小川 敏 10
大垣商工会議所 会頭 堤 俊彦 11
岐阜経済大学親和会 会長 中村 謙一郎 12
岐阜経済大学校友会 会長 安田 良邦 13

通史I—Category

学部学科の変遷 18
正課教育の変遷 20
国際交流の変遷 24
地域連携の変遷 26
課外活動の変遷 30
施設の変遷 34

column

1 野球に全力投球した大学生活 / 塚田 勝 52	11 思い出の海外語学研修 / 奥田 幹成 83
2 少林寺拳法の教え / 石川 博久 52	12 充実した日々を送った大学時代 / 立石 英明 83
3 青春の1ページ / 須藤 修二 53	13 様々なチャレンジをした貴重な4年間 / 菅田 英生 84
4 一生の志を決意した大学時代 / 鈴木 祐一 53	14 大学生生活を振り返って / 宮地 勲 97
5 大学の友人との交流 / 田島 孝浩 70	15 ボート部での思い出 / 三谷 浩一 97
6 やりきることの大切さ / 三輪 光司 70	16 4年間で学んだ「連携」と「協働」 / 堀 あゆ美 98
7 今は今しかない / 勝野 正巳 71	17 かけがえない私の財産 / 恒見 愛里 113
8 陸上部創設と黎明期 / 小川 正洋 71	18 人生濃縮の学生生活 / 畠山 晶利 113
9 多くの「出逢い」をくれた大学時代 / 馬淵 環 82	19 「ありがとう」岐阜経済大学 / 王 蘇珊 114
10 わが青春時代「失われない時間」 / 土本 繁 82	20 大学時代に学んだ三つのモットー / 高堂 祐樹 114

通史II—Every 10years

1967-1976 ●設立準備から創立10周年まで 40
Topics 1 「岐阜経済大学の教学と経営」の原点 / 小倉 正紀 (元職員) 50
●50周年記念座談会「開学期を振り返って」 54
1977-1986 ●創立10周年を迎え、成長期へ 60
Topics 2 1970年代後半から1980年代後半 / 酒井 博世 (岐阜経済大学 元経営学部長) 68
Topics 3 大学の中心的存在だった「白亜の図書館」 / 米勢 信次 (元職員) 69
1987-1996 ●創立20周年を迎え、発展期へ 72
Topics 4 大学発展の礎・経営学部を設置した頃 / 岡本 高廣 (元職員) 80
Topics 5 海外留学生受け入れの思い出 / 猪平 進 (岐阜経済大学 名誉教授) 81
1997-2006 ●創立30周年を迎え、円熟期へ 85
Topics 6 岐阜経済大学創立50周年に寄せて / 黒川 博 (岐阜経済大学 元学長) 95
Topics 7 経済大にスポーツがやってきた! / 高橋 正紀 (岐阜経済大学 経営学部教授) 96
2007-2016 ●創立40周年を迎え、飛躍期へ 99
Topics 8 千代紀の変わり目からのキャリア形成支援の推進 / 竹内 治彦 (岐阜経済大学 経営学部教授) 111
Topics 9 PAC 支援室創設の思い出 / 古口 博之 (岐阜経済大学 経営学部教授) 112

資料編

1 学校法人岐阜経済大学 役員・評議員 116
2 歴代理事長・歴代副理事長 117
3 歴代学長 118
4 歴代法人役員・評議員 119
5 現旧教職員 122
6 歴代役職者 126
7 歴代親和会・歴代校友会 会長 128
8 協定締結先 129
9 強化指定・準強化指定クラブ 130
10 各地から集い、各地で活躍する経大生 132
11 図書館蔵書数の推移 133

編集後記 134

GIFU KEIZAI UNIVERSITY 50TH ANNIVERSARY

通史 I — Category

【凡 例】

1. 本書は、原則として2017（平成29）年3月末までの事項を記述した。
2. 年号は西暦とし、和暦を併記した。一部については必要に応じて西暦のみとし、和暦を省略した。
3. 数詞に相当する表記については原則としてアラビア数字を採用した。
4. 人名は原則として敬称を省略し、役職名は記述当時のものとした。
5. 国名、地名、法人名は原則として該当時期のものとし、必要な場合は現在の名称を付記した。



岐阜県初の社会科学系大学として発足

1967（昭和42）年4月、本学は将来の中部圏の経済を担い、社会の中堅として活躍する人材の育成を求め、地元大垣市を中心とする自治体、産業界および教育界の熱い要望のもと、岐阜県における初めての社会科学系大学として発足しました。当初は、経済学部第一部経済学科のみ、入学定員200名でスタートしましたが、翌1968（昭和43）年4月には、地域の勤労学生に大学への門戸を開くため、第二部（定員200名）を開設。

1976（昭和51）年に経済学部第一部経済学科の定員を300名に増員しましたが、一方、第二部経済学科の定員は100名に減じ、更に80年代に入ると勤労学生も減少したため、時代の変化に合わせて1983（昭和58）年に第二部の学生募集停止に踏み切りました。1986（昭和61）年4月に、経済学部産業論を主軸に、経営学・会計学との結合を目指した「産業経営学科」を入学定員150名で設置し二学科体制へ。1987（昭和62）年に経済学部第二部経済学科を廃止し、経済学部第一部を経済学部へ改称しています。

産業経営学科は1991（平成3）年に期間付定員増により定員250名に増員しています。

待望の二学部体制がスタート

1994（平成6）年4月には、情報化時代に対応し地域社会の要請に応えるべく、既設産業経営学科を基に産業論・経営学・情報科学の三位一体の体系からなる経営学部を開設し、産業経営学科（入学定員250名）と経営情報学科（入学定員100名）により、待望の二学部体制として21世紀社会にむけて新たに出発しました。

2000（平成12）年には、経済学部コミュニティ福祉政策学科（入学定員100名）を開設し、2学部4学科の体制へ。同学科では、21世紀のキーワードである「コミュニティ」を視野においた、福祉を軸とする地域づくりの担い手を育成しました。

この年から入学定員の削減も始まり、経済学科は入学定員を350名とし、経営学部産業経営学科は期間付入学定員50名を廃止し200名に。

翌2001（平成13）年度には、企業経営の中核を担い、高度職業人の養成をめざし、大学院経営学研究科修士課程（入学定員10名）および、留学生の学部入学前の日本語能力と日本理解の向上を目指し、留学生別科（入学定員30名）を開設。また、同年、学部では経済学部経済学科の入学定員を300名に漸減し、経営学

部では産業経営学科をビジネス戦略学科に名称の変更を行いました。

この後も入学定員の漸減が続き2004（平成16）年には経済学部経済学科の入学定員を180名、同コミュニティ福祉政策学科の入学定員を75名、経営学部ビジネス戦略学科の入学定員を75名へ。他方、大学院経営学研究科修士課程は入学定員を20名としました。

社会的ニーズに対応しながら学科を新設

2006（平成18）年4月には、経営学部スポーツ経営学科（入学定員70名）を開設。社会的ニーズの高まるスポーツマネジメントに注目し、経営学とスポーツ科学を複合的に学ぶことによって、あらゆるスポーツシーン、ビジネスシーンで活躍できる新しい人材育成を目指しました。この年も、入学定員の変更があり経済学部経済学科は150名、同コミュニティ福祉政策学科の入学定員を70名、経営学部経営情報学科を90名とし、ビジネス戦略学科は募集を停止へ。

2007（平成19）年4月には、経済学部コミュニティ福祉政策学科に発足時からの社会福祉士をめざすコミュニティ福祉専攻（入学定員40名）と介護福祉士養

成のための介護福祉専攻（入学定員30名）を設置。この年も、入学定員の変更があり経済学部経済学科は100名、経営学部経営情報学科を60名とそれぞれ削減しましたが、スポーツ経営学科は150名に増員。

2008（平成20）年4月から、経済学部コミュニティ福祉政策学科を、地域の現場に臨んで実践的に福祉を学ぶ臨床福祉コミュニティ学科に、経営学部経営情報学科を、メディア表現教育の重要性に基づき教育課程を大幅に強化した情報メディア学科に、それぞれ学科名称を変更し、2009（平成21）年4月には臨床福祉コミュニティ学科の定員を40名に変更しました。

2012（平成24）年4月からは、現行の臨床福祉コミュニティ学科を発展的に改組し、教育理念として「協働と共生の地域社会の構築に向かって、指導的な役割を果たす人材」の育成を掲げた公共政策学科を開設。経済学部経済学科の定員を90名、情報メディア学科を70名とし、2009（平成21）年4月から専攻を廃止し、課程に変更していた介護福祉士課程を2016（平成28）年3月に廃止しました。



講義風景 (1967年)



株式会社デリカサイト FOUNDER (会長) 堀 富士夫氏による企業人育成課程「地域企業研究」の授業 (2016年12月)

教育課程の編成

本学は、教育課程の編成にあたり、カリキュラム改革など、様々な改善に取り組んできました。そのような取り組みの中で、現在の教育課程は、2000年代の前半から中盤にかけて確立されたものです。

(1) セメスター制の導入

まず、2002 (平成14) 年度より、セメスター制が導入されました。セメスター制とは、半年毎に履修登録と単位認定を行う半期完結型の制度のことです。本学では、「基礎演習」と「演習」を除き、セメスター制が採用されています。

セメスター制が導入される以前は、通年制が採用され、1年に1回、年度初めに履修登録、年度末に単位認定が行われていました。しかし、教育改革をめぐる議論の中で、このような1年というサイクルは、学生が授業内容を理解して次のステップへと学習を進めるうえで、長すぎるのではないかと考えられるようになりました。当時の学生は、年度前半で授業内容の理解が十分ではない場合、年度後半の授業は内容を理解できないまま過ごしてしまった、ということもあったので

はないかと思われます。また、年度末の定期試験に臨むにあたり、1年分の講義内容について試験勉強をしなければならず、その授業の全範囲にわたる勉強ができない場合もあったことでしょう。

そこで、このような状況を改善するため、セメスター制を導入し、半年毎に履修登録と単位認定を行うこととしました。これにより、学生は、授業内容に関する自分の理解を半年毎に確認しながら次の科目へと学習を進めることができるようになりました。さらに、国際交流においても、セメスター制は効果的でした。

なお、それまでの通年制との接続の観点から、セメスター制導入後の2年間は事実上の移行期間となり、2004 (平成16) 年度から完全実施されることになりました。例えば、英語クラスが火曜と金曜、第二外国語クラスが月曜と木曜、というように振り分けられるなど、現在のような時間制に固定化されたのもこの時からです。

(2) カリキュラムの「共通化」

次に、2004 (平成16) 年度より、カリキュラム体系の「共通化」が行われました。本学のカリキュラムは、卒業に必要な124単位のうち、①教養科目32単位、

②専門科目54単位、③就職・資格取得支援科目8単位、そして、任意の分野から30単位をそれぞれ取得することが求められています。①、②、③の分野をカリキュラムにおける三つの柱とし、②は学部学科の特徴に基づき、①と③は全学共通で実施されています。また、任意の分野から学べる制度を設けているため、学生が自分の興味関心に応じた履修を進めることが可能となっています。例えば、教職や公務員を目指す学生は、この仕組みのもとで、卒業に必要な124単位の中で自分の目標を実現するための学びが可能になっています。本学では、このようにカリキュラム体系を「共通化」し、教育に取り組んでいます。

さて、大学における教育の中心的な組織は言うまでもなく「学部」です。本学においても、学部単位で教育が行われていますし、よって、教育改革に関する議論も学部毎に行われてきました。

しかし、大学教育は、学部が中心であるとはいえ、学部だけで完結するものではありません。いわゆる「専門教育」は各学部の特徴に基づいて行われるのですが、例えば、語学等の「教養教育」の場合は、全学共通での取り組みが望ましく、そのための組織が必要になります。また、本学には、教務課、学生課、キャリア支

援課といった組織があり、このような組織は、全学共通に学生生活の支援を担当しています。つまり、本学における教育組織は、学部を「縦軸」、「教養教育」に関する組織や、教務課、学生課、キャリア支援課といった全学共通に関わる組織を「横軸」とした、いわばマトリクス型の組織になっていると言えます。ですので、各学部の教育改革によって、専門教育の充実が図られる場合に、全学共通の教育に影響を与えてしまうこともありますし、逆に、全学共通の問題が制約になると、学部における教育改革が十分に進展しないことにもなりかねません。実際、各学部での教育改革の結果、例えば、学部間で卒業必要単位数が異なる時期さえもありました。

一般の企業に例えていえば、大学は事業部制に近い組織であると言えるのかもしれませんが。事業部制では、一定の権限を与えられた複数の製品毎の事業部が主体的に行動できる一方、財務、購買、労務、製造、販売といった職能別の横断的組織との調整など、全体を統括することも必要になります。本学では、1994 (平成6) 年に経営学部が開設され、二学部体制となって以降、事業部制と同様な問題が生じるようになったわけでした。

そこで、2004 (平成16) 年度より、カリキュラム体



村田富二郎教授のゼミ風景



就職合宿 (2013年)



学内ゼミナール大会トロフィー

系の「共通化」が行われました。①教養科目、②専門科目、③就職・資格取得支援科目、といった三つの分野を柱とした共通のカリキュラム体系とし、学部学科の特徴に基づいて実施される分野と全学共通で実施される分野とに整理することにより、「縦軸」と「横軸」の役割が明確になりました。特に、全学共通教育については、この「共通化」により、初年次教育、キャリア教育、PAC など、その後の様々な教育改善が実施される枠組みが確立されたと言えるでしょう。

(3) その他の諸制度

このような教育課程の編成に関する改革に伴い、様々な制度が発足しました。

例えば、「基礎演習」及び「演習Ⅰ～Ⅲ」が両学部共に必修となり、両学部の全学年において演習が必修となりました。これにより、1年次から4年次までの学生全員がいずれかの演習に所属することになり、演習担当教員を「担任」とした現在の学生指導体制が始まることとなりました。

また、就職・資格取得科目として「キャリア形成Ⅰ～Ⅲ」が開講され、キャリア教育が正課において実施されるようになりました。それまでの「就職指導」から正課における「キャリア教育」へと、本学の就職支援における飛躍的な充実が図られました。

その他、科目担当者と担任が連携して出席指導を行う「欠席報告システム」や外部の検定試験等を利用して基礎学力の確立を図る「検定科目」の導入等も行われました。

学内ゼミナール大会の伝統

本学では、毎年12月初旬に「学内ゼミナール大会」を開催しています。これは演習での研究成果を学生たちが発表し合う研究発表会であり、本学における一大

イベントです。本学では、演習間の研究交流等を促進する学生の組織として「ゼミナール協議会」が設けられ、同協議会の幹事会は各演習の代表者によって構成されていますが、「ゼミナール大会」は、開催に向けた準備段階から、最後の表彰式まで、この幹事会によって運営されています。当日は、複数の会場で並行して発表が行なわれ、教員の審査により、会場ごとに優秀賞等が決まります。講堂で行われる表彰式での盛り上がりは学生の努力の反映といえるでしょう。発表の内容は『学生論叢』として論文にまとめ、本学での学修の成果として公開し、次年度の大会を引き継ぐ後輩の閲覧に供しています。

このような「学内ゼミナール大会」は、本学開学7年目の1973（昭和48）年度から継続して開催されている伝統行事でもあります。その当時の学生によって制定された「岐阜経済大学ゼミナール協議会規約」の「前文」には、以下のように、ゼミナール活動の精神が述べられています。学生たちは、先輩の「精神」を引き継ぎ、「学術研究の場を創造」すべく、「学内ゼミナール大会」を発展させ続けています。

岐阜経済大学ゼミナール協議会規約〔前文〕

我々は学術研究を通じて、現代社会の諸現象あるいは諸矛盾の本質を分析し、把握する能力を養いこの社会の形式の過程及び論理を追求し、過去の歴史を冷静に見つめ、且つ現実の社会を直視する上において、これを批判的に検討し科学的立場に立脚しつつ自己の人間の成長とともに学問研究者に課せられたる実践的立場をめざすものである。

学問は本来森羅万象を凝視することから始まり、その態度は厳しくいかなる妥協をも許されない。この学問を行なう場がまさにゼミナールであり、大学である。

この様な本質を有する学問研究の場であるゼミナール(大学)は、社会との間に一定の間隔を保ちつつこれに係わりを持ち、絶えず科学的真理の探求とその還元をもって、よりよく社会を変革していかねばならない。

そのために、学問の自由と大学の自治の精神を強く自覚



学内ゼミナール大会表彰式 (2016年12月)



卒論発表会 (2009年2月)



フレッシュマンエクスカージョンで「アクア・トトぎふ」を訪問 (2010年6月)

し、これをもってより深く学術研究の場を創造していこうとするものである。

卒業論文発表会（審査会）の変遷

本学では、4年次に履修する「演習Ⅲ」（必修）において卒業論文を作成することが卒業要件となっていますが、その際、卒論発表会（審査会）において審査を受けることが義務付けられています。このような制度は、本学のディプロマポリシーに基づいて実施されているものです。

さて、卒論発表会は、1998（平成10）年度に、経済学部において始まりました。当初は、同じ曜日に開講される演習の担当教員有志による「合同ゼミ」という形での開催でした。また、現在のような「審査」の要素はなく、学生同士が自分の卒論を発表し議論し合うという「発表会」でした。当日の夜には、学内の旧食堂において懇親会も開催され、大変盛り上がりました。4年次生にとっては、大学生活を締めくくる思い出の一日になったことでしょう。その後、他の曜日においても、同様な「発表会」が行われるようになりました。

現在のような「審査」という要素が加わったのは、経済学部において卒業論文の作成が必修となった2007（平成19）年度からです。演習担当教員と、さらに、もう一人の教員が主査及び副査となって、卒業論文についての口頭試問が行われます。いわば、「卒業試験」ということになっています。

経営学部では、1994（平成6）年度の開設当初から卒業論文の作成を必修とし、演習での教育の充実に取り組んできました。また、一部の演習では、卒論発表会も行われていました。2016（平成28）年度より、両学部に通ずる全学的な取り組みとして、卒論発表会（審査会）が開催されるようになりました。

フレッシュマンエクスカージョン

本学では、初年次教育として、自校教育やリーディングプロジェクトなど、様々な取り組みを行っていますが、フレッシュマンエクスカージョンもその一環として実施されています。「エクスカージョン」とは、「団体の遊覧旅行」あるいは「共同で行う野外調査」という意味で、本学のフレッシュマンエクスカージョンとは、1年次生が「基礎演習」のクラスを単位として地域の経済、歴史、文化について体験学習等を通じて学ぶ取り組みのことです。また、学生同士や担当教員との人間関係作りをスムーズに行う効果も期待されています。2009（平成21）年度から実施され、学部毎に充実が図られています。

経済学部では、当初、学年全体で、長浜市の「黒壁スクエア」や「アクア・トトぎふ」等の見学を行っていましたが、「地域実践型アクティブラーニング」を学部教育の柱として位置づけた2013（平成25）年度からは、大学が立地する大垣市について学ぶという共通テーマのもと、「基礎演習」のクラス毎に、事前学習、大垣市内の企業や史跡等の見学、さらに、考察を加えて、フレッシュマンエクスカージョン報告会で学習の成果を発表する、といった能動的な学びへの充実が図られています。また、公共政策学科の1年次生については、大垣市役所等において「ミニインターンシップ」も実施されています。

経営学部のフレッシュマンエクスカージョンも、当初は、学科毎に、ソフトピアジャパンや岐阜メモリアルセンター等の見学という形態で実施されていましたが、その後は、「基礎演習」のクラス毎に、曾根城公園でのエクスカージョンや、卒業生による講演会の実施等、多様な形態で充実が図られています。



上海财经大学（中国）と教育学术交流協定を締結（1999年7月 於：上海财经大学）



ダナン大学（ベトナム）と教育交流協定及び東南アジア特別奨学生協定を締結（2016年11月 於：ダナン大学）

外国人留学生の本格的受け入れ開始

1994（平成6）年4月、本学は経営学部の開設にあたり外国人留学生の受け入れを開始することになりました。それ以前にも科目等履修生（聴講生）として年に数科目を履修する外国人学生は存在しましたが、4年を通して日本人学生と同様の単位を取得して卒業していく（正規の）留学生を受け入れることになったのです。これに伴い、大学隣接地に留学生専用の宿舎が準備され、事務局には留学課が新設されました。当時、中部地区の大学に在籍する外国人留学生は、その大部分がアジア地域からの出身者で、中国・韓国・台湾が「御三家」と称され、本学でも初年度は中国9名、台湾3名、マレーシア1名、合計13名の勢力圏でスタートしました。その後、カナダ・イラン・インドネシア等の出身者を受け入れることはありましたが、中国人が多数を占める傾向に変化はなく、後に記す国際交流が、特に中国との間で大きな進展を見せる基盤ともなったのです。

入学試験でのハプニング

翌1995（平成7）年1月17日、私たちは経験のない

激しい揺れに眠りを破られました。阪神・淡路大震災です。実は、この日、第2回留学生の入学試験当日だったのです。出勤した頃にはまだ地震被害の実態が判然としていませんでしたが、金沢駅で富山の日本語学校からの受験生10名程が足止めを食うなど、各地で立ち往生している情報が徐々に集まってきました。とにかく、遅れても構わないから大垣に来るよう指示する一方、帰りの便がない場合の宿泊先の確保なども含めて万全の体制を敷き彼らの到着を待ちました。到着順に受験させ、午後9時頃、なんとかこの日の入試を乗り切りました。携帯電話もなかった時代の出来事で、日本語が達者でない彼らにとっては心細く不安な1日であっただろうと思えます。ちなみに、この第2回生の中に、現在経営学部の教授として活躍する韓金江氏の名前が見られます。

地域を中心とした国際交流の広まり

「岐阜経済大学に留学生」のニュースは、次第に大垣・西濃・岐阜地域に広まり、小学校や中学校を中心に国際交流の催しに招待を受けることが多くなりました。自国の紹介をしたり、一緒に歌ったり、給食を共にす

るなど、子どもたちも留学生たちも文化交流に楽しい一時を共有してくれました。高校の文化祭に招かれたり、太極拳の講師として好評を博した留学生もいました。国際交流と云えば、「外国人による日本語スピーチコンテスト」で、母に対する感謝と自らの将来への夢を饒舌な日本語で披露した第5回生の陳凌芸さんが銀賞に輝いた時には身震いしたものです。

交換留学生制度の整備

国外の大学との交換留学生の制度も着々と整備され、1999（平成11）年には上海财经大学と教育学术交流協定、ブルゴーニュ大学（フランス）およびハワイ大学マノア校と学生交換協定、さらに2008（平成20）年には江西師範大学と教育学术交流協定を締結するに至りました。1年間の短期留学生の相互派遣が主たる目的ですが、中国の2大学とは、研究者の相互派遣、書籍・資料等の交換も含まれた中身の濃い協定となっています。これらの協定を利用して、これまでに中国からは50名以上の学生を受け入れ、中国・ハワイに15名の学生を派遣してきました。特に、江西師範大学との協定締結は、同大学で教授として日本語教育を担当する第4回生の

丁勇氏の多大な尽力・貢献によるものです。また、2016（平成28）年1月には、岐阜県との友好提携に人材養成の面から貢献する目的で、江西省の省都、南昌市にある南昌航空大学と学生交流協定を締結しました。この協定により、中国江西省南昌市に所在する2つの大学と交流協定を締結したことになります。また、同年7月には江西财经大学と学生交流協定を締結し、さらに、同年11月には、創立50周年記念事業の一環として、ベトナムのダナン大学と教育交流協定及び東南アジア特別奨学生協定を締結しました。（注：国外のみならず、沖縄の大学とも同様の交流協定が締結されています）

グローバルに活躍する留学生達

外国人留学生の受け入れを開始して22年、彼らを含めてこれまでに約2万5千名の卒業生を送り出しました。日本に残り生活を確立した者、故国に戻り事業を起こした者、中にはニュージーランドの永住権を得てグローバルに活躍する者、それぞれの舞台で大きくはばたいて、文化・経済・平和交流の担い手となっています。がんばれ留学生!!

地域連携 の変遷



マイスター倶楽部活動報告会（2016年3月）

はじめに

本学の地域連携は、「設立趣意書」にもある「近代的広域行政にもとづく学園都市形成をめざす地元先覚の要望に応えて、中部岐阜県独自の壮大なる気宇を培い理想に燃えつつも現実より遊離せず他日内外に雄飛する気魄をもつ青年社会人を育成しようとする」に依拠して、座学のみで矮小的に完結することを是とせず、爾來蓄積してきた知的資源を根拠として、地域社会の活性化に向けて実践活動をするものです。その展開によって、例えば政策提案やまちづくり提案に結び付け、「地域の大学」としての意義が具体的に発揮できるように努めることを目的としています。そのため本学は、地域と「フェイス・トゥ・フェイス」の関係を多角的な視点から築きつつ、連携・協働のための基礎的条件を整備しています。

地域連携推進センターの設立

本学は、岐阜県を中心に東海・中部地方の産業界、市民、NPO 団体、行政機関と連携し、地域が求める事業を企画・実践しています。その一環として、地域社会との連携によって教育活動を推進するため、「マイスター倶楽部」と「ソフトピア共同研究室」を相次いで開設し、学生と教職員が一丸となって、中心市街地の活性化、まちづく

り活動、小中高校の総合学習支援、産業界との連携による情報システム研究などに取り組んできました。その努力が産業界、小中高校などの教育界、市町村、岐阜県、国などから高く評価されたことは学生や教職員にとって大きな励みとなりました。

この地域における評価を支えに、本学が周辺地域の産業界、市民、特定非営利活動法人（NPO 団体）、行政機関と一層緊密な連携を果たし、地域社会に不可欠な高等教育機関として発展していく礎として「地域連携推進センター」を2003（平成15）年に設立しました。同センターでは、教員の専門特性を十分に発揮して地域貢献できる体制を築き、コミュニティ政策グループ、環境グループ、地域・人間スポーツグループ、情報グループ、福祉グループの5グループ（詳細は大学 HP 参照）を設置して活動しています。

地域連携推進センターが活動の推進・統括をするもつとで、地域経済研究所、マイスター倶楽部、情報技術研究所（IT 研究所）、ソフトピア共同研究室、ボランティア・ラーニングセンターといった組織によって、地域の課題ごとに対応できる仕組みが構築されています。

(1) 地域経済研究所

本研究所は岐阜県を中心として経済・社会・文化に関する諸事象を研究し、地域の発展に寄与することを目的

に設立されました。その前身である1976（昭和51）年の地域経済研究会の発足以来、「岐阜県を中心として地域の経済・社会・文化に関する諸事象を研究し、もって当該地域の向上と発展に寄与する」ことを目的に、地域のシンクタンクを目指し、多くの研究成果を蓄積してきました。こうした歴史的財産に学びながら、独自財源による共同・個人研究、産業界や行政機関との共同・受託研究、地域調査の実施、公開講演会の開催、岐阜県に関する資料の蒐集・整理などを行い、幸い多くの方々・機関から高い評価を得るまでに至っています。

近年、大学の社会的役割が大きく問われています。本研究所は、本学の地域研究の中心的機関だけではなく、市民・企業・行政との間で幅広い産官学連携を推進していく中核的研究機関として発展を遂げ、地域社会へ大きく貢献するものと位置づけています。具体的な活動としては、共同研究・個人研究に基づく多彩な調査研究事業、学内のみならず広く市民を参加対象とする公開講演会、地域研究に関わるテーマを適宜設定して学内・外への啓発的な公開研究会の開催、本研究所の紀要として論集『地域経済』の毎年発行などがあります。

(2) まちなか共同研究室「マイスター倶楽部」

まちなか共同研究室「マイスター倶楽部」は、大垣商工会議所の「空き店舗対策モデル事業」として、1998（平成10）年10月に開設されました。当初は、大垣駅前商店街振興組合、大垣地域産業情報研究協議会（大垣市と大垣商工会議所が共同で運営する調査研究組織）、岐阜経済大学の三者が連携して設置し、地域社会を活動現場にして学生が研究・実践活動に取り組むための研究室でした。この後2006（平成18）年2月に、大垣市、大垣商工会議所、大垣市商店街振興組合連合会、岐阜経済大学の四者により「中心市街地活性化のための四者協定」が締結され、現在も継続して四者が連携・協力し、学生によるまちづくりプロジェクトを推進しています。

同時に、地域と共生する大学づくりの実践例として、テレビや新聞の他、各種専門誌でも数多く紹介され、地域活性化を共通テーマとした人材育成の場にもなっています。現在も、学外に出て“まちなか”の商店街の空き店舗を借用し、中心市街地活性化のためのさまざまな事業を展開しています。

(3) 情報技術研究所（IT 研究所）

情報技術研究所は「明日の地域づくりを私たちがともに」という思想のもと、大垣市が「情報先進都市」とし

てのまちづくりに取り組んでいることもあり、IT 分野における地域連携を組織的に推進するため設立され、産官学の連携交流をはかり、情報をキーワードとして、地域の情報革新や人材育成等を推進するメンバーで構成されています。本学の教職員、ソフトピアジャパン内の共同研究室を拠点として活動する学生グループも加えた幅広いスタッフにより、地域の情報革新や人材育成を目的とした多くの研究を精力的に行っています。

(4) ソフトピア共同研究室

ソフトピア共同研究室は、産官学の連携により ICT（information and communication technology）を基盤とした共同研究や先端技術の開発、地域における ICT 化の推進を目的として活動しています。また、システム構築やソフトウェア開発を通じて、プロジェクトマネジメント手法を学び、実践的なスキルの向上を目指すと同時に、インターンシップの実施や、研究会および学会において成果報告を行い、創造力豊かな人材を育成しています。

また、官学連携プロジェクトの共同研究を基礎にして、大垣市商店街振興組合の元気ハツラツ市に「輪投げ屋パソコン&スマートフォン何でも相談屋」を出展する他、産官学プロジェクトとして、スマートフォンアプリケーションによる地域活動における疾病予防や健康の維持及び増進に関する実践的研究と、住民が公式ホームページを情報発信ツールとして活用する共同研究を行い「地域の情報化」に寄与しています。地元企業・自治体及び当研究所で組織する産官学コンソーシアム「大垣情報ネットワーク研究会」では、講演会やシンポジウムなど啓発活動を含め、企業活性化のための技術的研究や教育活動に取り組んでいます。

(5) ボランティア・ラーニングセンター

ボランティア・ラーニングセンターは、教育支援活動、学生支援活動、地域連携機能を三本柱とし、分野別に分かれたボランティア（広報、環境、Earth 子ども、異文化国際、介助・高齢者福祉）を各リーダーが企画、または参加し運営しています。広報活動にも力を入れており、学内のボランティア窓口として学生が主体となり活動しています。ボランティア・ラーニングセンターは地域とメンバー間の信頼関係作りを重視し、企画や分野別の地域ボランティアへの参加等、様々な活動に取り組んでいます。

自治体・団体との連携状況

本学では、2003（平成15）年4月に岐阜県との間で地域連携協定を締結して以降、2016（平成28）年までに10の自治体（岐阜県、揖斐川町、美濃加茂市、下呂市、海津市、大垣市、高山市、坂祝町、郡上市、山県市）との間で地域連携協定を締結しました。協定は、大学と自治体が「どんなことでも話し合い、協力し合う」姿勢を重視する立場から、「特定な課題に限定せず、あらゆる課題の解決に向けて協力し合う」という意味で包括的な協定としてきました。「地域貢献」を建学の精神とする本学は、地域連携協定の締結を通じて、今後も地域の人々や産業界、行政の要望を全力で受け止め、地域課題の解決に向けた政策づくりに取り組んでいきます。

さらに本学は、地域で活躍される諸団体と、地域貢献や相互の発展をめざし連携協定を締結しています。現在、（株）岐阜フットボールクラブ、（社）大垣市社会福祉協議会、（財）岐阜県イベント・スポーツ振興事業団、岐阜県世界淡水魚園水族館「アクア・トトぎふ」、（財）大垣市体育連盟、岐阜県商工会連合会、および（株）岐阜新聞社と連携協定を締結し、協定に基づき様々な活動を行っています。

高大連携事業「学び塾」と「出張講座」

本学は、開学以来、地域の活性化にどのように貢献していくのかを重要課題として、積極的に地域との関わりを展開しています。その一環として、高等学校と連携して、地域の発展に寄与できる人材育成を目指すことも重要な活動と認識しています。教育のシステムが多様化していく現代にあって、生徒・学生の能力や適性、意欲を伸ばし、彼らの自己実現をいかに援助していくかは、高等学校および大学の共通の課題であり、高大連携によって検討される事案でもあります。同時に、本事業による大学の授業体験は、生徒自身にとっての進学の意義や目的を改めて問う機会になると期待できます。

そのほか、クラブ活動の協力や施設利用など様々な連携事業もあり、高等学校ごとの事情や課題に即した個別連携も含まれています。本学は、2009（平成21）年に岐阜県立揖斐高等学校、大垣桜高等学校、大垣商業高等学校、大垣養老高等学校および海津明誠高等学校の5校と高大連携教育協定を締結し、その後、岐阜県立岐南工業高等学校、岐阜県立飛騨高山高等学校、彦根総合高等学校、岐阜県立不破高等学校と協定を結び、本学の高大連

携は促進されています。

また、2008（平成20）年度から高校生を対象に、大学講義体験講座「学び塾」を開講しています。これは、高校生の多様化する興味・関心に応えるため、高校教員を含め大学の学びに触れる機会を積極的に提供するものです。そのことによって、高等学校で学ぶことが、大学や社会でどのように拡がり発展していくのかを再認識し、今後の学習の動機付けの一助となることを願っています。加えて本学では、大学の持つ専門的知見を広く社会に開示することを旨としており、「出張講座」として高等学校からの授業依頼を恒常的に受け付けています。

岐阜県内大学間の連携（三大学連携事業）

夢や理想を掲げながらも専門性のある根柢をもって、豊かな地域社会の担い手を育成することを目標に、岐阜経済大学・岐阜大学地域科学部・岐阜市立女子短期大学の三大学が共同で開催する地域連携事業です。この連携事業は、大学への進学に止まらず、将来の地域づくりの担い手となることを考えるきっかけをつくりたいと考えて、各地で実施しています。事例としては高山市における地域課題を対象に、地域づくりへの様々な取り組みが行われ、同市行政や高等学校とも一緒に企画を作り、市民の皆さんにも開かれた学びの機会にしたいと位置づけています。

「かがやきカレッジ」市民大学講座の開講

大垣市と岐阜経済大学はともに、地域の皆様に生涯学習の機会を積極的に提供しています。「かがやきカレッジ」は、本学教員の専門性に即したテーマに基づき開講され、誰もが自由に受講することができます。そこは知的好奇心を満たすだけでなく、地域活動への活用や生涯学習の意義をも把握できる機会が最新情報とともに提供される場ともいえます。

「岐阜県コミュニティ診断士」の設置

今日の地域社会においては、都市化・高齢化の進展、生活様式の変化などにより、人間関係や相互扶助意識の希薄化、危機管理能力の低下などが懸念されています。こうした状況を背景に安全・安心に暮らせる地域コミュニティの形成を目指して、本学では、住民の側から地域の課題を発見し、解決していく取り組みを支援する専門

的な人材を養成するため、2002（平成14）年に「岐阜県コミュニティ診断士」の資格認定制度を創設しました。この資格は、岐阜県知事と本学学長が共同で認める民間専門資格で、他大学では取得できません。

岐阜県コミュニティ診断士は、地域コミュニティの現状について調査・分析を行い、それにより明らかとなった諸課題について、地域住民、自治・地縁組織、NPO、企業など地域の様々な主体と協働して、その解決・改善に取り組み、地域コミュニティの再生・活性化を推進するコミュニティの専門家です。この資格を取得した方は岐阜県庁や本学にコミュニティづくりの専門家として人材登録し、民間企業や福祉施設、市町村の求めに対して積極的に紹介します。ボランティア活動やNPO活動に携わる場合にも、大いに役立つ資格であり取得増加に向けて推進しています。

ネットワーク大学コンソーシアム岐阜

本事業は、岐阜県と県内の国公立、私立大学、短大等22校、1団体からなる大学連合です。本コンソーシアムでは、加盟大学等の学生が共通の単位を取得できる「共同授業」を、通常の対面授業やインターネットを活用したオンデマンド授業（eラーニング）で実施しています。また、コンソーシアム参加大学間の「包括的単位互換制度」により、参加大学等の学生であれば、各大学等が開講している授業科目の中から希望する科目を履修し、単位を修得すれば、所属する大学の単位として認定されるなど、学ぶ機会が大きく広がっています。この他にも、教員免許状更新講習、高大連携、教育連携推進、地域連携・産学連携の部会を組織し、それぞれ活動しています。本学は地域連携・産学連携部会において「学生による地域課題解決提案事業」の運営に貢献しました。

大垣市の行事への参加

本学は、大垣市の伝統的な行事や様々な地域行事に参加しています。毎年5月に行われる伝統のある「大垣まつり」では、軸巡行に本学学生が参加しています。10月の「十万石まつり」には、学生会を中心に百名を超える本学関係者の参加や協力を得て、本学の神輿を担ぎ、大垣駅前通りの歩行者天国を練り歩いています。そこで本学の沖縄県人会が「エイサー」の演舞を披露し、皆様から温かい拍手をいただいています。また、ここ10年ほど4月初旬

に大垣市北部で開催される中川さくら祭りに、本学サークルが行列の出来る楽しい出店を企画し参加しています。以上のような活動は本学関係者が一体化するだけでなく、大学の諸活動を発信する機会ともなっています。

注：「大垣祭の軸行事」は、2015（平成27）年に国重要無形民俗文化財に指定、2016（平成28）年にユネスコ無形文化遺産に登録。

地域への大学施設利用の推進

本学は、授業・課外活動・学内行事などに支障がない範囲で、大学の施設を地域の皆さまに開放しています。なお、学内食堂は一般の方もご利用いただけます。また、図書館の利用については、岐阜県西濃農域2市4郡（大垣市・海津市・安八郡・養老郡・不破郡・揖斐郡）に在住・在勤・在学の高校生以上の方を対象者とし、広く生涯学習やスキルアップの機会に活用いただければと思っております。

大垣ポスター展実行委員会は「地域の文化活性化」と「ポスター芸術の理解」を願って1985（昭和60）年から大垣の地で世界のポスターの紹介を始めました。日本・ポーランド・アメリカ・ソヴィエト（現ロシア）・フィンランド・ドイツ・チェコ・スイスと国別のポスター紹介を重ね、1996（平成8）年には日本初の国際ポスター美術館を開設、2008（平成20）年に、本学講堂ロビーに移設されました。現在まで年に数度の展覧会を企画・開催しています。2017（平成29）年3月には、認定特定非営利活動法人と認められました。

おわりに

本学における地域連携の推進は、「建学の精神」に定める地域貢献をいっそう顕現し、人々が生涯にわたりできるだけ有意義に過ごせる地域社会の再生と地域経済の活性化の一翼を担う大学として発展していく責務を自覚するところから出発しています。すなわち、国内・外の社会情勢を見据えつつ、市民・NPO、小中高校、企業、行政など地域を担う皆さまと協働し、誇りをもてる多くの地域特性を活用・発信しながら、暮らし、学び、働きやすい魅力と活力溢れる社会とすることを目的とするものです。その一助を果たす活動こそが、本学に与えられた存在価値であり使命ともいえ、今後もいっそう地域連携を推進していく所存です。



応援団



秩父宮賜杯 第48回 全日本大学駅伝対校選手権大会 No.19のゼッケンは1区の大垣皓暉さん (2016年11月)

学生会の成立と大学祭・五月祭

開学間もない1967(昭和42)年5月19日、学生会総会が開催され、学生自治組織として「学生会」が成立し、執行部役員が選出されました。同年7月7日には「学生自治会会則」が制定されました。

また、大学祭実行委員会が組織され、同年11月22日～24日に第1回大学祭が「始動」をテーマとして開催されました。第二部の学生自治会も1969(昭和44)年に成立し、大学祭も始まりました。現在も毎年11月に「岐経祭」として開催されています。

五月祭は、1972(昭和47)年から毎春に開催されており、スポーツ大会などの催し物を行っています。

クラブ活動・同好会の結成

1967(昭和42)年6月6日付けの岐阜経済大学「同好会予算案」によれば、当時すでに結成されていた同好会は以下のとおりでした(カッコ内は人数)。

〔運動部〕自動車(14名)、卓球(10)、テニス(14)、サッカー(17)、バスケット(10)、ハンドボール(8)、バレーボール(7)、剣道(10)、山岳(14)、ラグビー

(7)、柔道(8)、空手道(5)、応援(7)、弓道(8)、陸上(4)、体操(6)、野球(13)、少林寺拳法(6)、バドミントン(10)。

〔文化部〕フランス語(14)、ESS(8)、写真(13)、税理・会計研究会(14)、社会研究(9)、政治・経済研究会(11)、旅行研究(11)、放送研究(5)、美術(5)、落語研究(6)、フォーク・ロック(6)、ギター(7)、軽音楽(8)。

開学したばかりで1年生296名だけでしたが、当初からクラブ活動が盛んであったことが分かります。

その後もさまざまな体育系・文化系のクラブ・同好会が結成されました。その主要なクラブは以下の通りです。(カッコ内は各年度『学生要覧』『CLUB GUIDE』に基づくおおよその活動年度)

〔体育系クラブ〕

体育系クラブには、応援団(1967-2005)、剣道部(1967-2011)、柔道部(1967-2014)、自動車部(1967-2005)、ラグビー部(1967-2014)、ワンダーフォーゲル部(1967-2005)、ボウリング部(1968-1977)、拳闘部(1971-2014)、アメリカンフットボール部(1974-2011)、二輪部(1989-2011)、ソフトボール部(1988-2005)、新空手部(1993-2011)、なぎなた部(2003-2007)、フットサル部(2003-2014)、健康スポーツ

部(2011-2014)、フェンシング部(2011-2014)など、同好会も合わせると約100団体が結成されました。〔文化系クラブ〕

文化系クラブには、将棋部(1967-2001)、茶道部(1968-1987)、第三文明研究会(1969-2011)、ユースホステル部(1971-1999)、演劇部(1973-1996)、鉄道研究会(1977-2011)、無線部(1983-2000)、落語研究会(1967,1992-2000)、文学研究会(1976-1993)、歴史散策の会(1977-1987)、シミュレーションゲーム研究部(1982-2011)、吹奏楽部(1985-2014)、ボランティアクラブ(1992-2004)、ライセンスサークル(1999-2011)、国際交流クラブ(1999-2007)、マルチメディアサークル(1995-2008)など、同好会も合わせると約150団体が結成されました。

強化指定・準強化指定クラブ

2001(平成13)年、体育系クラブの中から強化指定クラブとして、陸上競技部、硬式野球部、ボート部が指定されました。現在の強化指定クラブ・準強化指定クラブとその主要な競技実績を紹介します。(各クラブの現指導体制とその他の競技実績については、資料編130頁をご覧ください)

●ボート部

2000(平成12)年に同好会として創部し、2001(平成13)年に強化指定クラブとなりました。

2006(平成18)年の全日本選手権大会の男子ダブルスカルで、山本亮太さん(経営学部3年)、嶋田盛一さん(経営学部1年)が優勝しました。山本さんは翌年、スコットランドで開催された世界選手権に出場し、11位の成績を残しました。

2007(平成19)年、全日本大学選手権大会の男子舵手つきペアで優勝しました。

2009(平成21)年、全日本大学選手権男子シングルスカルで今井祐樹さん(経営学部4年)が準優勝しました。

2012(平成24)年、全日本軽量級選手権大会の女子舵手なしクォドルプルで準優勝しました。

2013(平成25)年の全日本大学選手権大会で、田中敏彦さん(経営学部4年)が男子シングルスカルで準優勝しました。

●陸上競技部

1984(昭和59)年に同好会が結成され、翌年、陸上競技部として創部しました。その後、2001年に強化指定クラブとなりました。

2010(平成22)年の日本学生個人選手権大会で、久我



硬式野球部 岐阜県秋季リーグ優勝 (2015年)



陸上競技部



ボート部

アレキサンデルさん(経営学部3年)が男子800m決勝で3位になりました。卒業後の2013(平成25)年には、バレー選手権800mで優勝し、南米選手権で準決勝に進出しました。現在は本学陸上部の指導者になっています。

2014(平成26)年の日本学生個人選手権大会で、松原瑞貴さん(経営学部4年)が男子走幅跳で優勝しました。

2015(平成27)年の日本学生個人選手権大会で、東魁輝さん(経営学部4年)が400mで優勝しました。

●硬式野球部

1967(昭和42)年に硬式野球同好会として創部し、2001(平成13)年に強化指定クラブになりました。

2012(平成24)年に東海地区春季岐阜学生リーグで初優勝し、同年東海王座決定戦で準優勝、2015(平成27)年に岐阜県大学野球リーグ秋季リーグで優勝しました。

●サッカー部

1967(昭和42)年にサッカー同好会として創部しました。2004(平成16)年に準強化指定クラブに、2009(平成21)年強化指定クラブになりました。

2012(平成24)年、総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントに出場。2014(平成26)年、岐阜県代表として天皇杯全日本サッカー選手権大会に出場しました。

●男子バレーボール部

1967(昭和42)年にバレーボール部として創部しました。2007(平成19)年に準強化指定クラブとなり、2011(平成23)年に強化指定クラブとなりました。

2010(平成22)年に東海学生秋季リーグで1部に昇格しました。2014(平成26)年、2016(平成28)年に、全日本大学バレーボール選手権に出場しました。

●女子バレーボール部

2006(平成18)年に創部し、2009(平成21)年に準強化指定クラブになりました。

2011(平成23)年に岐阜県リーグ1部秋季リーグで優勝しました。その後2012(平成24)年から2014(平成26)年まで、岐阜県大学1部リーグで連続優勝。2016(平成28)年に東海大学女子バレーボールリーグ

で1部に昇格しました。

●女子ソフトボール部

2010(平成22)年に準強化指定クラブとして創部しました。2012(平成24)年に東海地区大学ソフトボールリーグ1部に昇格。2014(平成26)年、2016(平成28)年に、全日本大学選手権大会に出場しました。

●駅伝部

2013(平成25)年に準強化指定クラブとして創部しました。創部1年目の2013年に、秩父宮賜杯全日本大学駅伝対校選手権大会に出場し、23位となりました。その後同大会において、2015(平成27)年には20位、2016(平成28)年には18位となりました。

2016年に東海学生駅伝対校選手権大会で優勝し、2017(平成29)年の出雲全日本大学選抜駅伝への出場権を獲得しました。

岐阜経済大学アスリート育成クラブの結成

2014(平成26)年、競技力及び地域のジュニア育成を使命に岐阜経済大学アスリート育成クラブが誕生しました。

スクール事業として、サッカー部門・アスレチック(陸上)部門・ランニング部門を開講し、またトップアスリート派遣事業として小学校、中学校、高校、少年団、クラブへ、全国大会トップクラス選手を育成した本クラブスタッフを派遣し、競技力向上と各指導者への指導方法の伝達を行っています。

そして、各部門のスポーツ祭として、会員に加え地域の方々にも参加いただけるイベントを開催し、活発な地域スポーツ貢献活動を展開しています。

在学生・卒業生の活躍

次に、一部の学生の在学中、卒業後の活躍を紹介します。

堀富士夫さん(経済学部1971年度卒・経営学研究科2005年度修了)は、卒業後、水都食品(現株式会社デリカサイト)を創業し、現在は代表取締役FOUNDER(会長)となっています。本学の客員教授でもあります。

浅井清貴さん(経済学部1972年度卒)は、現代美術造形作家として活躍しています。本学正面のオブジェ「飛翔の掌」は浅井氏の作品です。

武藤鉄弘さん(経済学部1974年度卒)は、2014(平成26)年美濃市長に当選しました。

今井隆さん(経済学部1978年度卒)は、2000(平成12)年に新品種の米「龍の瞳」を発見しました。龍の瞳は、「全国米・食味分析鑑定コンクール」で金賞を、「あなたが選ぶ日本一おいしい米コンテスト」で最優秀賞を受賞しています。

亀岡利幸さん(経済学部1980年度卒)は、和歌山を拠点とするJ-POPユニット「ウインズ」のメンバーとして、後にソロアーティストとして活躍しています。

飯田覚士さん(経済学部1991年度卒)は、1994(平成6)年3月にジュニアバンタム級(現スーパーフライ級)全日本チャンピオンとなり、のち1997(平成9)年12月WBA世界タイトルマッチにおいて、ヨックタイ・シスオー選手(タイ)を破り、世界王者となりました。

松多俊一郎さん(経済学部1995年度卒)は卒業後も新空手道を続け、2000(平成12)年にはK-1 JAPANに出場しました。

1997(平成9)年11月、少林寺拳法部の尾関真由さん(経済学部4年)が全日本学生大会女子単独演武第3位となりました。

1998(平成10)年、陳凌芸さん(経営学部1年)が第39回外国人による日本語弁論大会に出場し、岐阜県知事賞・会場審査員賞を受賞しました。

オランダ在住の写真家、畑直幸さん(経営学部2001年度卒)は、2010(平成22)年「EINSTEIN PHOTO COMPETITION VOL.1」で矢木沢俊樹賞を受賞し、2011(平成23)年第4回写真「1_WALL」展でグランプリを受賞しました。

2004(平成16)年、陳正暉さん(経営学部3年)が第3回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会で優勝し、第45回外国人による日本語弁論大会に出場しました。

竹内雄作さん(経営学部2009年度卒)は、2016(平成28)年第32回共同通信社杯競輪でG2初優勝を果たしました。

今井将人さん(経営学部2009年度卒)は、吉本興業のお笑いコンビ「ヒガシ逢ウサカ」として活躍しています。

2010(平成22)年、名古屋市での大学発ベンチャービジネスプラン発表会で、村井識顕さん(経営学部4年)ほか4人の研究グループが、学生ビジネスアイデア部門で優秀賞を獲得しました。

2011(平成23)年、第48回全日本空手道選手権大会において、成人男子6の部で平野泰斗さん(経営学部2010年度卒)が優勝しました。

2013(平成25)年、高橋由衣さん(経済学部3年)が、国際ソロプチミスト「学生援護賞リジョン賞」を受賞しました。

2014(平成26)年、第85回都市対抗野球大会で西濃運輸野球部が初優勝し、伊藤匠さん(経済学部2013年度卒)が若獅子賞(新人賞)を受賞しました。

2016(平成28)年、和田博雄さん(経営学部3年)が国際スキー連盟のコンチネンタル・カップThe Cardrona Games 2016において、フリースタイルスキー・ハーフパイプで第6位になりました。

その他にも、クラブとして次のような活躍がありました。
・1999(平成11)年、自動車部が全日本学生ジムカーナ王座決定戦の男子団体部門で準優勝。

・鉄道研究会は、樽見鉄道や名古屋鉄道岐阜市内線の貸切イベントなどを開催。

・落語研究会は定期的に「経大寄席」を開催し、ボランティアで老人ホームなどに出向いて公演。岡田茂樹さん(経大亭勝笑。経済学部1995年度卒)が、卒業後も「出前落語」の社会奉仕活動で活躍しています。

その他にも数多くのクラブ・サークルがさまざまな活動をしていました。

現在のクラブ・同好会の活動状況

強化・準強化指定クラブ以外で、現在活動しているクラブ・サークルは以下の通りです。

体育系クラブには、空手道部(1967-)、卓球部(1967-)、硬式庭球部(1967-)、準硬式野球部(1968-)、男子バスケットボール部(1967-)、ハンドボール部(1967-)、バドミントン部(1967-)、スキー部(1975-)、軟式野球部(1967-)、ソフトテニス部(1994-)、女子バスケットボール部(2008-)があります。

文化系クラブには、H I G E ☆ B U(2006-)、沖縄県人会(2002-)、軽音楽部(1967-)、ボランティアバンド部(2008-)、ギター部(1967-)、美術部(1967-)、漫画研究会(1986-)、メディアソサエティ(2013-)、ダンス部(2015-)、ソフトダーツ部(2015-)があります。

施設 の変遷



校舎全景（1974年）



校舎全景（2005年7月）

校舎の変遷

開学から10年間の校舎は、西から一列にA号館、B号館、C号館、D号館と並んでいました。1967（昭和42）年に完成したB～D号館のうち、正門前のB号館は2階建てで、1階が事務室、2階の大教室が講堂として入学式や卒業式の会場となりました。また、学生運動が盛んな時代には学生集会が開かれました。学園祭のコンサート会場としても使われ、当時“学園祭クイーン”と呼ばれた白井貴子さんのコンサートは、大盛況で床が抜けるのではないかと心配される程でした。

C号館は3階建てで、1階は事務室、2～3階は教室棟でした。1階には卓球場があり、学園祭の会場にもなり、ダンスパーティも開かれるなど、学生にとって思い出の深い場所でした。D号館は4階建てで、1階は図書館、2～4階は研究室でした。A号館は1969（昭和44）年に完成し、3階建ての大教室、中教室の教室棟でした。E号館（現2号館）は1974（昭和49）年に完成し、3階建てで、1階は教務課・学生課・第二部事務室があり、2～3階はLL教室と中教室がありました。

1990年代前半に受験者数急増期を迎え、本学も経営学部の新設で、1992（平成4）年には、定員700名に対し、

志願者が17,091名となり、学生数が大幅に増えました。そのため、開学当初の建物が手狭となり、B、C号館を建替え、3～8号館が1987（昭和62）年に完成しました。これ以降、建物の名称がアルファベットから数字に変わりました。

中庭を取り囲むように建っている3～8号館のうち、3号館は3階建てで、1階のロビーには学生の談話スペース、喫茶コーナー、丸善売店があり、2～3階は語学教室、ゼミ室でした。4～6号館は2階建ての大教室、7号館は850名収容の講堂で、入学式、卒業式、講演会の会場となりました。8号館は4階建てで語学教室、ゼミ教室、中教室の教室棟です。10号館は4階建てで、経営学部の研究室です。

体育施設の変遷

開学当初のグラウンドは、校舎の後方にあり、1970（昭和45）年に旧野球場が、翌年には旧体育館（面積1,397㎡）が完成しました。旧体育館には、当時珍しかったボクシングリングがありました。このリングは、1966（昭和41）年開催の岐阜国体で使用したもので、これにより拳闘部は東海地区の強豪となり、後に「1997（平成9）年WBAスーパーフライ級チャンピオン」となった飯田覚士氏がこのリングで世界を目指しました。

総合グラウンド（面積46,717㎡）は、大学に隣接した輪中堤東側の養豚場のあった場所に1985（昭和60）年に完成しました。総合グラウンドには、体育センター、野球場（両翼90m）、全天候型のテニスコート、サッカーコート、ラグビー・アメリカンフットボールコート、400mトラックがあり、その後、陸上競技場、サッカーコート、野球場が改修されました。

陸上競技場は、2003（平成15）年、全天候型陸上競技場に改修し、オープニングには、タレント（当時は陸上のアスリート）の武井壮氏を招きました。2008（平成20）年には（財）日本陸上競技連盟の第4種公認を取得しています。陸上競技部員が日々練習しており、2014（平成26）年には、松原瑞貴さんが走幅跳で学生日本一に輝くなど、部員は現在も全日本レベルで活躍しています。

サッカーコートは、2004（平成16）年に人工芝に改修し、オープニングにはサッカー元日本代表の井原正巳氏を招きました。サッカー部は、2014（平成26）年天皇杯全日本サッカー選手権大会に出場するなど、東海1部リーグで活躍しています。

硬式野球部は、2005（平成17）年に完成した屋内練習場を活用し、2015（平成27）年には東海学生野球岐阜県リーグで優勝するなど、神宮大会を目指して練習に励んでいます。

駅伝部は、2013（平成25）年の創部から3ヶ月後に全日本大学駅伝対校選手権大会に出場する快挙を成し遂げ、全国的にも注目を集めました。

1990（平成2）年に完成した総合体育館（面積3,548㎡）は、1階にトレーニング室や柔道場等の四つのアリーナが、2階にはバレー・バスケットボールの球技場アリーナがあります。男子バレーボール部は強化指定クラブとして東海1部リーグで上位の成績を残し、女子バレーボール部は準強化指定クラブとして東海1部リーグに昇格するなど、男女共に東海1部リーグで活躍しています。トレーニング室にはノーチラス製のエアロバイクやパワーマックス等の本格的なトレーニングマシンが整備され、体育会クラブ員は競って筋肉トレーニングに励んでいます。

ボート部は、2007（平成19）年に山本亮太さんが世界選手権大会に出場し、その翌年には、海津市の長良川国際レガッタコース隣接地に2階建てのボート部合宿所が完成しました。現在も全日本レベルで活躍しています。

情報施設の変遷

本学の情報教育は、1984（昭和59）年に情報処理科目が開設されたことに始まります。E号館（現2号館）2



介護実習室 8号館 (2006年2月)



総合グラウンド 陸上競技場



総合グラウンド サッカー場



「Cafe Rest50」完成 (2017年3月)



ポート部合宿所完成(2008年11月岐阜県海津市)



中庭のハリヨ池完成 (1999年10月)

階が情報実習室に改修され、パソコン FM-11EX16台が設置されました。その後、1994(平成6)年の経営学部経営情報学科新設に伴い、9号館(情報棟)が完成しました。電算課・情報自習室・情報演習室・情報実習室および大教室と中教室があり、2008(平成20)年の情報メディア学科への改組により、フォトスタジオ、ビデオスタジオのあるスタジオ実習室を新設しました。ハードウェア・ソフトウェアともに最新の環境を整え、パソコン222台で情報教育に対応し、地域の情報化を担う実践的な人材を養成しています。

福祉実習施設の変遷

2007(平成19)年にコミュニティ福祉政策学科にコミュニティ福祉専攻と介護福祉専攻を設置しました。8号館1階は介護実習室と福祉実習指導室に改修され、地域福祉を担う実践的な人材を育成しています。

バリアフリー化の推進

2004(平成16)年、筋ジストロフィー症の学生の入学を機に、エレベーターやスロープ・障害者用トイレのバリアフリー化が進み、障がいを持った学生をサポートする学生支援室も設置されるなど、障がいを持った学生が安心して学べる環境となり、その年、岐阜県が主催する「GIFUバリアフリー賞」を受賞しました。介助犬はドアノブに巻かれたハンカチを咥えてドアを開閉し、授業時間は机の横で静かに待機するなど、本学での学生生活を支えました。

中庭の整備、各号館改修

三方を校舎に囲まれた中庭は「中央プラザ」と呼ばれ、インターロックで舗装されていましたが、植栽もなく殺風景でした。1999(平成11)年、ここに「ハリヨパーク」が

完成し、景観が一新しました。ハリヨパークの中心には、森誠一教授の監修で造られた、岐阜県の天然記念物ハリヨの保存池「湧愛の泉」(420㎡)があります。ハリヨを観測できるピットの他、周辺にはカフェテラスや自噴水、木々が配され、水都大垣を象徴する庭園となっています。

同じ1999(平成11)年にはA号館を教室棟から事務棟に改修し、名称を1号館に変更しました。2000(平成12)年には3号館の1階にキャリア支援課を、2001(平成13)年には大学院経営学研究科開設に伴い、10号館の一部を大学院共同研究室、大学院演習室、大学院生自習室に改修しました。6号館1階の大教室は、2007(平成19)年に90席の可動式中教室2室に、翌2008(平成20)年、3号館1階は「student plaza」として、学生の憩いの場となるよう、ミニホール・PCコーナー・コンビニと書店が一体となった丸善売店が整備されました。2012(平成24)年の公共政策学科開設に向け、8号館1階にPAC支援室(公務員試験対策)が、3階にはPAC学習室が設置されました。

食堂、クラブハウスの変遷

1968(昭和43)年に最初の食堂(76席)が、1972(昭和47)年には11号館前に喫茶・食堂兼学生談話室が完成しました。1978(昭和53)年に完成した3代目の食堂は2階建てで、1階は定食方式の食堂、2階が喫茶室でした。1992(平成4)年に完成した4代目の食堂は3階建てで、1階は喫茶・軽食コーナーで170席、2階はカフェテリア方式で560席、3階は定食方式で480席。安くてボリュームがあり、昼休みには行列ができるほど混雑しました。その後、旧食堂は卓球台や自動販売機等が置かれ、学生談話ホールとして活用されました。2017(平成29)年、創立50周年記念事業キャンパス整備計画により、新食堂「Cafe Rest50」が完成しました。

1969(昭和44)年に完成した旧クラブハウスは、平屋

建てでグラウンドの東に長屋のように連なっていました。その後、1976(昭和51)年にクラブハウス南、1979(昭和54)年にクラブハウス北、1983(昭和58)年にクラブハウス中、1995(平成7)年には音楽練習室が完成し、徐々に形を成していきました。当時は応援団、ボウリング部、アメリカンフットボール部、剣道部等があり、クラブ活動は盛んでしたが、全国大会に出場実績のある少林寺拳法部、自動車部、世界チャンピオンを輩出した拳闘部が、現在は活動していないのが惜しまれます。

研究棟の変遷

11号館(旧D号館)は研究室として1967(昭和42)年に完成しました。当時、名和統一第3代学長(国際経済論、日本学術会議会員)、飯田繁第4代学長(貨幣論、日本学術会議会員)、小野義彦教授(日本資本主義論、日本学術会議会員)、大谷省三教授(農業経済学会会長)等の優れた教授陣が揃い、研究室では学生との熱い議論が交わされました。

1993(平成5)年には、経営学部研究棟として10号館が竣工。その後、11号館の老朽化に伴い、2008(平成20)年に8号館3・4階を改修し、経済学部の研究室を11号館から移転しました。

図書館の変遷

当初、図書館はD号館の1階にありましたが、創立10周年記念事業の一環として、1977(昭和52)年に3階建ての新図書館が完成しました。1階は新聞を配したラウンジと自習室があり、2～3階は閲覧室です。1991(平成3)年、蔵書の増加に対応するため、図書館書庫を増築しました。社会科学系の書籍を中心に33万冊余の蔵書があります。特に地域経済関係の文献は充実しており、地域への学術情報サービスとして一般市民にも開放されています。

利用者ポータル(MY CARIN)でWeb上から図書館のサービスが利用できるようになっています。2014(平成26)年には、文部科学省の補助金により改修工事がなされ、入退館は学生証のバーコード読み込み式となりました。1階には本校教育の部屋「岐阜経済大学の歩み」、2階にはディスカッション、グループワーク等に使えるオープンスペース(ラーニングコモンズA・B)、3階には女子学生専用の談話スペース(Jクアドラント)が整備されました。

校友会創設30周年記念オブジェ「飛翔の掌」

3号館前の庭の噴水には巨大なオブジェ「飛翔の掌」があります。本学第3期卒業生である浅井清貴氏の作品で、校友会創設30周年を記念して、校友会から寄贈されたものです。浅井氏の作品は、他にも2000(平成12)年に寄贈された壁画「激動の世紀末～21世紀への伝言」(6号館ロビー)等があります。本学は、経済系大学として、経営者を輩出していますが、スポーツ、芸術分野に進んだ卒業生も少なくありません。

日本国際ポスター美術館

日本国際ポスター美術館は、2008(平成20)年に、情報メディア学科開設を記念して、大迫輝通館長(元岐阜経済大学学長)、本学第2期卒業生の堀富士夫氏(株式会社デリカサイト代表取締役 FOUNDER・本学客員教授)、および地元企業のご尽力により、7号館講堂に移設されました。近代ポスターの祖、ロートレックやシュレの100年前の作品をはじめとして、世界各国の貴重なポスター1万点以上を所有しており、「大垣国際招待ポスター展」や、「高校生ポスターコンクール」が開催されています。

GIFU
KEIZAI
UNIVERSITY
50TH
ANNIVERSARY

通史Ⅱ — Every 10years



1967-1976

前史—開学に向けて

昭和40年代、日本は戦後復興の時期を乗り越え、高度成長の時代へと進みました。当地、岐阜県においても、産業各分野における躍進を背景に、将来、経済界の中堅として活躍すべき人材育成の気運が各方面から高まりました。

おりしも、18歳人口が200万人を超える戦後ベビーブーム世代（1947年～1949年生まれ）の大学進学時期を迎え、教育界からも進学先の受け皿づくりに熱い要望がありました。

しかし当時、岐阜県内の大学は、国立岐阜大学と岐阜市立岐阜薬科大学の2校のみであり、また社会科学系の学部がなく、経済学部（科）に限れば、隣県愛知県においても、国公立2大学、私立3大学と数えるほどでした。

こうした事態を受けて、県内に社会科学系大学を創設することについて松野幸泰（岐阜県知事）が、山本庄一（大垣市長）並びに杉山令肇（学校法人聖徳学園理事長）と相談の結果、山本市長が中心となって大学設置準備が進められ、参議院議員（前文部事務次官）内藤誉三郎氏をはじめ県下の地方自治体、教育界、実業界の代表者らが協力し、杉山令肇氏がその推進にあたりました。

1966（昭和41）年5月10日、大垣市役所会議室において、岐阜経済大学設立発起人会が山本市長を議長に、発起人19名全員の出席のもと開催されました。



学校法人 岐阜経済大学寄附行為認可申請書（1966年9月）

当日の議事録から、本学設立に向けた第一歩を読みとることができます。1967（昭和42）年4月、山本市長から「岐阜経済大学経済学部経済学科入学定員200名、総定員800名の設置発足できる態勢はととのった」旨の説明があり、次に、横谷裔大垣市議会議長から、「計画の進行と共に県下各方面よりの期待と声援は日毎に増大している。われら設立発起人一同の責任は重大であることをあらためて確認しなければならない」旨の発言があり、全員異議なく賛成で議決されました。続いて、学校法人岐阜経済大学設立代表者として内藤誉三郎氏の選任、及び学校法人岐阜経済大学寄附行為の制定が全員一致で決議されました。

発足した学校法人岐阜経済大学設立準備委員会（設立代表者 内藤誉三郎氏）は、早速、開学準備を始めました。6月、校舎棟C号館（現3号館の前身、鉄筋3階建、教室・事務室・役員室）建設工事契約を締結。7月、大垣市北方町大字東村前1250番地の土地を岐阜経済大学校地として手続完了。8月、教職員宿舍用地（大垣市三津屋町鐘突28番地）を購入。同月、図書設備の発注契約を締結、機械器具・標本、備品類等の発注等を完了しました。特に、校地、校舎など基礎的な施設に要する資金は、主として設置準備の中心となった大垣市の助成によるものでした。

一方、教授陣の確保については、当時、富山大学の内田穰吉教授、龍谷大学の永田啓恭経済学部長、北村貞夫経営学部長などのお力添えによるものと伝えられています。こうして、ハード・ソフト両面において、



建築中のC号館（1966年）

関係者の多大な尽力により、大学新設、学校法人設立認可申請に必要な準備を整えることができました。

1966（昭和41）年9月28日付けで、学校法人岐阜経済大学設立に係る「学校法人岐阜経済大学認可申請書」を文部大臣宛に提出しました。計画概要は、「昭和42年4月1日開設、岐阜経済大学経済学部経済学科、入学定員200名、収容定員800名、教員は学長ほか専任教員37名、校地面積45,000㎡、校舎面積5,303㎡、蔵書21,410冊など（教員組織及び校舎などの諸条件は3カ年の年次計画）」でした。

法人設立当初の役員は、内藤誉三郎理事長、杉山令肇副理事長、山本庄一理事、横谷裔理事、土屋義雄理事、小川宗一理事、田口利八理事、須崎潔理事、杉山武一理事、伊藤良太郎理事、大野繁俊理事、加納博司理事、佐々木元昭理事、高木敏夫理事、野村正三理事、三宅晃允理事、大友抱璞理事、竹中恭平監事、山田勝之助監事、以上の19名でした。

申請書の「岐阜経済大学設立趣意書」は、建学の精神ともいうべき性格を有し、当時の時代背景、先人の大学設立にかける篤い気概を示す歴史的な文書として、ここに長文ではありますが原文のまま引用します。

「近代科学が生んだ技術革新の潮流は急速に全世界をおおい、人類の歴史は今日すでに新しい段階に入っております。このような新時代転換期にあつては、高度の科学知識と斬新な工業技術を修得した者と、経済管理に精進し眼を広く世界の市場にそそぐ産業人々が車の両輪のごとく相協力しなければならぬことはいまでもありません。もともと資源に乏しく、しかも過大な人口をようする我が国にとっては、科学技術の飛躍的振興による生産性の向上を、海外自由化貿易を通じて無限の富にかえること以外に民族発展の方途はあり得ないと信じます。

このような社会事態に対処するためには、まづ有為な人材育成に着目し、一は創造発見の能力伸長を図り、一は社会指導の負荷に耐えうる知才の涵養に留意し、もって人間資質の真価を発揚せしめることが最も肝要と思います。

われわれが、大学設立を企図したいわれもこの意味の具現に外ならないのであります。

時に既設の大学をみるに、今なお学問の分野ではともすれば象牙の塔に立てこもり観念的アカデミズムを固執する弊なしとしないのであります。また校地もいたずらに大都市に集中偏在するきらいが多分にあります。それ故にわれわれは深思反省して、ここに青年学徒の教育地はもっぱら都塵をさげ自然の環境にめぐまれた大垣市の中心部より北部にはなれること3,000米、文化においては昔日大垣城下古猷豊かな適地に校地を求めて大学を設立し、もって一面近代的広域行政にもとづく学園都市形成をめざす地元先覚の要望に応じて、中部岐阜県独自の壮大なる気宇を培い理想に燃えつつも現実より遊離せず、他日内外に雄飛する気魄をもつ青年社会人を育成しようとするものであります」。

翌1967（昭和42）年1月23日、学校法人岐阜経済大学及び岐阜経済大学経済学部経済学科（入学定員200名、収容定員800名）の設置が認可されました。

本学は、すでに1966（昭和41）年12月に文部省（現文部科学省）から設置認可の見通しの内示をえていましたので、4月1日からの開学準備をすすめる一方、県下の高等学校進学関係者らを対象とした開学・進学の説明会を開催するなど、学生の募集にも着手しました。入試事務局は大垣市教育委員会内に置かれ、入学試験は、第一次入試が1月、第二次入試が3月に、地元岐阜県立大垣北高校を会場に実施されました。志願者は、479名で、岐阜県内高校出身者が69.2%、愛知県の17.3%がこれに次いでいます。本学の設立事情から、将来の拡充・発展に期待して、多くの優秀な進学志望者が受験しました。

開学にあたり、大学学章と学歌が一般公募され、学章は、岐阜県恵那郡の丹羽幸三氏の作品に一部修正を加えたもので、たゆまない躍進を象徴する岐阜県の県木イチイの葉に経大の文字を図案化したものです。また、学歌の歌詞は九州在住の花田鶴彦氏の作品に決まり、作曲は網代栄三氏によるものです。

始動—開学の息吹

1967（昭和42）年4月7日、第1回入学式が、大垣市民会館（大垣市外側町 ※現在は大垣市保健センターが

立地)に、入学者296名と保護者・来賓を迎え盛大に行われました。初代学長の友友抱璞氏は「自分の意思で自分の力で勉強し研究してほしい。勉強によって自分をきたえ、豊かな人間性を高めてほしい」と訓示を述べました。また、選定された学章および学歌が披露され、大学の歴史のスタートが切られました。

開学当時、校舎はまだC号館が竣工したのみで、1階が事務室、役員室、会議室に、2・3階の中教室2、小教室7、演習室6室が授業にあてられました。B号館(現2号館前に当時立地=鉄筋2階建、1階:事務室等、2階講堂兼大教室)、D号館(現新食堂、第2体育館建設地=鉄筋4階建、1階:図書館、2~4階:教員個人研究室等)の建設、グラウンドの一応の整地が完了したのは11月から12月にかけてで、施設・設備面の開講準備は十分とはいえませんでした。開学1年目に19名の専任教員が着任し、教育・研究の体制は開学早々とのえられ、入学式の翌18・19日にオリエンテーション、授業は20日から実施されました。

教育・研究の内容・体制を審議する経済学部教授会は、3月18日、開講の前に第1回を開催し、大学の自治的機能を開始しています。5月には、学則に基づき大学管理機関として評議会が確立され、事務機構も16名の職員により庶務、会計、教務、学生、図書などの諸課を設置し、教育・研究を支える体制を整えました。

教授会、大学評議会及び大学事務機構は、一方では開学早々の教育・研究システムや施設・設備の整備に努めながら、他方では、1968(昭和43)年4月に向けて、

勤労学生を対象とした経済学部第二部経済学科を増設する認可申請、及び第一部・第二部に教員養成課程を附設する申請準備に力を注ぎました。

教員の研究組織としての岐阜経済大学学会は、学長を会長に活動を開始し、学会機関誌「岐阜経済大学論集」の開学記念号第1巻第1号(377頁)を11月に刊行しました。学生の保護者で組織された親和会も、7月に設立総会を開催しています。

学生の課外活動は、学術・文化・体育各分野のサークルが多く組織され、5月に学生総会を開催して「学生会」を結成しています。11月には、第1回大学祭が「始動」を統一テーマに、3日間にわたり開催されました。主要行事は、講演会「経済学の道」(講師:名和統一教授)、「大学の森」(講師:城宝正治教授)、ダンスパーティ、映画会、ファイヤーストーム、模擬店などです。本大学祭に対し学生部長は「学生諸君の創意と努力とその凡ての力を結集して行われた第1回大学祭が単に学生乃至大学のためであるにとどまらず、市民各位との接触と理解を深め、その関連性を高めると共に、今後における学生の勉学と研究の成果によって大学創設に当たって寄せられた地元の協力とその要望に応える好機である」と、メッセージを寄せています。

開学早々の準備は必ずしも十分とはいえませんが、教職員、学生は新設大学の意気込みを持って、新鮮で、積極的で、いきいきした学園の雰囲気をつくりだしていました。

構築—教学・経営体制の整備・確立

1968(昭和43)年4月1日、経済学部第一部経済学科を基礎として経済学部第二部経済学科(入学定員200名、収容定員800名)、及び第一部・第二部に教員養成課程(「社会科」中学校1級・高等学校2級、「商業科」高等学校2級普通免許状)が増設・附設されました。第二部は、当時、岐阜県で唯一の4年制大学夜間部であり、地元自治体および民間企業から向学心に燃える多くの青年を迎えることができました。

また開学2年目にして、今日の地域貢献の端緒となる大学の学問開放の場として、本学学会主催、大垣市教育委員会後援の「市民大学講座」が、大垣市民会館を会場に8月と1月を除く毎月1回開催されています。

この時期は、大学紛争の嵐が吹き荒れており、教授会では大学問題研究会、学生問題研究会などを組織して問題の所在を明らかにし、事態の推移に伴って大学の態勢を整えられるよう努力が試みられました。大学トップは、健康上もしくは大学運営上の問題により大友抱璞学長、伊奈重誠学長事務取扱、名和統一学長へと交代しました。また、法人の理事長も、内藤三郎氏から田口利八氏へ、副理事長(常任理事)は、杉山令肇氏、伊藤一郎氏、下野次郎氏、岩井正一氏へと交代しました。

1972(昭和47)年4月、田口利八理事長の就任によって、理事会が毎月開催されることとなり、経営の管理体制とその運営はとみに整備されました。全教職員に

より選出された学内選出理事制度、理事会と大学の連携を図る理事長室の新設、新事務局長の任命、若手職員を事務課長に抜擢するなど、大学組織、事務機構が効果的に機能することとなりました。

1974(昭和49)年、赤字財政の傾向のなか「狂乱物価」が経営に決定的影響を与えていることから、飯田学長及び学内理事が中心となり、紆余曲折を経て開学以来はじめて学費を改定しました。

この間、施設設備については、1969(昭和44)年にA号館(鉄筋3階建)・クラブハウス(木造平屋建26室)、1971(昭和46)年に体育館(バスケット・バレーコート等)、1973(昭和48)年にE号館(鉄筋3階建、その後2号館に改称)、1976(昭和51)年に新図書館建設が着工されています。

創立10周年の前年、1976(昭和51)年11月、田口利八理事長を会長に創立10周年記念事業委員会を、飯田繁学長を委員長として記念事業実行委員会を組織しました。事業計画は、新図書館の建設、「岐阜経済大学10年史」の編纂、記念講演会の開催、「岐阜経済大学論集創立10周年記念特集号」(社会科学、人文・自然科学両編)及び「地域経済論集」の刊行でした。

1977(昭和52)年の入試志願者は、第一部2,008名、第二部128名で第一部のそれは開学年度479名に対し、4.2倍に達しました。

田口利八理事長を中心とする理事会は、教学を裏付ける財政の確立をはかり、飯田繁学長を中心とする大学諸機関は、大学自治の立場に立って教学に専念し、互いに協力して大学の充実につとめ、とくに学内の理事及び事務機構は教学と財政の接点にある立場から、大学経営の統一的な運営が進められるよう努力されました。

「岐阜経済大学10年略史」には「1977(昭和52)年4月、本学は創立10周年を迎えた。本学は、その教学内容、教員組織、施設・設備など内容、形式ともすでに幼年期、少年期を脱して、青年期に足をふみいれた」と記しています。



開学当初(1967年12月)



創立時の図書館



大学祭のファイヤーストーム(1967年11月)

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1966 昭和41	5月 岐阜経済大学設立発起人会（議長：山本庄一・大垣市長）において岐阜経済大学設立準備委員会を発足（設立代表者：内藤善三郎参議院議員・前文部事務次官）、設置認可申請手続準備開始	6月 国民の祝日に関する法律改正公布（建国記念の日）2月11日）、敬老の日（9月15日）、体育の日（10月10日）を制定
	6月 校舎棟 C 号館建設工事契約締結	6月 ビートルズ来日
	7月 大垣市北方町大字東村前 1250 番地を岐阜経済大学校地として取得	7月 新東京国際空港を成田市三里塚に建設することを閣議決定
	8月 教職員宿舎用地（大垣市三津屋町鐘突 28 番地）を取得	9月 台風 26 号東海地方に上陸（全国で 318 人の犠牲者）
	9月 「学校法人岐阜経済大学認可申請書」を文部省に提出	11月 全日空機、松山中で墜落
	1月 「学校法人岐阜経済大学寄附行為」認可される。学校法人岐阜経済大学（経済学部第一部経済学科）設置認可される（入学定員 200 名）	12月 衆議院、汚職疑惑続出で解散
	1月 初代理事長に内藤善三郎参議院議員（前文部事務次官）が就任	2月 米軍、ベトナム戦争で「枯葉作戦」を開始
	1月 学章デザイン・学歌を公募、学歌は花田鶴彦氏作詞、網代栄三氏作曲に決定	3月 自民党が「核政策の基本方針」まとめる（非核三原則）
	1月 1967 年度岐阜経済大学経済学部第一部経済学科第一次入学試験実施	* この年丙午で出産数が前年比 25% 減
	2月 C 号館（鉄筋 3 階建、教室・事務室・役員室・会議室など）竣工	
2月 設立準備委員を理事として学校法人岐阜経済大学理事会を構成		
3月 1967 年度岐阜経済大学経済学部第一部経済学科第二次入学試験実施		
3月 経済学部第 1 回教授会開催		
1967 昭和42	4月 岐阜経済大学開学、経済学部第一部経済学科（入学定員 200 名）開設（教員 25 名、事務職員 17 名）	4月 東京都知事選挙で、社会・共産両党連合の美濃部亮吉が当選
	4月 初代学長に大友抱環教授が就任	6月 中国、初の水爆実験に成功、4 番目の保有国に
	4月 第 1 回入学式 入学者数 296 名 於：大垣市民会館（東外側町）、入学者オリエンテーション実施、授業開始	7月 米デトロイトで大規模黒人暴動。38 人死亡
	4月 図書館開館	7月 西日本に集中豪雨、24 府県で 365 人が死亡
	4月 教職員宿舎竣工	7月 欧州共同体（EC）成立
	5月 評議会（大学管理機関）成立	8月 東南アジア諸国連合（ASEAN）結成
	5月 教務部長（初代：牧倫教授）、学生部長（初代：伊奈重誠教授）、図書館長（初代：城宝正治教授）選任	10月 吉田元首相死去で国葬
	5月 学生総会開催、「学生会」（学生自治組織）結成	12月 南アで、世界初の心臓移植手術
	5月 教職員の親睦会「伊吹会」結成	1月 チェコスロバキア共産党第一書記にドブチェク選出、「プラハの春」が始まる
	7月 親和会（学生保護者会）創立総会開催	2月 金婚老事件発生
	7月 学生会、「学生自治会会則」制定	3月 東大全学闘争委員会が安田講堂を占拠、卒業式中止
8月 教職員宿舎用地等取得		
11月 学生会、大学祭実行委員会を組織、第 1 回大学祭開催 テーマ「始動」		

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1968 昭和43	11月 岐阜経済大学学会、会則を制定（会長：学長） 機関誌『岐阜経済大学論集』創刊（開学記念号）	
	12月 B 号館（鉄筋 2 階建、事務室・役員室・講堂兼大教室）、D 号館（鉄筋 4 階建、図書館・教員研究室・資料室等）竣工	
	2月 経済学部第二部経済学科開設の設置認可される	
	3月 経済学部長事務取扱に伊奈重誠教授が就任	
	* 岐阜経済大学学生会活動開始	
	4月 経済学部第二部経済学科開設（入学定員 200 名）	4月 米 黒人運動指導者キング牧師、撃たれて死亡
	4月 経済学部長（初代）に伊奈重誠教授が就任	4月 米 ネバダ州で大規模な地下核実験
	4月 一部・二部に教員養成課程開設（中学校教諭一級免許状「社会」、高等学校教諭二級免許状「社会」、高等学校教諭二級免許状「商業」）	5月 仏 ベトナム和平会談本格討議、パリで開始
	4月 カリキュラム変更（一般・専門教育科目・教職課程科目増置、随意科目「基礎演習」設置）	5月 仏 五月革命
	4月 「課外活動に関する規程」（1969 年度から「課外活動規程」）制定（クラブ活動育成）	6月 東大医学部全学闘争委員会の学生ら、安田講堂を占拠
4月 1968 年度入学式挙行 経済学部第一部第 2 回（入学者数 229 名）、経済学部第二部第 1 回（入学者数 186 名）	6月 小笠原諸島、日本返還	
4月 指導教員制度発足	8月 札幌医大で日本初の心臓移植手術実施	
5月 学生の課外活動団体（クラブ）に顧問（部長）を委嘱	8月 飛騨川バス転落事故	
5月 岐阜経済大学学会が「岐阜経済大学市民講座」第 1 回を開講（後援：大垣市教育委員会、於：大垣市民会館）	10月 川端康成がノーベル文学賞受賞	
9月 大友抱環学長病氣療養に伴い、伊奈重誠経済学部長が学長職務代理を兼任	10月 第 19 回オリンピック、メキシコシティで開催	
9月 学生自治会、クラブ設立委員会を設置、同好会のクラブ（部）昇格を認定（文化系 12、体育系 5 団体がクラブに昇格）	10月 明治 100 年記念式典挙行（日本武道館）	
11月 食堂竣工、キャンパス整備	10月 中国 毛沢東、劉少奇（元国家首席）から全職務を剥奪し、共産党を除名	
11月 事務職員の親睦会「薬城会」結成	12月 「3 億円強奪事件」発生	
11月 第 2 回大学祭開催 テーマ「若き可能性と主体性の追求を」	12月 1969 年度の東大、東教大の入試中止を決定	
12月 教職員組合準備会結成		
3月 教員養成課程「聴講生課程」設置認可される		
3月 岐阜経済大学教職員会結成（1970 年 6 月教職員組合として再編）		
3月 初代学長大友抱環が退任、学長職務代理伊奈重誠が退任		



第 1 回入試（1967 年 1 月）



入学案内（1968 年）



第 2 回入学式にて、左から山本庄一市長、大友抱環学長、内藤善三郎理事長（1968 年 4 月）



第 1 回卒業式（1971 年 3 月）



学生寮「三津屋荘」（1967 年）

最初に建設された C 号館（1967 年 2 月）

学生談話室（1972 年）



開学 2 年目初夏のキャンパス周辺（1968 年）



体育館建設工事（1970 年）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1968 昭和43	<ul style="list-style-type: none"> * 1969年度入試から、3年次編転入学試験、第一部第一次入学試験場を富山・岡山・米子に設営、第二部において推薦入試開始 * 学生会が第一部学生自治会として再編 	
1969 昭和44	<ul style="list-style-type: none"> 4月 学長事務取扱に伊奈重誠経済学部長が就任 4月 カリキュラム変更（一般・専門教育・外国語科目増置「スペイン語・ロシア語」、「基礎演習」の専門科目への位置づけ） 6月 教授会、大学立法反対を声明 6月 A号館（後に1号館、鉄筋3階建、大・中・小教室・LL教室）竣工 6月 第二部学生自治会結成準備集会開催 8月 クラブ・ハウス（木造平家建26室）竣工 9月 B号館前庭の緑化、テニス・コート等整備 10月 「第二部学生自治会会則」制定 11月 第一部第3回大学祭、第二部第1回大学祭テーマ「我々にとって『学問』と『労働』とは何か」開催 1月 グラウンドに野球場・バックネット設置 1月 入試事務局を臨時編成 2月 「課外活動規程」制定（課外活動の基本手続） * 1970年度入試から、第一部第一次入学試験における出張試験を富山・岡山・浜松・飯田で実施（飯田は1971年度以降廃止） 	<ul style="list-style-type: none"> 5月 東名高速道路全通 5月 文部省、「大学の運営に関する臨時措置法案」をまとめる。全国大学30校以上が反対声明 6月 日本初の原子力船「むつ」進水 6月 経済企画庁、1968年の日本のGNPは西側諸国で第2位と発表 7月 米アポロ11号、人類初の月面着陸成功 7月 東京都公害防止条例公布 8月 「大学の運営に関する臨時措置法」公布 2月 国産初の人工衛星「おおすみ」打上げ成功 3月 大阪で、日本万国博覧会開幕（9.13まで）77カ国参加 3月 八幡・富士両製鉄会社、合併して新日本製鉄発足 3月 日航機よど号、赤軍派学生に乗っ取られる（日本発のハイジャック事件） * 大学・短大への進学率が20%を超える
1970 昭和45	<ul style="list-style-type: none"> 4月 カリキュラム変更（専門教育科目の見直しと増置） 4月 資料室開設 6月 「教職員会規約」改正、教職員組合と名称変更し「岐阜経済大学教職員組合規約」制定 10月 岐阜経済大学ゼミナール協議会結成 11月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（玉野井芳郎氏） 11月 「岐阜経済大学広報」創刊号発刊 11月 第一部第4回経大祭開催、第二部模擬大学祭として協賛 1月 「岐阜経済大学教職員組合規約」改正、「伊吹会」解消し、教職員組合へ吸収 3月 経済学部第一部経済学科第1回卒業式挙（於：B号館講堂） 3月 第1回卒業生、岐阜経済大学校友会結成・会則制定（会長：名和統一） 	<ul style="list-style-type: none"> 5月 日本私学振興財団法公布 6月 日米安全保障条約自動延長。全国で反安保統一行動 8月 歩行者天国東京でスタート（世界で2番目） 8月 大学設置基準改正（一般教育科目の開設方法など） 9月 米上院で大気汚染防止法（マスキー法）可決 9月 ソニー、日本企業で初めてニューヨーク証券取引所に株式上場 10月 戦後初めて沖縄を含め、国勢調査を実施（総人口1億466万5171人）

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1971 昭和46	<ul style="list-style-type: none"> 3月 伊奈重誠学長事務取扱が退任 * 1971年度入試から、第一部で推薦入試開始（2002年度以降、一般推薦入試） * 学内ゼミナール大会開催、全国・中部ゼミナール大会参加 	<ul style="list-style-type: none"> 11月 沖縄国政参加選挙 11月 三島由紀夫割腹自殺 2月 成田空港公団、第1次行政代執行着手 2月 米ロサンゼルスで大地震。高速道路崩壊、ダムにひび割れ
1971 昭和46	<ul style="list-style-type: none"> 4月 学長に名和統一教授が就任 4月 カリキュラム変更（必修科目の整理、第二部の卒業資格所要単位改訂） 4月 岐阜経済大学校友会会則施行 4月 体育館（バスケット・コート2面、バレー・コート2面、バドミントン・コート2面併用、シャワー室、更衣室、教員室）竣工 7月 クラブ・ハウス（木造平家建2室）増築 10月 理事会、第一部・第二部学生自治会に学費改定案を提示 11月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（矢口孝次郎氏） 11月 第一部第5回経大祭、第二部第3回経大祭開催 12月 第一部・第二部学生自治会、学費改定案につき、理事会側と団体交渉開催 12月 理事会、学費改定案を撤回 12月 内藤誉三郎理事長が退任 1月 「同窓会会報」創刊 2月 名和統一学長が辞任 2月 飯田繁教授が学長代行・校友会会長に就任 3月 喫茶室（後の学生談話室、鉄筋平家建）竣工 3月 経済学部第一部経済学科第2回卒業式、第二部第1回卒業式挙 3月 岐阜経済大学第二部同窓会やかん会結成 	<ul style="list-style-type: none"> 4月 学校法人会計基準制定 6月 沖縄返還協定調印 7月 全日空機と自衛隊機衝突（岩手県雫石上空） 8月 米ニクソン大統領、ドル防衛策発表（ニクソン・ショック） 8月 政府、対ドルレートの変動相場制採用 10月 国連総会、中国の国連復帰を決定 10月 英議会、英国のEC（欧州共同体）加盟を可決 12月 韓国大統領、国家非常事態を宣言 12月 10カ国蔵相会議で多国間通貨調整合意（スミソニアン合意）基準為替相場1ドル=308円（スミソニアンレート） 1月 グラムで横井さん救出 2月 第11回オリンピック冬季大会、札幌で開催 2月 連合赤軍、浅間山荘事件
1972 昭和47	<ul style="list-style-type: none"> 4月 理事長に田口利八西濃運輸株式会社取締役社長が就任 4月 カリキュラム変更（大学設置基準改正に基づく科目配置・履修再編・科目追加など） 4月 国内留学制度発足（第1回の適用者：前期 那須宏、後期 川崎七瀬） 4月 資料室を図書館へ吸収、資料室跡を参考図書室に 5月 学生自治会、第1回五月祭を開催 6月 学長に飯田繁教授が就任 6月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（富塚文太郎氏） 	<ul style="list-style-type: none"> 5月 沖縄の施政権返還、沖縄県発足 5月 テルアビブ空港で自動小銃乱射事件 6月 田中角栄通産相「日本列島改造論」発表、地価暴騰の引き金となる 6月 沖縄知事選挙で革新の屋良氏が圧勝 7月 第1次田中角栄内閣成立 7月 四日市喘息公害訴訟判決、大企業の共同不法行為認める

講義風景・ゼミ



安部大成先生の英語語学クラス（1967年）



佐藤昇先生の経済政策講義（1967年）



内田先生のゼミ（1970年）



米田先生のゼミ（1970年）

大学祭&五月祭



第1回大学祭（1967年11月）



第3回大学祭（1969年11月）



第1回五月祭バレーボール（1972年5月）



第10回経大祭（1976年11月）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事	
1972 昭和47	9月 クラブ・ハウス（木造平家建4室）増築	8月 第20回オリンピック、ミュンヘンで開催	
	10月 初代事務局長に長宗我部蓬城が就任	9月 日本・中国国交樹立	
	11月 第1回校友大会開催（於：食堂）	2月 円、変動相場制移行（1ドル＝264円に急騰）	
	11月 第6回経大祭を第一部・第二部統一して開催（これ以降毎年11月に経大祭開催）		
	* 喫茶部開設（食堂西側）		
1973 昭和48	6月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（長洲一二氏）	4月 日銀、公定歩合を5%とする	
	6月 「岐阜経済大学ゼミナール協議会規約」制定、学術講演会開催	5月 日本とドイツ民主共和国（東独）国交樹立	
	7月 教授会有志、「筑波大学法案」国会に反対声明	7月 日航機ハイジャック事件	
	10月 クラブ作業場（木造スレート葺平家建）竣工	8月 金大中事件	
	10月 岐阜経済大学学会講演会開催「経済学の屈折」（法政大学教授 伊東光晴氏）	10月 第4次中東戦争勃発	
	10月 国庫助成に関する関西教授会連合に加盟	10月 ペルシア湾岸6ヵ国、原油公示価格の21%引上げと生産削減を決定	
	12月 E号館（後の2号館、鉄筋3階建、シンボルタワー付き、大・小教室、役員室、保健室、事務室）竣工、校舎前庭の全面緑化、大学西大駐車場整備、サッカー・グラウンドなど整備完了	10月 プロ野球、巨人V9達成、王貞治選手3冠王達成	
	1月 B号館1階改装（ロビー、事務室、会議室）	11月 本州と九州を結ぶ東洋一の吊り橋「関門橋」開通	
	2月 校庭の緑化計画完成	11月 政府、オイルショックに対処する石油緊急対策要綱閣議決定	
	3月 岐阜経済大学ゼミナール協議会が「岐阜経済大学学生論叢」創刊	12月 日銀公定歩合を2.0%引上げ9%とする	
	3月 E号館・B号館の竣工式挙行	3月 小野田寛郎元陸軍少尉、ルバング島で救出	
	1974 昭和49	4月 「岐阜経済大学留学規程」制定（国外留学制度発足）	5月 堀江謙一、小型ヨットで単独無寄港世界一周より帰港
		10月 学内理事、第一部、第二部学生自治会に学費改定案を提示	8月 米ニクソン大統領、ウォーターゲート事件で辞任
10月 全関西私立大学国庫補助促進同盟に加盟、同同盟主催の決起大会参加、国の私立大学経常費補助の大幅増額要望運動に参加		8月 三菱重工ビル爆破事件	
11月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（宮崎義一氏）		10月 プロ野球、巨人・長嶋茂雄選手引退	
12月 理事会、1975年度入学者から学費改定実施を決定		11月 田中首相、金脈問題で辞意表明	
12月 学生自治会、学費改訂反対のストライキを実施		12月 三木武夫内閣成立	
2月 軽音楽部部室竣工		12月 日本経済、戦後初のマイナス成長と発表	
3月 米田清治教授、国外留学制度の第1回適用者としてイギリスへ出発（オクスフォード大学・ロンドン大学）		* 高等学校等への進学率が90%を超える	

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1975 昭和50	5月 岐阜経済大学10周年準備委員会設置	4月 ベトナム戦争終結
	5月 自動車部部室竣工	5月 日本女子登山隊が女性初のエベレスト登頂に成功
	6月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（吉田義三氏）	7月 沖縄で国際海洋博覧会開幕
	7月 事務職員の定期人事異動制度発足	7月 私立学校振興助成法公布
	1月 地域経済研究会発足	9月 天皇訪米
	2月 図書館建設のための資金3ヵ年計画決定	11月 第1回先進国首脳会議が、フランスで開幕
	* クラブ・ハウス（南、鉄筋コンクリート造2階建9室、シャワー室）竣工、野球場整備、グラウンド照明設備強化	1月 中国革命の指導者、周恩来首相、死去
1976 昭和51	4月 経済学部第一部経済学科の入学定員を300名に変更	5月 冒険家植村直己、北極圏単独犬ぞり旅行に成功
	4月 経済学部第二部経済学科の入学定員を100名に変更	6月 民法、戸籍法改正（離婚後の姓の自由）
	4月 学生自治会、新入生歓迎会を開催	7月 南北ベトナム統一
	9月 9.12集中豪雨（台風17号）による洪水被害義捐金拠出を教授会、事務職会議で決定	7月 第21回オリンピック、カナダのモントリオールで開催
	9月 学生自治会、9.12集中豪雨救援カンパ活動を行い社会事業団を通じ被災地を救援	7月 ロッキード事件で田中角栄首相逮捕
	10月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（行沢健三氏）	9月 ソ連戦闘機ミグ25が函館に亡命着陸
	11月 創立10周年記念事業委員会（会長：田口利八理事長）、創立10周年記念事業実行委員会（委員長：飯田繁学長）発足	9月 毛沢東中国共産党主席、死去
		9月 集中豪雨により長良川右岸決壊。安八町、大垣市周辺浸水
		10月 酒田大火発生
		12月 ソ連、200海里漁業専管水域設定を布告
		12月 福田赳夫内閣成立
		12月 この年、戦後生まれが総人口の半数を突破

クラブ活動

●運動系クラブ



少林寺拳法部



ボウリング部



応援団



ゴルフ部



硬式野球部

●文化系クラブ



軽音楽部



美術部



ESSクラブ



フランス語クラブ

Topics 1

「岐阜経済大学の教学と経営」の原点

小倉 正紀 (元職員)

岐阜経済大学が開学して50年が過ぎました。この大学は岐阜県下初の私立大学として誕生しましたが、開学当初から大学運営が円滑に機能していたとは言いきれませんでした。開学3年目にして副理事長の杉山令肇さん、学長の太友抱璞さんが退任されていることから、その事情が容易に推察されるどころです。

岐阜経済大学の歴史を振り返ってみますと、草創期の5年間は激動の年代であり、岐阜経済大学の礎を定めた期間だったと感じています。

大学の経営管理に十分な認識と技量が不足する理事集団と国立大学出身者が多い教員集団との間で、カリキュラム編成のあり方や担当コマ数指定をめぐる交渉でも折り合いがつかない事態が度々生じていました。

理事長が内藤誉三郎さん（元文部事務次官・参議院議員）であることが理事側の権威的運営を助長していたのではないかと思います。

開設準備段階での教員編成については、学部設置の中心となる就任予定研究者が決定された上で科目配当人事が準備されるのが通例ですが、岐阜経済大学の場合は、数名の他大学関係者に依頼していたため、勤務体系・給与体系のバランスがとれず、教員個々

の間で不満が累積していました。これに対処すべく、開学2年目には教職員組合準備会が結成され、就業規則・給与規定の検討会が行われ、翌々年には教職員組合が誕生しました。

この間に学長交代が2度あり、開学5年目に名和統一学長就任の機会を捉えて、伊藤一郎副理事長より困窮する大学財政を改善するため、学費値上げ案が提示されました。これに対し、教職員組合、学生自治会は、理事会側の努力不足を指摘し、反対を表明。個別に団体交渉の場が設けられました。数日後、学生自治会においては、第二部（夜間部）学生自治会がスト権を確立し、学長、学部長、副理事長と団体交渉を行いました。54時間に及ぶ交渉の末、値上げ案を白紙撤回させ、学長等の面々は、役職も辞任することの確約をさせたのです。団体交渉中、学長と副理事長の密約により、次年度入学予定者の入試合格通知書に値上げ案が同封されていたことが判明し、不誠実さを糾弾されたことが大きな要因でした。

名和学長、伊藤副理事長の辞任により、内藤理事長も辞任され、大学首脳部の交替を余儀なくされ、大学評議会、理事会は後任人事選考の協議に入りました。学長代行には飯田繁さんが選任されましたが、理事長選考が難航しました。学費値上げ問題の直後

でもあり、大学経営者責任のあり方をめぐって、理事者相互の討議が続きました。その間に大学教学現場では、飯田学長代行を中心に善後策を検討し、飯田学長より、今後の大学運営改革のあり方を含め「飯田私案」が、全教職員宛に諮問されました。これを受けて、三部会（大学評議会・事務機構・学長選挙制度）が結成され、討議の結果、全教職員より、教授の中から3名の理事を選出し、理事会との連携を強固にし、責任体制を確立することを決定し、理事会に提案しました。後任理事長就任を固辞され続けた田口利八さんは、飯田学長の決意に賛同され、理事会に承諾の旨を諮られ、二代目理事長として就任されました。

その後の学内運営は、学内理事会の責任ある原案提出が義務付けられ、理事会が保障運営を行うことになり、3年後の学費改定実施の全学合意を得ることができました。このことにより、岐阜経済大学の教学と経営の礎が築かれました。

第二部（夜間部）の創設については、第一部（昼間部）以上に地元経済界・自治体からの強い要望があり、1年遅れて開学しました。就労時間後、通学しての勉学となり、心身の疲れがある中で努力する学生の姿には、年齢を超越して敬服しました。学問に向き合う真の若者達でした。

学生の課外活動については、学生の自主性を尊重し、大学が積極的に支援する形態は採りませんでした。しかし、硬式野球部が全国大会出場を賭けた福井工大戦に惜敗したこと、少林寺拳法部が全国優勝したこと、美術部・新聞部・ユースホステル部・鉄道研究会・将棋部・軽音楽部などの活躍が、岐阜経済大学のキャンパスを活気づけてくれたことが思い出されます。



全国大会出場を賭けた福井工大戦（1970年）



経済学部第一部・第二部の第1回大学祭パンフレット（1967年11月・1969年11月）



少林寺拳法部



朝日新聞 1971年12月20日付（朝日新聞社提供）

column

野球に全力投球した
大学生活1970年度卒/第1期生
塚田 勝

私も1期生の入学時、校舎はボツンと田園の中にたち「えっ!!」と言う感じでちょっぴり寂しい思いもしました。でもこの大学生活のスタートが私の人生に素晴らしいプレゼントをもたらしてくれました。

甲子園を夢みながらも進学先の高校に硬式野球部はなく虚しさを感じておりましたが、岐阜経済大学への入学によって道が開けました。

躊躇なく野球部に飛び込んだものの、硬式ボールへの対応は想像以上に辛いものでした。しかし、良きチームメイトに恵まれ乗り越えられました。その仲間とローラーをひいてのグラウンド整備（グラウンドづくり）・ボールもはっきり見えない薄暗闇でノックをうけた岩国キャンプ等懐かしさで一杯です。野球の師と仰ぐ監督との出会い。キャンプ地に向かう夜行列車内で監督に「覚悟しとけ!!」と言われスタートした強烈な素手ノックと電柱との間隔50cmでの素振り。あの時が私の真の野球人生の始まりであったと思っています。

神宮を目指した最終学年、決勝の9回表の逆転負けで逃した神宮切符。流した悔し涙は鮮明に脳裏に焼き付いています。野球に全力投球した大学生活は、その後の人生の大きな支えになっていることは言うまでもありません。

金融機関に就職後、勤務のかたわら41歳からOBとして野球部監督に就任。54歳には金融機関を退職し岐阜経済大学職員としてお世話になりました。66歳を迎えた2014（平成26）年3月、退職と同時にユニフォームを脱ぎましたが、名誉監督の称号も授かり充実感に満ちた職員・監督生活でありました。大学関係者のご理解の賜物と感謝しています。

野球を通じて知り合った多くの人々との繋がり、OB達との絆、本当に私は幸せ者です。岐阜経済大学に入学しそこに硬式野球部があったからこそ今の自分だと認識しています。後輩達には近い将来必ずや神宮出場を果たしてくれるものと期待しています。

50周年を迎える今日の大学進学人口は減少し、地方大学は厳しい環境下にありますが、困難を打破し、岐阜経済大学が尚一層光輝くことを念じてやみません。

少林寺拳法の教え

1970年度卒/第1期生
石川 博久

早や創立50周年とは感慨無量です。

1967（昭和42）年1月の入試に臨んだ時の本校は、出来たばかりの荒涼感溢れる佇まいにビックリしました。

大学生活は、第一学寮に入寮、当初は寮と大学との往復のみから、寮近くで魚取りをし、あとで珍しい魚「ハリヨ」と分かりました。また、杭瀬川沿いでは蛍の乱舞に感動、次いで金生山に登り、化石を掘ったり、さらに関ヶ原に足を延ばして古戦場巡りなど好奇心を燃やしていました。

寮では寮長で強面を感じる安部大成先生、なんでも米国ネブラスカ州警の監獄の警備を務めていたと聞き、また日ごと寮周辺を鉄ゲタで歩く足音を聞いたり、筋肉を付けるためにホルモンを焼く臭いが漂い、シャドーボクシングの所作を見ていて怖い先生とっていました。その先生がある日「少林寺拳法の道場に行ったが強いぞ、おまえも少林寺拳法をやれよ」と言われ、少林寺拳法を始める切っ掛けとなりました。少林寺拳法にかかわり、大学生活が充実したことで、自分の人生にも得ることが多かったです。

その一つが、忍耐する体力が培われたことで、その後の仕事でも無理がきくようになったこと。次に少林寺の教えで「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」「己れこそ己れの寄るべ、己れを措きて誰に寄るべぞ、良く整し己れこそ、まこと得がたき寄るべなり」を心に刻み、宝は、少林寺拳法部と一緒に修養した部員仲間達です。その切っ掛けを与えてくださった、安部大成先生は、一生忘れ難い恩人でもあります。

ただ、残念なのは、その少林寺拳法部が今は廃部となっていることです。できればいつの日か、少林寺拳法部が再建できればと思っています。

column

青春の1ページ

1974年度卒/第5期生
須藤 修二

1971（昭和46）年4月に入学した当時を思い出すと、学長に名和統一先生が就任されました。当時は伊奈学長事務取扱が2年就任されていたようです。つまり正式な学長が就任されてからの入学でした。校風はフロンティア精神が流れており、まさに公設民営大学の香りがありました事を覚えています。だからこそ部活もありはしましたが、一部の体育会系の倶楽部を除き、特に文科系は、美術部以外は不安定な組織でした。

私も1年先輩たちが作られたユースホステル同好会に入会したものの、課外時間に誰一人先輩たちの顔を見ることなく数カ月経ち、私が同期の1年生の中で1歳年上だとのことで音頭をとって、新規に「ユースホステル旅行会」の名称で同好会を立ち上げました。当時は早いクラブ昇格を目指していましたが、文化会の筆頭、美術部と仲良くし、さらに学生自治会とも友好的協力関係を築いていました。

そのために10.21国際反戦デーにも参加し、たまたまその年の秋に47年度に学費値上げの動きがあったため、学費値上げ糾弾集会から始まり、大衆団交へと進み、48時間ストライキを打ちビケを張った次第です。当然2日間全学休講になり、集中して団交に立ち向かったわけです。偶然にも2日目に「密約3原則」が発覚し、伊藤副理事長・名和学長・花井学部長の退陣が確定し、学費値上げ案は白紙になりました。当時、自治会側の記者会見が必要と思い、中日・毎日・朝日各新聞社に連絡し、学費値上げを阻止することに一役買いました。私の青春の1ページになりました。

1975（昭和50）年春に大学を卒業し、社会の荒波の中で成長していく中で肯定的に考え、人との関わり方やポジティブにとらえる事、そしてレスポンスの速さと報連相は組織の必須項目であることは管理職を経験してきたからこそ、身につけ、それを当時の大学で学ぶ事が出来なかったのは若さなのか、それとも「気づき」なのか、社会の枠組みの中で勉強させられたのだろうと振り返り、回想します。

新入生ガイダンスで、基礎ゼミを受講すると大学生らしい勉強ができるとの説明があり、1週間考えて、池永先生の基礎ゼミに決めました。先生とは、毎年「空襲体験・戦争体験を語りつく集い」でお会いして、今もご指導いただいております。五月祭頃に、友人や先輩と夜通し、偉いのは年長者か、または能力がある人か、について論争しました。このとき、自分が大学生になったと実感しました。

2年生の9月には、1週間、雨が続いて長良川が氾濫し、下宿から外に出られませんでした。後期最初の授業で、大迫先生が、この地域に輪中が存在する理由について講義され、地域の水防団や消防団への感謝を忘れないでほしいと締めくくられました。

親が生活を切り詰めて学費を工面してくれましたので、4年生の時は、とれる科目をすべて受講しました。飯田学長の金融論は、単位取得が難しいので尻込みしていましたが、友人に背中を押され、2人で受講しました。試験問題は「インフレーションと物価上昇の違いについて論ぜよ」だったと記憶しています。満足できる解答は書けませんでしたので、お情けで可をいただいたのかもしれませんが。

試験勉強をしながら、なぜ自分がこの世に存在するのかを考え続けたことがあります。答えが出ないので、漢和辞典で自分の名前の「祐」の字を調べたら、「最後の助け。神様の助け」とあり、「これだ!」と思ったことです。社会の底辺で頑張っている人たちの最後の助け、または、民衆が困った時の神頼み、これで生きて行こうと決意しました。この志は、今も変わっていないように思います。

毎年、卒業式の時期になると、こんな夢を見ます。掲示板の卒業生一覧に自分の学籍番号がないので教務課に尋ねると、「4月に履修届を出していないので、単位は認定できない。もう1年頑張ってください」との答えです。永遠に卒業出来ない岐阜「寿」経済大学の学生のような気がしています。

一生の志を
決意した大学時代1978年度卒/第9期生
鈴木 祐一

50周年記念

座談会



森 恒男



加藤 称一



桑原 利幸



岩花 正樹



三宅 茂



水上 純孝

開学期を振り返って

学舎1棟のみで
スタートした開学期

水上 このたび、岐阜経済大学が50周年を迎えます。そこで、1期生の皆さんにお集まりいただき、当時の思い出を伺うことになりました。どうぞよろしくをお願いします。では、まず、入学式のことから始めましょうか。

三宅 入学式は、1967(昭和42)年4月17日に水門川のそばの大垣市民会館(東外側町)で行われました。今の市立図書館が移転する前にあった場所です。

加藤 私たちの時は、校舎が十分に整っておらず、入学式のための会場

がありませんでした。初年度の入学者は、300名ほどでしたか。

水上 1期生は296人でしたね。校舎の建設は真ん中のC号館から始まり、その後B号館とD号館(図書館)が建ちました。

森 JRの駅裏から大学まで、歩いて30分くらいだったでしょうか。当時は、交通の便が悪かったので歩いて通いました。

岩花 入学式の翌日でしたか、大学で初めて学舎を見たときには、1棟のみで大変驚きました。グラウンドは畑のようでした。履修ガイダンス等が実施され、受講科目を申告したように覚えています。

加藤 今の1号館はA号館でしたね。教務課・学生課の窓口はB号館でした。

水上 B号館は講堂で、その裏にE号館がありました。今の2号館です。1階に教務課と学生課があり、上に講義室がありました。研究室はD号館でしたね。D号館の図書館の上が研究室でしたが、先日、取り壊されました。C号館がメインで始まって、1階は事務所と図書室。昼はそこが食堂になりましたね。

加藤 食堂のメニューは、カレーライスと煮込みうどんくらいでしたね。学食はカレーライスと決まっていた。

岩花 大学の周囲には食堂や店もな

く、業者が来てパンを売るくらいで、昼食の時間に大変困ったことを思い出します。大学の東側に豚舎があり、臭いが流れてくると閉口しました。

加藤 私は、ラーメン屋をやっていたので、大学からのリクエストに応え、車で屋台を運んで、校門の東の道路でやらせてもらいました。そんなことがあったので、ご夫婦でやっておられた食堂のおばさんと目が合うのがいやでしたね。(笑)

新進気鋭の
教授陣を迎えて

桑原 同期生は、ほとんどファミリーでした。人数が少なかったから結束力がありませんでした。

森 学生の個性も強かったですね。ラーメン屋に、ダンプカーに乗って大学へ来る人も。(笑)

水上 先生が遅刻されて、出席だけ取っておいてくれと言われ、大変な思いをしたことがありました。

加藤 当時、水上先生が教室に来られると、威厳があって、背筋がのびたものです。

桑原 私は建設の仕事をやっていたので、どうしても途中で抜けなければならぬときがあり、代返を頼むことがありました。抜け出すときは、水

上先生に見つからないよう念じていました。そのうち、授業ごとに色が違う出欠確認用のカードが作られましたが、いろいろな色のカードを持っている人がいて、助けてもらいました。

水上 教授会は新進気鋭の教授で構成され、いつも喧々諤々でした。教員がはりきっているから、職員も甘くはできない雰囲気でした。あの当時の学則には、教員の一生懸命の気風が反映されています。一方、休講される先生にはまいりました。苦言を呈すると、出席率の話になり、休んでいる学生に単位はやれない、とおっしゃる。学生からは、午前中で授業が終わるのに、授業料を取るのはいかなるものかと言われることもありました。そういう中で、「基礎演習」という科目が生まれ、すべての先生が5~10人程度の学生を担当することになりました。

三宅 ロシア語ご担当の武井勇四郎先生を思い出します。

水上 武井先生は、1968(昭和43)年に開学した第二部のときの先生です。専門は哲学で、ロシア語も担当されました。第二外国語は、ロシア語、中国語、ドイツ語、フランス語でした。学業の面では他大学より、厳しかったです。第二外国語8単位、英語8単位が必修でしたから。フランス語に

しろ、ドイツ語にしろ8単位とらなければならなかったのです。

桑原 全部出席でないとだめでしたね。出席できないときは、レポートを書きました。今でも、簡単なドイツ語は覚えていますよ。イッヒ・リーベ・デイツヒとか。

加藤 そういえば、まだ、卒業できない夢を見ますよ。朝起きて「夢で良かった」と思います。136単位。再々試験を受け、すれすれのところです。あの滑り込みがセーフになったのが私のスタートです。

森 私もしょっちゅう見ます。

岩花 私も大学時代のことは、今でも夢に見ます。単位を取れない夢です。でも、振り返れば先生方には、よくご指導いただきました。

桑原 那須宏先生もおられました。

加藤 厳格な方でした。講義時間を守られ、記述式の難しい試験問題でした。鷺見等曜先生、佐藤昇先生も思い出します。体格のよかった安部大成先生は、亡くなられましたね。

水上 第1期前後に就任されてご存命なのは、大迫輝通先生だけでしょうか。浅井幸男先生、矢野建治先生もお懐かしいです。

桑原 女性の英語の先生がおられましたね。祖父江ゆき子先生。アガサ・クリスティーの原書が教科書でした。

- 出席者 岐阜経済大学 経済学部経済学科 1970年度/第1期卒業
岩花正樹、加藤称一、桑原利幸、三宅 茂、森 恒男 (※五十音順、敬称略)
- 司 会 岐阜経済大学元職員 水上純孝

難しかったのですが、登場人物の名前だけは覚えました。

水上 非常勤の先生も、本当に素晴らしい先生を集めていました。皆さんはいろんな先生に出会われたと思います。学生数が少ないから、隅々まで目が行き届いていました。

岩花 私のゼミは川崎七瀬先生が担当で、卒論は福祉国家論についてまとめました。先生は、東京大学が男女共学になった1期生です。先生とは高度な話をし、いろいろ教わりました。ご存命でしょうか。

水上 亡くなられましたね。川崎先生とは私もよく飲み、議論しました。

地元の期待を背負い、公立化を目指して

水上 あの当時、地元の人たちは、経済大学を待ち焦がれていたものです。近くには社会科学系の大学があ

りませんでしたから。

桑原 私は、雑誌の「螢雪時代」で本学を知りました。入学金と授業料が岐阜大学並みだったので、大垣市立だと思っていました。名古屋の大学に行くと、学費が10倍という時代でした。

加藤 私は、市立になると聞いて入学しました。自分で学費を工面しなければならなかったのが、半期で4万5千円の学費は助かりました。大学の上層部は、公立化について考えておられたと思いますが。

水上 岐阜県知事や大垣市長が理事でしたから、いずれ公立にしたいという希望があり、そういう宣伝もしていました。

桑原 「螢雪時代」では、確か公立として紹介されていました。

水上 その話はその通りで、「ごまかしじゃないか」と怒られたことがありましたね。本学の設立準備室は京都

にありましたが、願書の受け付けは大垣市役所でやっていたのです。

三宅 受験の勧誘に来た人は「将来、公立になります」と言っていました。家の近くにできるのだから来ませんか。公立ときいて、学費も安かったら、岐阜経済大学に決めたわけです。

水上 合格判定で、合格最終ラインを決めるときは、理事会と教授会とが対立しました。何点下げたら入学者が増やせるというようなやりとりもあり、教授会が成立しなくなりました。女子職員がお弁当を届けたのですが、教授会と理事会の荒れようにお弁当を落としてしまったエピソードがありましたね。

桑原 我々の合否を決めるにあたり、そんなことがあったのですね。

水上 教授会が非常に厳しかったですね。1期生、2期生に甘くはできない、将来に汚点を残してはならないという姿勢でした。その結果、公立高校の受験生が不合格になったので、岐阜県や大垣市からはひんしゆくを買いました。岐阜経済大学は難しいから、受験しても無駄だという、いわゆる褒め殺しにあったのです。もう少し多くの学生を合格させられたらよかったのですが。それが、伸び悩んだ大きな原因でした。

部活動の思い出

桑原 そう言えば、森さんは、野球部でしたよね。

森 そうです。私のゼミの先生は浅井幸男先生で、松川事件を研究されていましたが、野球部の顧問でもありました。野球部の一番初めは、小川君と、秋田君と私の3人。食堂の横で練習していました。小川君は大垣北高校出身。大垣商業高校に負けて甲子園には行けませんでした。彼がうちのピッチャーでした。

当時のリーグ戦を勝ち上がるための壁であった福井工大に負け、神宮に行く夢は叶いませんでしたが、すごいピッチャーでした。一級下の市橋さんは120キロくらい投げました。ぜひ、またお会いしたいものです。私は、4年間、野球部を続けました。50年たって、後輩に逸材が現れます。あとは、誰かがドラフトにかかってほしいです。

桑原 現在、野球部の監督は西濃運輸から来られた、名城大学出身の上田和宏さんです。去年、優勝していますが、残念ながら、代表決定戦で負けました。現在の部員には沖縄の学生が多いです。沖縄の子たちは粘り強いですし、プロに行ける実力のある部員もいると思いますが、競



争の中で育てる必要があります。野球部の出身者では、岡山関西高校と沖縄尚学高校の監督を務めた角田篤敏さんも忘れてはいけません。

加藤 同じ1期生の塚田さんはセカンドの4番。最近、NHKの高校野球岐阜県予選の解説を担当することがありますが、うまいですよ。今は、名誉監督になられています。

水上 卒業生には、就職先で、それぞれしっかり頑張ってもらっています。本学にあの年代に入学した学生の中には、親の跡を継ごうという学生が多くいましたが、今は少ないですね。

桑原 今は、大学が偏差値などでランク付けされて、さみしく感じることはあります。

加藤 テレビでオリンピックの試合を見ていると、みんな逆転で勝っています。最後には自分を信用してやらな

いと話にならないということではないでしょうか。最後は、俺が主役だ、と思ってやらねば何もできません。

森 そのバイタリティーがないと何もできませんね。

加藤 そういう人が残っていく。団塊の世代ですから。過去は変わらないけど、これからは変えられますからね。

桑原 そう言えば、岩花さんは応援団でしたね。合宿などはされましたか。

岩花 最初は下呂温泉の温泉寺でした。昼は住職と座禅を組み、夜は発声練習がうるさいと近隣の旅館から怒られ、住職と酒を飲んでいましたね。後輩は直立不動です。苦学していたのに、あの金はどこから出ていたのでしょうか。(笑)

桑原 応援団がないと、他大学とエール交換もできないということで、応援



団ができたのでしたね。今の学生は、エール交換の仕方もわからないのが残念です。ここで、岩花さんに、エールを送ってもらったらどうでしょう。(岩花氏、エールを行う)

水上 学生時代と変わりませんね。

岩花 いま68歳ですが、当時と同じくらいの声が出ていると思いますよ。団旗は8畳もあり、重いものでした。

第1期生の活躍

水上 学業で言えば、三宅君は、入学のときトップの成績でした。

三宅 私はそんなことを忘れていますが。

桑原 我々の仲間、税理士は2人います。政治家もいるし、少し歳下には美濃市長もいます。

岩花 私は、1995(平成7)年から岐阜県議会議員を20年務めました。同級生の中では初めての議員です。

他には、瑞穂市の市議員もいます。校友会長の安田さんは神戸町の町会議員でしたし、岐阜支部の初代支部長は、三重県で市議員をされています。

水上 C号館の裏のグラウンドを作ったのも皆さんでしたね。

岩花 単位をもらうための手段でもありました。

桑原 大学祭でお神輿を作りましたが、お城で燃やしたので、2回くらいでやめになったことも思い出します。

桑原 同期は300人くらいしかいませんでしたが、無茶苦茶生き抜いてきたという思いです。

水上 当時は、教職員も学生も、まじめで真剣でした。堤防の上で、教員や職員と学生の皆さんが酒を酌み交わしながら過ごしたこともありました。あの頃のなごやかな雰囲気からは、変わってきました。

大変だった当時の就職事情

水上 話は変わりますが、当時の就職活動はどうでしたか。就職は大変な時期で、県教委から援助をいただいて、就職開拓をしました。皆さんは、就職についてどんなふう考えていましたか。

桑原 私は、家業が建設業だったので、自分の希望というより、関連したところということで就職先を選びました。合格していた貿易会社は諦めましたが、それが今になって功を奏したと思います。自分の自由意思でないと就職先を決める時代でした。

岩花 就職課の勧めで、西濃運輸を目指しましたが、最終審査の一步手前で落ちて、次に名古屋鉄道を受けました。名古屋鉄道では、英語の試験が大変だったことだけを覚えています。ここも落ちましたが、運輸志望という望みを捨てず、岐阜乗合を受験して合格しました。

当時は、就職課でも、那須先生、佐藤先生などにも、「志望を決めたらそれ一本で行け」と言われていました。分野を絞れば、面接でも自分の意見が言えますから。岐阜乗合の試験では、エールを送ったことが、面



接官の印象をよくしたようで、これで受かった、と思いました。

森 私は、早く関市に帰って就職して、商売をやりたいばかりでした。今は、室内装飾の仕事をしています。

三宅 私は、地元の財界が中心になって創設された本学のおかげで大垣共立銀行に入りました。ゼミは金融論で今宮謙二先生でした。養老での合宿や、2年生の時に内田忠男先生、西澤孝先生、武井勇四郎先生や、執行部をやっていた小林君たちと山へ登ったことは、良い思い出です。

この50年を振り返って

水上 断片的に話を聞かせてもらいましたが、人生50年といえます。大

生であることを誇りに思っています。後輩にもがんばってほしいし、歴史を作っていかなければと思います。微力ではありますが、灯を絶やさないようにしたいですね。

岩花 我々がいなければ、大学の50年はないのです。私は本学に合格したときの掲載紙を今も持っています。大学の4年間では、他の歴史ある大学との関係で、先輩がいないさみしさを感じていましたが、大学を背負って立った記憶は今も強烈に残っており、社会に出た自分を励ましてくれました。私の長女は、本学の卒業生と結婚しました。その義理の息子が、「お父さん達先輩方がいたからこそ、我々が育った」と言ってくれます。大学が、100周年、150周年、200周年と、少子化の中でも生き残るように願っています。

水上 本日は、皆さんのお話を伺うことで、地域で活躍する人材を輩出してきた本学の実績を振り返ることができました。皆さんとともに、岐阜経済大学の今後の益々の発展を祈念したいと思います。50周年の記念式典での再会を楽しみにしています。

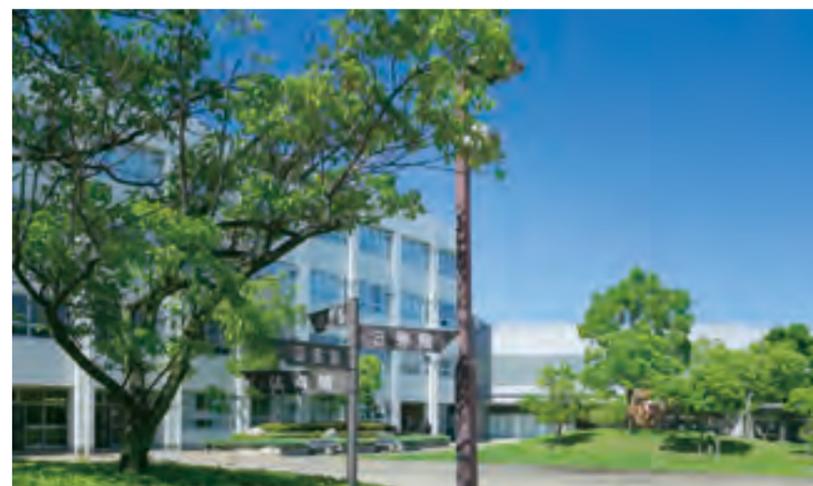
この座談会の司会を務められた水上純孝氏は、2016(平成28)年9月13日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

学も50年。振り返ってみて、感想はいかがですか。

桑原 大学には、最初は夢を持って入ったつもりでしたが、いろいろなことに追われてばかりでした。勉強した記憶はありませんが、業界のトップレベルの人たちとこういうおつきあいができるのは財産です。本学の世間的な評価は厳しい面がありますが、卑下することはありません。我々が育ってきましたし、岐阜経済大学があつてこそ、新たな流れができていきます。地元とのコラボレーションを深めながら存続してほしいと思います。

三宅 三代を経て、はじめて、初代の人たちが望んだ家、つまり大学を盛り上げていくものだと思います。

桑原 私は、岐阜経済大学の卒業



1977-1986

創立 10 周年記念事業

1977（昭和52）年4月1日をもって本学は創立10周年を迎え、同年度には一連の記念事業が実施されました。それらは世上しばしばみられるような華やかな行事よりも、むしろ大学という内容にふさわしく、その後における教育・研究の充実・発展を期して、教育的な事業を中心としたものでした。すなわち、本学の施設・設備のうち最も弱点になっていた図書館を新しく建設・整備することを柱としてとりあげ、『岐阜経済大学論集』の特集号や『地域経済』の編集・刊行など教育の前提となる教員の研究成果を結集することをはじめとして、次のような事業が実施されました。

1. 新図書館の建設
2. 『岐阜経済大学論集』（岐阜経済大学学会機関誌）創立10周年記念特集号の編集・刊行
 - (1) 「社会科学編」約500頁
 - (2) 「人文・自然科学編」約300頁
3. 『地域経済』（岐阜経済大学地域経済研究会編）の編集・刊行 約300頁
4. 懸賞論文募集（本学学生対象）
5. 『岐阜経済大学10年略史』の編集・刊行
6. 創立10周年記念・図書館竣工式典の挙行

県・市等地方自治体代表者、県下の大学長、高等学校長、その他関係団体代表者を招待し、本学のPRを兼ねて1977（昭和52）年5月26日（木）に挙行。
7. 創立10周年記念講演会（岐阜経済大学学会主催、岐阜県・大垣市教育委員会後援）の開催
 - (1) 演題・講師

「西欧社会主義のゆくえ」
京都大学人文科学研究所教授 河野健二氏
「世界経済の動向と日本の将来」
日本経済研究センター理事長 金森久雄氏
 - (2) 会場 大垣商工会議所大ホール
 - (3) 日時 1977（昭和52）年5月28日（土）午後2時～

新図書館の構造と内容

創立10周年記念事業の柱として、新図書館が1977（昭和52）年5月に竣工しました。

1. 構造の概要

(1) 構造

鉄筋コンクリート3階建て（書庫2階積層式5層）

(2) 面積

建築面積 698.5㎡ 延床面積 1453.6㎡

(3) 内容

1階 玄関ホール、ラウンジ、自習室（座席60席）、事務室、館長室、会議室等

2階 出納ロビー、開架閲覧室、参考図書コーナー等（閲覧席数42席）

3階 自由閲覧室、キャレル、視聴覚室（閲覧席数104席）、書庫 2階建て、スチール製積層式書架5層、ダムウェーター、空調設備等（書庫収蔵可能書数約15万冊）

その他 全館冷暖房、中庭等

2. 新図書館の機能向上

(1) 書庫の拡充と機能改善

旧図書館の書庫は収蔵可能冊数5万冊程度で既に満杯となり、もはやそれ以上の収蔵ができなくなっていました。これに対して新しい書庫は収蔵可能冊数を約15万冊とし

（旧書庫は保存書庫として利用の少ない図書・資料の所蔵にあてる）、書架、ダムウェーター、空調など最新の諸設備をととのえ、書庫の諸機能が大きく改善・向上しました。

(2) 閲覧環境の改善

旧図書館は食堂の前にあり、人の往来が激しいという問題がありました。また、開架閲覧室と自由閲覧室との間に隔壁もありませんでした。そこで、より静かな位置に移すとともに、1階に自習室、2階に開架閲覧室、3階に自由閲覧室と分離して、落ち着いた勉強環境を確保しました。

(3) 閲覧席数の増加

閲覧席数が不足していた旧図書館に対して新図書館では開架閲覧室、自由閲覧室、および自習室を合わせて閲覧席数が206席となり、キャレル（個人用閲覧席）なども設けられました。

(4) 参考図書コーナーの併設

旧図書館の時代には参考図書・雑誌コーナーがD号館

2階に位置し、これらの利用に不便がありました。新図書館では同コーナーが開架閲覧室と同じ2階に隣接して設けられ、図書館員のレファレンスも受けやすくなりました。

(5) その他

図書館らしい研究・勉学の雰囲気を整えるために、玄関ホールやラウンジ、出納ロビー（カウンターやカードケースのコーナー）を整備し、中庭や前庭で緑を整えるなど、環境にも配慮しました。

教学体制の充実

新図書館の建設・竣工は教育的な事業でありましたが、それは教学充実のための必要条件でこそあれ、必要十分条件でないことはいまでもありません。こうした観点からも、1978（昭和53）年度には経済学研究入門を目的とする「経済学」が開講されました。これにより1年次生は、それぞれ特定クラス教室で外国語5コマ、経済学1コマを受講することになり、それぞれのクラスに指導教員が複数つくことになりました。そのクラスが1人ひとりの学生にとって、生活の単位として機能することになったといってもいいでしょう。

1979（昭和54）年度にも授業科目の新設をはじめとする教学の充実が行なわれました。まず、専門教育科目では社会政策関連分野に「労働問題」が認められ、比較的手薄と感じられていた部門に改善が及びました。他方、一般教育科目では、その総合分野に「総合科目」が設けられました。この「総合科目」が狙いとしたのは、われわれが今日見て感じて問題と考えざるを得ない現実に、人文科学、社会科学、自然科学から多角的なライトとメスをあてることでした。換言すれば、「総合科目」は人文・社会・自然諸科学のそれぞれに従事する研究者個々人が、それらを通じて「今日」を相手として問うものであり、それだけに本学でも取り組む意義のあるものでした。なお、「総合科目」は、単位が4・2・2と通年あるいは半期ずつ、いずれでも開講しよう融通をもたせた設定となりました。

こうした科目の新設にくわえて、1978年度には授業科目

の変更が行なわれました。今日の学界で一般的に用いられているよび方にならない、また各科目の範囲や性格、内容をより明確に示すよう、「商学総論」は「商業経済論」へ、「地域開発論」は「地域経済論」へ、「経済地理」は「経済地理学」へ、それぞれ変更されました。

地域経済研究所の出発

1981（昭和56）年4月1日付で、地域経済研究会が地域経済研究所へと改称、新しく出発することになりました。地域経済研究会は、本学創立10周年を記念して『地域経済』を発刊することになり、その準備機関として設立されたものですが、その後、1978（昭和53）年に常置機関として存続が決まり、さらに研究所への昇格を認められたわけです。研究会は、過去、2冊の研究論集『地域経済』を出していましたが、当時の研究の中心は輪中に関するものであり、論集の第2集は輪中の特集し、5編の関係論文を集めていました。

ところで、地方大学の大きな特性の一つは、地域ないしは地域性の教学面への積極的な取組みにあります。本学は、輪中地帯に位置しているため、これへの教学面からの積極的な取組みは、本学の重要な責務でしょう。直接この任に当たり、その窓口となるのが地域経済研究所です。これがまた地域の期待に応える道でもありましょう。

地域経済研究会同様、研究所もまた、輪中への取組みを継続する方針としました。その具体的な課題の一つは、



地域経済研究会発行の論集「地域経済」第1～3集（1983年3月）

十六輪中（大垣市十六町）の総合的研究であり、その自然環境と輪中の成立、土地利用、地主制の成立、水論、農村工業、生活と民俗、住民意識など、広範な調査研究が企図されました。十六輪中は、小規模ながら、輪中堤が現存し、よくまとまった格好の研究対象でした。

この十六輪中に関する2年間の研究成果が『地域経済』第3集に特集として刊行され、地元の方々の協力への感謝の意味をこめて、現地（十六町公民館）での報告会が1983（昭和58）年5月19日に実施されました。反響はきわめて大きく、数紙の新聞紙上で大きく報告され、またNHKテレビ（5月30日放送、「きょうのレポート」）でも紹介されました。

当時まで、輪中の学問的解明はきわめて少なく、とくにその学際的研究は皆無といってよい状態でした。こうした事情もあり、地域経済研究所は、輪中研究の実績積み上げに傾注していくことになったわけです。

経済学部第二部の募集停止と新たな将来計画

1983（昭和58）年度に、経済学部第二部の学生募集停止が行なわれました。大学進学者の第二部離れは全国でみられた現象でした。その原因は1960年代以降、急速な技術進歩および生活水準の上昇に伴って大学進学希望者のニーズがますます専門化、多様化してきたことに対して、大学が十分に対応しきれなかった点にあります。しかも、特に本学第二部についていえば、地域の産業構造や人口規模からみて勤労者の有効な進学需要はほぼ出尽くし、以後、地域の飛躍的な経済発展によって新規雇用が創出されない限り、進学需要は減少こそすれ到底増加はおぼつかないと考えざるをえませんでした。このことは、勤労者人口の規模が十分大きく、交通も便利な大都市所在の先発大学において、辛うじて第二部が維持されている事実にも照らしても間違いはありませんでした。

しかし、本学では慎重なる検討の結果、第二部の学生募集停止を単なる消極的撤収としてとらえるのではなく、地域社会の新たな教学ニーズに応え、前進の準備に着手すべきであるとの結論に到達しました。そのための議論

は1981（昭和56）年より開始されており、2つの将来計画に結実しました。それらは産業経営学科という新学科の設置計画、およびこれに伴って必要となる施設設備の改善計画です。

産業経営学科の新設

新学科は「経済学部」のなかにあつて、しかも既存「経済学科」の単なる延長ではなく、相対的に独自の学科でなくてはならないと考えられました。本学はその条件を満たす学科として産業経営学科を選択しました。新学科はまず「経営学科」です。既存経済学科に設けられていた経営学関連の諸科目は新学科に移されました。しかし、新学科は単なる「経営学科」ではなく、産業論を通じて経済学と連結する「産業経営学科」です。この学際的メリットは小さくないと考えられました。

例えば1980年代に日本の自動車産業は、米国自動車産業の不況・首切りのみにとどまらず、同国における国際収支の赤字まで、その元凶のように非難されました。経済発展の過程でどんな産業が輸出産業になるのか、国際収支赤字の原因は何か、これらは経済学の問題ですが、そういう問題意識を背後に持ちながら、ある産業の中でどんな企業が成長し、生き残れるのか、それを探究するのが新学科の任務でした。

こうした基本的認識のもと、現代の産業および企業の実態を把握するために必要な理論と実際的な知識を体系的に研究・修得させ、激動する産業動向に対処しうる幅広い視野と行動力をもった人材を育てることを、産業経営学科は目的としました。この目的を達成するため、「経営学」にくわえ、「産業論」を学科目の柱にし、それらを中心に「企業論」、「会計学」の分野をおき、さらに、技術革新と情報化社会に対応するため、「管理科学」という新しい分野が設置されることになりました。こうした新学科設置の申請が認可され、1986（昭和61）年度から産業経営学科がスタートしました。この学科への初年度の志願者は799名で、そのうち200名（経済学部全体では782名）が入学しました。

施設設備の改善

以上のような新学科の設置と合わせ、教育研究条件の一層の整備を柱に、魅力ある大学づくりを目指して、大幅な施設設備の改善事業が実施されました。1985（昭和60）年度には総合グラウンドと新校舎3および4号館が竣工しました。そして1986（昭和61）年度には5・6・7・8号館の建設が始まり、これらは翌1987（昭和62）年度に竣工の運びとなりました。中央広場の整備も施され、キャンパスは旧来の外観を一新する変貌を遂げました。施設の現状に必ずしも誇りをもつことができなかった学生にとって、大きな喜びとなったに相違ありません。

5および6号館は、いずれも既設の4号館と同様の規模と構造を有するもので、それぞれ1階は440人、2階は約300人収容の中規模教室2室で構成され、教壇の位置、机の扇形配置およびフロアの緩やかなスロープなど、落ち着いて受講できるように設計されたものでした。4・5・6号館をつなぐ南北の廊下も、大学の学舎にふさわしい風格の漂うものとなりました。

これら一連の施設整備のうち、圧巻は7号館にあったといっても過言ではないでしょう。7号館は主として岐阜経済大学講堂の役割を担うもので、2階建てワンフロア、座席数は850となりました。ロビーも設けられ、様々な文化活動への利用が期待されるような、シアターと呼ぶにも値する本学自慢の施設となりました。



7号館 大学講堂（1987年8月）

他方、8号館は本学の教室として初めての4階建てで、ゼミ室、語学教室、中教室などから成る教室棟です。その白くそびえる姿は大変シンボリックなものとなりました。また、西側の図書館、そして他三方を新校舎群で囲まれた中庭は、中央広場として整備され、学生の憩いの場として活用されることになりました。ヨーロッパと違い、日本の歴史社会は広場というものをもたなかったのですが、中央広場が文字通り「ヒロバ」として機能することが期待されました。

ただし、施設それ自体は、単なる器、入れ物にすぎません。建物は学生の大学生活を幾らか演出しはするものの、生活それ自体を創るものではありません。新装なったキャンパスを足場に、学生が何よりも豊かな人間のドラマを創造するようにとの願いがこめられた、そんな施設設備の改善でした。

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1977 昭和52	5月 図書館竣工（創立 10 周年記念事業）	5月 領海法・漁業水域暫定措置法（200 海里）公布
	5月 創立 10 周年記念式典挙行	5月 大学入試センター発足
	5月 創立 10 周年記念講演会 「西欧社会主義のゆくえ」（京都大学人文科学研究所教授 河野健二氏）、「世界経済の動向と日本の将来」（日本経済研究センター理事長 金森久雄氏）	7月 日本初の静止気象衛星「ひまわり」1号打上げ成功
	5月 「岐阜経済大学 10 年略史」刊行	8月 中国、文化大革命終結宣言
	6月 『岐阜経済大学論集』開学 10 周年記念号（社会科学編）発刊	9月 日本赤軍、ダッカで日航機を乗っ取る
	9月 『岐阜経済大学論集』開学 10 周年記念号（人文・自然科学編）発刊	10月 伊藤忠商事 安宅産業を吸収合併
	12月 論集『地域経済』創刊号（開学 10 周年記念）発刊	12月 この年、円急騰し、円高差益問題化（12.1 1 ドル 238 円を記録）
3月 売店設置		
1978 昭和53	5月 食堂解体	5月 新東京国際空港（成田）開港
	6月 保健室開設	6月 宮城県沖地震（M7.4）
	8月 二部自動車部部室完成	8月 日中平和友好条約調印
	9月 食堂（2 階建）完成	12月 大平正芳内閣成立
	9月 喫茶室を学生談話室に改装	12月 東芝が世界初の日本語ワープロを発売
	12月 岐阜経済大学親和会が「親和会だより」創刊	1月 国公立大学、初の共通 1 次学力試験を実施
		1月 対日原油供給削減を通告（第 2 次石油危機）
1979 昭和54	12月 クラブハウス（北）竣工、部室 14 室開設	5月 英国史上初の女性首相にサッチャー就任
		6月 先進国首脳会議（東京サミット）開催
		12月 マザー・テレサ、ノーベル平和賞受賞
		12月 ソ連、アフガニスタンのクーデターに軍事介入

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
		2月 第 13 回オリンピック冬季大会、レークプラシッドで開催
		3月 第 2 次石油危機不況始まる
1980 昭和55	4月 朝倉運動公園内朝倉会館を教育・福利厚生施設の指定	6月 大平首相急死、首相代理伊東正義
	1月 飯田繁学長が退任	7月 鈴木善幸内閣成立
	2月 学長に建林正喜教授が就任	7月 第 22 回オリンピック、モスクワで開催。西側諸国大半がボイコット（日本不参加）
		9月 イラン・イラク戦争勃発
		2月 ローマ法王、ヨハネ・パウロ 2 世来日
		3月 神戸ポートアイランド博覧会（ポートピア '81）開催
1981 昭和56	4月 地域経済研究所設置（地域経済研究会を改称）	4月 米スペースシャトル「コロンビア」、打ち上げに成功
	6月 「岐阜経済大学名誉教授規程」により、牧倫教授と鷲見中嶺教授に名誉教授の称号授与（本学初）	6月 商法改正公布（監査役権限強化、総会屋への利益供与禁止など）
	11月 校友会結成 10 周年記念式典・記念パーティ（於：レストハウス大垣）	12月 EC、輸出白黒、市場開放の対日要求を決定
	12月 第 17 回中部学生経済ゼミナール大会を本学で開催	
	12月 大垣市教育委員会との共催で市民大学講座開設	
1982 昭和57	5月 岐阜経済大学市民大学講座「これからの国際社会と日本」開講	4月 500 円硬貨発行
	6月 第 21 回東海学生ボクシング選手権大会で拳闘部優勝	6月 東北新幹線開業（大宮ー盛岡間）
	7月 田口利八理事長が逝去	8月 老人健康法公布（70 歳以上の医療無料制廃止）



創立10周年記念事業 図書館竣工記念式典（1977年5月）



図書館が竣工（1977年5月）



図書館閲覧室（1977年5月）



図書館書庫（1977年5月）



岐阜経済大学 10年略史（1977年5月）

就職指導研修会 於：朝倉会館（1980年）



就職指導研修会（1980年）



クラブハウスが竣工（1979年12月）



建設中のクラブハウス（1979年）



校舎風景（1980年4月）



校舎風景（1982年）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1982 昭和57	9月 理事長に矢橋浩吉イビデン(株)代表取締役会長が就任	11月 上越新幹線(大宮-新潟間)開業
		11月 中曽根康弘内閣成立 12月 テレホンカード使用開始
1983 昭和58	4月 経済学部第二部経済学科の学生募集停止	4月 千葉県浦安市に東京ディズニーランド開園
	4月 第1回フレッシュマン・キャンプ実施	8月 金融機関、第2土曜日休日制実施
	6月 課外活動休憩室完成	10月 ロッキード事件で田中元首相に有罪判決
	8月 クラブ・ハウス(中)竣工、部室20室開設	1月 日経ダウ平均株価、初の1万円台乗せ
	* 1984年度入試から、推薦入試(授業料・施設拡充費免除)開始(1988年度まで)	2月 第14回オリンピック冬季大会、サラエボで開催
1984 昭和59	4月 ビデオ教室開設	5月 NHKテレビ、衛星放送開始
	4月 指定合宿施設利用制度制定(「豆馬亭」を指定施設に)	7月 第23回オリンピック、ロサンゼルスで開催(ソ連、東欧諸国不参加)
	10月 情報関係科目開講	11月 1万円、5千円、千円の新札発行
	12月 総合グラウンド用地取得	3月 科学万博つくば'85(国際科学技術博覧会)開幕
1985 昭和60	4月 経済学部第一部経済学科の入学定員を450名に変更	4月 日本電信電話株式会社(NTT)、日本たばこ産業株式会社(JT)発足
	4月 トレーニングルーム完成	5月 男女雇用機会均等法成立(61.4.1施行)
	10月 留学生宿舎用地取得	8月 日航ジャンボ機(ボーイング747型)、群馬県御巣鷹山に墜落
	10月 体育センター完成	

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1986 昭和61	12月 経済学部第一部産業経営学科(入学定員150名、総定員600名)設置認可される	9月 G5(先進5カ国蔵相・中央銀行総裁会議)のプラザ合意により、円急騰(1ドル=230.10円)
	3月 3号館・4号館(校舎棟)竣工	10月 関越自動車道全通(東京・練馬-新潟間)
	3月 経済学部第二部経済学科18年の歴史を閉じる	1月 米スペースシャトル「チャレンジャー」、発射直後爆発
	3月 昭和60年度第二部卒業生より卒業記念ブロンズ像寄贈	2月 コラソン・アキノ、フィリピン大統領に就任
1986 昭和61	4月 経済学部産業経営学科開設(入学定員150名)	4月 ハレー彗星、地球に大接近
	4月 総合グラウンド完成	4月 ソ連、チェルノブイリ原子力発電所事故
	4月 教職課程開設(経済学科:中学校教諭一級普通免許状「社会」、高等学校教諭二級普通免許状「社会」、経済学科・産業経営学科:高等学校教諭二級免許状「商業」)	5月 先進国首脳会議(東京サミット)開催
	5月 経済学部産業経営学科開設・新校舎完成記念式典	7月 東北自動車道全通
	2月 学長に大迫輝通教授が就任	9月 ガット閣僚会議、ウルグアイ・ラウンド開始宣言
	3月 学生談話ホール(食堂)一部取り壊し	11月 三原山209年ぶりに噴火
	* 岐阜経済大学学会学術講演会(東京大学経済学部教授 竹内啓氏)	12月 厚生省、エイズ対策専門委員会を設置
	1月 東京外国為替市場で円相場急騰、1ドル149.98円と初めて150円を突破	



学長に建林正喜教授が就任(1981年2月)



少林寺拳法部全国大会出場の壮行会(1981年)



B号館(1985年)



総合グラウンド全景(1986年4月)



総合グラウンドのサッカー場(1986年4月)



C号館 就職課資料室(1981年)



総合グラウンド(1986年4月)



総合グラウンドの野球場(1986年4月)



3~5号館校舎棟の建設現場(1986年)



経済学部第二部最後の卒業祝賀会(1986年3月)

Topics 2

1970年代後半から1980年代後半

— 大学発展の礎づくりに明け暮れた時代 —

酒井 博世 (岐阜経済大学 元経営学部長)

私が岐阜経済大学（以下、経済大学）に着任したのは、1977（昭和52）年4月でした。採用決定の正式通知と、4月最初の（私の記憶によれば6日）の教授会に出席するようにという案内以外、何の情報もないまま、不安な気持ちを抱きつつ、長宗我部事務局長の指示に従って恐る恐る会議室に向かったことを覚えています。今とは違って新任教員に対するガイダンスの類は一切なく、必要な事柄はすべて先輩教職員の方から聞き出さなければなりません。時間を見つけては、教務課や第二部事務室に入り浸っていたことが懐かしく思い出されます。

この原始的な待遇は、新人教員が先輩教職員とのコミュニケーションを（たとえそれが必要に迫られてという消極的理由であったとしても）密にするきっかけを作ってくれたわけで、結果的にスムーズに経済大学の一員として溶け込むことを可能にしてくれました。創立当初の大学運営をめぐる危機的状況乗り越えて確立されてきた経済大学の民主的な大学運営が機能し始め、構成員の自由な意見表明を尊重する環境が整いつつある中で、教授会での活発な議論に圧倒されながら、新米教員であってもこの大学を構成する一員であるという自覚を深めるとともに、大学運営を他人任せ（役職者任せ）にするのではなく、常により良い大学にするために何が必要か、自分たちに何ができるかを自分の頭で考え、先輩同僚諸氏と忌憚なく意見を戦わせる習慣をごく自然に身につけることもできました。まだ第二部経済学科があった時代だったので、私の夜間の講義の終わるのを待って、第二部事務室の職員の方や同僚教員と夜の大垣に（時には柳ヶ瀬にまで）繰り出したことも懐かしく思い出されます。（高橋さん、故大橋さん、故木下さんに感謝）

1977（昭和52）年という年は、大学創立10周年を記念して建設された図書館の竣工式が行われた年でした。10年かかって、大学の名にふさわしい環境を整えることができた喜びに大学中が沸き立っていました。以後、80年代に入って、保健室開設、新食堂建設（ハエ地獄からの脱却）、第二次クラブハウス建設、総合グラウンド整備など、学生生活を充実させるための環境整備が進みました。同時に新講義棟（3、4、5……号館）が順次建設されるとともに、A～C、E号館改修・解体（D号館は研究棟として存続）、それに伴う校舎群の呼称変更もあり、経済大学の外観がリニューアルされていきました。出身高校の校舎よりも古いと嘆かれていた学び舎が、小規模ではあっても近代的で、大学らしい姿に様変わりし

ていったのです。前庭、中庭スペース等ゆとりを持った配置も心を安らげてくれました。

名古屋大都市圏から離れた地方都市に立地する小規模大学としての存立基盤を固めるための将来を見越した戦略の検討が求められていた経済大学は、70年代の文部省の大学の量的抑制政策時代から、経済学部経済学科の収容定員増を図ってきましたが、80年代にはいって、文部省が、18歳人口の急増に対応すべく、それまでの抑制政策を量的拡充に政策転換を図ったこともあって、さまざまな取り組みを活発に展開しはじめました。

その戦略の柱は、一つは「地域に根差した大学」づくりであり、いま一つは、安定的な収容定員を確保するための学部・学科の再編でした。1981（昭和56）年には、地域経済研究所が学内に設置され（旧地域経済研究会改称）、地域の課題に応え、地域との連携を目指し、地域に根ざし、地域に支えられる大学としての活動が強化されました。大垣市教育委員会との共催による市民大学講座が開講されたのもこの年でした。私も何度かこの講座の講師を務めました。講座に参加して下さる市民の方々の高い学習意欲、向上心に大きな刺激を受けるとともに、学生諸君の日常の姿と比較しながら、学びへの意欲の根源はどこにあるのか、それをどう作り出すのか、大学教師としての課題が鋭く問われていることを思わざるをえませんでした。

他方では、歴史的役割を終えつつあった第二部を廃止（1983年学生募集停止、1987年4月廃止）し、経済学科の定員増（1985年度300→450名）とともに、経済学部に産業経営学科が新設され1学部1学科の単科大学から複数学科を持つ大学として改組し、将来的に複学部体制を実現する基盤が創り出されていきました（この時には、将来自分自身が新学部（経営学部）設置のための仕事に関わることになるなどということは夢にも思いませんでした……）。いずれにしても、地域や時代の要請に応える大学づくりにみんなで元気いっぱい、力を合わせて、楽しく取り組んでいた時代でした。



地域経済研究所

Topics 3

大学の中心的存在だった「白亜の図書館」

米勢 信次 (元職員)

1977（昭和52）年5月、岐阜経済大学創立10周年記念事業の一環として、新しい図書館が完成し、その竣工記念式典が近隣の自治体、主要企業、大学等の関係者を招いて盛大に行われました。

新図書館は、白壁の鉄筋3階建、書庫2階5層で、当時は「白亜の図書館」といわれ、大学の中心的存在でした。それまでキャンパス東端の研究棟の1階にあった図書室から独立した図書館に移って、誰もがこれまでに誇らしい気分には浸っていませんでした。

新しい図書館という器ができたことで、次は器に入れる中味の一層の充実が求められます。1977～1986（昭和52～61）年頃の統計では、図書館は毎年新しい図書を7,000～8,000冊受け入れていて、ちなみに、1986（昭和61）年3月現在での蔵書数は図書123,847冊（和92,301冊、洋31,546冊）、雑誌1,192種（和1,010種、洋182種）で、そのうち経済学、経営学を中心とした社会科学関係の図書が全体の約53%を占めています。大学図書館は、教育・研究機関の図書館という性格上、それにふさわしい蔵書の構築と整備が必要になります。本学に学部が設置されている経済学や経営学関係の専門書の整備は必須ですが、それ以外の分野、具体的には哲学、歴史、社会、芸術、自然科学、文学といった分野で、あらゆる学問の基礎となり、また人間としての教養を身につける上でも欠かすことのできない図書についてもバランスよく取書するように努めました。

取書という観点から図書館の役割を考えますと、一般的には利用者が必要とする図書を整備し、利用に供することが、図書館の役割とされていますが、同時に人間の知的活動の産物として表現されたものを人類の文化的遺産として保存し、後世に伝えるということも、図書館のもう一つの重要な役割と考えられます。そして、後者の機能を果たす上で、国立国会図書館をはじめ、地域の基幹図書館（県立図書館）、専門図書館と共に大学図書館が果たす役割は、たいへん大きいと思います。

1982（昭和57）年6月に図書館の広報活動の一環として図書館報『You and Library』の創刊号が発行されました。B5判8ページの小冊子で、本学教員の随筆、利用統計、主な蔵書の紹介や新着図書の案内、図書館の利用の仕方、その他図書館関連のニュースなどが掲載されています。

また、図書館は図書・資料の閲覧や貸出だけではなく、広く文化的な活動にも力を入れたいという考えから、定期的に絵画、写真、テーマ別の図書などの展示会や主に本学の教員による講演会の催しを企画しました。講演会では、

聴衆があまり集まらず、毎回人集めに苦労しました。

展示会で特に印象に残っているものとしては、本学出身の画家浅井清貴氏による『世紀末の棺』と題された催しがあります。この展示は、1986（昭和61）年の第20回経大祭の期間中に開催され、展示会場の中央に、水が流れ落ちる水槽を設置した大がかりなもので、ナイアガラの滝やテレビの泉を背景にして、水槽の真ん中にミッキー・マウス扮する自由の女神が立ち、それを取り囲むようなかたちで、同様にミッキーが自由自在に変身したアダムとイブ、シーザーとクレオパトラ、義経と弁慶、徳川家康、ナポレオンといった歴史上の人物が配置されていて、そこでは、人間の欲望と闘争、権力への意志が、こうした人間の業から救われたいという願いと共に渦巻いている様が、世紀末の混沌として表現されているように思われます。顧みると、これは従来の図書館の催しの枠を超えた大胆な企画であったと思います。ちなみに、同じ1986（昭和61）年に、浅井氏の制作により、図書館玄関の吹き抜けの壁を飾る絵画が完成しました。タテ366cm×ヨコ180cmの巨大なキャンバスには、スフィンクス、原水爆、紙幣の山、ミッキー・マウス、マルクスやケインズの肖像、高層ビル、ジェット機、惑星など、さまざまな対象が現代の混沌を象徴するかのよう描きこまれていて、来館者の目を楽しませてくれます。

1986（昭和61）年でもう一つ特記すべきこととしては、懸案であった図書館業務の一部コンピュータ化が始まったことです。この時点では、まだ図書の受入・登録システムが稼働したのみで、最終的に利用者がパソコンを使って蔵書検索ができる段階に至るまでには、さらに長い道のりをたどることになります。



図書館2階カウンター

column

大学の友人との交流



1980年度卒/第11期生
田島 孝浩

私が入学した年は1976年(昭和51)年です。大垣市羽衣町の羽衣荘という下宿でした。そこに、一人は岡山県出身、もう一人は、浜松市出身の三人で大学生活が始まりました。下宿先には、公衆電話が無くて、家から連絡が有ると、大家さんが呼び出しに来て下さいました。風呂も、当時、歌手の「かくや姫」が歌った「神田川」の詩の中に出てくる様に友だちといっしょに銭湯に出かけました。

大学までは自転車通勤です。テニス部に入部して、球拾いと、素振り、ランニングなど、ボールを中々打たせてもらえず、コートにローラーを掛けて帰る頃には、暗くなっていました。

夕食は、三人で共同流しでの自炊です。私が遅くなると、ごはんの用意は、二人がしてくれて助かりました。片付けは、私がやりました。私の部屋がたまり場になり、毎日一緒に楽しかったです。

浜松の友人は、長期休みに入ると、自宅のある長浜に、2~3日泊まりに来て、帰省先にもどっていきました。彼からは、今でも5月になると新茶が、そして、12月にはミカンが届きます。下宿していたアパートは、すでに取り壊されて、行きつけの喫茶店も駐車場に変わっています。

友人達とは、4、5年に一度「羽衣会」で会う様になっています。孫が入学する話も出る様になりました。仕事も、出身地も違いがある中で、共通点がある事は、数少ない大切なものです。

来年は、皆で記念式典に参加して、思い出話に花を咲かせたいと思います。

やりきることの大切さ



1981年度卒/第12期生
三輪 光司

大学時代を回想すると様々な光景が思い出されます。そのなかでも、卒業後の目標として掲げていた「高校教員になる」、「運動部の顧問になる」の目標実現に向けて過ごした時間は、大変貴重な時間だったと感じています。

卒業後の私は、1982(昭和57)年4月より浜松日体高校で「政治経済」の非常勤講師となり、バレーボール部のコーチをやらせていただけることとなりました。また、1984(昭和59)年より沼津学園高校(現・飛龍高校)に着任し、ボクシング部の部長に就くこととなり、1992(平成4)年より県高体連委員長、1995(平成7)年からは全国高体連常任委員となり、高校生スポーツの普及・強化活動に携わるという貴重な機会をいただきました。

この礎になったのは、入学した1978(昭和53)年、先輩7名が努力されて産声を上げていた、バレーボール同好会での活動であったかと思います。

私を含め同期4名が入りましたが、当時の練習時間は講義が行われている時間と重なるなど厳しい練習環境の中でも、皆で様々な試行錯誤しながら、少しでも結果を残していこうと頑張っていた貴重な時間でした。その後は後輩達も揃い、3年の1981(昭和56)年秋季東海リーグでは念願の入れ替え戦を突破し、それまでの4部リーグから3部リーグへの昇格、学内でも「部」として認められ、その喜びはひとしおでした。

翌年の春季リーグでは、セット率で惜しくも3位に終わりましたが、仲間とバレーボールを続けることの楽しさ、やりきることの大切さを実際に体験し、その後の自分の将来に大きく活かすことができたと感じています。

現在私は、知的障害の方々の生活支援を行う仕事に新たに取り組んでいます。大学で体験した、「あきらめない」ことを信条に進んでいきたいと思っています。

「今は今しかない」を信条に今も歌い続けているのが、かつて岐経祭のステージに立った白井貴子さんです。ミニスカートで飛び跳ねながらチャンスと三回繰り返し、当時ロックの女王と呼ばれていました。先日、地方紙に掲載されていて約三十年前にタイムスリップしました。

自分の学生時代はと聞かれると、華やかではなかった印象が強く、安いアパートで何とか自炊し、楽しいこともなくただひたすら大学へ通っていたまじめな学生だったと思います。学生二人を持つ親となり、もっと親父の脛をかじってやれば良かったと思いつつ、日々やせ細っていく自分の脛を見ている。

当時「歴史散策の会」に所属し、サークルの仲間と史跡を訪ねたり、岐経祭での模擬店、球技大会への参加が良い思い出となっています。女性が稀な分、外部からの女王コンサートは大盛況で、今でも色あせない思い出です。

就職してしまうと、学生時代を思い出すことはほとんどなく、またそんな余裕すらありません。年賀状のやり取りで学友の健在を知る程度。4年間を過ごした大垣の街はどうなっているのでしょうか?最近ではストリートビューでかなりのところまで見ることができるので、皆さんもご覧になってみれば楽しいと思います。

学生時代の忘れられない思い出は、ユースホステルを利用して、北海道や中国、九州、四国地方をマイカーで旅をしたことです。国内にある話題やニュースはいつでもリンクします。最近放浪癖が復活し、まだ出掛けたことのない景勝地や神社仏閣に御朱印帳を片手に持ち、片手はハンドルを握って、気ままな旅をしています。今になって考えると、その基礎を作ったのは学生時代であり、知らないうちにたくさんの経験をしていたのかなあと感じています。

そろそろ退職や老後を考えなければならない時を迎え、「今は今しかない」自分の時間を大切に、悔いのない人生を歩み続けたいと思います。未だに色あせない白井貴子さんに負けないように。

column

今は今しかない



1984年度卒/第15期生
勝野 正巳

大学時代を思い出すことは、陸上部創設と黎明期の活動についてです。私たちが、大学に入学した時は、経済学部だけの単科大学で、校舎も高校をもう少し大きくした位の規模でした。高校時代ボート部で育った私にとっては、大学でも、ボートを続けられたらと思っていましたが、当時は設備も環境も無く、断念せざるを得ませんでした。

ちょうどそんな時、大学主催の「キャンパスライフ説明会」で、この大学にはまだ陸上部が無いので、是非、創部し、駅伝にも参加できるようにクラブ活動に発展させたいとの話を聞き、もともと長距離走が好きだった私は陸上部をつくろうと思いついたのでした。当時、各クラブがクラブ員確保のため熱心に勧誘活動をしていて、先輩たちから、もう一人、陸上部をつくりたいという新入生がいると情報を得ることができました。大西君です。

彼は高校時代陸上部、100Mの選手で滋賀県の大会で大会記録を持っており、彼との出会いが、その後、大きくクラブの発展に影響することとなりました。

まずは、陸上同好会として、最低人数6名(高校時代陸上部2名、テニス部1名、文化部2名、ボート部1名)で発足。初の練習は、雨の日に校舎の中を走ったり、筋トレをすることから始めました。とても陸上部の練習とは覚束ないものですが、手さぐりながらも、前に進もうと一生懸命でした。

活動の拠点はと申しますと、陸上部がなかった位なので、当然、陸上のグラウンドもありません。そこで、学生課の小倉課長を頼りに、市営グラウンド(日大大垣前)に利用許可を得に行きました。その後、2年の時に後輩たちの活躍もあり、陸上部に昇格。岐阜大学陸上部の練習参加、3年の時には念願の学内陸上グラウンド(300M、6コース、アンツーカー)ができ、駅伝(西濃1市5郡)にも体育会選抜での参加とやっと陸上部らしくなり、後々の後輩たちの尽力の甲斐あって、現在に引き継がれていると思います。

当時思い浮かべた陸上部の将来像を遥かに上回る発展は、ひとえに、大学の方々、後輩諸君の苦勞と努力の賜物だと思います。ここまで成長した陸上部の姿に感謝の念でいっぱいです。

設備や環境に恵まれた現在においても、無いものから有るものを生み出すような選手一人ひとりのエネルギーこそクラブ活動の原点だと思います。今後の陸上部の発展をお祈りいたします。

陸上部創設と黎明期



1986年度卒/第17期生
小川 正洋

1987-1996

はじめに

この10年間には1992(平成4)年に18歳人口がピークを迎え、本学では1994(平成6)年に経営学部が開設され、並行して様々な充実策が図られました。そのほかにも、様々な出来事があり、ここではこの10年間を通史的に振り返ります。

新学長就任と学部の改称

1987(昭和62)年度には、次のような出来事がありました。

まず、この年度より大迫輝通が学長に就任しました。大迫は学長就任に当たり「私は、昭和42年、本学創設と同時にここへきて、この大学と成長を共にしてきた。20年の歴史は、そう長くはないがきわめて大きく、また重いものであった。この間、いろいろな困難もあったが、われわれは将来を信じて頑張ってきた。そして期待通り、今や、新しい学舎や大総合グラウンドが成り、3,000人近い学生数をかかえるまでに発展した。感無量である」と『岐阜経済大学広報』に書いています。

そして、4月に経済学部第二部を廃止し、経済学部第一部を経済学部へ改称し、8月には7号館(講堂)、8号館(校舎)を竣工しました。

新体育館の建設とキャンパス整備事業

1988(昭和63)年度の4月には、親和会より彫刻家の水井康雄氏作「石順」が寄贈されました。石のオブジェで、中庭でもひととき目立つ存在となっています。

この年度には、長年の懸案であった新体育館の建設がすすめられました。既存の体育館は1971(昭和46)年に建設され、1,397㎡ありましたが、老朽化と収容力の問題から建て直すことになったものです。

新体育館は1989(平成元)年度末に竣工しました。また、本学ではこの間、1986(昭和61)年度の産業経営学科開設に伴う学生増や自動車通学者の増加によって駐

車場が手狭になったこと、さらに新体育館を既存の駐車場に建設したことなどから、これを機会に駐車場を拡張整備しました。工事は3月のうちに竣工し、翌年度の4月から使用が開始されました。

1990(平成2)年度の4月に、新体育館の落成記念の式典と招待試合を行いました。

新体育館の規模は、延べ床面積が旧体育館の約2.5倍にあたる3,548㎡で鉄筋コンクリート造り2階建て。1階は4つのアリーナから成り、卓球、ボクシング、少林寺拳法、剣道、柔道等の競技ができるほか、設備の充実したトレーニングルームを有し、基礎体力の鍛錬に利用されます。2階は1つの大アリーナで、バスケットボールやバレーボールなどの競技ができるようになっています。

こうして、1985(昭和60)年7月の3・4号館新校舎建設工事に始まった本学のキャンパス整備事業も5号館から8号館の建設、B・C号館解体撤去、1・2号館(旧A・B号館)の改造工事を経て前庭整備工事(C号館跡地を含めた緑化工事)を進め、新しいキャンパス空間が作り出されました。こうした整備をすることにより中央プラザと共に学生諸君の憩いの場を提供することができるようになりました。B号館の跡地に3号館をはじめ新校舎群の静穏を保つため、ゾーン区分する意味で中央歩道を隔ててバスレーンを配置し、学生・教職員の日常の利用に供しています。また、バスレーンの西側(1号館東側)には、キャッシュコーナー、電話ボックス、タクシー待合も設置されました。

図書館書庫の増築

本学の図書館は1990(平成2)年度に13年目を迎えました。当初の蔵書冊数は56,000冊余、年間収書冊数も5,000冊程度で書庫も棟を同じくして約15万冊の図書が収蔵可能に設計されていました。その後、本学教育、研究の充実、発展につれて年々収書量が増加し、1989(平成元)年度には、15万冊を超え当時の書庫が満杯となりました。これに対処するため、将来の蔵書収容量も考慮し学内諸機関で検討した結果、書庫増築を計画しました。増築する書庫は、現在の書庫の西側へ隣接させ、2層および3層を連絡通路で結ぶ別棟建物となりました。

入学定員の増加と志願者事情

1991(平成3)年度に向けて、本学では、経済学部産業経営学科(入学定員150名)の入学定員の増加を、文部省に申請していましたが、1990(平成2)年12月に文部大臣の認可を得ました。1991(平成3)年度からの入学定員は250名であり、従来より100名程増加することになりました。この定員増は、通例の恒常的な定員増とは異なり、期間付定員増であり、1999(平成11)年度入学者まで適用されることになりました。

1992(平成4)年度入試は、18歳人口のピークを迎え、現役志願者が増加したものの、浪人の減少と期間付定員増により、前年度入試に比べわずかに広き門となりました。

経済・経営系統は、数年来の急難化の反動とバブル経済崩壊の影響を受けて全国的に志願者が減少しました。

こうした全国的な傾向の中、本学志願者は、前年比約4,200名、32.6%の増加となりました。とくに、一次入試において、経済学科で3,205名増え、前年の約2倍、産業経営学科で1,236名増え、同6割増と激増。増加の要因は、前年度入試の志願者減による反動(隔年現象)と受験生の安全志向等であろうと当時は推測されていました。

3階建食堂の建設

1992(平成4)年度に入り、前年度の8月に着工した食堂の建設がすすめられ、8月に竣工し、9月から利用が開始されました。食堂の建設は、既存の学生食堂が、鉄骨



食堂2階(1992年8月)

1部2階建延べ910㎡、収容客数約500席であり、学生諸君の利用増に応えるため計画されたものでした。

建設場所は、6号館、7号館の北側で、全館冷暖房を完備し、既存の6号館、7号館とも廊下で連結されました。また、建設規模は鉄骨造、3階建延床面積3,535㎡。1階に軽食・喫茶コーナー170席、2階は学生の嗜好を取り入れ、いわゆるカフェテリア方式の食堂560席、3階は従来のオーソドックスな定食形式の食堂480席を設けました。

研究棟と情報棟の建設

1993(平成5)年度には、1号館北側の10号館経営学部研究棟、8号館北側の9号館情報棟の建設がすすめられました。

研究棟には教員研究室が、教員の増加等教育研究条件の向上に備えるため新たに40室配置されました。建築規模は鉄筋コンクリート造4階建、延床面積1,869㎡です。

また、情報棟は本学情報教育の強化・充実をはかるとともに、当時2号館2・3階にあった情報実習室のコンピューター台数の不足を解消するため、情報教育専用の建物として計画されました。施設内容としては、情報実習室(4室)、情報演習室(3室)、中教室(2室)、自習室、教材開発室等が配置され、それぞれの教室には最新のハードウェア・ソフトウェアが整備されました。

情報棟は11月に完成しました。建築規模は鉄筋コンクリート造4階建、延床面積3,103㎡です。建物完成後、コンピューターを中心とする情報機器等の設置、LAN工事、そしてビデオプロジェクターを中心とする映像設備工事が3月まで行なわれました。

語学研修補助と奨学金制度の発足

1993(平成5)年度より学生の海外語学研修旅行に対して、その費用の一部を本学が補助する制度が発足しました。この制度は当時の他大学にはあまり例のないもので、おおいにこの制度が利用されることが予想されました。

この制度は、学生の外国語の学習を奨励し、それらを

母語とする人々の生活と文化への親しみと理解を深めさせ、幅広い国際感覚・自立した行動力を養成することを目指して、夏期休暇期間中に大学の指定する研修旅行取扱業者、および語学研修機関で研修を受ける場合に、その研修旅行費の6割を補助するものとなりました。この年度は、アメリカ、ドイツ、フランス、中国の4ヵ国で語学研修が行なわれました。

また、成績・人物ともに優れた学生に対して学資を給付することにより、学業継続の援助ならびに学業意欲を向上させることを目的として1993（平成5）年度に「岐阜経済大学奨学金」制度が発足しました。この奨学金は「経済的理由により著しく修学が困難な者」を対象とするⅠ種、「学業成績が極めて優秀で本学の模範となる者」を対象とするⅡ種、「文化、体育、社会活動において特に優れた成績をおさめた者」を対象とするⅢ種の、3種類で構成されています。

経営学部の創設

1994（平成6）年度に、念願の経営学部が創設され、本学は二学部体制となりました。経営学部は経済学部産業経営学科を母体として、それに、経営情報学科という新しい学科を設け、二学科構成にしたものです。

経営学部に移った産業経営学科は、産業活動を広い視野でとらえ、産業論と経営学、そして情報を有機的に結んで追求するユニークな学科でした。一方、経営情報学科は、経営学と情報処理技術の両サイドから現代経営



9号館 情報棟・情報演習室（1993年11月）

をとらえ、単にコンピューターを操るだけでなく、戦略思考を持って、情報処理を経営に生かす理論と技術を身につける人材を養成する学科として誕生しました。

経済学部と経営学部は、現在も岐阜経済大学を支え、前進させるための両輪となっています。

また、経営学部開設によって、岐阜経済大学の英語表示が GIFU COLLEGE OF ECONOMICS から GIFU KEIZAI UNIVERSITY へと変わりました。

経営学部経営情報学科の開設とともに、9号館（情報棟）がオープンしました。ここには、コンピューターのダウンサイジング、ネットワーク、オープンシステム、マルチメディアの4つを特徴とした、最新のハードウェア・ソフトウェアが用意されました。情報実習授業の教室としては、ゼミなどで利用される情報演習室と、情報実習室があり、情報実習室では、基礎的な情報処理から、コンピューターネットワークの実習、UNIXワークステーションを用いた中級以上の情報実習まで情報処理教育のほとんどが行われました。4階には、200インチの大画面を映し出すビデオプロジェクターが用意され、視聴覚教材を駆使した授業が開始されました。また、学生向けにノートパソコンの貸し出しも開始されました。

この年には、語学学習設備 LL システムも登場しました。2号館2階の教室には語学学習が効率的かつ効果的に行えるよう、最新の語学トレーニング用機器や映像メディアが導入されました。

LL 教室には、学生用ブースが54台設置されており、それぞれのブースには、テレビモニター、ヘッドセット、カセットテープレコーダーが設置されました。

ヘッドホンによる学習は、語学教材あるいは、教員の発音を聞くだけのものではありません。教室内の誰かと会話をする「ペア学習」、グループの中で会話ができる「グループ学習」などいろいろな形態の会話学習が、いながらにして可能となりました。

さらに9月には全教室冷房化事業が完了し、学生が夏の暑さから解放されることになりました。

経営学部の開設と同時に、正規生としての外国人留学生の受け入れを開始しました。経済面あるいは日本語で受ける講義など多難が予想されたものの、国際交流のより一層の進展に大きな期待が寄せられました。

外国人留学生の第1期生となった入学者は、中国、台湾、マレーシアの3ヵ国から女性2人を含めて13人、経営学部の4つのクラスに分かれて1年次の講義を受けました。

1994（平成6）年の12月には、チサングランドホテルにおいて、全国の高校生を対象に募集した経営学部開設記念「作文コンクール」入賞者の表彰式を行いました。審査委員長は国語学者の金田一春彦氏に引き受けていただきました。

引き続き行われた受賞パーティでは、各受賞者の方に応募の動機、サブテーマの設定理由などを語ってもらいました。若者らしく「副賞を目当てに」と本音を交えながらも、「この機会に自分がずっと書きたかったテーマにチャレンジしてみようと思った」、「深く考えることを避けていた問題についてつきつめて考えてみようと思った」、「自分を支えてくれた友人に感謝の気持ちを伝えたいから」……など、はにかみながら語ってくれました。

新学長就任とカリキュラム改革

1995（平成7）年2月に、新学長として米田清治が就任しました。

大学設置基準の大綱化以来、大学改革の波が全国に押し寄せている中、本学では新学長のもとで全学的なカリキュラム改革が行われました。

経済学部では専門教育の系統履修を保障するために、国際経済コース、日本経済コース、地域と生活コースといったコース制を導入し、断片的に知識をため込むのではなく、専門的に学んだことが一つのまとまりを持ったものの見方として結実することを目指しました。

経営学部では4年間の一貫教育体系という観点から、全科目を教養科目群、基礎科目群、基幹科目群、応用科目群の4つの科目群から編成することによって、大学における学問研究を成立させる上で不可欠な学生諸君の目的意識、問題意識を涵養するとともに、基礎的学習からより専門的な学習への系統的学習を保障することとしました。特に、経済学部が導入したコース制は、現在の国際社会と日本コース、生活と環境コースの礎となるカリキュラム改革となりました。

年度末には部活動の部員たちが待ち望んでいた新クラブハウスが完成しました。新クラブハウスは、既設の木造ハウスを取り壊した跡地に建築され、音楽練習室を3室、部室5室を擁しています。新棟の完成にともない既設軽音楽ハウスは取り壊され、跡地に緑化整備として造園工事が行われました。

音楽練習室の設計にあたっては、音が外部に漏れないよう遮音設備が施され外部への音の影響をより少なくする工夫がなされました。

共同研究プロジェクトの開始

1996（平成8）年度にはソフトピアジャパンとの共同研究プロジェクトが開始されています。岐阜県が国際的なソフトウェアの研究・開発の拠点として建設を推進してきたソフトピアジャパンが、1996（平成8）年にソフトピアジャパンビルをオープンし、活動を開始しました。本学では地域経済研究所が研究を担当、研究代表者を間仁田幸雄所長（経営学部教授・当時）が務めたほか、地域研究、都市研究、産業政策研究及び情報科学研究の本学専門家集団がプロジェクトを編成し、活動を開始しました。

図書館の蔵書は、1994（平成6）年度末に、20万冊（和書：約15万冊、洋書：約5万冊）を超え、利用者サービスの面でも、蔵書管理の面でも、多くの手間と時間を必要とするようになってきました。図書館では、こうした問題の改善をはかるために、図書館業務のトータルなコンピューター化について検討をかさねてきましたが、この年度より、いよいよ閲覧など一部の業務からコンピューター化を始めることになりました。

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1987 昭和62	4月 経済学部第二部を廃止。経済学部第一部を経済学部に改称	4月 国鉄分割・民営化実施、JR7社が発足、営業開始
	8月 5号館・6号館・7号館・8号館（校舎棟）完成	4月 1人当りのGNP、アメリカを抜き世界第1位に
	10月 新校舎落成記念講演会開催（ウシオ電気取締役会長 牛尾治朗氏）	9月 東北自動車道と首都高速が接続
	1月 建林正喜学長が退任	10月 ニューヨーク株式市場で株価大暴落
	2月 学長に大迫輝通教授が就任	11月 竹下登内閣成立
1988 昭和63	3月 駐車場用地取得	2月 第15回オリンピック冬季大会、カルガリーで開催
	4月 親和会より石の彫刻「石順」（彫刻家 水井康雄氏作）、[SUN SECTION]（親和会会長・彫刻家 杉野茂時氏作）寄贈される	3月 青函トンネル開業（53.85km）
	11月 『岐阜経済大学論集』開学20周年記念号刊行	3月 日本初の屋根つき球場東京ドーム完成
	3月 自動車部部室・第二部自動車庫庫解体	4月 瀬戸大橋開通（児島・坂出間 9.368km）
		9月 第24回オリンピック、ソウルで開幕
1989 平成元	12月 岐阜経済大学学会学術講演会開催（NTT 林紘一郎氏）	12月 消費税法公布（平成元年 4.1 施行）
	2月 C号館解体	1月 昭和天皇崩御、明仁親王が即位
	3月 総合体育館竣工、旧体育館解体	1月 元号が「平成」と改元
	3月 クラブハウス（自動車部作業場）・更衣室（グラウンド）完成	4月 消費税（3%）スタート
	3月 B号館・トレーニングルーム解体	6月 宇野宗佑内閣成立
1990 平成2	4月 教職課程開設（中学校教諭一種免許状：「社会」、高等学校教諭一種免許状：「地理歴史」「公民」、経済学科・産業経営学科：高等学校教諭一種免許状「商業」）	6月 中国、天安門事件
	4月 総合体育館落成記念式典、招待試合	8月 海部俊樹内閣成立
	8月 日米経営戦略セミナー（米・ウォレス大学経営学研修団）	10月 サンフランシスコで大地震発生（M6.9）
		11月 東独の国境開放によりベルリンの壁崩壊
		1月 大学入試センター第1回試験実施

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1991 平成3	12月 経済学部産業経営学科期間付学生定員増認可される（期間付入学定員100名）	12月 この年バブル経済崩壊
	1月 3教室にビデオプロジェクターを導入	1月 多国籍軍のイラク空爆開始
	3月 B・C号館を解体、前庭として整備	
	3月 A・E号館を改修。A号館を管理棟とする	
	3月 図書館書庫増築（C館）	
1992 平成4	*（春）岐阜経済大学学会公開講演会開催「日本経済と円相場」（名古屋市立大学経済学部教授 松永嘉夫氏）	
	*（秋）岐阜経済大学学会公開講演会開催「日本の仏像－奈良時代を中心として－」（国際日本文化研究センター所長 梅原猛氏）	
	4月 経済学部産業経営学科の入学定員を250名に変更（2000年3月までの期間付定員100名）	5月 育児休業法公布
	*（春）岐阜経済大学学会公開講演会開催「太平記の世界」（椋山女学園大学短期大学部教授 桜井好朗氏）	6月 長崎県の雲仙普賢岳で大火砕流発生（死者37名）
	*（秋）岐阜経済大学学会公開講演会開催「激動の現代を解読する－人間の可能性－」（慶應義塾大学法学部教授 内山秀夫氏）	6月 東北、上越新幹線、東京駅乗り入れ開始
1993 平成5	4月 校友会より壁画（3期生、浅井清貴氏作）寄贈	6月 4大証券会社が大口法人投資家になっていた巨額の損失補填が明るみに
	8月 食堂（3階建）完成	7月 大学設置基準改正（自己評価・評価努力義務化施行）
	9月 食堂オープン	11月 宮沢喜一内閣成立
	3月 学生談話ホール完成（旧食堂を改装）	12月 アルマ・アタ宣言によりソ連邦解体決定
	*（春）岐阜経済大学学会公開講演会開催「西欧の個人と日本の個人」（一橋大学社会学部教授 阿部謹也氏）	
1994 平成6	*（秋）岐阜経済大学学会公開講演会開催「環境問題と経済学－コモンズの悲劇と社会共同資本－」（新潟大学経済学部教授 宇澤弘文氏）	
	4月 校友会より壁画（3期生、浅井清貴氏作）寄贈	6月 国際平和維持活動（PKO）協力法案成立
	8月 食堂（3階建）完成	7月 山形新幹線開業
	9月 食堂オープン	7月 第25回オリンピック、バルセロナで開催
	3月 学生談話ホール完成（旧食堂を改装）	9月 学校週5日制スタート



学長に大迫輝通教授が就任（1988年2月）



7・8号館が竣工（1987年8月）



5・6号館が竣工（1987年8月）



建設工事中の5・6・7・8号館（1987年）



校舎落成記念
ウシオ電気・牛尾治朗取締役会長の講演
（1987年10月）



就職セミナー 於：養老豆腐亭



体育館が竣工（1990年3月）



体育館1階-第5アリーナ
トレーニングルーム



親和会より「石順」が寄贈（1988年4月）



体育館2階-第1アリーナ（1990年3月）



第9回市民大学講座



建設工事中の図書館書庫（1990年）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1993 平成5	4月 岐阜経済大学奨学金（給付型）制度開始	5月 日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）開幕
	7月 海外語学研修開始（旅行費用一部補助）	6月 皇太子殿下結婚の儀
	11月 9号館（情報棟）・10号館（経済学部研究棟）竣工	6月 自民党が分裂し宮沢内閣不信任案可決、衆議院が解散
	12月 経営学部産業経営学科（入学定員150名、収容定員600名<期間付入学定員100名>）および経営情報学科（入学定員100名、収容定員400名）の設置認可される	7月 北海道南西沖地震発生（M7.8）、奥尻島中心に被害（死者、行方不明244人）
	3月 留学生宿舎竣工	8月 細川護熙非自民連立内閣成立
	*（春）岐阜経済大学学会公開講演会開催「現代フェミニズムと女性労働」（名古屋市立女子短期大学教授 安川悦子氏）	8月 冷夏（39年ぶり）豪雨など異常気象が日本列島を襲う
	*（秋）岐阜経済大学学会公開講演会開催「『複合不況』その後」（京都大学名誉教授 宮崎義一氏）	10月 インドで大地震、死者3万人以上
	* 1994年度入試から、留学生入試開始、帰国生徒入試開始（2002年度まで）	10月 中国、地下核実験再開
		12月 GATTウルグアイ・ラウンドが最終合意
		1月 政治改革4法案成立、衆議院議員小選挙区比例代表並立制決定
1994 平成6	4月 経営学部開設	4月 羽田孜連立内閣成立
	4月 経営学部産業経営学科（入学定員250名）（2000年3月までの期間付入学定員100名）、経営学部経営情報学科（入学定員100名）開設、経済学部産業経営学科の学生募集停止	5月 英仏海峡トンネル（ユーロトンネル）開通（全長50km）
	4月 教職課程開設（産業経営学科・経営情報学科：高等学校教諭一種免許状〔商業〕）	6月 松本サリン事件
	4月 外国人留学生受入開始	6月 村山富市連立内閣成立
	5月 経営学部開設記念式典挙行	8月 東京で記録的な猛暑（39.1℃）、各地で水不足被害発生
	5月 クラブハウス解体	9月 関西国際空港が営業開始、わが国初の24時間稼働
	5月 経営学部開設記念式典・記念講演会開催「21世紀へ向けての教育と社会」（愛知芸術文化センター総長 飯島宗一氏）	11月 年金改革法成立、支給年令を段階的に65歳に
	6月 経営学部開設記念文化講演会開催（映画監督 山田洋次氏）	

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1995 平成7	10月 岐阜経済大学学会 経営学部開設記念公開シンポジウム「産業社会の転換と日本の経営-比較の中のトヨタイズム-」（岡山大学経済学部教授 野村正寛氏「トヨタイズムと労働」、名古屋大学経済学部教授 山田鋭夫氏「フォーディズムとトヨタイズム」、岐阜経済大学 経営学部助教授 小林正人「自動車産業と社会的システム -自動車からの安全性から見た日本企業の生産システム-」）	1月 阪神・淡路大震災
	12月 経営学部開設記念高校生作文コンクール表彰式	3月 営団地下鉄線車内でサリン事件
	12月 経営学部開設記念「U・Iコンテスト」	
	12月 経営学部開設記念学生論文コンクール表彰式	
	1月 大迫輝通学長が退任	
	2月 学長に米田清治経済学部教授が就任	
	2月 クラブハウス（北北）完成	
	6月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「近代日本の光のあたる部分と影の部分」（静岡県立大学大学院国際関係学専攻教授 山口昌男氏）	4月 円相場1ドル79.75円まで高騰、史上最高値
	9月 全教室冷房化工事完了	5月 オウム真理教代表麻原彰晃を逮捕
	10月 グラウンド改修工事	7月 製造物責任法（PL法）施行
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「望ましい経済システムを求めて」（中央大学商学部教授 鶴田満彦氏）	9月 日銀、公定歩合を史上最低の0.5%とする	
	11月 アジア太平洋経済協力会議（APEC）大阪会議開催	
	1月 橋本龍太郎内閣成立	
1996 平成8	5月 図書館業務のコンピューター化開始	4月 沖縄の米軍普天間基地の返還問題で日米合意
	7月（財）ソフトピアジャパンとの委託研究に関する契約締結	7月 公安調査庁、公安審査委員会にオウム真理教の解散を請求
	3月 岐阜経済大学公式ホームページ公開	7月 大阪府堺市でO-157集団感染
	*（春）岐阜経済大学学会公開講演会開催「異文化とのつきあい方 -日本語と英語との間-」（明治大学政治経済学部教授 マーク・ピーターセン氏）	7月 第26回オリンピック、アトランタで開催
	*（秋）岐阜経済大学学会公開講演会開催「望ましい経済システムを求めて」（広島大学名誉教授、聖泉短期大学教授 芝田進午氏）	10月 第41回総選挙（初の小選挙区比例代表並立制）
	* 1997年度入学試験から大学入試センター利用入試開始	12月 ペルーで日本大使公邸人質事件



3階建の食堂が完成（1992年8月）



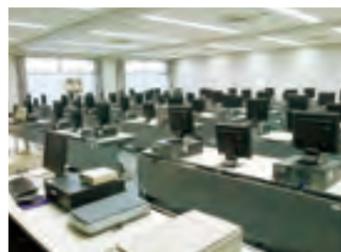
第24回卒業式（1994年3月）



9号館（情報棟）が竣工（1993年）



10号館（経営学部研究棟）が完成（1993年11月）



9号館（情報棟）情報実習室（1993年11月）

学長に米田清治教授が就任（1995年2月）



留学生宿舎が竣工（1993年3月）



就職支援の金融セミナー



新クラブハウスが竣工



経営学部開設記念映画監督 山田洋次氏の講演



経営学部開設記念 高校生作文コンクール表彰式（1994年12月）

Topics 4

大学発展の礎・経営学部を設置した頃

岡本 高廣 (元職員)

在職中は学部学科の設置などに関わる仕事を多く担当させていただきました。経済学部産業経営学部の設置、それに先立つ経済学科の入学定員増、経営学部の設置、経済学部コミュニティ福祉政策学科の設置、留学生別科の設置、大学院の設置などに取り組み、また、経営学部スポーツ経営学科を最初に構想することにも深く関わることができました。

経済学部の学科増設の機運が高まったとき、最初に構想されたのが地域経済学科です。しかし、その趣旨について事前協議の段階で文部省（当時）の理解を得ることができませんでした。佐藤昇教授が執筆された当該学科の趣旨文書は、精緻な論理による、先駆的で、しかも格調の高い名文です。新たに産業経営学科を企図したところ、当時は既設経済学科の収容定員超過が著しく、この是正をしてからでないと新学科の申請ができないとされました。これが1985（昭和60）年4月の経済学科入学定員450人となり、翌年の1986（昭和61）年4月によりやく産業経営学科を開設することができました。

1994（平成6）年4月の経営学部設置では、それを機に教育研究が充実するとともに、立派な校舎群が並び立ち、情報処理設備、LL装置、視聴覚機器が整備されるなど大学施設の格段の充実が実現しました。これには大垣市（つまり、大垣市民）や岐阜県下の多くの企業、個人から多大な補助金・寄付金をいただいたことを忘れてはなりません。

経営学部設置に係る文部省協議は難航に難航を重ね、もう申請を断念するしかない、という場面が何度もありました。申請が受理されるか分からないうちに多くの専任教員採用人事を行い、認可が不透明なままに校舎等の建設を始めるという綱渡りの連続です。これで認可を得られなかったらどうなるか。校舎建設の槌音が聞こえてくると、もう心臓が止まる思いでした。当時の文部省の設置認可行政は今日では考えられない厳しいもので、事前相談から認可に至るまでに重ねた文部省協議は同省企画課とは25回、私学行政課とは14回に及んでいます。申請期日を間際にして面談に臨んだ同省課長補佐が「この経営学部は趣旨がよく分からんなあ（取り下げはどうか）」と声高に言ったときには、さすがに私は即座に「申請書の体裁は黒表紙に金文字でいいですか」と質問してみせたのでした。

経営学部設置が難航した最大の理由は、1991（平成3）年5月の大学審議会答申『平成5年度以降の高等教育の

計画的整備について』にあります。ここでは学部学科の増設(量的拡大)は原則認めないとされました。それでも、本学の経営学部は抑制対象の増設ではなく、経済学部産業経営学科の少人数の定員増を伴う「改組転換」であること、しかも抑制の例外でもある「社会人、留学生及び帰国生徒を積極的に受け入れるもの」であることを以て申請を受理してもらうことができました。申請の入り口が見いだせず、切羽詰まったところでこの知恵を出してくれたのは若手文部官僚の小さな声でのつぶやきです。

経営学部の教育課程編成では産業経営学科と経営情報学科のそれぞれの学科理念がいつも問題となりました。専任教員の配置では教員の資格審査が大きな関門となりました。一方、施設設備では校舎建設とあわせて特に情報設備で他大学に勝るとも劣らない整備を実現することができました。整備計画を策定した学内小委員会には予算の制約を設けず、「とにかくいいものを計画してほしい」と要請し、当該計画のすべてを実現しました。LL装置の整備は認可に必須の要件であり、留学生宿舎の建設も強く求められました。

設置認可申請と同時にを行うのが寄附行為変更認可申請です。ここでは経営学部設置に要する自己資金の充足状況や設置後の財政見通し、法人の管理運営体制が問われます。文部省におけるヒアリングでは法人財政全般にわたって西原春夫委員（早稲田大学総長）と議論できたのは職員冥利でした。

この困難に満ちた学部設置を遂行できたのは、ひとえに矢橋浩吉理事長の揺るぎない精神、大迫輝通学長の不退転の意思によっています。準備委員会委員長を務めた竹林信一教授は文部省では特別に高等教育局長室に招き入れられるなど、同教授の人脈にも支えられました。また、若手の文部官僚にあっては、勝野尚行教授（教育行政学）や酒井博世教授（教育心理学）、三羽光彦教授（学校制度論）の学問業績に対するリスペクトがあって、それが本学への好感を生み出していました。高度な判断力が求められる複雑多岐で膨大な申請書類を作成するとともに、文部省の厳しい指摘に対峙することができたのは文部官僚に愛された松井典子主査（後に事務局長を務める）の叡智によっています。

※個人の役職名はすべて当時のものです。

Topics 5

海外留学生受け入れの思い出

猪平 進 (岐阜経済大学 名誉教授)

海外からの留学生が本学に入学してきたのは、経営学部を開設した1994（平成6）年からです。社会人・帰国子女とともに留学生の受け入れは、経営学部設立に際し文部省から要請された条件であり、93年ころから留学生宿舎の竣工、留学課の設置などの準備がなされました。当時は、はたして留学生が本学に来てくれるか教職員一同心配したものでした。ところが94年4月の留学生の入学者は13名（志願者は52名）と期待以上で、いずれも非常に優秀な留学生でした。この第1期の留学生には、のちに台湾や韓国へのゼミ旅行で通訳として活躍してくれた羅宣哲君（台湾）や朴愛京さん（中国）など今も印象に残る留学生たちが多くいます。

当時、文部省（現在の文科省）の高等教育政策に関しては批判的な立場の方々が本学には多かったと思いますが、「3点セット」といわれた留学生・社会人・帰国子女の受け入れは、欧米での大学淘汰の先行経験に学んだ文部省なりの少子化対策であったと思われる。今考えれば、文部省はその後の18歳人口減少（1992年205万人→2016年119万人）をにらんで3点セットを要請したと考えられるからです。しかし、本学の留学生受け入れは、大学内からの内発的な政策でなく文部省の外圧によって始まったため、当時新米の教員であった私自身の反省も込めて言うのですが、当時の大学執行部は、本学の未来の発展にとって大事な政策として位置付ける視点が欠けていたと思います。

この小文では、「1999年ころまでの留学生の思い出」を依頼されていますので、この期間に話を限れば、留学生はおおむね11～22人（94年～99年）と少数でした。同期間の学部入学者は900～1000人ですから、留学生数は、学年全体の1%にすぎません。その後の学生数の激減、留学生数の増加を思うと、たとえば留学生宿舎などは、コンクリート構造物は100年以上持つのですから、後に使えなくなるものでなく、せめて5階建てで100人程度収容できるしっかりしたインフラとしておけばよかったと思います。

外圧によって始まったとはいえ、中国、韓国、台湾などからの留学生は、公平に考えて、全体として日本人の学生より勉強熱心で、これが教える側にとっても日本人学生にとってもいい刺激をあたえてくれました。当時大講義室で持っていた私の講義でも、前方中央に席を占め熱心に話を聞いていたのが、多くは留学生でした。このなかに3年になって私のゼミに入ってきた丁勇君（現・江西師範大学教員）や朴永南君（現・(株)ヤマコ）の姿がありました。質の良い留学生の入学は、ゼミのなかでも他の日本人の学生にいい刺激になり、学習や研究の質があがったことは確かです。

丁勇君や朴永南君らは、1997（平成9）年入学の第4期留学生ですが、彼らの卒業年である2001（平成13）年に大学院経営学研究科が設立されたため、成績の良い進学希望の留学生は、その後、学内推薦で大学院に進むことができるようになりました。私が本学に来た1990年代初めは1学年900人を超える学部学生のうち、大学院への進学者はわずか1人か2人しかいませんでしたが、大学院へ留学生が多数進学してくれ、ピーク時は私のゼミだけでも、修士1、2年合計で12人も抱えたほどです。留学生は日本語の会話能力はあっても、日本語で書く能力は低い場合が多く、卒論や修論の指導などでは、本の読み方、文章の添削指導などに相当の時間を費やさなければなりません。このため留学生をお荷物として嫌う教員もおられました。たしかに大学院の論文指導は大変でしたが、今思い返すと指導する側には充実感があり、手ごたえのあった時代でもありました。

当時留学課にいた職員の方々は、課長の高橋哲朗さんをはじめ、尾崎和美さん等、留学生の面倒を実に親身にみられていました。故・堀部嘉雄さんが、名古屋の出入国管理事務所に足しげく通い、留学生のための面倒な書類手続きなどを続けられていたことを思い出します。このような方々の地道なサポートによって、留学生たちの本学への印象は非常に良いものとなり、その結果、彼らの親戚・家族なども続々と本学に留学して来ることになりました。

留学生を単に定員確保の手段として位置づけるのではなく、本学が、日本人学生にとっても、留学生にとっても、世界に開かれた大学として、言語や文化の異なる多様な人々と交流できる場、異なる視野に触れることから生まれる創造性にあふれた場となるのが、結局は大学生生き残りにもつながる道と考える次第です。



第1期外国人留学生の入学式にて。
中国・台湾・マレーシアから13人が入学（1994年4月）

column

多くの「出逢い」をくれた大学時代



1990 年度卒 / 第 21 期生
馬淵 環

昭和から平成へと時代が移り変わる4年間、私は岐阜経済大学のある大垣市、下宿のある安八郡神戸町で生活をしました。当時はまだ時間の流れもゆっくりとしていて、今から思えば本当に様々なことを考えられた4年間でした。

中学・高校から続けてきた陸上競技部に入部し、中長距離を専門に取り組みました。創部4年という若い部活であり、人数も少ない中で、競技活動、大学行事、プライベートと学生らしい生活を送ることができました。中でも渡辺正典さんとの出逢いは大きなものでした。岐阜経済大学OBで大学職員として働いていらした渡辺さんと共に長距離練習を行い、大学周辺を走り、照明設備のなかったグラウンドを渡辺さんの自家用車のヘッドライトで照らしてもらって練習した良い思い出があります。駅伝大会に共に出場し、私がホノルルマラソンに出場する前には励まして頂きました。ゴルフを初めて教えてもらったのもこの頃だったと思います。大学生の私にとって、渡辺さんは大人として社会人として一緒に練習してくれる仲間として憧れの存在でした。大学卒業後も陸上競技部OB会、校友会などで現在までお世話になっていることは私の財産だと思っています。

大学時代とは何なのかという問いに対して、答えは「出逢い」だと思います。人との出逢い。学問との出逢い。新しい土地（生活の場）との出逢い。岐阜経済大学、大垣市、神戸町、1年に一度は必ず訪れる場所。第2の故郷となっています。多くの先輩後輩、お世話になった教授や大学職員の方々。今現在までその想いが繋がっていることに本当に感謝したいと思います。

岐阜経済大学は現在も今後も発展し続けていくことと思います。同時に、大学が学生一人ひとりの心のよりどころであることは今後も変わらないことだと思います。

岐阜経済大学は永遠に不滅です。

わが青春時代「失われない時間」



1993 年度卒 / 第 24 期生
土本 繁

1973（昭和48）年12月から続いた、世に言う“安定成長期”は終わりを告げ、その後は「失われた20年」と呼ばれる低成長期となり、国際社会における日本への認識やその後の日本人の価値観にも大きな影響を及ぼしました。

第2次ベビーブーム世代に生まれた私は、奇しくもバブル崩壊前年の1990（平成2）年の春に大学生活をスタートする事になります。大学生活を通じて常に影響を受けた恩人を挙げるとすれば、教職課程の恩師三羽光彦先生と教務部教職担当をされていた青山博光様との出会いと断言できます。就職氷河期に卒業を迎える私たちの進路について親身に相談に乗っていただき、我が子のように叱咤激励し応援してもらったことで、現在は現職教諭として勤務できていると言っても過言ではありません。

日々の講義が終わり、取り立てて用件はないものいつものように三羽教授室を訪れると、ひとりまたひとり学生が来訪して、あつと言う間に教授室が学生で一杯になりました。教室ではフォークソングの名曲「22歳の別れ」が大好きだった三羽先生を囲んで談笑しているうちに、将来の教職に対する熱い思いをぶつけ合いながら時間を忘れて夜遅くまで語りあったことを昨日の事のように鮮明に覚えています。また、学外でも夏季休業期間に三羽先生のご実家がある三重県いなべ市での山村留学に参加したり、教職ゼミの仲間と協力して裏山に生えていた青竹を使い、そうめん流しをしたりしたことも仲間と汗を流し共に過ごした貴重な体験となりました。

大学卒業後、東濃地区の高等学校での勤務を経て、2007（平成19）年には現在の勤務先である大垣商業高等学校へ異動となり、大学卒業以降約15年ぶりに思い出深い大垣の地で勤務することとなりました。また、岐阜経済大学の先輩でもある大野宏先生と同僚として勤務するなかで、教諭として現場で発生する多くの課題に正面からぶつかり、問題解決していく素晴らしい体験と大きな成果を得られたことは、これからの自分自身の指針ともなる貴重な財産となりました。

創立50周年という大きな節目と次への第一歩を踏み出そうとしている我が母校岐阜経済大学のキャンパスには、今日も全国から集った後輩たちが昔の私たちの様に熱い志を胸に秘め、学生生活を謳歌し、将来の夢に向かって懸命に毎日過ごしています。母校での4年間は過去のバブル崩壊のように、失ってはいけない大切な時間です。それぞれのかげがえのない青春時代を、わが母校に思いを馳せてみませんか。

column

思い出の海外語学研修



1994 年度卒 / 第 25 期生
奥田 幹成

これから始まる大学生活はどんな感じになるのかなあ…そんな期待と不安を胸に、岐阜経済大学に入学しました。しかし、不安は瞬間に払拭され、大学では期待どおり、とても充実した4年間を送ることが出来ました。

寮での共同生活、日々の講義、ゼミ、大学祭への参加、冬のスキー合宿、就職活動など経験と思い出は枚挙にいとまがありませんが、一番思い出に残っている事は、3年生の夏休みに参加した、大学主催による、英語の語学研修です。研修先はアメリカ合衆国シアトル。ELS Language Centers, Seattleにて研修を行いました。学校の授業は、1日中みっちりとなりましたが、外国人の先生の丁寧かつユーモアを交えた授業で楽しく受けることが出来ました。授業で分からない所は、経大から一緒に参加しているクラスメートに教えてもらい、内容を理解していきました。宿題も毎日出され、宿舎に戻り夜遅くまで勉強しました。

同じクラスには、アジア、中東、ヨーロッパ、南米など世界の国から学びに来ており、互いの国の紹介などを片言の英語とゼスチャーでコミュニケーションを取りました。私のいたクラスは、語学レベルが初級だったため、かえってお互いの親交を深めることが出来ました。休日には、キャンプやMt.Rainierのトレッキング、大リーグ観戦、市内中心部ダウンタウンの散歩など様々な所に行きました。多少なりとも見聞は広められたと思います。短期間の語学研修でしたが、毎日浴びる英語のシャワー、世界の国の人との交流、クラスメート同士の助け合いなど、どれも貴重なことばかりでした。

現在の仕事で語学を生かす機会はなかなかありませんが、大学でこのような経験をさせていただきとても感謝しています。

最後になりますが、在学生の皆さんも、大学では色々なことにチャレンジして、有意義な4年間を過ごしていただきたいと思います。

充実した日々を送った大学時代



1995 年度卒 / 第 26 期生
立石 英明

創立50周年、誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。私が入学した1992（平成4）年は入学者が非常に多く、1学年900名以上だったと記憶しています。当時は珍しかった商業高校からの進学であり、大学入学前には授業についていけるか、学力面の不安が相当ありました。しかしながら、しっかり授業に出席し、ノートもしっかりとり、試験勉強もそこそこしていたので、すぐに不安は吹っ飛びました。その結果、大学3年生で卒業に必要な単位を取得し、大学4年は就職活動に専念する事が出来ました。（土産屋のバイトもかなりしていましたが…）

大学時代の思い出として、大学1年生のクラスの仲間と志賀高原にスキーに行った事は今でもよく覚えています。夜行バスでのきびしいスケジュールでしたが、多くの仲間が参加しました。このスキーツアーで、より一層友情も深まりました。大垣での飲み会も何回かあって、今でも集合写真を見るたびに懐かしく思います。

他には2年生の時に近江商人を学ぶ基礎演習を受講して、ゼミ担当の一柳先生とゼミ仲間と近江八幡を散策した事です。八幡山や八幡堀、歴史資料館など、八幡商業高校出身の私が張り切って皆を案内していた記憶が残っています。他にも、ゼミ対抗ソフトボール大会を開催した事、地元の霊仙山登山（思いのほか山道が厳しく、途中で断念しましたが…）をした事などが深く心に残っています。

岐阜経済大学を卒業後、地元長浜の北ビワコホテルグレイティエに就職しました。縁あって、岐阜経済大学校友会滋賀支部の定期総会の会場として、2年に1度使って頂いています。多くの校友の皆様と親交が深められ、仕事の幅も広がり、滋賀県支部副支部長の大役を仰せつかっております。今後も微力ながら、大学の発展に貢献したいと思っています。

column

様々なチャレンジをした貴重な4年間

1999 年度卒 / 第 30 期生
菅田 英生

この度は岐阜経済大学創立50周年、おめでとうございます。

私の大学時代と言いますと、一昔も二昔も前の話になりますが、その頃の思い出と聞かれると、ほとんどがサークル活動の話になってしまいます。

私は当時、大学の吹奏楽部に所属しながら、社会人団体の合唱サークルに2団体加盟。それ以外にも社会人演劇グループにも所属していました。

もちろん授業はしっかりと受けていましたが(笑)、それ以外の時間はほぼサークル活動に費やし学生時代を謳歌していました。

明けても暮れてもサークル活動ばかりで、バイトもほとんどできなかったため、いわゆる貧乏学生でしたが、同じような貧乏学生仲間と少しのお金を出し合いながら、部室に集まり、ほとんど具のない焼きそばをみんなでワイワイ言いながら食べていたのも楽しい思い出です。

学生時代のほとんどの時間を費やしたサークル活動の成績はというと、あまり自慢できるような内容ではないかもしれませんが、合唱サークルでは中部地区で銀賞、演劇では「ウエストサイドストーリー」の主演「トニー」をさせていただき、大垣市と可児市で計4回上演。岐阜経済大学の冊子にも活動内容のインタビューを載せていただきました。

その大学の冊子にも少し書かせていただいたのですが、私がこの4年間で手に入れた一番の宝はやはり仲間だったと思います。

その頃活動していた仲間とはいまだにつきあいのある方も多く、現在私はその頃の仲間の一人と結婚をし、3人の子供に恵まれ幸せな家庭を築いています。

大学では、もちろん学校で習う授業の内容も重要ですが、社会人の準備段階として高校生活ではできなかった事にいろいろとチャレンジできる貴重な4年間だと思います。

人はチャレンジした数ほど成長できると思います。結果はどうであれ、人生の中で最もチャレンジができる大学4年間。後で振り返ったとき、今の学生の方達にも良さ思い出となるような4年間を過ごしていつてもらいたいと思います。

最後になりましたが、学生時代学生課の方々には大変お世話になりました。学生の無茶なお願いを何度も聞いて下さり、助けられたことも多々あります。その時はお伝えできなかったかもしれませんが、この場を借りて感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

1997-2006

創立 30 周年を迎える

1997(平成9)年は、本学創立30周年にあたる記念すべき年でした。この年の11月に創立30周年記念式典が挙行されましたが、まず4月から順にこの年の出来事を振り返りましょう。4月早々、学生相談室が開設されました。大学が冬の時代を迎えつつある時期に、在学生に対するケアをより充実させようとするものでした。

5月17日に、黒川博教授が幹事となって本学で日本経営学会中部支部大会が開催されました。本学に経営学部が開設されて以来、初めてのことで。また同じ5月に、校友会より太陽電池の時計塔が寄贈されています。6月には、岐阜経済大学学会が、法人資本主義論で著名な中央大学教授・奥村宏氏を招き、「変わる日本型企業システム」という演題で公開講演会を開催しています。

7月8日に、田口利夫が第4代理事長に就任しました。同月、大垣市立図書館、本学図書館、大垣女子短期大学図書館の3館を結ぶ「大垣地域図書館情報ネットワーク」がスタートしました。10月には、創立30周年記念事業の一つとして本学のロゴマークが決定されました。

創立 30 周年記念式典

前述のように、11月に30周年記念式典が挙行されました。29日と30日の2日間にわたって記念シンポジウムが開催され、第1部では、「成熟社会にむけての選択肢」というテーマで、滋賀大学経済学部教授の成瀬龍夫氏の基調報告があり、パネラーとして奈良女子大学助教授・木村陽子氏、高知大学教授・藤岡純一氏が加わり、本学経済学部教授の木村隆之がコーディネーターを務めました。第2部では、「成熟社会のまちづくり」と題して京都府立大学助教授の上掛利博氏の基調報告の後で、兵庫県淡路島五色町長・砂尾治氏、岐阜県揖斐郡池田町サンビレッジ新生苑理事長・石原美智子氏が加わり、本学経済学部助教授・太田正がコーディネーターを務めました。この記念シンポジウムに先行して、東京大学教授の上野千鶴子氏による学会記念講演「21世紀 家族はどこまで変わるか、少子化・高齢化・女と男」が行われ

ています。同月、やはり記念行事の一環として、オーケストラ・アンサンブル金沢による創立30周年記念コンサートが開催されました。

この年の最後(12月)に、本学関係者に喜ばしいニュースがもたらされました。本学OBの飯田覚士氏がプロボクシング世界チャンピオンとなったことです。

1998(平成10)年4月1日付で、岡安賢二が副理事長に就任しました。4月6日には大学創立30周年を記念して校友会より寄贈された、水井康雄氏作の石彫モニュメント「石は呼ぶ」の除幕式が行われました。5月に本学と大垣地域産業情報研究協議会が、産業の活性化とまちづくりの推進のため、研究支援および人的交流を目的として、大垣市情報工房内に共同研究室と連絡窓口を開設することで協定書を締結しました。また8月に、前年理事長に就任したばかりの田口利夫が死去しました。その結果、同年11月17日に、田口義嘉壽が第5代理事長に就任しました。

9月になると、政府は大学設置基準の改正によるFDの努力義務化や、教育自己評価の義務化を定め、10月に大学審議会による「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の答申がありました。大学教育は大きな転換期を迎えていました。

マイスター倶楽部とソフトピア共同研究
室の開設

1998(平成10)年10月、本学の地域重視の姿勢を具体化する出来事がありました。それは、本学と大垣駅前商店街振興組合および大垣地域産業情報研究協議会が中心となって、まちなか共同研究室「マイスター倶楽部」を開設したことです。

翌1999(平成11)年の2月に、池永輝之教授が、米田清治学長に代わって本学第8代学長に就任しました。4月になって新学期が始まると、ソフトピアジャパンセンタービルに岐阜経済大学ソフトピア共同研究室が開設されました。「マイスター倶楽部」と「ソフトピア共同研究室」の開設は、その後の本学の教育に大きな役割をはたすこととなります。

同じ4月に、岐阜県下13の大学・短大が参画した「国際ネットワーク大学」が発足しました。また、ユニークプラン助成金制度もこの月にスタートしました。5月にソフトピア共同研究室が開設記念公開研究会を開催しています。

7月には、上海財経大学と教育学術交流協定を締結し、8月にブルゴーニュ大学と学生交換協定を締結しました。さらに10月に入って、沖縄大学とも学生交流協定を締結しました。1999（平成11）年という年は学長の交代もあり、本学の教育の重要な転換点となったと言っても過言ではないでしょう。

ハリヨパークの完成

この年の同じ10月に、本学の中庭に「ハリヨパーク」が完成しました。それまで殺風景だった中庭に池ができて憩いの場となりました。この池は、一カ所で水中の様子を見ることができるように設計されており、ハリヨの生態も観察できます。ハリヨは、環境庁が絶滅危急種に指定している淡水魚で、養老山系のきれいな湧き水に生息しています。本学が立地している場所は、開学以前は湧水地帯であったといわれ、「ハリヨパーク」という命名が豊かな水のイメージを喚起させました。12月15日にキャンパス中庭新規オープン披露式典が挙行されました。

2000（平成12）年3月、本学はハワイ大学マノア校と学生交換協定を締結しました。

この年の4月から経済学部コミュニティ福祉政策学



中庭のハリヨパーク（1999年10月）

科が開設され、経済学科の入学定員も350人に変更されました（期間付入学定員増）。さらに経営学部にも新カリキュラムが導入され、スポーツ推薦制度および社会人聴講制度が制定されました。

6月に、本学学会が著名作家・小田実氏を招いて公開講演会を開催したことも忘れがたい出来事でした。

東海豪雨による被災学生への援助

2000（平成12）年、夏の東海豪雨によって被災した本学学生に対して、本学は9月に経済的援助を実施しました。11月には酪農学園大学と学生交換協定を締結し、この協定は2012（平成24）年3月まで継続しました。

2001（平成13）年1月に中央省庁の再編がスタートし、文部省が文部科学省に改称され、さらに中央教育審議会が設置されました。その後、国立大学の再編・統合、国立大学法人化に向けた動きが加速します。

大学院の設置

大学をめぐる環境が大きく変化する中で、本学も組織の改編を進めました。2001（平成13）年4月、経営学部産業経営学科をビジネス戦略学科に改称しました。これは、時流に対応したカリキュラム改革が目的でしたが、学生募集上の理由もありました。さらに本学は、大学院経営学研究科経営学専攻修士課程を開設し、留学生別科も設置しました。まさに生き残りをかけた改革でした。

また、岐阜県を中心とする地域の情報化に寄与することを目指して、大学の附置機関として情報技術研究所が設立され、所長に新家茂教授が就任しました。研究課所管のエクステンションセンターも発足し資格試験対策講座を開講するとともに、図書館1階閲覧室の一部にエクステンションセンター自習室を開設しました。さらに、課外活動強化指定制度が導入され、ポート部・硬式野球部・陸上競技部の3団体が強化指定クラブに認定されました。

6月の学会公開講演会では、前年に続きユニークな講

演が行われました。総合地球環境学研究所長・日高敏隆氏による「動物たちの経営戦略」です。11月には、4月に設置された本学大学院の開設記念式典の行事として、イビデン株式会社取締役会長の遠藤優氏がパネリストとなって、「ネットワーク化と経営革新」をテーマにシンポジウムが開催され、「イビデンにおけるネットワーク化の現状と課題」というテーマで遠藤氏の報告があり、三重大学教授の渡邊明氏の報告もありました。

同じく11月に本学校友会創設30周年記念式典が開催され、NHKアナウンサーで、人気番組「プロジェクトX」のキャスターを務めた国井雅比古氏を招いて、「無名の英雄たちの物語～プロジェクトXの舞台裏～」と題する公開講演会が行われました。11月末には、経営学部の中西靖忠教授が中心となって、本学で日本数学会幾何学分会が開催されました。

マイスター倶楽部の活動

年明けの2002（平成14）年1月早々、マイスター倶楽部が大垣駅前商店街振興組合とともに「新春駅前もちつき大会」を実施しました。2月には、やはりマイスター倶楽部がかかわる、バリアフリーを考える市民グループ「大垣バリアフリーフォーラム」が、ノンステップバスの体験試乗会を開催しました。また、マイスター倶楽部が前年から取り組んできた、全盲の方のためのガイドマップ「大垣市まちなか触図マップ」が3月に完成しました。

この年の4月から、わが国の学校教育に大きな変化が生じました。完全学校週5日制、いわゆる「ゆとり教育」のスタートです。本学の教育にもセメスター制が導入されるなど重要な改革が行われました。5月27日に、遠藤優が第6代理事長に就任しました。

8月にマイスター倶楽部が、大垣駅前商店街振興組合が開催する「大垣水祭り」に協力し、11月には同倶楽部が岐阜県「都市再生モデル事業（賑わいのまちづくり事業）」に採択されました。その間10月に、経済学部の高橋勉助教授が中心となって、本学で経済理論学会第50回大会が開催されています。

2003（平成15）年1月、マイスター倶楽部は前年同様

「新春もちつき大会」を実施するとともに、大垣バリアフリーフォーラムと共同で「人にやさしいまちづくりシンポジウム」を開催しました。また同じく1月に、本学3号館前庭にオブジェ「飛翔の掌」が完成しました。

2月に、経営学部の黒川博教授が第9代学長に就任しました。

地域連携推進センターの設置

2003（平成15）年4月に、本学は岐阜県と「地域貢献協力協定書」を締結し、大垣市・揖斐川町とも「協定書」を締結しました。5月末に全天候型陸上競技場が完成し、6月にその完成記念フェスタが、ゲストに武井壮氏を招いて開催されました。7月には本学に地域連携推進センターが設置され、同センター長に経済学部の鈴木誠教授が就任しました。

11月27日に、マイスター倶楽部が「バリアフリー化功労者表彰・内閣官房長官賞」を受賞したことは特筆すべき出来事でした。また同月、中西靖忠教授が実行委員長となって、本学で日本数学会幾何学分会が開催されています。学内分煙運動も11月にスタートしました。

2004（平成16）年3月、地域連携推進センター開設記念式典がソフトピアジャパンで開催され、200人を超える出席者がありました。

4月に、前年公布された国立大学法人法に基づき89の国立大学法人が発足し、さらに認証評価受審も義務化され、大学教育の新時代を迎えました。本学では新学期に入り、経済・経営両学部の入学定員の変更が行われました。

全天候型陸上競技場と人工芝サッカー場の完成

6月に人工芝サッカー場が完成し、そのオープンフェスタが開催されました。井原正巳氏のトークショーのあと、総合グラウンド・サッカーコートにおいてオープンセレモニーが行われました。

あゆみ

7月に「岐阜県若者政策提案促進事業」に本学から2件の提案が採択されました。1件は竹内ゼミの「若者の県内定住産業政策 県民との協働体制 ―フリーターをつくらないための若者と産官学地域連携システムの構築―」で、もう1件はマイスター倶楽部防犯コミュニティー研究グループの「安全・安心な生活環境づくり ―防犯コミュニティー活動による防犯ボランティア・ネットワークの形成のための調査研究―」です。

10月に第1回学内レガッタが開催されています。
2005（平成17）年2月に、本学の地域経済研究所が、「自律と合併―小規模町村は未来をどう描いたか」をテーマに、パネリストとして長野県泰阜村村長・松島貞治氏らを招き、公開シンポジウムを開催しました。また3月1日に、本学は大垣共立銀行・共立総合研究所と「産学連携に関する協定書」を締結しました。

3月8日、遠藤優理事長の辞任にともない、大垣共立銀行の土屋嶋頭取が第7代理事長に就任しました。

7月になって上述の大垣共立銀行との産学連携共同研究が開始され、定期的に研究会が行われるようになりました。この年の夏に屋内練習場が完成しています。

スポーツ経営学科の開設

本学は受験者数の減少傾向に歯止めをかけるために、2005（平成17）年に経営学部ビジネス戦略学科のスポーツ経営学科への改組を決定しました。スポーツ経営学科の特徴はビジネスとスポーツの融合にあり、スポーツのビジネス化・産業化に寄与する人材の育成を目指すところにあります。さらに、この学科で学んだ学生は、保健体育・商業の教員免許の取得が可能になり中学・高校教員への道が開かれるとともに、必要な科目の単位を取得すれば地域スポーツマネージャーなどの様々な資格を得ることができます。現時点(2017年)から振り返って、これはまさに「大いなる決断」でした。この決定が、その後の本学の運命を変えたと言っても過言ではありません。スポーツ志向の学生が増加したことにより、学生の質も大学の雰囲気も大きく変わりました。12月にスポーツ経営学科開設記念講演会が、本学客員教授で元野球

全日本監督の後藤寿彦氏をはじめ、読売ジャイアンツの高橋由伸選手、中日ドラゴンズの井端弘和選手らを招いて、大垣市サイトピアセンター文化ホールで行われました。

2006（平成18）年4月から経営学部スポーツ経営学科が入学定員70名でスタートしました。それと同時にビジネス戦略学科の学生募集が停止されました。

また本学は、4月から5月にかけて「下呂市における地域連携協定書」および美濃加茂市との「地域連携協定書」、さらに坂祝町との「まちづくり連携協定書」を次々に締結しました。7月に、認証評価受審の義務化にともない、本学は（財）日本高等教育評価機構に対して「自己評価報告書」を提出しました。

8月1日に説田泰明が第6代副理事長に就任しました。

ボート部、日本選手権大会で優勝

9月になると、本学にとって喜ばしいニュースが伝えられました。ボート部の山本亮太さん・嶋田盛一さんが日本選手権大会男子ダブルスカルで優勝したことです。山本・嶋田両名は、12月に岐阜県民栄誉賞を受賞しました。同じく9月に、本学で「日本臨床心理身体運動学会」が開催されました。

11月27日、本学学会が公開講演会を開催しました。在名古屋米田領事館首席領事ダニエル・ロッチマン氏が「日米関係と両国文化の違いについて」という演題で講演されました。

2007（平成19）年2月には、待望の介護福祉士養成施設が完成しました。2月19日に、地域経済研究所が「安全で活力ある岐阜づくり」というテーマで公開シンポジウムを開催しました。新宿・歌舞伎町商店街振興組合事務局長の城克氏が基調講演を行い、岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会理事長の辻英二氏らが加わってパネルディスカッションが行われました。

3月末に、本学が前年提出した「自己評価報告書」が、（財）日本高等教育評価機構によって認定されました。

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事		
1997 平成9	4月	学生相談室開設	4月	消費税を3%から5%に引き上げ
	5月	校友会より太陽電池の時計塔寄贈される	5月	神戸市で小学生殺害事件
	5月	校友会ホームページ開設	6月	臓器移植法成立
	6月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「変わる日本型企業システム」(中央大学商学部教授 奥村宏氏)	7月	香港がイギリスから返還
	7月	矢橋浩吉理事長が退任	10月	長野新幹線(高崎駅-長野駅間)開通
	7月	理事長に田口利夫西濃運輸株代表取締役会長が就任	11月	山一證券が経営破綻
	7月	大垣市立図書館、岐阜経済大学図書館、大垣女子短期大学図書館の3館を結ぶ「大垣地域図書館情報ネットワーク」がスタート	12月	地球温暖化防止京都会議開催(CO2削減決議)
	10月	大学のロゴマーク決定	12月	この年、大規模なエルニーニョ発生(世界各地で異常気象)
	10月	第二部第1回卒業生同窓会開催	2月	郵便番号7桁に変更
	11月	大学創立30周年記念式典・祝賀会開催	2月	第18回オリンピック冬季大会が長野市で開催
	11月	岐阜経済大学創立30周年記念学会講演会開催「21世紀 家族はどこまで変わるか、少子化・高齢化・女と男」(東京大学教授 上野千鶴子氏)		
	11月	岐阜経済大学創立30周年記念コンサート開催(オーケストラ・アンサンブル金沢)		
	11月	岐阜経済大学創立30周年記念シンポジウム開催「2030年の地域社会を展望する」第1部 成熟社会にむけての選択肢(滋賀大学経済学部教授 成瀬龍夫氏、奈良女子大学生生活環境学部助教授 木村陽子氏、高知大学人文学部教授 藤岡純一氏、岐阜経済大学経済学部教授 木村隆之)、第2部成熟社会のまちづくり(京都府立大学福祉社会学部助教授 上掛利博氏、兵庫県淡路島五色町長 砂尾治氏、サンビレッジ新生苑理事長 石原美智子氏、岐阜経済大学経済学部助教授 太田正)		
	11月	『岐阜経済大学論集』岐阜経済大学創立30周年(経済学部創設30周年)記念号発行		
12月	22期生 飯田覚士氏がWBA世界ジュニアバンタム級タイトルマッチで勝利			
1998 平成10	*	岐阜経済大学学会公開シンポジウム開催「市場経済・資本主義・制度変化―その学史的検討―」(北海道大学経済学部助教授 西部忠氏、和歌山大学経済学部助教授 尾近裕幸氏、専修大学経済学部助教授 吉田雅明氏、岐阜経済大学経営学部教授 野松敏雄)		
	4月	校友会より大学創立30周年記念石彫モニュメント「石は呼ぶ」(水井康雄氏作) 寄贈される	4月	改正外為法施行(日本版ビッグバン始動)
	4月	ボクシング部が岐阜県の競技力向上強化指定部に決定	4月	明石海峡大橋開通
	6月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「ポスト京都会議の地球温暖化対策」(京大経済研究所所長 佐和隆光氏)	6月	金融監督庁発足
	8月	田口利夫理事長逝去	7月	体細胞クローン牛誕生
	10月	大垣市・大垣女子短期大学・本学の共催による「第1回リレー講座 in 大垣」開講	7月	和歌山市で毒物カレー事件
			7月	小淵恵三内閣成立
			9月	自己点検・評価の実施・公表の義務化施行 大学設置基準等の改正によるFD努力義務



創立30周年記念事業パンフレット



創立30周年記念 アンサンブル金沢コンサート(1997年11月)



飯田覚士さん WBA世界ジュニアバンタム級世界王者に(1997年12月)



岐阜経済大学校友会より石彫モニュメント「石は呼ぶ」が寄贈(1998年4月)



経営学部4年 安藤光一さんの学生1人旅(1997年)

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1998 平成10	10月	地域経済研究所主催第1回市民ゼミナール開講
	10月	まちなか共同研究室マイスター倶楽部開設
	10月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「いじめ社会と人間」(ルポライター 鎌田慧氏)
	11月	理事長に田口義嘉壽西濃運輸㈱代表取締役社長が就任
	1月	米田清治学長が退任
	2月	学長に池永輝之経済学部教授が就任
*	情報棟(9号館)のパソコン更新、マルチメディア教室へ改修(2202・2302教室)	10月 日本長期信用銀行破綻 11月 政府、緊急経済対策決定(地域振興券支給 減税7兆円など) 1月 欧州通貨統合始動 1月 東京外国為替市場でユーロの取引はじまる 3月 ニューヨーク株価、史上初の1万ドル突破 3月 アメリカの好調な景気反映 3月 日産自動車、フランスのルノーと資本提携合意発表 3月 総務庁、2月の完全失業率4.6%と発表

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
1999 平成11	4月	岐阜県下13の大学・短大が参画する国際ネットワーク大学発足
	4月	ユニークプラン助成金制度開始
	4月	ソフトピアジャパンセンタービルに岐阜経済大学ソフトピア共同研究室を開設
	5月	ソフトピア岐阜経済大学共同研究室開設記念公開研究会「福祉を支援する情報通信技術」(名古屋工業大学電子情報学教授 岩田彰氏)
	6月	留学生宿舎駐車場用地取得
	6月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「超能力の舞台裏-科学的なものの方・考え方-」(立命館大学国際関係学部教授 安斎育郎氏)
	7月	上海財経大学と教育学術交流協定を締結
	8月	ブルゴーニュ大学と学生交換協定を締結
	8月	沖縄大学と学生交換協定を締結
	10月	経済学部コミュニティ福祉政策学科(入学定員100名、収容定員400名)の設置認可される
	10月	中庭にハリヨパーク完成
	10月	障がい者用トイレ新設(3号館1階)、情報棟(9号館)にエレベーター設置
	11月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「企業社会の人権」(甲南大学経済学部教授 熊沢誠氏)
	12月	経営学部産業経営学科期間付入学定員の延長認可される(2005年3月までの期間付入学定員50名)
	1月	講演会開催「電子商取引を中心とする情報化社会の課題と対策」(元通商産業事務次官・本学客員教授 棚橋祐治)
	3月	セクシャルハラスメント防止等に関するガイドライン制定
	3月	ハワイ大学と学生交換協定を締結
	*	マルチメディア教室に改修(8号館4階)

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
*	異文化体験旅行制度開始(8~9月に米・ヨーロッパ・中国へ)	
2000 平成12	4月	経済学部コミュニティ福祉政策学科開設(入学定員100名、社会福祉士養成)
	4月	教職課程開設(経済学部コミュニティ福祉政策学科:中学校教諭1種免許状「社会」、高等学校教諭一種免許状「公民」)
	4月	経済学部経済学科の入学定員を350名に変更
	4月	経営学部産業経営学科の入学定員を200名に変更(2005年3月までの期間付入学定員50名)
	4月	カリキュラム変更(多様な学習形態の保証、経営学部のカリキュラム改革)
	6月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「今、考えること」(作家 小田実氏)
	9月	東海豪雨被災学生に経済的援助実施
	9月	経済学部コミュニティ福祉政策学科開設記念式典 記念講演「真の豊かさを求めて-21世紀のコミュニティと福祉-」(埼玉大学名誉教授 暉峻淑子氏)
	9月	キャリア支援課が3号館1階へ移転
	11月	酪農学園大学と学生交換協定を締結
	12月	『岐阜経済大学論集』経済学部コミュニティ福祉政策学科 開設記念号発刊
	*	2001年度入試から、指定校推薦入試、AO入試、大学院入試、留学生別科入試開始

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2001 平成13	4月	経営学部ビジネス戦略学科を開設(経営学部産業経営学科を改称)
	4月	大学院経営学研究科経営学専攻修士課程を開設(入学定員10名)
	4月	経済学部経済学科の入学定員を300名に変更
	4月	留学生別科開設(入学定員30名)
	4月	教職課程新設(経営学部経営情報学科:高等学校一種免許状「情報」)
	4月	エクステンションセンター開設、資格試験対策講座開講。エクステンションセンター自習室開設(図書館1階閲覧室内)
	4月	情報技術研究所開設(初代所長 新家茂経済学部教授)
	4月	課外活動強化指定制度導入(ボート部・硬式野球部・陸上競技部が初の強化指定クラブに認定)
	6月	岐阜経済大学学会公開講演会開催「動物たちの経営戦略」(総合地球環境学研究所長 日高敏隆氏)
	10月	経済学部産業経営学科の廃止認可される



高校生作文コンクールの表彰式(1998年)



異文化体験旅行「万里の長城」で(1998年9月)

ソフトピアジャパンセンタービルにソフトピア共同研究室を開設(1999年4月)



まちなか共同研究室マイスター倶楽部(1998年)



教育学術協定を結んだ上海財経大学(1999年)



フランス・ブルゴーニュ大学と学生交換協定を締結(1999年8月)



沖縄大学と学生交流に関する協定を締結(1999年8月)



沖縄大学(1999年)



大学全景(1999年)

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事	
2001 平成13	10月	岐阜県と岐阜経済大学の情報交流会開催	
	10月	火災により、マイスター倶楽部まちなか共同研究室一時閉鎖	
	11月	岐阜経済大学校友会創設 30 周年記念式典および公開講演会開催 「無名の英雄たちの物語〜プロジェクト X の舞台裏〜」(講師: NHK アナウンサー「プロジェクト X」キャスター国井雅比古氏)	
	11月	岐阜経済大学大学院開設記念式典・シンポジウム開催 テーマ「ネットワーク化と経営革新」(イビデン株式会社取締役会長 遠藤優氏、三重大学人文学部教授 渡邊明氏、経営学部教授 黒川博、経営学部教授 籠幾緒、経営学部助教授 岩坂和幸)	
	12月	『岐阜経済大学論集』経営学部ビジネス戦略学科 開設記念号発刊	
	1月	校友会創立 30 周年を記念し、3 号館前庭にオブジェ「飛翔の掌」(浅井清貴氏作) 寄贈される	
	*	2002 年度入試より、スポーツ推薦入試(特待生制度) 開始、岐阜県過疎地域奨学生推薦入試(学費減免制度) 開始(2003 年度まで)、沖縄県・離島地域奨学生推薦入試(学費減免制度) 開始	
	2002 平成14	4月	経営学部ビジネス戦略学科の入学定員を 150 名に変更(経営学部ビジネス戦略学科の期間付入学定員を廃止)
		4月	セメスター制開始
		4月	教職課程開設(経済学部コミュニティ福祉政策学科に高等学校教諭一種免許状「福祉」)
4月		社会福祉実習センター開設(8 号館 1 階)	
4月		学業成績表記を A-D 段階から AA-D 段階に変更	
5月		田口義嘉壽理事長が退任	
5月		理事長に遠藤優イビデン(株)代表取締役会長が就任	
6月		岐阜経済大学学会公開講演会開催 「『グローバルイノベーション』と『テロリズム』 - くらしの観点から -」(名城大学経済学部教授 尾崎芳治氏)	
7月		公開講演会開催 「人を育て活かす法」(本学客員教授 後藤寿彦)	
7月		火災により、閉鎖していたマイスター倶楽部まちなか共同研究室再開	
10月	「おもしろゼミナール in 大垣(リレー講座 in 大垣から改題) テーマ: 発見! 新しいライフスタイル」 開講		
12月	大垣情報ネットワーク研究会発足		
12月	岐阜経済大学学会公開講演会開催 「物質文明を超えて - 資源・環境革命の 21 世紀 -」(元日本ゼオン(株)専務取締役 新第一塩ビ(株)取締役社長 佐伯康治氏)		
12月	上海財経大学の訪問団来訪		
1月	高山市教育委員会主催、本学共催による「たかやま市民カレッジ」開講		
1月	池永輝之学長が退任		
2月	学長に黒川博経営学部教授が就任		
3月	岐阜県コミュニティ診断士認定開始		
12月	愛子内親王誕生		
1月	三和銀行と東海銀行が合併して UFJ 銀行(現: 三菱東京 UFJ 銀行)が発足		
1月	雪印牛肉偽装事件		
4月	完全学校週 5 日制のゆとり教育スタート		
4月	DV 防止法が全面施行		
5月	経済団体連合会(経団連)と日本経営者団体連盟(日経連)が統合、日本経済団体連合会(日本経団連)が発足		
5月	日韓ワールドカップ開催		
6月	東京都千代田区で全国初の歩きタバコ禁止条例が成立		
8月	住民基本台帳ネットワーク開始		
9月	小泉首相が日本の首相として史上初めて、朝鮮民主主義人民共和国を訪問		
10月	小柴昌俊東京大学名誉教授にノーベル物理学賞、田中耕一島津製作所社員にノーベル化学賞の受賞が決定		
11月	北朝鮮に拉致された日本人 5 人が帰国		
1月	朝青龍が第 68 代横綱に昇進(モンゴル人初の横綱誕生)		
2月	アメリカ航空宇宙局、スペースシャトル・コロンビア号、帰還のため大気圏突入後、テキサス州上空で空中分解、墜落		
3月	宮崎駿監督「千と千尋の神隠し」が第 75 回アカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞		

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2003 平成15	3月	学内ネットワーク環境整備
	4月	岐阜県と地域貢献協力協定を締結
	4月	大垣市・揖斐川町と協定を締結
	4月	カリキュラム変更(コミュニティ福祉政策学科に精神保健福祉士受験資格取得プログラム設置)
	4月	FD(ファカルティ・ディベロップメント) 活動推進を決定
	5月	全天候型陸上競技場完成
	5月	森誠一経済学部教授が第 12 回「生態学琵琶湖賞」受賞
	6月	陸上競技場完成記念フェスタ開催(ゲスト武井壮氏)
	6月	津島市主催・岐阜経済大学共催 津島市市民大学講座「まちづくり講座」開講
	7月	地域連携推進センター設置
7月	岐阜経済大学学会公開講演会開催 生態学琵琶湖賞受賞記念 「ハリヨ社会から地域環境の保全まで」(岐阜経済大学経済学部教授 森誠一)	
8月	岐阜市及び県内の 11 大学と学官連携協定締結	
11月	マイスター倶楽部「バリアフリー化功労者表彰・内閣官房長官賞」受賞	
11月	学内分煙開始	
12月	岐阜経済大学学会公開講演会開催 「東アジア経済圏と日本の地域経済 その過去・現在・未来」(京都大学名誉教授・鹿児島国際大学大学院経済学研究科教授 中村哲氏)	
3月	地域連携推進センター開設記念式典開催	
3月	8 号館にエレベーター設置	
*	2004 年度入試より、全国過疎地域奨学生推薦入試開始(2006 年度以降は指定校制度)	
2004 平成16	4月	高山市と協定を締結
	4月	経済学部経済学科の入学定員を 180 名に変更
	4月	経済学部コミュニティ福祉政策学科の入学定員を 75 名に変更
	4月	経営学部ビジネス戦略学科の入学定員を 75 名に変更
	4月	大学院経営学研究科経営学専攻修士課程の入学定員を 20 名に変更
	4月	新カリキュラムに移行(就職・資格取得支援科目群設置、体験学習重視、履修プログラム導入など)
	4月	Web による受講登録開始
	4月	特別なニーズをもつ学生の支援体制整備
	4月	課外活動準強化指定制度導入(サッカー部が初の準強化指定クラブに認定)
	5月	「大垣市民大学講座」と「リレー講座 in 大垣」を「コミュニティ・カレッジ」として開始
4月	郵政事業庁が日本郵政公社に改組	
4月	六本木ヒルズがグランドオープン	
5月	個人情報保護法が参議院本会議で可決され成立	
6月	戦後はじめて有事法制が成立	
7月	食糧庁廃止	
7月	国立大学法人法公布	
8月	沖縄に戦後初の鉄道沖縄都市モノレール(ゆいレール)が開業	
8月	住民基本台帳ネットワークシステムが本格稼働	
9月	自由党が野党第 1 党の民主党へ合流、新たに「民主党」となる	
10月	東海道新幹線の東京駅-新横浜駅間に品川駅が開業	
10月	最後の日本産トキ「キン」が死亡	
11月	イラク日本人外交官射殺事件	
12月	新たな留学生政策の展開について(答申) ~ 留学生交流の拡大と質の向上を目指して ~ (中央教育審議会)	
12月	地上デジタルテレビ放送が東京、大阪、名古屋で開始	
1月	山口県阿東町の養鶏場で鳥インフルエンザの発生確認	
1月	自衛隊イラク派遣開始	
3月	スペイン列車爆破事件発生	
3月	日本で製造業への人材派遣が解禁	
4月	消費税の内税(総額)表示の義務化	
4月	イラク日本人人質事件	
5月	拉致被害者の家族 5 人が帰国	
10月	新潟県中越地震(M6.8)	
12月	牛肉トレーサビリティ法が全国で施行	
12月	スマトラ島沖地震(M9.3)	
1月	我が国の高等教育の将来像(答申)(中央教育審議会)	
2月	中部国際空港(セントレア)開港	
3月	日本国際博覧会(愛知万博)「愛・地球博」が開幕	



ハワイ大学マノア校と学生交換協定を締結(2000年3月)



ハワイ大学マノア校(2000年)



酪農学園大学と学生交換協定を締結(2000年11月)



陸上競技部が強化指定クラブに(2001年4月)



ボート部が強化指定クラブに(2001年4月)



沖縄県人会発足(2002年)

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2004 平成16	5月 森誠一経済学部教授、マイスター倶楽部が第1回大垣市民大賞受賞	
	6月 人工芝サッカーコート完成・オープンフェスタ開催	
	10月 第1回学内レガッタ開催	
	3月 遠藤優理事長が退任	
	3月 理事長に土屋嶋(株)大垣共立銀行取締役頭取が就任	
	3月 株式会社大垣共立銀行・株式会社共立総合研究所と産学連携に関する協定を締結	
*	岐阜経済大学学会公開講演会開催 「日本の近代化と福沢諭吉 一福沢はなぜアジアから憎まれているのかー」(名古屋大学名誉教授 安川寿之輔氏)	
2005 平成17	10月 硬式野球部屋内練習場完成	4月 個人情報保護法全面施行
	11月 初代キャリア支援部長に竹内治彦経営学部教授が就任	4月 JR 福知山線脱線事故
	12月 岐阜経済大学学会 スポーツ経営学科開設記念講演会開催「やる気を引き出すコーチングー選手の論理 指導者の論理ー」(本学客員教授 野球全日本元監督 後藤寿彦、読売ジャイアンツ選手 高橋由伸氏、中日ドラゴンズ選手 井端弘和氏、東海テレビアナウンサー 吉本功氏)	7月 日本人宇宙飛行士野口聡一氏が搭乗したスペースシャトル「ディスカバリー」の打ち上げ成功
	2月 大垣市・大垣商工会議所・大垣市商店街振興組合連合会と中心市街地活性化のための四者協定を締結	11月 耐震強度偽装事件
		1月 日本郵政株式会社が発足
		3月 NTT 東日本およびNTT 西日本のICカード公衆電話とICテレホンカードが廃止
2006 平成18	4月 下呂市などと地域連携協定を締結	4月 国会議員互助年金廃止
	4月 経営学部スポーツ経営学科を開設(入学定員70人)	4月 地上デジタルテレビ放送の1セグメント放送「ワンセグ」が開始
	4月 レクリエーションインストラクター資格・初級障がい者スポーツ指導員・財団法人日本体育協会の公認スポーツ指導者資格取得支援開始	6月 「宙に浮いた年金記録」判明
	4月 経済学部経済学科の入学定員を150名に変更	7月 パロマ工業社製ガス瞬間湯沸かし器が原因の一酸化炭素中毒事故発覚
	4月 経済学部コミュニティ福祉政策学科の入学定員を70名に変更	8月 バスケットボール世界選手権が日本で初開催
	4月 経営学部経営情報学科の入学定員を90名に変更	9月 秋篠宮文仁親王の第一男子、悠仁親王誕生
	4月 経営学部ビジネス戦略学科の学生募集停止	9月 安倍晋三が第90代首相に就任
	5月 美濃加茂市と地域連携協定、坂祝町とまちづくり連携協定を締結	10月 ボーダフォン日本法人、ソフトバンクモバイルに社名変更
	5月 学生談話室(喫茶食堂)解体	11月 JR 東海の名古屋エリアで、ICカード乗車券「TOICA」のサービスが開始
	9月 ボート部の山本亮太・嶋田盛一が日本選手権大会において男子ダブルスカルで優勝	1月 防衛庁が省に昇格し、防衛省発足
	11月 教職員宿舎解体	3月 名古屋駅前に地上47階、高さ247メートルのミッドランドスクエアが完成
	11月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「日米関係と両国文化の違いについて」(在名古屋米国籍館首席領事 ダニエル・ロッチマン氏)	3月 能登半島地震(M6.9)
	12月 ボート部の山本亮太・嶋田盛一が岐阜県民栄誉賞を受賞	
	2月 介護福祉士養成施設(入浴・介護・家政・調理実習室)完成・内覧会開催	
	3月 (財)日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価(認定) 認定期間:7年間(2006年4月1日~2013年3月31日)	



全天候型陸上競技場が完成(2003年5月)



人工芝サッカー場が完成(2004年6月)

硬式野球部屋内練習場が完成(2005年10月)



中心市街地活性化のための協定を締結(2006年2月)

Topics 6

岐阜経済大学創立 50 周年に寄せて

黒川 博 (岐阜経済大学 元学長)

岐阜経済大学は、2017(平成29)年4月をもって創立50周年という大きな節目を迎えることになります。心よりお祝い申し上げます。

私が学長に就任したのは2003(平成15)年で、大学進学率は漸増ないし横ばいで推移していたものの、18歳人口は年々減少する一方だったにもかかわらず、大学数は増加の一途をたどっていました。なかでも首都圏・大都市圏以外の地方では「定員割れ」大学が相次ぐなど、「大学冬の時代」の到来が目前に迫っていました。

こうした厳しい状況の中で、最初に取り組んだのは、創立以来連綿と培ってきた地域との交流・連携を一層明確な「かたち」として位置づけることでした。地域社会と様々な個別的なパイプでつながっていた関係の一元化を構想し、「地域連携推進センター」を立ち上げました。その活動の主な柱としてセンター内に「まちづくり」、「福祉」、「地域スポーツ」、「情報」、「自然環境」という5つのセクターを設け、それぞれ専門の先生方のみならず学生諸君にも産官学連携の一役を担ってもらうことを期したのです。

また、2006(平成18)年には経営学部ビジネス戦略学科を改組し、経営学部スポーツ経営学科を開設することができました。同学科は、端的には、スポーツとマネジメントとの融合を目指して企図されたものです。

2000年代に入って、日本のスポーツ界は大きな転機を迎えていました。例えば、オリンピックはもとより、FIFA ワールドカップの日韓共同開催、米メジャーリーグでのイチロー選手らの活躍などが連日のようにTV放映され、「見るスポーツ」が一層盛んになっただけでなく、折からの健康ブームとも相まって市民マラソンなどの「するスポーツ」も定着していきました。こうしたスポーツの隆盛は、スポーツ組織・団体の戦略やマネジメントを大学で教育・実践する、つまりスポーツ経営学科開設の重要な背景になったのではないかと考えています。

同じような範疇の学部学科は、当時全国でわずか1例しか存在していませんでした。そのため、同学科の開設は本学の競争力強化に資するのではないかと考えました。

幸いなことに、当時、すでに全天候型陸上競技場や全

面人工芝サッカーグラウンドなどの諸施設が完成ないし施工中でした。こうした施設の整備に加え、陸上競技部、硬式野球部、ボート部を「強化クラブ」に指定するなど、スポーツの振興・強化に向けた動きを展開していました。

これらの学内外の諸条件を考慮しつつ、学科再編作業に取り掛かりました。体育担当の先生方や事務職の方々の助言・サポートを得つつ、1年余に及ぶ準備作業を滞りなく進めることができました。この過程で、特に重要な点は、新学科にあっては中学・高校の保健体育の教員免許状の取得が可能になったことでしょうか。この場をお借りして、改めて関係された方々に厚く御礼申し上げます。お陰をもちまして、予想を大幅に超える学生を迎えることができました。

以上、甚だ簡単ながら、本学の歴史の一齣を紹介させて頂きました。

この度創立50周年を迎えるにあたり、岐阜経済大学は「建学の精神」を「再定義」され、「創造発見」、「知才涵養」、「資質発揚」、「地域貢献」を導出されておられます。これからの時代に相応しい有為な人材を育成・輩出され、地域との連携を具体化・深化され、新たな歴史を刻んでいけることを切に願いつつ、祝意にかえさせていただきます。



スポーツ経営学科開設記念講演会(2005年12月)

経済大にスポーツがやってきた!?

— 冬の時代の小さな春 —

高橋 正紀 (岐阜経済大学 経営学部教授)

本学では1997~2006(平成9~18)年度に、いわゆる“スポーツを活かしての学生募集”を本格化させるための様々なベース(スポーツ推薦入試、強化指定クラブ制度、スポーツ経営学科)が偶然の作用にも影響されながら築き上げられ、その稼働にまで至りました。その“スポーツを活かしての学生募集”の働きが2005(平成17)年度にどん底となる282名(定員430名)にまで落ち込んだ入学者数を、2006(平成18)年度に一気に449名(定員380名)にまで押し戻し、さらに、大学冬の時代と言われる難局を今日まで乗り越えて乗り越え続けるための想定外の力となりました。本稿ではこのプロセスを今後のためにも私の記憶の範囲内で、いくつかの段階に分けてまとめてみたいと思います。

いつもながらの外発的? 偶発的! なきっかけ

本学の“スポーツを活かしての学生募集”は、1998(平成10)年度に着任された田口理事長が日本ボート連盟の要職に就いていることや、2005(平成17)年には長良川の国際レガッタコースで世界ボート選手権が開催されることなどが、直接・間接のきっかけとなり、本学のシンボルとなるスポーツの創出という意味も含め、日本の大学トップレベルで闘えるボート部を育てるという方針の下で始まりました。そのためのボート同好会が2000(平成12)年の12月に設立され、2001(平成13)年度よりAO入試によるボート同好会へのスポーツ入学生(数名)の受け入れが始まりました。

外部環境の変化と新たな模索

18歳人口の本格的な減少に伴う受験生マーケットの縮小によって、本学への入学者数が急激に減少(1997年度入学者959名/定員750名⇒2000年度入学者529名/定員700名)していく状況の中で、新たな学生募集の道筋としてスポーツ推薦入試が2002(平成14)年度からスタートしました。スポーツ推薦入試の新設は、ボート部強化のための入学生獲得に生かされただけでなく、それまでの入試制度において指導者ルートで入学生を獲得していた硬式野球部と陸上競技部におけるスポーツ入学生の獲得にも着実な効果をもたらしました。この入試制度のスタートとセットで、入学後の競技力向上支援のための強化指定クラブ制度(ボート部、硬式野球部、陸上競技部)や2003(平成15)年度全天候型陸上トラック、2004(平成16)年度野球場屋内練習場・人工芝サッカー場の整備が進められていき

ます。(2004年度に学生確保のポテンシャルの高さを持つサッカー部が準強化指定に加わりました)

こうして、“スポーツを活かした学生募集”のための最低限のベースとなる学内環境が整えられた結果、強化指定クラブへのスポーツ入学生は2004年度には入学者数383名(定員430名)のうちの70名を占めるまでに至りました。

学生のために…

このようにスポーツ入学生が増加し続ける中で、学内の事務レベルからスポーツ関連学科設置の提案が起きます。この提案は、冬の時代における学生確保の切り札という認識からではなく、スポーツ入学生に対して競技力の向上だけでなくスポーツの学びを保証することが大学としての責任ではないか、という誠実な想いから生まれたものでした。この案は、その後、関連領域の教員を含めた具体的な検討を経ることで、2006(平成18)年度のスポーツ経営学科の開設に至るわけですが、学内にはスポーツ関連学科の設置に対して「藁をもつかむ思い…」という発言が出ていたのも事実です。

小さな春と今後

こうして初めての入学生を迎えることになったスポーツ経営学科は、それまでのスポーツ推薦入学生数を念頭に置いていたためその定員を70名としましたが、結果的に想定をはるかに上回る258名もの入学者を獲得し、既述の通りどん底を抜けることには成功したのです。

1997~2006(平成9~18)年度の時期にベースが築かれた“スポーツを活かした学生募集”は、入学生の確実な確保という働きのみならず、様々な側面で地域社会における岐阜経済大学のイメージを変えてきています。今後は、これまでの本学における“スポーツを活かした学生募集”に対する誠実な評価に基づいた明確な戦略上の位置づけを定めることが、これからの10年を着実なものにしていくための最低限の基礎になるのではないかと思います。



ボート部 初代メンバー

「大学生活では勉強と部活動とアルバイトのうち、2つしか全力でできないよ。」

私が大学進学を控えた高校3年生のとき、2つ上の兄が言った言葉でした。それを聞いた私は、部活動とアルバイトに力を注ごうと心に決めて、大学へ入学しました。

部活動は高校まで打ち込んだ野球を続けるため硬式野球部に入り、毎日の練習に明け暮れました。高校まではあまり意識をしなかった身体の仕組みや使い方を意識した練習を取り入れたり、一人暮らしをしていたので、栄養管理にも気を配るようにしました。

硬式野球部の先輩からは技術や知識を教わるだけではなく、大学の講義をしっかり受けるようアドバイスを頂きました。学んでおくべき講義、出席を重視する講義、あるいは単位取得が困難な講義などを聞き、講義選択の参考にしました。部活動とアルバイト中心の生活でしたが、本分である学業も可能な限り努力しました。その甲斐もあり、2回生から3年間、大学の奨学金を受けることができました。私は教職課程を履修していたため、冬場、遅くまで講義を受けた後には、真っ暗な中を一人で走り込むという地味で辛い経験をしたことも今では良い思い出です。

アルバイトでは主に接客業を経験しました。挨拶や言葉遣いはそれなりにできていたつもりでしたが、更に細やかな気遣いや身だしなみなど細部にわたり接遇の基礎を学び、今の仕事に活かしています。

また、多くの友人にも恵まれました。大学にはいろいろな地方から人が集まっているため、各地に友人ができました。今でも付き合いがあり、結婚式に出席したり、近くに出かけたときは立ち寄って当時の思い出話を楽しんでいます。

振り返ってみると、入学当時は2つのことに力を注ごうと思っていた自分が、最終的には3つ、あるいはそれ以上のことに対して全力で取り組み、毎日を忙しく過ごしていたように思います。

社会人になり十数年が経った今、大学生活ほど自分磨きに時間を費やせる時期はないと痛感しています。そんな大学生活で何に時間を使い、何をやるかは本人次第だと思います。

在学生の皆さんが限られた時間を大切にして、充実した日々を過ごされるよう願っています。

私の大学生活はボート部でのクラブ活動一色でした。元々、進路をどうするか悩んでいる時期に声をかけて頂き、入学を決めました。当時は創部2年目で10人程の小さな部でした。練習場所が決まっておらず、コーチもやめてしまい、不安ばかりのスタートでした。

2年になる頃、正式にコーチが決まり、後輩も増え、マネージャーも出来ました。

合宿所も用意して頂いたのですが、環境が劣悪(汲み取り式トイレ等…)でいろんな意味で心身を鍛えられました。大学でのクラブ活動を経験し、高校までどれ程恵まれた環境で活動出来ていたかを実感しました。大学では、自分達で考え動くということの難しさと苦労を感じながらも、それまで以上に広い視野でボート競技を考えることが出来る様になったと思います。

3年の秋からは主将となりましたが、当時は大会や合宿の計画、準備、下級生への指導で、自然と競技から距離を置いてしまっていたと思います。仕事をするようになり実感しますが、全て自分で抱え込んでしまうというのは一番いけないことです。役割分担し、まわりをうまく動かすことが先輩、上司にとって必要なスキルだと思います。当時は、自分で抱え込むことで周りの成長を妨げてしまったと反省しています。

4年のインカレではチームとして2つものメダルを獲得でき、入部当初には考えられないくらい組織として成長しました。クラブを運営する難しさ、上に立つ難しさを痛感しましたが、それ以上に、指導頂いた監督・コーチ、支えてくれた先生方、支援いただいた協力者の皆さん、そして両親へ言葉では表せない程の感謝でいっぱいだったと思います。

学生時代はクラブ活動が嫌で早く解放されたいと毎日思っていました。社会人になって、学生時代はまだまだ甘かったなと痛感しています。また、学生時代に自分の将来をしっかりと考えていなかったことが悔やまれます。私は流れにまかせて就職し、その仕事を続けていますが、卒業してからの長い人生をどうしたいか、よく考えておくべきだったと後悔しています。

ただ、岐阜経済大学に入学し、クラブ活動を通して成長させて頂き、大学で出会った女性と結婚し、2人の子供に囲まれ過ごす今の人生は最高に幸せです。

大学生活を振り返って



2000年度卒/第31期生
宮地 勲

ボート部の思い出



2005年度卒/第36期生
三谷 浩一

「連携」と「協働」
4年間で学んだ



2008年度卒/第39期生
堀 あゆ美

岐阜経済大学を卒業して8年経ちますが、今でもふと大学生活を思い出すときがあります。私は、中学2年時の職場体験がきっかけで福祉に関心を持ち、社会福祉について学ぶことができるこの大学に進みました。

特に思い出に残っていることは、次の3つです。

1つ目は、マイスター倶楽部での活動です。まちづくりを農業や防犯、教育など様々な面から検討、実践するまちなか共同研究室は、地域に開かれた大学を掲げる岐阜経済大学らしい学びの場であると思いました。

郷土学習の一環で小学生とまち歩きをしたり、自治体からの依頼に基づき住民調査を行ったりと、学生の立場で実践を経験できたことが大きな財産であったと感じています。

2つ目は、ボランティアサークル「HIGE ☆BU」を立ち上げたことです。友人や先生方と自分たちにできることは何かを考え、大学周辺の保育園や福祉施設への訪問から徐々に活動を広げていきました。卒業後にボランティア・ラーニングセンターが誕生し、現在も福祉施設のお祭りへの企画参加や震災の被災地での復興支援など在学生の活動をホームページや広報誌で見ることができ、大変嬉しく思います。

3つ目は、社会福祉士の資格を取得し、その資格を活かせる場所で働きたいという夢が叶ったことです。私は、入学時より社会福祉士の資格取得を目標にしていました。専門用語が多い講義、慣れない現場実習と大変なことも多かったですが、友人とともに先生や職員の方から「頑張れ」と励ましをいただきながら、一つひとつ積み上げていくことができ、無事国家試験に合格することができました。

現在は、社会福祉協議会で地域福祉推進に携わっています。めまぐるしく変化する社会の中で、今何が必要か、そのために何をすべきなのか、4年間で学んだ「連携・協働」を大切にしながら仕事に臨んでいます。これからも岐阜経済大学が地域に根ざし、学生の関心に寄り添う大学であることを願っています。

2007-2016

創立40周年記念式典

2007(平成19)年6月1日(金)本学講堂において、創立40周年記念式典が開催されました。大学40年の歩みがビデオで紹介され、堀富士夫副理事長による「むすんでひらいた～地域を力に未来を究める」と題した創立40周年の決意表明などが行なわれました。その後の「地域と大学の未来」をテーマとした記念シンポジウムでは、黒川博学長がコーディネーターを務め、小川敏大垣市長、岩田義文イビデン代表取締役会長、土屋嶋大垣共立銀行代表取締役頭取、田口義隆セイノーホールディングス代表取締役社長(ビデオ参加)にパネリストをお願いし、活発な意見交換がなされました。

また、40周年のソフトウェア事業として特別講演会が4回開催されました。講師として、それぞれ立川敬二氏(宇宙航空研究開発機構理事長)、松平定知氏(NHKキャスター)〈校友会協賛事業〉、鎌田實氏(諏訪中央病院名誉院長)、桑田真澄氏(元読売巨人軍投手)をお迎えしました。他にもボート部合宿所完成記念式典、50歳の大学院体験、ボートレガッタ大会など様々な事業を開催しました。ハード事業としては、7号館講堂再整備、3号館「Student Plaza」の整備、ボート部合宿所建設、(財)日本陸上競技連盟第4種公認陸上競技場の整備など、施設の整備も進みました。なお、これらの40周年記念事業をまとめた「40th Anniversary Booklet」を刊行しました。

介護福祉士養成のための専攻を新設

2007(平成19)年4月にコミュニティ福祉政策学科にコミュニティ福祉専攻(入学定員40名)と介護福祉専攻(入学定員30名)を設置、2008(平成20)年には「コミュニティ福祉政策学科」を、地域福祉の現場に臨んで、実践的に福祉を学ぶという意味を込めた「臨床福祉コミュニティ学科」に、「経営情報学科」をメディア表現教育の重要性を再認識し「情報メディア学科」に学科名称を変更しました。

2012(平成24)年4月臨床福祉コミュニティ学科を

改組し、新たな地域づくりの担い手の育成を基本的な教育目標とする公共政策学科を開設しました。公務員の育成をめざす「公共マネジメントコース」と社会福祉士の育成をめざす「社会福祉コース」が設けられ現在に至っています。

自主的学習と地域産業との インターンシップ

今こそアクティブ・ラーニングという言葉が大学教育にとって当然のことのように取り上げられていますが、本学では「実習・体験型授業」という名称で大学創立当初から実践されています。その中でもゼミ教育は最も重視され、その総仕上げとも言えるのが、全学あげて年に一度開かれ、2016(平成28)年度で第43回となるゼミナール大会です。どのゼミも、4月からの成果を発表し最優秀賞を目指して頑張ります。このように歴史があり、多面的で内容が充実したゼミナール大会が開かれてきたことは非常に教育的意義のあることだと言えるでしょう。

また、「地域に有為の人材を養成する」という本学の教育目的を果たすべく、地域の産業とのインターンシップにも力を入れています。特に2009(平成21)年に企業人育成コースができてからは、地域の協力企業数も増え、カリキュラムも充実してきました。主なカリキュラムの特徴としては、協力企業の派遣講師による「地域企業講座」の開設、協力企業を対象とした調査研究、発表会の実施、協力企業でのインターンシップの実施に力を入れていることです。また、演習は1年次より一環指導体制を採用し、協力企業の研究に必要な語学力を身につけるべく海外語学研修、異文化体験旅行等を行なっています。他学部も、内容はそれぞれ異なりますが、インターンシップや語学研修等、様々なカリキュラムが用意されています。

情報分野の活動では、ソフトピア共同研究の学生が、情報処理学会で毎年研究成果を発表してきました。当学会はコンピューターとコミュニケーションを中心とした情報処理に関する学術、技術の進歩発展と普及啓蒙を図り、会員相互間および関連学協会との連絡研修の場となり、学術、文化ならびに産業の発展に寄与することを目的と

する情報処理における最大の学会です。その中で本学の存在を確かなものにしていきます。

その他、授業以外で興味ある研究に打ち込みたいという学生の自発的な企画を啓発する助成制度としてユニークプラン（研究調査助成制度）があります。個人・団体を問わず応募することができ、価値ある研究や調査が毎年採択されます。調査の中で、調査対象への協力依頼、目的説明、調査方法・内容決定、調査、報告などの義務があり、研究以外に多くのことをする必要が出てきます。この中で学生は新たな体験を通して、多くのことを学びます。また、その研究調査内容も優秀な結果となって学内外で評価されてきました。

地域実践型アクティブ・ラーニングと地域貢献

地域実践型アクティブ・ラーニングとは、教室での理論的な学びと体験的な学びが循環するものです。そのために、1年生から授業が組み立てられ、それが実践に結び付くように細部まで計画されています。ここではまちなか共同研究室「マイスター倶楽部」、ボランティア・ラーニングセンター、スポーツ活動について紹介します。

まちなか共同研究室「マイスター倶楽部」では、地域に根ざした課題解決型のまちづくり実践を通じた教育と結び付いた活動と研究を常に進めています。まず、地域と特性の課題原因を仮定し、予備学習、現地調査の後、講義内での学生同士のプレゼンテーション、現地での学生プレゼンテーションと、学生・住民・行政の合同意見交換ワークショップ、政策提案というステップで進められます。一例を挙げると、マイスター倶楽部地域お助け隊が、岐阜県郡上市明宝坂本で「國田家の芝桜を守る会」の方々とともに活動し、「交流と移住の基本的条件に関する調査～人と人とのつながりを紡ぐ絆再生を目指して～」と題した研究をしました。このプロジェクトは、ネットワーク大学コンソーシアム岐阜主催による2012（平成24）年度「学生による地域課題解決事業」成果報告会でグランプリを受賞しました。また、今年で17年目を迎える「土まるけネットワーク（TMN）」は、揖斐川町と大垣市

の農業を通じて繋がり、大垣中心市街地を活性化しようと野菜販売や農業体験ツアー等も行なっています。さらに、大垣駅前商店街で毎月行なわれる元気はつらつ市への参加、外国にルーツを持つ児童生徒をサポートする活動など、幅広い学びと活動が定期的に続けられています。

ボランティア・ラーニングセンターは2011（平成23）年の6月に開設され、それまでの活動が統合され、より機動力があるものになりました。ここには、体験から得た力が新たなアカデミックな学びに繋がり、社会問題に対する関心、理解、新たなプログラムの企画や実践につながっていくというダイナミクスがあります。たとえば、避難所体験から、「災害時のコミュニティのあり方」「日常からの人と人との関係の大切さ」「今できる東日本大震災への支援」「行政の防災計画やハザードマップの実情」などへと拡がり、公共政策の学びにフィードバックするというような動きです。開設以来、必要とされる支援に応える姿勢は、地域活動はもちろんのこと、国内国外を問いません。熊本への動きもすぐにスタートしました。これらの体験を通して学生は新たな体験と学びをしています。

その他、スポーツでも地域貢献を図ることを目指して活動しています。一例を挙げると、2007（平成19）年からスタートした体育授業サポーター制度では、小中学校の体育の授業をサポートしています。これは中高の保健体育科教員免許取得を目指す教職課程履修者のために始められた制度で、毎週特定曜日に定期的に活動します。それ以外にも、課外体育サポーター制度もあり、これらは参加する学生のために非常に有効な制度です。また、記憶に新しいぎふ清流国体・大会では、国体に競技補助員として延べ約300名が、大会には約200名が参加しました。その他にも、揖斐川マラソンへの協力、FC岐阜など、様々なボランティア活動をしてきました。

このように、学生たちは自らの学びを地域貢献につなげています。

高い地域貢献度

地域貢献は学生だけではなく、教職員も行なっています。大学が地域自治体と連携して行なうべきものは直接

的にも間接的にも地域住民の生活に関係しているのです。まず、大学には自治体の委員会等の中心となって、よりよい地方自治のあり方に導き、協力する役割があります。次に、大垣市と共同で行なってきた、2009（平成21）年度までは「コミュニティーカレッジ」、2010（平成22）年度からは「かがやきカレッジ」と呼ぶ一般市民講座の定期的開催があります。また、大学独自で行なってきた数多くの公開講座や研究会があり、これらの講座・研究会は様々な学びを地域住民に提供してきました。

このように、学生と職員が共に行なってきた活動から、『日経グローバル』全国大学の地域貢献度ランキングでは、2014（平成26）年に、東海地区の私立大学ではトップになりました。

グローバル化

岐阜経済大学で留学生を受け入れ始めて、すでに20年余りになります。初めは学部生だけでしたが、現在では留学生別科（学部入学までの予備教育）、学部生、大学院生、交換留学生、聴講生という5種類の受け入れをしています。また、海外の学生交換留学協定を結んでいる大学は5大学で、中国の上海財経大学、江西師範大学、南昌航空大学、江西財経大学、アメリカのハワイ大学です。交換留学生や一般の留学生は、今では必ずしも日本経済・経営の勉強が主流という訳ではなく、日本のアニメや文化に憧れて留学をしてくることも多くなりました。また、初めは中国からの留学生がすべてという状況でしたが、今では、中国に加えてベトナム、アメリカ、ネパールの学生もいます。今後はこのように非漢字圏の学生も増え、さらなる変化がみられそうです。大学の中に留学生がいて、同年代の異なった文化や考え方、言語に触れることは、日本に居ながらにして世界を知ることになります。

また、海外語学留学の機会が多く用意されています。アメリカや中国は1年間の留学と短期留学のシステムがあり、ドイツ、フランス、ロシアには短期留学のシステム、異文化体験旅行があります。ここ数年では、フィンランド、ドイツ、カンボジア、アメリカへの異文化体験旅行が実施

されました。これらの体験を若い時にすることは、日本においては決して知ることができない、ある意味で人生観を変えるほどの意義を持つものです。最近、留学に興味を持つ学生が増えてきていることは、グローバル化がさらに進む状況で好ましいことです。これらはすべて大学の助成を受けてできるようになっています。

高い就職率

大学には、充実した学生生活に加えて、卒業後の社会生活に至る確実な道を用意するということが要求されます。その意味で、面倒見がいい大学であることは重要なことだとの見解から、就職支援に力を注いできました。その甲斐があつて、年々就職率を上げ、本学は就職率の高さでは常に全国平均を上回り、2014（平成26）年度で96.4%となりました。週刊エコノミスト『強い大学 有力100社に強い大学はここだ』では、大学就職者数ランキング西濃運輸就職者数全国1位、読売新聞社『就職に強い大学2015・557大学実就職率ランキング』では、学部別ランキング経営学部で全国20位となりました。その後も、この勢いは変わっていません。本学の就職支援は1年生からキャリア形成の授業が設けられ、就職に対する姿勢や考え方が指導されます。それに加えて、常に幅広い業界の採用担当者の方を招き、説明会や学生就職セミナーの実施、就職活動に不可欠な自己分析、エントリーシート作成、面接指導、チューター（4年生の内定就職者）の在学生に対するサポート、一泊二日の面接集中指導、就職特別講座（今枝塾）など多くの機会を提供しています。さらに、キャリア支援課は来訪する学生に希望する就職先の紹介、書類作成の支援など学生の希望を聞いて常時支援をするだけでなく、就職活動に踏み出せない学生にキャリア支援課から声をかける等というきめ細かな指導とサポートをしています。これらが就職率の高さに繋がり、学生の満足度にも繋がっています。

スポーツと学業

スポーツの知識を身につけ、それを実際の競技に生かしている学生の活躍には目を見張るものがあります。創部3ヵ月で秩父宮賜杯全日本大学駅伝対校選手権大会に出場以来メディアでも取り上げられる駅伝部、2007(平成19)年の全日本インカレに優勝して世界選手権に出場してからも、全国的に上位成績を修めているボート部をはじめ、陸上競技での全国・東海での数々の輝かしい成績、天皇杯全国サッカー選手権大会岐阜県代表を争うサッカー部はじめ、全日本学生スキー選手権大会で活躍するスキー部、硬式野球部の県リーグでの活躍、準硬式野球の全国大会出場、2010(平成22)年に発足した女子ソフトボール部の活躍などなど、取り上げるものが多く、ここで詳しい紹介ができません。

これらの成績はそれぞれのスポーツ部の監督や指導者の下で、連日の練習を積み、自己鍛錬している選手一人ひとりの努力の賜物です。それを支えるべく、大学は設備の整備にできる限りの力を注いでおり、新設したりリニューアルしたりしています。50周年のキャンパス整備では、第2体育館の建設が予定されており、よりよい環境となります。

しかし、スポーツをしている学生はスポーツに専念していればよいわけではない、どの部活や同好会も学業との両立をさせるべきであるというのが大学の方針です。そのため、すべての指導者は学生の授業に対する姿勢と成績には目を配り、学業を第一に考えるようにとの厳しい指示を出しています。学生の意識も高く、朝練の後でも1時間目から授業に積極的参加をしています。確実に身につけた知識と部活で鍛錬した経験が、社会人になったときに生きてくることとなります。

学生の企画力と実行力

クラブ活動はスポーツだけではなくありません。多くの文化系の部活も活躍しています。普段はスポーツほど目立つ動きを見せませんが、大学祭ではその本領を存分に発揮します。企画は実行委員の今年のテーマの決定から始まり、

具体的な全体企画決定、ステージ企画、野外無料コンサートに外から招くプロのバンドとの交渉、イベントの内容の細かな決定、模擬店の設定など、スタートから当日の運営と後片付けまで休まず責任を持って対応する必要があります。毎年、ユニークなテーマで実施される大きな秋のイベントは、大学にとって重要な行事であり、学生の企画力と実行力が試されることとなります。まさに、実行委員の経験はアクティブラーニングそのものと言えるでしょう。

教育施設の充実

2013(平成25)年、2014(平成26)年、2015(平成27)年と私立大学等教育研究活性化設備整備事業での採択が続き、次のように施設・設備が変わりました。

まず、図書館がラーニングcommonsになりました。図書館の1階は自校教育のスペースとして、本学の歴史年表を設置し、本学と関わりの深い大垣市や周辺自治体、理事企業の資料を展示して本学の歴史を学ぶフロアになりました。2階は、アクティブ・ラーニングのスペースとして、グループワークのためのスペースを確保して可動式の机、椅子、ホワイトボード、プロジェクター、タブレット端末を整備し、学生の主体的活動のフロアになりました。3階は懇談と学びのスペースに変わり、ビデオ室3部屋にはプロジェクター等を設置し、ゼミ室として整備されました。

9号館9302教室はアクティブ・ラーニングの教室に整備されました。6人で利用する7つのテーブルが設置され、テーブル毎に入力用PC1台、動作確認用タブレット端末2台、グループ討論用インタラクティブプロジェクター並びにスクリーン一式がそれぞれ配置されました。また、Abookというオーサリング型コンテンツ作成ソフトを利用し、そのフォーマットに掲載する地域紹介コンテンツを学生が調査・研究し発表できるようになりました。この環境はビジネスプレゼンテーションでの利用、各種の演習や実習に活用され、学生主体的に調査し、より有効な発表をするというアクティブな学習スタイルを可能にしました。

2015年には、リアルタイムモーション計測システム機器が整備されました。スポーツ動作分析において、動作を撮影するために必要なランニングマシン、リアルタイム

モーション計測システムを中心とする動作分析用の赤外線カメラ、被験者のランニング中の歩幅、ピッチ、接地時間等を測定する高感度光学センサーの3機種です。これらにより、学生がスポーツ科学の実践を経験し、科学的な視点を取り入れられるようになり、実験、データ入力、三次元的に解析することで、科学的な態度の形成ができるようになりました。このように、教育現場は大きく変わりつつあります。

先輩とのつながりは豊かな財産

岐阜で初めて経済学部のある大学を作った本学には、政財界、教育界、行政など多様な分野に多くの先輩を送り出してきました。そのおかげで、先輩との密接な懇談の機会を作ることができ、仕事とはどういうものか、仕事から得る達成感や苦勞、どう人生を生きていくのかなど具体的に聞ける機会があります。これは常に素晴らしいロールモデルを見ることにつながります。このような機会を定期的に作り、またその機会を積極的に利用するシステムがあることは、本学にとっての大きな強みです。

また、経営者となっている先輩の割合の多さも東海地方で高く、学生の起業に対する意識を高めています。一例を挙げると、自分の好きなことを仕事にした宮川涼氏は、野球クラブ工房BIG Wednesdayの代表でクラブクラブトマンです。完全オーダーメイドのオリジナル野球クラブRAG de Lionの製造や、大手メーカークラブの設計・デザイン・作成・販売等を手がけていらっしゃいます。しかも販売後もクラブの修理・型付け加工・手入れの指導もするというきめ細かなメンテナンスが人気の秘密になっています。

この姿勢から、本当の仕事というものの意義を、学生に教えてくださいました。これらの機会が非常に身近にしかも、頻りに体験できることは豊かな財産であり、学生の未来を大きく変えています。



創立 40 周年記念シンポジウム (2007年6月1日)



図書館のアクティブ・ラーニングスペース (2015年3月)

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2007 平成19	4月 経済学部経済学科の入学定員を100名に変更	4月 小学6年生と中学3年生を対象に、43年ぶりとなる全国学力調査実施
	4月 経済学部コミュニティ福祉政策学科にコミュニティ福祉専攻（入学定員40名）と介護福祉専攻（入学定員30名）を設置	6月 教育改革3法成立。教員免許更新制度を導入
	4月 経営学部経営情報学科の入学定員を60名に変更	7月 新潟県中越沖地震（M6.8）
	4月 経営学部スポーツ経営学科の入学定員を150名に変更	8月 岐阜県多治見市及び埼玉県熊谷市において、日本観測史上最高となる気温40.9℃を観測
	4月 教職課程支援室開設	9月 福田康夫が第91代首相に就任
	4月 「大学院FD（ファカルティ・ディベロップメント）推進委員会規程」施行	10月 気象庁が緊急地震速報を開始
	6月 岐阜経済大学創立40周年記念式典 記念シンポジウム開催「地域と大学の未来」（大垣市長 小川敏氏、イビデン株式会社代表取締役会長 岩田義文氏、株式会社大垣共立銀行代表取締役頭取 土屋嶋氏、セイノーホールディングス株式会社代表取締役社長 田口義隆氏、岐阜経済大学学長 黒川博）	10月 郵政民営化スタート
	7月 岐阜経済大学創立40周年記念公開講演会開催「情報メディア社会の未来—ユビキタス時代の移動通信—地域と大学の未来」（独立行政法人宇宙航空研究開発機構「JAXA」理事長・元NTTドコモ社長 立川敬二氏）	11月 ミシュランが、欧米以外で初となるミシュランガイド東京を発表
	7月 9号館（情報棟）スタジオ実習室完成	2月 文部科学省、授業時間を1割増加し、小学5年生から英語を必修とするなど、「ゆとり教育」からの脱却を柱とした新学習指導要領を発表
	8月 ボート部の仲矢俊之・久司和矢・富田龍平が全日本インカレにおいて男子舵手付きペアで優勝	
	8月 3号館改修・内覧会開催	
	9月 7号館（講堂）改修	
9月 ボート部艇庫（川辺町、岐阜大学より所有権移転）取得		
9月 岐阜経済大学創立40周年記念事業 第1回西濃地域ボランティア学習大会開催		
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催（大垣共立銀行中国共立会との合同セミナー）「21世紀をまい進する上海」		
11月 障がい学生支援室開設		
11月 校友会主催公開講演会開催「私の取材ノートから」（NHKエグゼクティブ・アナウンサー 松平定知氏）		
11月 岐阜経済大学創立40周年記念事業「まちづくりシンポジウム in 大垣」開催 テーマ「かがやくまちを市民の手で！—水の都・大垣—」（大垣市長 小川敏氏、沖縄大学副学長法経学部教授 山門健一氏、酪農学園大学酪農学部教授 工藤英一氏、株式会社共立総合研究所 国枝利久子氏、岐阜経済大学地域連携推進センター長・岐阜経済大学経済学部教授 鈴木誠）		
12月 岐阜経済大学創立40周年記念公開講演会開催「命を支えるということ」（諏訪中央病院名誉院長 鎌田實氏）		



40周年記念ブックレット

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2008 平成20	12月 岐阜経済大学創立40周年記念公開講演会開催「試練が人を磨く」（元巨人軍、元メジャーリーガー桑田真澄氏 インタビュアー 本学客員教授・野球部顧問 後藤寿彦）	
	12月 ボート部の仲矢俊之・久司和矢・富田龍平が岐阜県民栄誉賞を受賞	
	2月 岐阜経済大学創立40周年記念事業「まちづくりシンポジウム in 高山」開催 テーマ「市民とともに世界に発信！ユニバーサルデザインの都市・高山」（高山市長 土野守氏、関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏、共立総合研究所取締役調査部長 古田千尋氏、岐阜経済大学地域連携推進センター長・岐阜経済大学経済学部教授 鈴木誠）	
	3月 陸上競技場第4種公認取得（日本陸上競技連盟）	
	3月 第4種公認競技場オープニングセレモニー開催・陸上記録会	
	* 体育授業インターンシップ制度開始	
	* 卒業要件としてP検、漢字検定、現代経済検定のうち2検定合格を追加	
	* 2008年度入試から経済学科特待生推薦入試開始（2010年度まで）	
	4月 江西師範大学と教育学術協定を締結	4月 大学設置基準法等の改正によるFD義務化
	4月 経済学部臨床福祉コミュニティ学科を開設（経済学部コミュニティ福祉政策学科を改称）	6月 秋葉原で無差別殺傷事件
	4月 経営学部情報メディア学科を開設（経営学部経営情報学科を改称）	9月 アメリカ証券会社大手リーマン・ブラザーズの経営破綻
	4月 サッカー協会公認指導者（C級）認定支援開始	9月 アメリカで金融安定化法案が否決。これをきっかけに金融危機が世界的に拡大
4月 ボート部合宿所用地購入	9月 麻生太郎が第92代首相に就任	
5月 野球部ナイター照明整備・グラウンド全面補修	10月 小林誠（高エネルギー加速器研究機構名誉教授）、益川敏英（京都大学名誉教授）、南部陽一郎（シカゴ大学名誉教授）3名のノーベル物理学賞受賞が決定	
5月 株式会社岐阜フットボールクラブと連携協定を締結	10月 海洋生物学者で理学博士の下村脩（ボストン大学名誉教授）、ノーベル化学賞の受賞が決定	
6月 8号館に経済学部研究室改修・移転	12月 学士課程教育の構築に向けて（答申）（中央教育審議会）	
7月 郡上市と連携協定を締結		
8月 高大連携講座「学び塾」開講		
9月 臨床福祉コミュニティ学科開設記念・客員教授就任記念講演会開催「いのちを支えるということ—『がんばらない』けど『あきらめない』『なぜださない』—」（本学客員教授 鎌田實）		
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「現代経済学を学び、新しい生き方を考えよう」（京都大学名誉教授 池上惇氏）		
11月 ボート部合宿所（海津市）竣工・記念式典		
11月 地域経済研究所公開講演会開催「住民一人ひとりが輝く「地域づくり」の経済学」（京都大学教授 岡田知弘氏）		



第4種公認競技場オープニングセレモニー 陸上記録会



創立40周年記念シンポジウム（2007年6月）



7号館講堂内がリニューアル（2007年9月）



7号館に日本ポスター美術館移設（2008年）



創立40周年記念式典における決意表明（2007年6月）



ボート部が全日本大学選手権優勝（2007年8月）



郡上市と地域連携協定を締結（2008年7月）



留学生弁論大会表彰式（2008年）



西濃地区の県立5校と高大連携協定を締結（2009年3月）



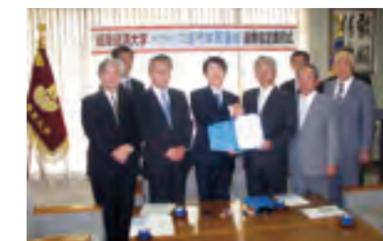
岐阜県商工会連合会と連携協定を締結（2011年3月）



海津市と地域連携協定を締結（2009年2月）



第83回全日本学生スキー選手権大会総合優勝（2010年）



大垣市体育連盟と連携協定を締結（2010年5月）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2008 平成20	1月 黒川博学長が退任	
	1月 社団法人大垣市社会福祉協議会と連携協力に関する協定を締結	
	2月 学長に谷江幸雄経済学部教授が就任	
	2月 海津市と連携協定を締結	
	3月 岐阜大学地域科学部と地域貢献事業「街なかオープンカレッジ」開催	
	3月 大垣桜、損斐、大垣商業、大垣養老、海津明誠の5県立高校と教育連携に関する協定を締結	
	* 課外体育インターンシップ制度発足	
	* 学内無線 LAN 設置	
	* 2009 年度入試から、特別修学支援奨学生推薦入試（学費減免制度）開始	
	* 2009 年度入試から、企業人育成コース入試（成績上位者奨学金制度）開始	
2009 平成21	4月 経済学部臨床福祉コミュニティ学科の入学定員を 40 名に変更（コミュニティ福祉専攻、介護福祉専攻廃止）	5月 裁判員制度がスタート
	4月 経済学科に企業人育成課程開設	9月 消費者庁が発足
	4月 経済学科に留学生プログラム開設	9月 鳩山由紀夫が第 93 代首相に就任
	4月 財団法人岐阜県イベント・スポーツ振興事業団と協定を締結	12月 宇宙飛行士・野口聡一さんが宇宙長期滞在へ
	6月 文部科学省「大学教育・学生支援推進事業（テーマ B：学生支援推進プログラム）『就活サークルと学生・OB メンター育成によるキャリア教育の充実』」に採択される ※事業実施期間平成 21 年 8 月 31 日～平成 24 年 3 月 31 日（3 年間）	1月 日本年金機構が発足
	7月 公開講演会開催「コミュニティ・サービス・ラーニング」（昭和女子大学教授 興梠寛氏）	3月 モスクワの地下鉄で爆破テロ発生
	7月 岐阜県世界淡水魚水族館と連携に関する協定を締結	
	9月 諏訪中央病院見学会実施（名誉院長・本学客員教授 鎌田實）	
	10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「スポーツと地域振興」（サッカー解説者、日本サッカー協会理事、筑波大学サッカー部監督 風間八宏氏）	
	1月 岐阜経済大学公開講演会開催「自治と協働のむらづくり ～阿智村が全国に伝えたい“地域主権”論～」（長野県阿智村村長 岡庭一雄氏）	
* スポーツ振興室開設		
2010 平成22	4月 大垣商工会議所と連携協定を締結	5月 宮崎県で家畜の伝染病・口蹄疫が拡大
	5月 財団法人大垣市体育連盟と連携協定を締結	6月 菅直人が第 94 代首相に就任
	6月 副理事長に浅野照章が就任（第 6 代）	6月 小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2011 平成23	6月 大垣市と共催で「かがやきカレッジ」開講	8月 チリ鉱山落盤事故 生き埋めの 33 人の生存確認
	10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「今を大切に生きる」（NPO 法人希少難病患者支援事務局 SORD 常任理事 中岡亜希氏）	12月 東北新幹線 八戸駅 - 新青森駅間が開業し、同線が全通
	11月 岐阜大学地域科学部・岐阜市立女子短期大学と連携協定を締結	1月 今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）（中央教育審議会）
	11月 地域経済研究所と日本地域経済学会の共催による公開講演会・シンポジウム開催「大垣共立銀行の歩みと大垣産業の変遷～郷土力企業が生み出す地域の力～」シンポジウムテーマ「郷土力を活かした豊かな地域経済の形成に向けて～地方都市・大垣からの地域産業政策の提案～」（株式会社大垣共立銀行頭取 土屋曉氏）（株式会社デリカサイト FOUNDER 岐阜経済大学理事 堀富士夫、岐阜県商工労働部長 江崎禎英氏、岐阜経済大学客員教授 渡邊明、岐阜大学地域科学部教授 富樫幸一氏、岐阜経済大学奨励研究員 堀智考、岐阜経済大学地域経済研究所長・岐阜経済大学経済学部教授 鈴木誠）	3月 東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が発生（M9.0）
	3月 経営学部ビジネス戦略学科の廃止を届出	
	3月 公開講演会開催「人は一瞬で変わる～命・介護・経済を考える～」（岐阜経済大学客員教授・諏訪中央病院名誉院長 鎌田實）	
	3月 岐阜県商工会連合会と連携協定を締結	
	4月 GPA 制度導入	4月 大学情報の公表及びキャリア教育の制度化
	6月 ボランティア・ラーニングセンター開設（初代センター長 高橋正紀学生部長が兼任）	7月 地上アナログテレビ放送がこの日をもって停波、地上デジタル放送に完全移行
	6月 陸上競技部 久我アレクサンデル大垣市民大賞受賞	7月 FIFA 女子サッカーワールドカップにてなでしこジャパン優勝
7月 公共政策学科開設プレイベント講演会・シンポジウム開催「『新しい公共』とは何か～つながりで創るこれからの社会～」（早稲田大学大学院公共経営研究科教授、元三重県知事 北川正恭氏、東京大学名誉教授 神野直彦氏、大垣市長 小川敏氏、岐阜県副知事 淵上俊則氏、岐阜経済大学教授 森誠一、岐阜経済大学教授 勝田美穂）	9月 野田佳彦が第 95 代首相に就任	
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「豊かな流域の恩恵を受け続けるために住民の知を」（環境ジャーナリスト 保屋野初子氏）	10月 米アップル社のスティーブ・ジョブズ会長が死去	
10月 女子バスケットボール部員が大垣市女性消防隊岐阜県代表として全国女性消防操法大会に出場		
10月 公共政策学科開設プレイベント「はりんこ ざわめく自然」上映会開催		
11月 校友会創立 40 周年記念式典、トークショー開催「お江と篤姫 ～戦国と幕末を生き抜いた女たち～」（脚本家 田淵久美子氏）		



女子学生が大垣市女性消防隊を結成（2011 年 10 月）



経済学部公共政策学科開設記念シンポジウム（2011 年 7 月）



飛騨高山高等学校と高大連携教育協定を締結（2012 年 5 月）



学内で救急救命講習会を開催（2011 年）



高校生作文コンクール表彰式（2011 年）



サッカー部が総理大臣杯全日本大学トーナメント出場（2012 年 7 月）



岐阜経済大学学生日本赤十字奉仕団を結成（2012 年 7 月）



硬式野球部が 2012 年度春季岐阜県リーグ優勝（2012 年 5 月）



地域自治会・大垣市・岐阜経済大学との防災懇談会（2012 年 12 月）



「ぎふ清流団体」炬火リレーに参加（2012 年）



学会公開講演会 北京五輪陸上銅メダリスト 朝原宣治氏（2012 年 10 月）



岩手県大槌町でボランティア活動実施（2011 年 8 月）

あゆみ

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2011 平成23	12月 大垣市、地域自治会、岐阜経済大学が防災懇談会開催（以後、毎年実施）	
	12月 地域経済研究所公開講演会開催「福島原発事故と食卓の放射能汚染」（安斎科学・平和事務所所長 安斎育郎氏）	
	2月 岐南工業高校と教育連携に関する協定を締結	
	* 公共政策学科開設イベント開催「高校生作文コンクール」	
2012 平成24	4月 経済学部公共政策学科を開設（入学定員 40 名）	4月 福島第一原子力発電所の 1-4 号機が正式に廃炉
	4月 経済学部臨床福祉コミュニティ学科の学生募集停止	5月 東京スカイツリーおよび、東京ソラマチなど周辺の商業・観光・業務施設を含む東京スカイツリータウン開業
	4月 経済学部経済学科の入学定員を 90 名に変更	6月 大学改革実行プランの公表
	4月 経営学部情報メディア学科の入学定員を 70 名に変更	7月 食品衛生法により生の牛レバー（レバ刺し）の提供禁止
	4月 学内全面禁煙開始	8月 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）（中央教育審議会）
	4月 PAC 講座開始・PAC 支援室開設	9月 原子力規制委員会が発足
	5月 飛騨高山高校と教育連携に関する協定を締結	10月 ノーベル生理学・医学賞を京都大学 山中伸弥教授が受賞
	5月 「発展職業プログラム連絡会規程」制定（PAC 講座・支援室の運営調整）	12月 安倍晋三が第 96 代首相に就任
	5月 硬式野球部が岐阜県大学野球春季リーグ戦で初優勝	
	7月 サッカー部が総理大臣杯全日本サッカー選手権大会に初出場	
	7月 地域連携推進センター 震災「復光」シンポジウム開催（大槌町役場生涯学習課長・図書館長 佐々木健氏）	
	7月 岐阜経済大学学生赤十字奉仕団発足	
9月 ぎふ清流国体・ぎふ清流大会に延べ 811 名の学生がボランティア参加		
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「目標達成のためのセルフマネジメント」（北京オリンピック陸上銅メダリスト 朝原宣治氏）		
10月 「岐阜経済大学学長選考規程」・「岐阜経済大学副長に関する規程」制定		
10月 彦根総合高校と教育連携に関する協定を締結		
12月 地域経済研究所公開講演会・シンポジウム開催「共にある包摂型社会の構築は可能なのか？～若年者薬物乱用問題と回復支援～」		
1月 谷江幸雄学長が退任		
2月 新学長選考制度、副学長制度のもと、学長に石原健一経済学部教授、副学長に中村共一経営学部教授、竹内治彦経営学部教授が就任		
3月 ボート部が岐阜県教育長賞・大垣市民大賞受賞		
2013 平成25	4月 アスリート育成クラブ発足（陸上・駅伝・サッカー・野球部門）	4月 公職選挙法の改正案が参院で可決成立、インターネット選挙運動が解禁
	4月 谷江幸雄教授（前学長）が大垣市功労賞授賞	
	4月 不破高校と教育連携に関する協定を締結	

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2014 平成26	6月 （公財）日本高等教育評価機構認証評価「自己点検評価書」提出	5月 「これからの大学教育等の在り方について」（第三次提言）（教育再生実行会議）
	6月 駅伝部（2013 年 4 月創部）が全日本大学駅伝対校選手権大会の出場権を獲得	6月 富士山が世界文化遺産に決定
	8月 「SD（スタッフ・ディベロップメント）推進委員会規程」施行	9月 2020 年夏季五輪・パラリンピックの開催地が東京に決定
	9月 人工芝サッカー場全面改修	10月 「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（第四次提言）（教育再生実行会議）
	9月 日欧シンポジウム「中間自治体の果たすべき役割とは何か」（フィンランド タンペレ大学経済管理学部教授 アルト・ハヴェリ氏、立命館大学政策科学部教授 森裕之氏、岐阜経済大学経済学部専任講師 今井良幸、岐阜経済大学経済学部専任講師 焼田紗、岐阜経済大学副学長・岐阜経済大学経営学部教授 竹内治彦）	11月 国立大学改革プランの公表
	9月 「全学教育改革推進会議規程」制定	12月 特定秘密保護法成立
	11月 駅伝部が創部 1 年目で全日本大学駅伝に出場	
	2月 岐阜経済大学公開講演会開催「東北の被災地は今……「いきがい」と「絆」が大切」（岐阜経済大学客員教授 鎌田實）	
	3月 （公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価（認定）	
	* 平成 25 年度私立大学等教育研究活性化設備整備費補助金 タイプ 2 採択される	
	4月 「岐阜経済大学協議会規則」制定	4月 学校教育法の改正により、教授会の学長諮問機関化。国立大学法人法の改正により、学長選考基準、結果公表の義務付け
	6月 陸上競技部の松原瑞樹が全日本個人選手権大会において男子走幅跳で優勝	4月 消費税が 5% から 8% に増税
7月 サッカー部が天皇杯全日本サッカー選手権大会に初出場	6月 富岡製糸場が世界文化遺産登録決定	
8月 女子ソフトボール部が全日本インカレ初出場	7月 「今後の学制等の在り方について」（第五次提言）（教育再生実行会議）	
9月 全天候型陸上競技場全面改修	12月 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」（中央教育審議会）	
9月 株式会社岐阜新聞社と連携協定を締結	1月 イスラム過激派組織による日本人拘束事件	
10月 陸上競技場リニューアル記念式典・陸上記録会・長距離記録会開催、第 4 種陸上競技場の認定更新	3月 「学び続ける」社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について（第六次提言）（教育再生実行会議）	
10月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「TPP の本質と行方を考える」（大妻女子大学教授、横浜国立大学名誉教授 田代洋一氏）		
11月 大学ホームページリニューアル		
* 平成 26 年度私立大学等教育研究活性化設備整備費補助金 タイプ 1. 2 採択される		
* 図書館・9302 教室改装		
2015 平成27	4月 「経済学部公共政策科社会福祉部会規則」制定（公共政策学科社会福祉コース及び社会福祉課程における授業実施についての連絡調整）	



女子学生が大垣市赤坂町の赤坂祭り女御輿に参加（2013 年 11 月）



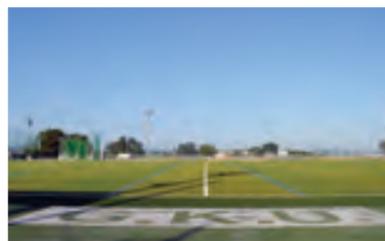
硬式野球部の屋内練習場リニューアル（2013 年）



学生が船頭を務める「水都大垣船下り」たらい舟（2014 年 4 月）



不破高等学校との高大連携教育協定を締結（2013 年）



人工芝サッカー場の全面改修工事が完了（2013 年 9 月）



外国人留学生在が損妻の茶摘を体験（2014 年 4 月）



全日本大学陸上競技個人選手権で走幅跳優勝（2014 年 6 月）



大垣祭りにて軸を曳く学生（2015 年 5 月）



ボート部が日本インカレに入賞（2015 年）



岐阜新聞社と連携協定を締結（2014 年 9 月）



海外語学研修でハワイへ



マイスター倶楽部「全国まちづくりカレッジ in 大垣」開催（2015 年 9 月）

Topics 8

千年紀の変わり目からのキャリア形成支援の推進

竹内 治彦 (岐阜経済大学 経営学部教授)

2000(平成12)年という記念の年の前後、日本は不景気のさなかにあり、就職状況は極めて厳しいものでした。その後、2002(平成14)年からいざなぎ(小泉)景気といわれる長期の成長期間が訪れます。東京駅周辺では再開発が進み、クレーンが立ち並んで、景気の良さを感じさせましたが、地方においては、景気回復の力強さや就職状況の改善を感じるほどの勢いはありませんでした。そして、アメリカにおける2007(平成19)年のサブプライム住宅ローン危機、2008(平成20)年のリーマンショックと続くことで、景気は悪化するということになります。

このように、景気の変動は目まぐるしく、本学の就職活動も影響は受けていましたが、全国紙で報道されるのとは少し状況がずれていました。たしかに、2000年代の初めは就職氷河期でした。ただ、それ以前に、本学の対応もまだマンモス大学型の時代であったといえます。学生数もまだまだ多く、就職課にやってくる学生には支援ができていたと思いますが、すべての学生にまで手は及んでいなかったように思います。もちろん、日本中の大学が同様でした。当時の就職率はきわめて低かったのですが、それは本当に低かったのではなく、把握率が低かっただけで、実際には当時も、本学の卒業生はなんらかの正社員就職できていたと推測しています。

2004(平成16)年からキャリア形成科目ができ、全学生が「キャリア」ということを意識する機会がうまれました。さらに、全国に先駆けて、1年次から3年次までに、キャリア形成I~IVを配置し、履修必須化することで、やってくる学生を相手にする、というスタンスではなく、全学生を否応なしにキャリア支援課に來させるという体制をつくることができました。

不況は、本学のキャリア支援を浸透させるうえでは、むしろ追い風であったといえるかもしれません。2000年代のいざなぎ景気の時代も、地方の雇用情勢は芳しくなく、

学生たちはキャリア支援課に自ら進んで訪れてくれるようになりました。また、ゼミ教員との連携や、「キャリア形成IV」という科目の中の、グループ面接の時間をゼミの担当教員も参加する形で実施したことで、全学的な支援体制というものが進んできたと思われまます。

この間、外部との連携も進みました。民間企業から職員を派遣いただくことや、ハローワーク大垣とも連携協定を結ぶこともできました。厚生労働省が推進するジョブカード(職務や研修の経歴により自己の職業的能力を表現するシート)の学生版を作成した際には、キャリア形成科目の中で活用し、ハローワークから派遣された専門のカウンセラーの指導のもと、3年生全員がジョブカードを作成するという事業を進めました。この取り組みは、厚生労働省で全国のモデル事業となりましたが、大学でモデル校となったのは、富山大学、秋田県立大学と本学の3大学だけでした。他に、就職本番前のキャリア形成科目の試験では、企業等で活躍されている方をお招きして、集団面接を最終試験として実施するといった取り組みもできました。外部の諸団体と連携して、インターンシップが質量ともに広がったのもこの時期です。

冒頭述べたような景気動向の影響を最小限に止め、本学の就職率は全卒業生に対する実質就職率でも90%を超えるようになってきました。しかし、いたずらに就職率を高めることだけが、キャリア形成支援の目的ではありません。産業界にとって「都合の良い」人材を育成することではなく、真に主体性を持ち、責任感の強い頼もしい人材を育成することに、キャリア形成支援の本質があると考えます。そうした観点から、2007(平成19)年頃に定めたのが、本学のキャリア支援宣言です。学生一人ひとりが、その資質を発揚し、地域に貢献することを求め、キャリア支援を行っていくことを宣言し、また、卒業後も、学生の支援を続けることを謳っています。

岐阜経済大学キャリア支援宣言

- 私達は、学生一人ひとりの声に耳を傾け、卒業時に全員が達成感と満足を感じる進路を発見できるように支援します
- 私達は、学生一人ひとりが、より高い理想を持ち、それを実現できるように励まし、後押しします
- 私達は、学生一人ひとりに、その資質・能力を伸ばす手段につき情報や機会、助言を提供します
- 私達は、学生諸君が地域で活躍できるよう努力します
- 私達は、卒業生からの職業上の相談にもできる限り対応します

年度	岐阜経済大学年表	この年の出来事
2015 平成27	4月 「IR推進委員会規程」施行	5月 「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(第七次提言)(教育再生実行会議)
	5月 全日本学生個人選手権大会において陸上競技部 東魁輝が男子400mで優勝	6月 日本年金機構で、個人情報約125万件が外部に流出
	5月 古口博之経営学部教授が副学長に就任	7月 「教育立国実現のための教育投資・教育財源の在り方について」(第八次提言)(教育再生実行会議)
	5月 ボート部、駅伝部が岐阜県競技力強化指定団体に認定	9月 参院本会議において安全保障関連法案可決
	5月 マイスター倶楽部が岐阜県各界功労者として表彰	10月 ノーベル生理学・医学賞を大村智が、ノーベル物理学賞を梶田隆章が受賞
	7月 創立50周年記念事業実行委員会及び関連委員会発足	1月 軽井沢スキーバス転落事故
	8月 岐阜聖徳学園大学、岐阜聖徳学園短期大学と共同SDに関する協定を締結	2月 環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)署名
	11月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「現在のロシア情勢」(京都大学 経済研究所 教授 溝端佐登氏)	3月 北海道新幹線(新青森駅-新函館北斗駅)が開業
	1月 「学校法人岐阜経済大学と学校法人大垣女子短期大学との合併協議に係る基本合意書」締結	
	* 体育館第1アリーナ床・壁改修工事	
* 平成27年度私立大学等教育研究活性化設備整備費補助金 タイプ1 採択される		
2016 平成28	4月 南昌航空大学と学生交流協定を締結	4月 熊本地震(M6.5、M7.3)
	7月 江西财经大学と学生交流協定を締結	5月 米大統領が広島訪問
	8月 山県市と連携協定を締結	6月 選挙権に関連する改正公職選挙法施行
	10月 岐阜県と就職支援に関する協定を締結	7月 東京都知事に小池百合子氏当選
	10月 学校法人岐阜経済大学理事会・評議員会 法人合併を承認	7月 日本で「ポケモンGO」配信開始
	10月 「学校法人岐阜経済大学と学校法人大垣女子短期大学との合併契約書」締結	8月 リオ五輪 日本がメダル41個
	10月 文部科学大臣に学校法人岐阜経済大学及び学校法人大垣女子短期大学合併認可申請書を提出	8月 天皇陛下 退位のご意向示唆
	11月 岐阜経済大学学会公開講演会開催「性の多様性とLGBTの人権」(中京大学国際教養学部教授 風間孝氏)	12月 大隅良典・東京工業大名誉教授がノーベル生理学・医学賞を受賞
	11月 ダナン大学と教育交流及び東南アジア特別奨学生に関する協定を締結	
	1月 学校法人合併認可される	
	3月 食堂「Cafe Rest50」竣工、内覧会開催	
	3月 石原健一学長、古口博之副学長、竹内治彦副学長が退任	
2017 平成29	4月 「学校法人大垣総合学園」設立(理事長:田口義隆セイノーホールディングス(株)代表取締役社長 CEO)	
	4月 学長に山田武司経済学部教授、副学長に高橋正紀経営学部教授、高橋利行経済学部教授が就任	



十万石祭りで神輿パレードに参加(2015年10月)



法人合併協議開始調印式(2016年1月)



秩父宮賜杯第48回全日本大学駅伝対校選手権に出場(2016年11月)



食堂「Cafe Rest50」内覧会(2017年3月)



山県市と地域連携協定を締結(2016年8月)



外国人留学生が海津市周遊ツアーに参加(2016年11月)

PAC 支援室創設の思い出

古口 博之 (岐阜経済大学 経営学部教授)

PAC 支援室は2011 (平成23)年の4月に開設されました。まず、PAC という名称は Program for Advanced Career の頭文字を取ったものです。直訳すると「上級キャリアのためのプログラム」ということになりませんが、通常は「発展職業プログラム」という名称で特定の分野の職業につくための支援プログラムとなっています。特に公務員試験、教員試験対策のための学習サポートをしています。現在5年目ですが、着実に成果を上げるようになってきています。

さて、PAC 支援室はどのような経緯でできたのでしょうか。以下それについて述べていきます。

2010 (平成22)年のことですが、岐阜経済大学では学生の就職に関し力を入れるようになってきておりました。全体として大学の教育実績を積み上げ、それにより大学の名を高めようとする気運がありました。ちょうど同時期に経済学部で公共政策学科ができ、学科の目標であるたくさんの公務員をだそうとするカリキュラムがスタートする時でもありました。そのなかでどうしても学科の教育成果をださなければならない、また学生の基礎力不足を補うためのリメディアル的な教育の必要性ということで、何ができるかを検討した結果、正課の授業では補えない充実した公務員、教職試験対策講座を打ち立てる必要がでてきました。

従来、教職課程においては面接指導等を含め様々な学生支援が行われていました。そのなかでも当時は教職課程の先生方の呼びかけで春と秋に教員試験対策のための教職科目と教養科目の補習講座が設けられていました。残念ながら、受講者はそれほど多くなく、クラブ等に忙しいとの理由などもあり学生の活発な参加がありませんでした。本学の先生方においてもせっかく時間を割いて学生のために教えておられましたが、十分な教育ができにくい環境でした。

また、当時、キャリア支援課では公務員講座を実施しており (警察・消防、行政職)、その講座は外注 (すなわち専門学校等の業者に依頼したもの) となっておりました。その講座では基礎的な教養科目と専門的な科目を教えておりましたが、基礎科目においては教職希望者が受講可能なものでした。しかし、教職希望者が受講するほど回数が多いわけでもなく、受講者も少なく公務員の専門科目においても全体的な講座時間は限られていました。

公務員、教職には重複する内容があるということで、それを一本化することができないか、同時にそれぞれの専門

領域の科目を充実させることができれば、より手厚い学生支援ができるのではないかと。それはまさに本学にとって機能的であり経済的でもある考えでした。よってこの構想を実現させるべく、「PAC 事業計画書」が作成され、協議会、常任理事運営委員会に諮られ承認されました。正課科目とのすり合わせ、既存の課外の科目の移行、時間割の配置等、難問が多くありましたが、少しずつ問題を解決し、2012 (平成24)年4月にどうにか滑り出すことができました。

それに合わせて、PAC 支援室 (当初は8号館3階に設置)、PAC 学習室を開設しました。支援室には教職関係の専属の職員を配置するなど学生の使いやすさを追求しました。同時に教職課程室として機能していたものを PAC 支援室に移行させ、そこに教職と公務員対策の支援機能を持たせました。ただ、当初は公務員試験対策の支援のほうは専属の職員がいないため、この職員を補充する必要がありました。のちに専任の職員を補充することができるようになり、学生の利用がよりやすくなりました。

本来、PAC 講座は、まず基礎学力をつけさせ、そのうえで専門的な力をつけさせようと組まれています。毎年1年生は200名近い受講者がいて、学年が上がるにつれ進路変更等により公務員、教職志望者は絞られていきます。その過程において、教務課、PAC 支援室のスタッフが専門的な視点から学生を指導していますので、基礎力がついてくるようになりました。今後はその機能をより充実させ、学生の支援に邁進して下さることを期待します。



PAC 学習室が開設 (2011年4月)

2009 (平成21)年、桜が満開に咲くころ、縁もゆかりもなかった岐阜県大垣市に引越しをしてきました。初めての一人暮らしに浮かれたのんびりな心境と、友達できるかな?なんて不安も入り混じりながら入学式の日を迎えました。いざ大学へ行ってみると、入った教室には男の子だらけ…。高校時代からのあまりのギャップに直ぐさま女の子を見つけて声を掛けたのを覚えています。三重出身の友人は方言のなまりがとて可愛く、地方から集まってきているんだなあというのを実感しました。

入学して少し経ったころ、高校時代にやっていた陸上競技を続けたいと思い友人と見学に行きました。ですが、私のレベルについて行けるのかと不安になり入部をギリギリまで引き伸ばしていました。やっとの決意で入部したものの、高校での引退から身体をロクに動かしていなかったため、あつという間に足を壊してしまいました。しかし、仲間や指導者の方々が見捨てることなく頑張ろうと声を掛けてくれたり、ダブルスクールのため休部を考えた時も向き合ってくれて話を両立できる方法を考えてくれたりしたお陰で4年間陸上部員として共に戦うことができました。

部活動だけでなく、岐阜経済大学で出逢った友人や先生・職員の皆さんもかけがえのない私の財産です。小さい大学だからというのものもあるかも知れませんが、とてもアットホームで友達が友達をいつの間にか繋いでくれていました。春は並木道で恒例のお花見、夏には川辺に行ってバーベキューをしたり、秋は学生会で文化祭の準備をしたり、冬はスノーボードをしたり。時には真面目に国道21号線沿いのマクドナルドへ夜な夜な集合して指導案を作ったりもしたなあ…とキリがないくらい鮮明に思い出されます。

何を切り取っても素敵な経験で、こうして文章に起こしている瞬間もとても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。卒業した今は東京という地で奮闘する日々ですが、ここにも岐阜経済大学の仲間は多く、それぞれの夢に向かい、日々切磋琢磨しています。多くの出逢いや経験を与えてくれた岐阜経済大学には本当に感謝しています。そして50周年おめでとうございます。

私
の
財
産
かけがえのない2010年度卒/第41期生
恒見 愛里

京都府出身の私が岐阜経済大学に進学した目的は、新設2年目のスポーツ経営学科で保健体育の教員免許を取得することでした。

そんな私の、大学時代の一番の思い出は何かと問われれば、間違いなく、「硬式野球部」で活動した日々です。入学した際、知り合いが居ない岐阜へ来ることを不安に思っていた私を、友人と繋いでくれたのも野球です。今もお連絡を取りあい、年に一度は集まるこの野球部の友人達は私の大学時代の財産です。また、塚田総監督、小森監督をはじめ、指導者の中に入って学生コーチとして勉強させて頂いた最後の1年間は、今の指導に大いに役立っており、本当に良い経験が詰まった時間を過ごすことができました。

学業では、教職支援室 (現PAC支援室) に大変お世話になりました。自分が高校体育の一人目の合格者になると意気込んでよく部屋に通ったことを覚えています。結果として、一人目合格どころか、遊びと野球で学業をおろそかにし、5年間の大学生活を送ったため、目標とは程遠いものとなりました。しかし、同級生より1年多く通ったことをプラスに考えるため、複数免許取得のアドバイスを頂き、絶対的な武器を持って卒業することが出来ました。卒業後も気にかけて頂き、教員採用試験に合格することも出来ました。教職の先生方には今でも気にかけて頂いており、私のような手のかかる学生を教員にするべく、育てて頂いたことを本当に感謝しています。

ゼミでは高橋正紀教授にお世話になり、このゼミの影響を今でも非常に受けています。「楽しくなければスポーツじゃない」という考え方のもと、スポーツマンシップという言葉の意味を考える事となり、現在では、教員として様々な場面でこの考え方を軸として指導することが多く、高橋教授との出会いは私にとってかけがえのないものとなりました。

様々な人との繋がりを経験し学んだ大学時代。人生のパートナーともこの大学で出会い、まさに私の人生を表す学生生活でした。そんな岐阜経済大学が益々発展していく事を祈念しています。

人生濃縮の
学生生活2010年度卒/第41期生
畠山 晶利

「ありがとう」
岐阜経済大学2010年度卒/第41期生
王 蘇姍

はじめまして王蘇姍(オウ ソウセン)と申します。岐阜経済大学50周年 おめでとうございます。この機会に留学のことを書かせていただけるのはとても嬉しいです。

日本に来て、13年。これまでの人生の3分の1ほどになりますが、振り返ると、本当にあっという間でした。日本に来た理由は、正直なところ、今の自分にもわかりません。日本とご縁が深い、ということではないかと思えます。

留学当初は、何もわからず、不案内の土地や言葉に、苦しくて何回も泣きました。私の人生の試練の始まりです。ただ、このときの経験のおかげで、真心は絶対に通じることがわかりました。

アルバイトをしながら、日本語などを勉強し、大学、アルバイト先、寮を行き来する忙しい毎日でしたが、立ち止まって考える時間がなかったことで、かえって、心安らかに過ごすことができました。飾らず、本来の自分を出すことが何より大切だということを学んだのもこの頃です。

留学中は、いろいろなことがありましたが、今は、出会った人たち、様々なできごとへの「感謝」の気持ちだけが浮かんできます。留学のおかげで、自分の魂を磨き、歩みたい道を探すことができました。

その中で、一番感謝しているのは岐阜経済大学です。大学はとても美しく、静かで、勉強にとってもいい環境でした。先生たちは、厳しいですがとても優しく、事務の皆さんも、困ったことがあれば、必ず全力で助けてくださいます。大学の中で一番好きなのは図書館と3号館のフリースペースです。時間があるときは、このどちらかで過ごしていました。好きな本を読んだり、宿題をしたり、インターネットで調べたり。今も、図書館で新聞や雑誌などを読んでいて、私の生活に欠かせない時間になっています。

大学時代に学んだ
三つのモットー2011年度卒/第42期生
高堂 祐樹

私は2008(平成20)年に岐阜経済大学・臨床福祉コミュニティ学科1期生として入学しました。大学時代特に思い出に残っていることは2つあります。

1つ目は、4年間陸上競技部に所属し、真っ黒になるまで陸上に熱中したことです。小学校から続けていた陸上競技をさらに高めたいという思いで大学でも陸上を続けました。そこでは、優秀な監督やコーチ、沢山の先輩や友人、後輩と出会い、陸上を通じて幅広い繋がりを持つことができました。その中、毎年自己記録を更新することができました。

また、大学3年生の時には陸上競技部の主将に任命していただき、先頭に立って人をまとめることの難しさを経験させていただきました。時に、友人と意見がぶつかり、対立することもありました。しかし、そんな時近くで支え続けてくれたのもまた友人たちでした。陸上を通じて出会った仲間たちとは今も尚深い関わりを持っています。私は陸上競技を継続しており、卒業後も自己記録を更新し続けています。その秘訣は、どんな時も向上心を忘れないことです。それを教えてくれたのも大学で出会った多くの仲間たちです。仲間たちに恥じない結果が残せるように、これからも上を向いて頑張り続けたいと思います。

2つ目は、様々な資格取得に向けて実習等に励んだことです。私は、当初、介護福祉士資格を取得し、卒業後は介護福祉施設での就職を考えていました。しかし、実習の際に訪問した特別支援学校や地元での陸上教室での子どもたちとの関わりの中で、子どもたちと関わりが持てる職に就きたいと思いました。そこで、急遽、大学3年生から中学・高等中等学校の教員免許を取得する道を選びました。カリキュラムの都合上、卒業後2年間は科目等履修生として大学に通いました。子どもたちへの教育、指導方法といった、今まで学んでいなかった分野に対し、悪戦苦闘する毎日でしたが、多くの先生方のサポートもあり、無事資格を取得することができました。現在では、この資格を活かして教育関係の職に就くことができます。

大学時代に学んだ「諦めない気持ち、周囲への心配り、感謝の気持ちを忘れない」この三つはすべて、今の私のモットーです。

(敬称略)

役員名	氏名	現職
理事長	土屋 嶋	(株)大垣共立銀行 取締役頭取
副理事長(常勤)	浅野 照章	
副理事長(非常勤)	説田 泰朗	大垣市元収入役
理事・評議員	岸 敬也	岐阜県副知事
理事・評議員	小川 敏	大垣市長
理事・評議員	川上 孝浩	大垣市議会議長
理事・評議員	田口 義隆	セイノーホールディングス(株) 代表取締役社長 CEO
理事・評議員	岩田 義文	イビデン(株) イビデングループ代表相談役
理事・評議員	小川 信也	太平洋工業(株) 代表取締役社長
理事・評議員	堤 俊彦	日本耐酸壘工業(株) 代表取締役会長
理事・評議員	河合 進一	河合石灰工業(株) 代表取締役社長
理事・評議員	堀 富士夫	(株)デリカサイト 代表取締役 FOUNDER(会長)
理事・評議員	岩井豊太郎	岐阜県議会議員
理事・評議員	中村 博宣	(学)大垣日本大学学園 前副理事長
理事・評議員	石原 健一	岐阜経済大学 学長
理事・評議員	古口 博之	岐阜経済大学 副学長
理事・評議員	竹内 治彦	岐阜経済大学 副学長
理事・評議員	宇佐見正史	岐阜経済大学 経済学部長
理事・評議員	高橋 信一	岐阜経済大学 経営学部長
理事・評議員	渡辺 正典	岐阜経済大学 事務局長
評議員	一柳 正義	(株)セイノー商事 代表取締役社長
評議員	井上 豊秋	揖斐川工業(株) 代表取締役社長
評議員	今川 喜章	(株)丸順 代表取締役社長
評議員	小川 貴久	太平洋精工(株) 代表取締役社長
評議員	金森 勤	(株)大光 名誉会長
評議員	河合 伸泰	河合石灰工業(株) 取締役副社長
評議員	瀬瀬多加志	大垣病院 副院長
評議員	五藤 義徳	(株)大垣共立銀行 執行役員 / (株)YOKB 総研 社長
評議員	田中 良幸	サンメッセ(株) 代表取締役会長
評議員	西脇 史雄	大垣西濃信用金庫 会長
評議員	日比 利雄	(株)エヌビーシー 代表取締役社長
評議員	平林 佳郎	イビデン(株) 顧問
評議員	蛭川 義高	岐阜県立大垣北高等学校 校長
評議員	三輪 高史	グレートインフォメーションネットワーク(株) 代表取締役会長
評議員	矢橋 慎哉	矢橋工業(株) 代表取締役会長
評議員	浅井 清貴	画家・現代美術造形作家
評議員	武藤 鉄弘	美濃市長
評議員	服部 信夫	(株)市川工務店 取締役会長
評議員	安田 良邦	岐阜経済大学 校友会会長
評議員	塚原 康之	岐阜経済大学 理事長室長
評議員	安田 天	岐阜経済大学 総務課長
評議員	坂 覚則	岐阜経済大学 財務課長
評議員	宮川 祐志	岐阜経済大学 教務課長
監事	浅野 圭一	東海サーモ(株) 代表取締役社長
監事	河合 保孝	(株)アレックカワイ 代表取締役社長
監事	山本 讓	大垣市教育長

歴代理事長・歴代副理事長

■ 歴代理事長

(敬称略)



初代理事長
内藤 誉三郎
参議院議員・元文部事務次官
1967(昭和42)年1月23日～1971(昭和46)年12月21日



第2代理事長
田口 利八
西濃運輸(株)代表取締役社長
1972(昭和47)年4月4日～1982(昭和57)年7月28日



第3代理事長
矢橋 浩吉
イビデン(株)代表取締役会長
1982(昭和57)年9月7日～1997(平成9)年7月8日



第4代理事長
田口 利夫
西濃運輸(株)代表取締役会長
1997(平成9)年7月8日～1998(平成10)年8月26日



第5代理事長
田口 義嘉壽
西濃運輸(株)代表取締役社長
1998(平成10)年11月17日～2002(平成14)年5月27日



第6代理事長
遠藤 優
イビデン(株)代表取締役会長
2002(平成14)年5月27日～2005(平成17)年3月8日



第7代理事長
土屋 嶋
(株)大垣共立銀行取締役頭取
2005(平成17)年3月8日～2017(平成29)年3月31日

■ 歴代副理事長

【常勤】

杉山 令肇	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年2月13日
伊藤 一郎	1969(昭和44)年2月14日	～	1971(昭和46)年12月21日
岩井 正一	1973(昭和48)年9月5日	～	1984(昭和59)年4月11日
山田 忠雄	1984(昭和59)年4月12日	～	1998(平成10)年3月31日
岡安 賢二	1998(平成10)年4月1日	～	2005(平成17)年12月9日
説田 泰朗	2006(平成18)年8月1日	～	2010(平成22)年5月31日
浅野 照章	2010(平成22)年6月1日	～	2017(平成29)年3月31日

※第2代伊藤一郎辞任後、第3代岩井正一まで、副理事長空席。

【非常勤】

堀 富士夫	2006(平成18)年6月1日	～	2009(平成21)年5月26日
説田 泰朗	2010(平成22)年7月28日	～	2017(平成29)年3月31日

歴代学長

(敬称略)



初代
大友 抱璞
1967(昭和42)年4月～1969(昭和44)年3月



第2代
伊奈 重誠
1968(昭和43)年9月～1969(昭和44)年3月 学長職務代理
1969(昭和44)年4月～1971(昭和46)年3月 学長事務取扱



第3代
名和 統一
1971(昭和46)年4月～1972(昭和47)年2月



第4代
飯田 繁
1972(昭和47)年2月～1972(昭和47)年6月 学長代行
1972(昭和47)年6月～1981(昭和56)年1月 学長



第5代
建林 正喜
1981(昭和56)年2月～1987(昭和62)年1月



第6代
大迫 輝通
1987(昭和62)年2月～1995(平成7)年1月



第7代
米田 清治
1995(平成7)年2月～1999(平成11)年1月



第8代
池永 輝之
1999(平成11)年2月～2003(平成15)年1月



第9代
黒川 博
2003(平成15)年2月～2009(平成21)年1月



第10代
谷江 幸雄
2009(平成21)年2月～2013(平成25)年1月



第11代
石原 健一
2013(平成25)年2月～2017(平成29)年3月



第12代
山田 武司
2017(平成29)年4月～現在

歴代法人役員・評議員

(敬称略)

理事

伊藤良太郎	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
大友 抱璞	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
大野 繁俊	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
小川 宗一	1967(昭和42)年1月23日	～	1990(平成2)年5月2日
加納 博司	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
佐々木元昭	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
杉山 武一	1967(昭和42)年1月23日	～	1967(昭和42)年10月9日
杉山 令肇	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
須崎 潔	1967(昭和42)年1月23日	～	1973(昭和48)年8月15日
高木 敏夫	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
田口 利八	1967(昭和42)年1月23日	～	1982(昭和57)年7月28日
土屋 義雄	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
内藤善三郎	1967(昭和42)年1月23日	～	1971(昭和46)年12月21日
野村 正三	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
三宅 晃允	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
山本 庄一	1967(昭和42)年1月23日	～	1970(昭和45)年5月7日
横谷 裔	1967(昭和42)年1月23日	～	1969(昭和44)年6月20日
杉山 武彦	1968(昭和43)年5月30日	～	1969(昭和44)年6月20日
平野 三郎	1968(昭和43)年5月30日	～	1976(昭和51)年12月14日
城宝 正治	1969(昭和44)年4月1日	～	1971(昭和46)年3月31日
伊藤 一郎	1969(昭和44)年2月14日	～	1971(昭和46)年12月21日
伊奈 重誠	1969(昭和44)年6月20日	～	1971(昭和46)年2月28日
栗野 一雄	1969(昭和44)年6月25日	～	1974(昭和49)年9月18日
岩井 正一	1969(昭和44)年6月25日	～	1969(昭和44)年12月12日
	1971(昭和46)年5月30日	～	1991(平成3)年5月30日
土屋 斉	1969(昭和44)年6月25日	～	1998(平成10)年3月3日
堀 薫	1969(昭和44)年6月25日	～	1975(昭和50)年5月30日
中田 茂雄	1969(昭和44)年12月22日	～	1970(昭和45)年5月7日
富田三子一	1970(昭和45)年5月22日	～	1971(昭和46)年2月28日
	1974(昭和49)年2月6日	～	1974(昭和49)年6月6日
廣瀬 重義	1970(昭和45)年7月15日	～	1974(昭和49)年2月21日
名和 統一	1971(昭和46)年5月30日	～	1972(昭和47)年1月7日
花井 益一	1971(昭和46)年5月30日	～	1972(昭和47)年1月6日
飯田 繁	1972(昭和47)年2月1日	～	1981(昭和56)年1月31日
米田 清治	1972(昭和47)年2月1日	～	1974(昭和49)年5月1日
	1976(昭和51)年7月7日	～	1999(平成11)年1月31日
下野 次郎	1972(昭和47)年2月14日	～	1972(昭和47)年5月11日
小川 整榮	1972(昭和47)年6月7日	～	1973(昭和48)年7月4日
林 仁七	1973(昭和48)年7月4日	～	1974(昭和49)年2月6日
	1978(昭和53)年5月12日	～	1979(昭和54)年6月6日
矢橋 浩吉	1973(昭和48)年11月7日	～	1997(平成9)年7月8日
大迫 輝通	1974(昭和49)年5月1日	～	1979(昭和54)年3月31日
	1987(昭和62)年2月1日	～	1995(平成7)年1月31日
清水 正之	1974(昭和49)年5月1日	～	1975(昭和50)年5月31日
野崎長四郎	1974(昭和49)年6月6日	～	1976(昭和51)年6月22日
	1977(昭和52)年6月1日	～	1978(昭和53)年5月9日
	1979(昭和54)年6月6日	～	1980(昭和55)年10月1日
佐藤 昇	1975(昭和50)年6月4日	～	1989(平成元)年1月31日
高崎 善慶	1975(昭和50)年6月4日	～	1982(昭和57)年5月23日
津田 梨	1975(昭和50)年6月4日	～	1982(昭和57)年12月14日
牧 倫	1975(昭和50)年6月4日	～	1976(昭和51)年7月1日
鷲見 等曜	1975(昭和50)年6月4日	～	1976(昭和51)年7月1日
	1985(昭和60)年2月27日	～	1987(昭和62)年1月31日
森 直之	1975(昭和50)年9月3日	～	1981(昭和56)年3月12日
内田 秀雄	1976(昭和51)年7月7日	～	1977(昭和52)年5月11日
建林 正喜	1976(昭和51)年7月7日	～	1987(昭和62)年1月31日
上松 陽助	1977(昭和52)年4月11日	～	1989(平成元)年2月20日
浅井 幸男	1979(昭和54)年4月4日	～	1984(昭和59)年5月10日
	1987(昭和62)年2月26日	～	1989(平成元)年1月31日
岡本 卓二	1980(昭和55)年11月5日	～	1982(昭和57)年5月30日
	1986(昭和61)年7月31日	～	1987(昭和62)年4月30日
	1990(平成2)年5月30日	～	1991(平成3)年5月7日
	1993(平成5)年10月25日	～	1994(平成6)年5月13日
大谷 省三	1981(昭和56)年2月1日	～	1985(昭和60)年1月31日

理事

岩田 巖	1981(昭和56)年6月3日	～	1985(昭和60)年4月25日
水根 敏夫	1982(昭和57)年6月3日	～	1983(昭和58)年5月30日
	1988(昭和63)年9月22日	～	1989(平成元)年5月12日
田口 利夫	1982(昭和57)年9月7日	～	1998(平成10)年8月26日
増田 博	1982(昭和57)年9月7日	～	1983(昭和58)年5月30日
藤田 守	1983(昭和58)年5月31日	～	1984(昭和59)年8月31日
	1987(昭和62)年5月31日	～	1988(昭和63)年9月14日
	1991(平成3)年5月31日	～	1992(平成4)年5月20日
	1998(平成10)年5月29日	～	1999(平成11)年5月30日
山田 忠雄	1984(昭和59)年4月12日	～	1998(平成10)年3月31日
小澤 治郎	1984(昭和59)年5月24日	～	1989(平成元)年1月31日
	1989(平成元)年2月23日	～	1993(平成5)年2月27日
鈴木 一也	1984(昭和59)年9月13日	～	1985(昭和60)年6月11日
	1989(平成元)年5月30日	～	1990(平成2)年5月28日
	1994(平成6)年5月24日	～	1995(平成7)年5月30日
小倉 満	1985(昭和60)年5月23日	～	2001(平成13)年3月3日
梶本 英夫	1985(昭和60)年7月26日	～	1986(昭和61)年7月1日
梶原 拓	1989(平成元)年2月23日	～	2005(平成17)年3月8日
武井勇四郎	1989(平成元)年2月23日	～	1993(平成5)年2月27日
藪内 武司	1989(平成元)年2月23日	～	1993(平成5)年1月31日
	1995(平成7)年2月28日	～	2001(平成13)年1月31日
小川 哲也	1990(平成2)年5月30日	～	2003(平成15)年3月10日
* 岩井豊太郎	1991(平成3)年5月31日	～	2017(平成29)年3月31日
河合 達雄	1991(平成3)年5月31日	～	1997(平成9)年4月28日
高畑 正	1992(平成4)年5月26日	～	1993(平成5)年10月1日
	1995(平成7)年5月31日	～	1996(平成8)年5月9日
	1997(平成9)年5月28日	～	1998(平成10)年5月7日
	2005(平成17)年5月27日	～	2006(平成18)年5月30日
池永 輝之	1993(平成5)年3月16日	～	2003(平成15)年1月31日
勝野 尚行	1993(平成5)年3月16日	～	2002(平成14)年1月31日
竹林 信一	1993(平成5)年3月16日	～	1994(平成6)年3月31日
飯島 孝	1994(平成6)年4月1日	～	1995(平成7)年11月30日
安部 大成	1994(平成6)年5月24日	～	2001(平成13)年1月31日
酒井 博世	1995(平成7)年12月1日	～	2001(平成13)年11月30日
渡辺 雄次	1996(平成8)年5月29日	～	1997(平成9)年5月8日
* 河合 進一	1997(平成9)年5月28日	～	2017(平成29)年3月31日
遠藤 優	1997(平成9)年7月8日	～	2007(平成19)年5月30日
* 土屋 嶮	1998(平成10)年3月3日	～	2017(平成29)年3月31日
岡安 賢二	1998(平成10)年4月1日	～	2005(平成17)年12月9日
田口義嘉壽	1998(平成10)年11月17日	～	2016(平成28)年9月22日
谷江 幸雄	1999(平成11)年2月1日	～	2003(平成15)年11月30日
	2008(平成20)年3月7日	～	2013(平成25)年1月31日
	1999(平成11)年5月31日	～	2000(平成12)年5月11日
西田 勝義	2000(平成12)年5月29日	～	2001(平成13)年5月9日
林 新太郎	2006(平成18)年5月30日	～	2007(平成19)年5月30日
	2013(平成25)年5月30日	～	2014(平成26)年5月27日
重田 澄男	2001(平成13)年2月28日	～	2004(平成16)年5月27日
野松 敏雄	2001(平成13)年2月28日	～	2013(平成25)年11月30日
* 小川 敏	2001(平成13)年5月28日	～	2017(平成29)年3月31日
高橋 昭次	2001(平成13)年5月28日	～	2002(平成14)年5月9日
黒川 博	2001(平成13)年12月1日	～	2009(平成21)年1月31日
* 石原 健一	2002(平成14)年2月26日	～	2007(平成19)年11月30日
	2009(平成21)年3月6日	～	2010(平成22)年3月5日
	2010(平成22)年10月6日	～	2017(平成29)年3月31日
津汲 仁	2002(平成14)年5月27日	～	2003(平成15)年5月30日
	2007(平成19)年5月31日	～	2008(平成20)年5月29日
成田 幸範	2003(平成15)年2月1日	～	2007(平成19)年11月30日
	2009(平成21)年3月6日	～	2010(平成22)年3月5日
* 小川 信也	2003(平成15)年5月31日	～	2017(平成29)年3月31日
高橋 滋	2003(平成15)年5月31日	～	2004(平成16)年5月27日
	2008(平成20)年5月29日	～	2009(平成21)年5月25日
	2014(平成26)年5月28日	～	2015(平成27)年5月30日
河合 恒生	2003(平成15)年12月9日	～	2005(平成17)年3月8日
木村 隆之	2004(平成16)年5月27日	～	2011(平成23)年11月30日

歴代法人役員・評議員

理事			
野村 弘	2004(平成16)年 5月27日	～	2005(平成17)年 5月27日
	2009(平成21)年 5月25日	～	2010(平成22)年 5月26日
* 浅野 照章	2005(平成17)年 3月 8日	～	2010(平成22)年 3月31日
	2010(平成22)年 6月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
古田 肇	2005(平成17)年 3月 8日	～	2009(平成21)年 5月25日
* 堀 富士夫	2005(平成17)年 5月27日	～	2013(平成25)年 5月26日
	2013(平成25)年 5月29日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 説田 泰朗	2006(平成18)年 8月 1日	～	2010(平成22)年 5月31日
	2010(平成22)年 7月28日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 岩田 義文	2007(平成19)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
中西 靖忠	2008(平成20)年 3月 7日	～	2009(平成21)年 3月 6日
西藤 公司	2009(平成21)年 5月25日	～	2011(平成23)年 5月30日
鈴木 誠	2010(平成22)年 3月 5日	～	2010(平成22)年10月 6日
中村 共一	2010(平成22)年 3月 5日	～	2015(平成27)年 4月30日
松井 典子	2010(平成22)年 4月 1日	～	2014(平成26)年 3月31日
岩井 哲二	2010(平成22)年 5月26日	～	2011(平成23)年 5月30日
* 堤 俊彦	2010(平成22)年 7月28日	～	2017(平成29)年 3月31日
石川 真恵	2011(平成23)年 5月31日	～	2012(平成24)年 5月30日
洲上 俊則	2011(平成23)年 5月31日	～	2013(平成25)年 3月31日
高橋 勉	2011(平成23)年12月 1日	～	2016(平成28)年 3月31日
岡本 敏美	2012(平成24)年 5月31日	～	2013(平成25)年 5月29日
* 竹内 治彦	2013(平成25)年 2月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
高原 剛	2013(平成25)年 5月30日	～	2015(平成27)年 3月31日
小倉 幸雄	2013(平成25)年12月 1日	～	2016(平成28)年 3月31日
* 渡辺 正典	2014(平成26)年 4月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 古口 博之	2015(平成27)年 5月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
石田 仁	2015(平成27)年 5月31日	～	2016(平成28)年 5月24日
* 中村 博宣	2015(平成27)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
藤野 琢巳	2015(平成27)年 5月31日	～	2016(平成28)年 3月31日
* 宇佐見正史	2016(平成28)年 4月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 高橋 信一	2016(平成28)年 4月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 川上 孝浩	2016(平成28)年 5月25日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 岸 敬也	2016(平成28)年10月25日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 田口 義隆	2016(平成28)年10月25日	～	2017(平成29)年 3月31日

評議員			
井上 孝二	1971(昭和46)年 5月28日	～	2007(平成19)年 5月30日
小川 正二	1971(昭和46)年 5月28日	～	1995(平成 7)年 5月30日
久松 定一	1971(昭和46)年 5月28日	～	1991(平成 3)年 5月30日
三輪 春雄	1971(昭和46)年 5月28日	～	1999(平成11)年 5月30日
大迫 輝通	1974(昭和49)年 5月 1日	～	1995(平成 7)年 1月31日
竹本 憲司	1975(昭和50)年 5月30日	～	2010(平成22)年 5月26日
向井 恵昌	1975(昭和50)年 5月30日	～	1995(平成 7)年 3月31日
浅井 幸男	1983(昭和58)年 5月31日	～	1984(昭和59)年 5月10日
	1987(昭和62)年 2月26日	～	1989(平成 元)年 1月31日
居原 昇治	1983(昭和58)年 5月31日	～	1991(平成 3)年 5月30日
岩井 正一	1983(昭和58)年 5月31日	～	1991(平成 3)年 5月30日
岩田 巖	1983(昭和58)年 5月31日	～	1985(昭和60)年 4月25日
上松 陽助	1983(昭和58)年 5月31日	～	1989(平成 元)年 2月20日
大谷 省三	1983(昭和58)年 5月31日	～	1985(昭和60)年 1月31日
小川 宗一	1983(昭和58)年 5月31日	～	1990(平成 2)年 5月 2日
小倉 満	1983(昭和58)年 5月31日	～	2001(平成13)年 3月 3日
河合 泰治	1983(昭和58)年 5月31日	～	2004(平成16)年 8月13日
河村 利夫	1983(昭和58)年 5月31日	～	1987(昭和62)年 5月30日
桐山 幸夫	1983(昭和58)年 5月31日	～	1991(平成 3)年 5月30日
後藤 琢美	1983(昭和58)年 5月31日	～	2003(平成15)年 5月30日
近藤 道雄	1983(昭和58)年 5月31日	～	1987(昭和62)年 5月30日
佐藤 昇	1983(昭和58)年 5月31日	～	1989(平成 元)年 1月31日
清水 義之	1983(昭和58)年 5月31日	～	2007(平成19)年 5月30日
高橋 滋	1983(昭和58)年 5月31日	～	1995(平成 7)年 5月30日
矢橋 浩吉	1983(昭和58)年 5月31日	～	1997(平成 9)年 7月 8日
高橋 滋	2003(平成15)年 5月31日	～	2004(平成16)年 5月27日
	2008(平成20)年 5月29日	～	2009(平成21)年 5月25日
	2014(平成26)年 5月28日	～	2015(平成27)年 5月30日

評議員			
田口 利夫	1983(昭和58)年 5月31日	～	1998(平成10)年 8月26日
建林 正喜	1983(昭和58)年 5月31日	～	1987(昭和62)年 1月31日
田中 康義	1983(昭和58)年 5月31日	～	2001(平成13)年 7月15日
棚橋 章	1983(昭和58)年 5月31日	～	1996(平成 8)年 5月 2日
長宗我部蓬城	1983(昭和58)年 5月31日	～	1985(昭和60)年 3月31日
土屋 斉	1983(昭和58)年 5月31日	～	1998(平成10)年 3月 3日
西 憲二	1983(昭和58)年 5月31日	～	1995(平成 7)年 5月30日
原 邦雄	1983(昭和58)年 5月31日	～	2004(平成16)年 3月31日
藤田 守	1983(昭和58)年 5月31日	～	1984(昭和59)年 8月31日
	1987(昭和62)年 5月31日	～	1988(昭和63)年 9月14日
	1991(平成 3)年 5月31日	～	1992(平成 4)年 5月20日
	1998(平成10)年 5月29日	～	1999(平成11)年 5月30日
* 堀 富士夫	1983(昭和58)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
松下 裕幸	1983(昭和58)年 5月31日	～	1984(昭和59)年 5月30日
宮川三千雄	1983(昭和58)年 5月31日	～	1989(平成 元)年11月20日
武藤 嘉彦	1983(昭和58)年 5月31日	～	1988(昭和63)年 5月 3日
山田 良造	1983(昭和58)年 5月31日	～	1999(平成11)年 5月30日
米田 清治	1983(昭和58)年 5月31日	～	1999(平成11)年 1月31日
小澤 治郎	1984(昭和59)年 5月31日	～	1993(平成 5)年 2月27日
山田 忠雄	1984(昭和59)年 5月31日	～	1998(平成10)年 3月31日
鈴木 一也	1984(昭和59)年 5月13日	～	1985(昭和60)年 6月11日
	1989(平成 元)年 5月30日	～	1990(平成 2)年 5月28日
	1994(平成 6)年 5月24日	～	1995(平成 7)年 5月30日
鷺見 等曜	1985(昭和60)年 2月27日	～	1987(昭和62)年 1月31日
宇野 勝利	1985(昭和60)年 5月23日	～	2004(平成16)年 3月31日
瀧本 浩俊	1985(昭和60)年 5月23日	～	1987(昭和62)年 5月30日
堀 房夫	1985(昭和60)年 5月23日	～	1999(平成11)年 5月30日
梶本 英夫	1985(昭和60)年 7月26日	～	1986(昭和61)年 7月 1日
岡本 卓二	1986(昭和61)年 7月31日	～	1987(昭和62)年 4月30日
	1990(平成 2)年 5月30日	～	1991(平成 3)年 5月 7日
	1993(平成 5)年10月25日	～	1994(平成 6)年 5月13日
	1987(昭和62)年 5月31日	～	2002(平成14)年 3月31日
小倉 正紀	1987(昭和62)年 5月31日	～	2002(平成14)年 1月31日
沼口 尚	1987(昭和62)年 5月31日	～	2002(平成14)年 3月31日
水上 純孝	1987(昭和62)年 5月31日	～	2002(平成14)年 3月31日
朝田 晃年	1988(昭和63)年 9月22日	～	1999(平成11)年 5月30日
水根 敏夫	1988(昭和63)年 9月22日	～	1989(平成 元)年 5月12日
梶原 拓	1989(平成 元)年 2月23日	～	2005(平成17)年 3月 8日
武井勇四郎	1989(平成 元)年 2月23日	～	1993(平成 5)年 2月27日
藪内 武司	1989(平成 元)年 2月23日	～	1993(平成 5)年 1月31日
	1995(平成 7)年 2月28日	～	2001(平成13)年 1月31日
小川 哲也	1990(平成 2)年 5月30日	～	2003(平成15)年 3月10日
浅野 弘嗣	1991(平成 3)年 5月31日	～	2003(平成15)年 5月30日
* 岩井豊太郎	1991(平成 3)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 小川 信也	1991(平成 3)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
押田 司	1991(平成 3)年 5月31日	～	2001(平成13)年 5月10日
原 整郎	1991(平成 3)年 5月31日	～	1999(平成11)年 5月30日
高畑 正	1992(平成 4)年 5月26日	～	1993(平成 5)年10月 1日
	1995(平成 7)年 5月31日	～	1996(平成 8)年 5月 9日
	1997(平成 9)年 5月28日	～	1998(平成10)年 5月 7日
	2005(平成17)年 5月27日	～	2006(平成18)年 5月30日
池永 輝之	1993(平成 5)年 3月16日	～	2003(平成15)年 1月31日
勝野 尚行	1993(平成 5)年 3月16日	～	2002(平成14)年 1月31日
竹林 信一	1993(平成 5)年 3月16日	～	1994(平成 6)年 3月31日
安部 大成	1994(平成 6)年 5月24日	～	2001(平成13)年 1月31日
飯島 孝	1995(平成 7)年 5月31日	～	1996(平成 8)年 5月 2日
河合 達雄	1995(平成 7)年 5月31日	～	1997(平成 9)年 4月28日
宮崎 修	1995(平成 7)年 5月31日	～	1999(平成11)年 5月30日
安田 益次	1995(平成 7)年 5月31日	～	2015(平成27)年 5月30日
桑原 利幸	1996(平成 8)年 5月29日	～	2009(平成21)年 5月25日
酒井 博世	1996(平成 8)年 5月29日	～	2002(平成14)年 1月31日
渡辺 雄次	1996(平成 8)年 5月29日	～	1997(平成 9)年 5月 8日
* 河合 進一	1997(平成 9)年 5月28日	～	2017(平成29)年 3月31日
遠藤 優	1997(平成 9)年 7月 8日	～	2007(平成19)年 5月30日
* 土屋 嶮	1998(平成10)年 3月 3日	～	2017(平成29)年 3月31日

評議員			
岡安 賢二	1998(平成10)年 4月 1日	～	2005(平成17)年12月 9日
田口義嘉壽	1998(平成10)年11月17日	～	2016(平成28)年 9月22日
谷江 幸雄	1999(平成11)年 2月24日	～	2004(平成16)年 2月29日
	2008(平成20)年 3月 7日	～	2013(平成25)年 1月31日
* 今川 喜章	1999(平成11)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 岩田 義文	1999(平成11)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
恩田秀比良	1999(平成11)年 5月31日	～	2010(平成22)年 5月26日
川瀬 文彦	1999(平成11)年 5月31日	～	2004(平成16)年 1月29日
* 堤 俊彦	1999(平成11)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
西田 勝義	1999(平成11)年 5月31日	～	2000(平成12)年 5月11日
* 三輪 高史	1999(平成11)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
林 新太郎	2000(平成12)年 5月29日	～	2001(平成13)年 5月 9日
	2006(平成18)年 5月30日	～	2007(平成19)年 5月30日
	2013(平成25)年 5月30日	～	2014(平成26)年 5月27日
重田 澄男	2001(平成13)年 2月28日	～	2004(平成16)年 3月31日
野松 敏雄	2001(平成13)年 2月28日	～	2013(平成25)年12月25日
* 小川 敏	2001(平成13)年 5月28日	～	2017(平成29)年 3月31日
高橋 昭次	2001(平成13)年 5月28日	～	2002(平成14)年 5月 9日
田原 邦弘	2001(平成13)年 5月28日	～	2004(平成16)年 5月27日
* 石原 健一	2002(平成14)年 2月26日	～	2008(平成20)年 3月 7日
	2009(平成21)年 3月 6日	～	2010(平成22)年 3月 5日
	2010(平成22)年10月 6日	～	2017(平成29)年 3月31日
黒川 博	2002(平成14)年 2月26日	～	2009(平成21)年 3月 6日
* 田中 良幸	2002(平成14)年 2月26日	～	2017(平成29)年 3月31日
山田 雄司	2002(平成14)年 2月26日	～	2015(平成27)年 5月30日
小関 克弘	2002(平成14)年 5月27日	～	2005(平成17)年 7月31日
津汲 仁	2002(平成14)年 5月27日	～	2003(平成15)年 5月30日
	2007(平成19)年 5月31日	～	2008(平成20)年 5月29日
度会さち子	2002(平成14)年 5月27日	～	2004(平成16)年 3月31日
成田 幸範	2003(平成15)年 3月10日	～	2008(平成20)年 3月 7日
	2009(平成21)年 3月 6日	～	2010(平成22)年 3月 5日
	2003(平成15)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 小川 貴久	2003(平成15)年 5月31日	～	2011(平成23)年 5月30日
北村 一巳	2003(平成15)年 5月31日	～	2007(平成19)年 5月30日
山中 茂樹	2003(平成15)年 5月31日	～	2007(平成19)年 5月30日
河合 恒生	2004(平成16)年 3月 4日	～	2005(平成17)年 3月 8日
* 浅野 照章	2004(平成16)年 5月27日	～	2010(平成22)年 5月26日
	2010(平成22)年 6月 1日	～	2017(平成29)年 3月31日
	2004(平成16)年 5月27日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 一柳 正義	2004(平成16)年 5月27日	～	2007(平成19)年 5月30日
岡本 高廣	2004(平成16)年 5月27日	～	2007(平成19)年 5月30日
川瀬 泰則	2004(平成16)年 5月27日	～	2006(平成18)年 5月30日
木村 隆之	2004(平成16)年 5月27日	～	2012(平成24)年10月29日
野村 弘	2004(平成16)年 5月27日	～	2005(平成17)年 5月27日
	2009(平成21)年 5月25日	～	2010(平成22)年 5月26日
林 敏明	2004(平成16)年 5月27日	～	2007(平成19)年 5月30日
上谷 月子	2005(平成17)年 3月 8日	～	2012(平成24)年 3月31日
* 河合 伸泰	2005(平成17)年 3月 8日	～	2017(平成29)年 3月31日
古田 肇	2005(平成17)年 3月 8日	～	2009(平成21)年 5月25日
松井 典子	2005(平成17)年 8月 8日	～	2014(平成26)年 5月27日
浅野 圭一	2006(平成18)年 5月30日	～	2015(平成27)年 5月30日
* 説田 泰朗	2006(平成18)年 8月 1日	～	2010(平成22)年 5月31日
	2010(平成22)年 7月28日	～	2017(平成29)年 3月31日
	2007(平成19)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 井上 豊秋	2007(平成19)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
岩崎 洋三	2007(平成19)年 5月31日	～	2013(平成25)年 3月31日
岡田 洋子	2007(平成19)年 5月31日	～	2008(平成20)年 3月31日
* 西脇 史雄	2007(平成19)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 平林 佳郎	2007(平成19)年 5月31日	～	2017(平成29)年 3月31日
* 渡辺 正典	2007(平成19)年 5月31日	～	2008(平成20)年 5月29日
	2012(平成24)年 5月30日	～	2017(平成29)年 3月31日
中西 靖忠	2008(平成20)年 3月 7日	～	2009(平成21)年 3月 6日
釣餌 丈志	2008(平成20)年 5月29日	～	2011(平成23)年 5月30日
* 宮川 祐志	2008(平成20)年 5月29日	～	2017(平成29)年 3月31日
西藤 公司	2009(平成21)年 5月25日	～	2011(平成23)年 5月30日
* 武藤 鉄弘	2009(平成21)年 5月25日	～	2017(平成29)年 3月31日
鈴木 誠	2010(平成22)年 3月 5日	～	2010(平成22)年10月 6日

現旧教職員

(敬称略)

(就任順)

教 員	
* 安部 大成	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
伊奈 重誠	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1971(昭和46)年 3月31日
遠藤 三郎	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1972(昭和47)年 3月31日
* 大迫 輝通	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1997(平成 9)年 3月31日
大友 抱璞	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
* 小澤 治郎	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
川崎 七瀬	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
河村 定芳	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1972(昭和47)年 6月10日
* 佐藤 昇	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1992(平成 4)年 3月31日
城宝 正治	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1974(昭和49)年 3月31日
* 鷺見 等曜	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1992(平成 4)年 3月31日
祖父江ゆき子	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
那須 宏	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1979(昭和54)年 1月 3日
* 丹羽 弘	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1994(平成 6)年 3月31日
* 牧 倫	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1982(昭和57)年 4月 1日
矢野 建治	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
* 米田 清治	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1999(平成11)年 1月31日
渡利彦四郎	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
今宮 謙二	1967(昭和42)年 5月 1日 ~ 1971(昭和46)年 3月31日
1967(昭和42)年5月1日から1968(昭和43)年3月31日までは事務職員	
依岡 道子	1967(昭和42)年 6月 1日 ~ 1968(昭和43)年 3月31日
* 浅井 幸男	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1999(平成11)年 3月31日
井上 国勝	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1973(昭和48)年 3月31日
加久間岩夫	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1980(昭和55)年 3月31日
* 勝野 尚行	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 2月11日
小泉 明	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1974(昭和49)年 3月31日
榊原 英城	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 7月31日
佐藤 哲英	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1972(昭和47)年 9月30日
* 鷺見 中嶺	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1982(昭和57)年 4月 1日
* 武井勇四郎	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日
中野効四郎	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1968(昭和43)年 3月31日
西澤 孝	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2009(平成21)年 3月31日
藤安 義勝	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1970(昭和45)年 3月31日
山本 厚男	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 4月17日
* 内田 忠男	1968(昭和43)年 6月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
金子 守	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1981(昭和56)年 3月31日
* 佐野 健治	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日
白柳 夏男	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1977(昭和52)年 3月31日
* 中川 温生	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1997(平成 9)年 3月31日
箕浦 格良	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1970(昭和45)年 3月31日
村松 常司	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1971(昭和46)年 3月31日
* 飯田 繁	1970(昭和45)年 4月 1日 ~ 1984(昭和59)年 3月31日
白井 瑛一	1970(昭和45)年 4月 1日 ~ 1977(昭和52)年 3月31日
名和 統一	1970(昭和45)年 4月 1日 ~ 1978(昭和53)年 7月 8日
* 花井 益一	1970(昭和45)年 4月 1日 ~ 1985(昭和60)年 3月31日
* 山田 勲	1970(昭和45)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日
* 小野 勝敏	1971(昭和46)年 4月 1日 ~ 2009(平成21)年 3月31日
* 池永 輝之	1972(昭和47)年 6月 1日 ~ 2012(平成24)年 3月31日
* 柿本 国弘	1973(昭和48)年 4月 1日 ~ 2011(平成23)年 3月31日
島崎 淳彦	1973(昭和48)年 4月 1日 ~ 1981(昭和56)年 5月 6日
* 藪内 武司	1973(昭和48)年 4月 1日 ~ 2008(平成20)年 3月31日
山田 健治	1973(昭和48)年 4月 1日 ~ 1991(平成 3)年 3月31日
* 建林 正喜	1975(昭和50)年 4月 1日 ~ 1987(昭和62)年 3月31日
福地 和夫	1975(昭和50)年 4月 1日 ~ 2017(平成29)年 3月31日
* 大谷 省三	1976(昭和51)年 4月 1日 ~ 1987(昭和62)年 3月31日
松下 博	1976(昭和51)年 4月 1日 ~ 1987(昭和62)年 3月31日
吉弘 貴	1976(昭和51)年 4月 2日 ~ 1985(昭和60)年10月12日
木下 滋	1977(昭和52)年 4月 1日 ~ 1983(昭和58)年 3月31日
* 酒井 博世	1977(昭和52)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日
田村 耀郎	1977(昭和52)年 4月 1日 ~ 1979(昭和54)年 3月31日
小野 義彦	1978(昭和53)年 4月 1日 ~ 1990(平成 2)年11月19日
谷江 幸雄	1978(昭和53)年 4月 1日 ~ 2017(平成29)年 3月31日
* 菅原 修	1978(昭和53)年 4月 2日 ~ 1990(平成 2)年 3月31日
* 但馬 末雄	1979(昭和54)年 4月 1日 ~ 2011(平成23)年 3月31日

教 員	
中道 寿一	1980(昭和55)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
鈴木 忠士	1981(昭和56)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 1月 6日
山本 隆司	1981(昭和56)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
山田 富貴	1982(昭和57)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年 3月31日
* 鈴木 和蔵	1983(昭和58)年 4月 1日 ~ 1995(平成 7)年 3月31日
千葉 俊一	1983(昭和58)年 4月 1日 ~ 1990(平成 2)年 6月 4日
村田富二郎	1983(昭和58)年 4月 1日 ~ 1992(平成 4)年 3月31日
山田 善久	1983(昭和58)年 4月 1日 ~
石原 健一	1984(昭和59)年 4月 1日 ~
堤 達朗	1984(昭和59)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日
平石 長久	1984(昭和59)年 4月 1日 ~ 1995(平成 7)年 3月31日
1984(昭和59)年 4月 2日 ~ 1992(平成 4)年 3月31日	
* 南 清彦	1984(昭和59)年10月 1日 ~ 1989(平成 元)年 3月31日
加藤 清	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 1990(平成 2)年 3月31日
岩崎(川島)いづみ	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
岡田 知弘	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 2007(平成19)年 3月31日
三羽 光彦	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 1994(平成 6)年 3月31日
* 豊川 卓爾	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
* 宮本 義男	1985(昭和60)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 3月31日
飯島 孝	1986(昭和61)年 4月 1日 ~
宇野 立身	1986(昭和61)年 4月 1日 ~
梅山 秀幸	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
* 新家 茂	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 2014(平成26)年 3月31日
長谷川拓三	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 1995(平成 7)年 3月31日
山田 恒彦	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
山本 喜一	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 1992(平成 4)年 8月17日
黎 波	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
和田 一雄	1986(昭和61)年 4月 1日 ~ 1990(平成 2)年 2月14日
* 黒川 博	1987(昭和62)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年 3月31日
小林 正人	1987(昭和62)年 4月 1日 ~ 2000(平成12)年 3月31日
高橋 正紀	1987(昭和62)年 4月 1日 ~
* 竹林 信一	1987(昭和62)年 4月 1日 ~ 1994(平成 6)年 3月31日
服部 信司	1987(昭和62)年 4月 1日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
溝端佐登史	1987(昭和62)年 4月 1日 ~ 1991(平成 3)年 3月31日
安田 晶彦	1987(昭和62)年 4月 1日 ~
梅田 守彦	1989(平成 元)年 4月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
* 猪平 進	1991(平成 3)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年 3月31日
近藤 真治	1991(平成 3)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 3月31日
佐藤 七郎	1991(平成 3)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日
鈴木 誠	1991(平成 3)年 4月 1日 ~ 2011(平成23)年 3月31日
野松 敏雄	1991(平成 3)年 4月 1日 ~ 2017(平成29)年 3月31日
07カヌキラマット	1991(平成 3)年 4月16日 ~ 1993(平成 5)年 3月31日
岩坂 和幸	1992(平成 4)年 4月 1日 ~
1992(平成 4)年 4月 1日 ~ 2000(平成12)年 3月31日	
太田 正	1992(平成 4)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 3月31日
* 木村 隆之	1992(平成 4)年 4月 1日 ~ 2015(平成27)年 3月31日
竹内 治彦	1992(平成 4)年 4月 1日 ~
鄭 章淵	1992(平成 4)年 4月 1日 ~ 2000(平成12)年 3月31日
宮脇 孝久	1992(平成 4)年 4月 1日 ~ 2016(平成28)年 3月31日
1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 6月18日	
* 河合 恒生	1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 2008(平成20)年 3月31日
古口 博之	1993(平成 5)年 4月 1日 ~
* 朱 實	1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 2000(平成12)年 3月31日
* 成田 幸範	1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 2014(平成26)年 3月31日
前畑 憲子	1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 1996(平成 8)年 3月31日
1993(平成 5)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日	
間仁田幸雄	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
宇佐見正史	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
浦崎佐知子	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
岸 順治	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
* 国分 幸	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 2008(平成20)年 3月31日
* 重田 澄男	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
神保 元二	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 1999(平成11)年 5月27日
杉山 一也	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日	
* 中西 靖忠	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年11月30日

教 員	
中村 共一	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
坂東 俊矢	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 1999(平成11)年 3月31日
平井 東幸	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
山田 珠夫	1994(平成 6)年 4月 1日 ~ 1995(平成 7)年 3月31日
0-7・Iリッ	1994(平成 6)年 4月 1日 ~
稲垣 慶成	1995(平成 7)年 4月 1日 ~
籠 幾緒	1995(平成 7)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
阪野 峯彦	1995(平成 7)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日
佐藤 俊幸	1995(平成 7)年 4月 1日 ~
菅谷 広宣	1995(平成 7)年 4月 1日 ~
杉浦 一平	1995(平成 7)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日
高橋 信一	1995(平成 7)年 4月 1日 ~
中川 裕司	1995(平成 7)年 4月 1日 ~
中島 章宏	1995(平成 7)年 4月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
松山 佳樹	1995(平成 7)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 3月31日
小倉 幸雄	1996(平成 8)年 4月 1日 ~ 2016(平成28)年 3月31日
海野 博	1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 2001(平成13)年 3月31日
岡田 義昭	1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
斎藤 悦子	1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 2010(平成22)年 9月30日
1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 2010(平成22)年 3月31日	
高橋 勉	1997(平成 9)年 4月 1日 ~
中川 秀一	1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
* 青柳 和身	1998(平成10)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年 3月31日
杉原 健一	1998(平成10)年 4月 1日 ~
森 誠一	1998(平成10)年 4月 1日 ~
浅井 澄子	1999(平成11)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
1999(平成11)年 4月 1日 ~	
井戸 伸彦	2001(平成13)年 4月 1日 ~
中井 健一	2001(平成13)年 4月 1日 ~ 2007(平成19)年 3月31日
安井 豊子	2001(平成13)年10月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
加藤由紀子	2002(平成14)年 4月 1日 ~ 2016(平成28)年 7月21日
増山 道康	2002(平成14)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
桑原 茂樹	2003(平成15)年 4月 1日 ~
松野 修	2003(平成15)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年10月31日
真野 典子	2003(平成15)年10月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
山田壮志郎	2004(平成16)年 4月 1日 ~ 2010(平成22)年 3月31日
吉岡 久晴	2004(平成16)年 4月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
2005(平成17)年 4月 1日 ~ 2006(平成18)年 3月31日	
山田 武司	2005(平成17)年 4月 1日 ~
渡辺 貴裕	2005(平成17)年 4月 1日 ~ 2010(平成22)年 3月31日
樋下田邦子	2006(平成18)年 9月21日 ~ 2017(平成29)年 3月31日
伊藤 敏雄	2007(平成19)年 4月 1日 ~
大野 貴司	2007(平成19)年 4月 1日 ~ 2016(平成28)年 3月31日
神谷 拓	2007(平成19)年 4月 1日 ~ 2011(平成23)年 3月31日
佐藤八千子	2007(平成19)年 4月 1日 ~ 2016(平成28)年 3月31日
梅木真寿郎	2010(平成22)年 4月 1日 ~ 2014(平成26)年 3月31日
徳永 俊太	2010(平成22)年 4月 1日 ~ 2015(平成27)年 3月31日
菱沼 公嗣	2010(平成22)年 7月 1日 ~ 2011(平成23)年 3月31日
石坂信一郎	2011(平成23)年 4月 1日 ~
伊藤 嘉人	2011(平成23)年 4月 1日 ~
今井 良幸	2011(平成23)年 4月 1日 ~ 2015(平成27)年 3月31日
勝田 美穂	2011(平成23)年 4月 1日 ~
菊本 舞	2011(平成23)年 4月 1日 ~
塚谷 文武	2011(平成23)年 4月 1日 ~ 2013(平成25)年 3月31日
篠田 知之	2012(平成24)年 4月 1日 ~
焼田 紗	2012(平成24)年 4月 1日 ~ 2015(平成27)年 3月31日
崔 宇	2013(平成25)年 4月 1日 ~
中西 大輔	2013(平成25)年 4月 1日 ~
藤井えりの	2013(平成25)年 4月 1日 ~
摺斐 祐治	2014(平成26)年 4月 1日 ~
韓 金江	2014(平成26)年 4月 1日 ~
高木 博史	2014(平成26)年 4月 1日 ~
有森 俊文	2014(平成26)年 9月 1日 ~
田中 紀子	2015(平成27)年 4月 1日 ~

教 員	
為房 牧	2015(平成27)年 4月 1日 ~
野崎 道哉	2015(平成27)年 4月 1日 ~
水野和佳奈	2015(平成27)年 4月 1日 ~
佐々木喜一郎	2016(平成28)年 4月 1日 ~
高橋 利行	2016(平成28)年 4月 1日 ~
原田 理人	2016(平成28)年 4月 1日 ~
三和 元	2016(平成28)年 4月 1日 ~
横倉 真弥	2016(平成28)年 9月21日 ~

※は名誉教授

事務職員	
大堀やよい	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1967(昭和42)年 8月31日
小倉(伊野)多鶴子	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1972(昭和47)年 6月30日
小関 克弘	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 2005(平成17)年 7月31日
国島 敏彦	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1970(昭和45)年 4月30日
小寺 美咲	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
佐々木元昭	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
杉浦(小寺)好子	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1971(昭和46)年12月31日
野村 春二	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1974(昭和49)年 3月31日
北條 秀明	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1970(昭和45)年 3月31日
水上 純孝	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
山崎 治雄	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
度会(高野)さち子	1967(昭和42)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
松尾 健吉	1967(昭和42)年 4月17日 ~ 1967(昭和42)年 8月31日
1967(昭和42)年10月21日 ~ 1984(昭和59)年 3月31日	
佐久間 亨	1968(昭和43)年 2月 1日 ~ 1971(昭和46)年 5月 2日
小倉 正紀	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 2002(平成14)年 3月31日
小里 圭子	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1970(昭和45)年12月31日
勝野 充行	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
野村 成章	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1998(平成10)年 3月31日	
松野 祐治	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
向井 恵昌	1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1995(平成 7)年 3月31日
1968(昭和43)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日	
佐藤 貞司	1968(昭和43)年 5月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日
1968(昭和43)年 6月 1日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日	
1968(昭和43)年 6月 3日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日	
宇野 勝利	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 2004(平成16)年 3月31日
1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 2000(平成12)年12月31日	
関屋 健太郎	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1973(昭和48)年 1月22日
1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1969(昭和44)年 6月 1日	
1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1978(昭和53)年12月31日	
1969(昭和44)年 4月10日 ~ 1969(昭和44)年 7月31日	
1969(昭和44)年 4月10日 ~ 1985(昭和60)年 3月31日	
1969(昭和44)年 4月10日 ~ 1981(昭和56)年 3月31日	
1969(昭和44)年 5月 1日 ~ 1969(昭和44)年 6月30日	
1969(昭和44)年 6月 1日 ~ 1984(昭和59)年 3月31日	

現旧教職員

事務職員

浅野 栄子	1972(昭和47)年 4月 1日	~	1976(昭和51)年 2月29日
浅野 照章	1972(昭和47)年 4月 1日	~	2010(平成22)年 5月31日
林 幹雄	1972(昭和47)年 4月 1日	~	1983(昭和58)年 3月31日
伊藤 敏雄	1972(昭和47)年10月 1日	~	1997(平成 9)年 1月 6日
高橋 哲朗	1972(昭和47)年10月 1日	~	2006(平成18)年 3月31日
廣瀬つや子	1972(昭和47)年10月 1日	~	1974(昭和49)年 5月31日
石川美知子	1972(昭和47)年12月 1日	~	1975(昭和50)年 4月30日
松井 典子	1973(昭和48)年 4月 1日	~	1981(昭和56)年12月31日
武藤(雄井)美也子	1973(昭和48)年 4月 1日	~	1978(昭和53)年11月30日
柳瀬 則子	1973(昭和48)年 4月 1日	~	1975(昭和50)年 3月31日
青山 博光	1974(昭和49)年 4月 1日	~	2011(平成23)年 3月31日
大橋 信二	1975(昭和50)年 4月 1日	~	1999(平成11)年 6月10日
田中真寿実	1975(昭和50)年 4月 1日	~	2013(平成25)年 3月31日
岡本 高廣	1975(昭和50)年 6月 9日	~	2015(平成27)年 3月31日
松井(岡田)典子	1976(昭和51)年 4月 1日	~	2015(平成27)年 3月31日
井上(堀)邦江	1977(昭和52)年 4月 1日	~	2007(平成19)年 3月31日
鈴木 衛	1977(昭和52)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
岡田(高井)洋子	1979(昭和54)年 4月 1日	~	2008(平成20)年 3月31日
堀部 嘉雄	1979(昭和54)年 4月 1日	~	2001(平成13)年 4月19日
岡安 和子	1979(昭和54)年 4月 1日	~	1984(昭和59)年 3月31日
岡田 吉孝	1981(昭和56)年 4月 1日	~	1984(昭和59)年 3月31日
三尾 美紀	1981(昭和56)年 4月 1日	~	2011(平成23)年 3月31日
釣餌 丈志	1982(昭和57)年 4月 1日	~	
宮川 祐志	1983(昭和58)年 4月 1日	~	
大音 浩一	1984(昭和59)年 4月 1日	~	
高比良幸司	1985(昭和60)年 4月 1日	~	
渡辺 正典	1985(昭和60)年 4月 1日	~	
安田 天	1986(昭和61)年 4月 1日	~	
後藤久美子	1988(昭和63)年 4月 1日	~	1992(平成 4)年 3月31日
安藤 彰記	1989(平成 元)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
竹内(小林)律美	1990(平成 2)年 4月 1日	~	1998(平成10)年 3月31日
森本 堅二	1990(平成 2)年 4月 1日	~	
林(小栗)京子	1991(平成 3)年 4月 1日	~	2005(平成17)年 3月31日
池尾 昌紀	1992(平成 4)年 4月 1日	~	2010(平成22)年 3月31日
宮町 優子	1992(平成 4)年 4月 1日	~	2005(平成17)年 3月31日
高木(勝部)恭子	1993(平成 5)年 4月 1日	~	
水野 謙二	1993(平成 5)年 4月 1日	~	1993(平成 5)年 8月31日
安村 千春	1993(平成 5)年 4月 1日	~	
大音(作山)和泉	1993(平成 5)年 9月 1日	~	
田口 正信	1994(平成 6)年 4月 1日	~	2003(平成15)年 3月31日
竹野谷(田比野)美紀	1994(平成 6)年 4月 1日	~	1999(平成11)年 3月31日
塚原 康之	1994(平成 6)年 4月 1日	~	
坂 覚則	1994(平成 6)年 4月 1日	~	
藤田(磯谷)玲子	1994(平成 6)年 4月 1日	~	2008(平成20)年 3月31日
大江 春彦	1995(平成 7)年 4月 1日	~	
清水(木村)恵美	1995(平成 7)年 4月 1日	~	2004(平成16)年10月31日
濱崎 正人	1995(平成 7)年 4月 1日	~	
梅山(安井)理江子	1996(平成 8)年 4月 1日	~	1999(平成11)年 2月13日
大橋 雄一	1996(平成 8)年 4月 1日	~	
堀江 淳也	1996(平成 8)年 4月 1日	~	
杉本 孝行	1997(平成 9)年 4月 1日	~	
伊藤(熊崎)仁美	1998(平成10)年 4月 1日	~	2015(平成27)年 3月31日
尾崎(花村)和美	1998(平成10)年 4月 1日	~	
吉形 高志	1998(平成10)年 4月 1日	~	
坂(加藤)美穂	1999(平成11)年 4月 1日	~	
吉田 大介	2002(平成14)年 4月 1日	~	
小森 茂	2008(平成20)年 3月 1日	~	
馬久地 亜季	2008(平成20)年 4月 1日	~	
河出 裕智	2008(平成20)年 4月14日	~	2011(平成23)年 3月31日
◆河村 道彦	2009(平成21)年 4月 1日	~	
◆平田 勝彦	2009(平成21)年 4月 1日	~	
尾崎 亜紀	2010(平成22)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 1月 7日
◆川島 弘治	2010(平成22)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
伊藤 範子	2011(平成23)年 4月 1日	~	

事務職員

◆川崎 千明	2011(平成23)年 4月 1日	~	
説田 千里	2011(平成23)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 6月30日
田中 俊彦	2011(平成23)年 4月 1日	~	
棚橋 智彦	2011(平成23)年 4月 1日	~	2013(平成25)年 3月31日
富永 和哉	2011(平成23)年 4月 1日	~	
◆上田 和宏	2012(平成24)年 4月 1日	~	
◆勝俣 康之	2012(平成24)年 4月 1日	~	2013(平成25)年 3月31日
田村 真梨	2012(平成24)年 4月 1日	~	
田部 良司	2014(平成26)年 4月 1日	~	
堀 有沙	2014(平成26)年 4月 1日	~	
鈴木 美保	2014(平成26)年 5月 1日	~	2016(平成28)年 2月29日
安藤 里沙	2015(平成27)年 1月 1日	~	
清棲 万里	2015(平成27)年 4月 1日	~	
◆品田 直宏	2015(平成27)年 4月 1日	~	
◆寺田 亮太	2015(平成27)年 4月 1日	~	
◆田中 透	2016(平成28)年 4月 1日	~	
◆中村 有壮	2016(平成28)年 4月 1日	~	
天川 伊織	2017(平成29)年 2月 1日	~	

◆はスポーツ指導職員

嘱託・専門員

小林 一郎	1985(昭和60)年 4月 1日	~	2012(平成24)年 3月31日
青木 恵子	1995(平成 7)年 4月10日	~	1997(平成 9)年 7月31日
中原 美和	1997(平成 9)年 9月 1日	~	1999(平成11)年 8月31日
寺井 稔	1997(平成 9)年10月 1日	~	1999(平成11)年 3月31日
羽根田 泉	1999(平成11)年 6月 1日	~	1999(平成11)年 9月30日
吉田 大介	2001(平成13)年 4月 1日	~	2002(平成14)年 3月31日
福田 輝久	2002(平成14)年 3月25日	~	2005(平成17)年 3月31日
河村 道彦	2003(平成15)年 4月 1日	~	2009(平成21)年 3月31日
塚田 勝	2003(平成15)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
馬久地 浩	2004(平成16)年 4月 1日	~	2007(平成19)年 3月31日
栗田 義之	2004(平成16)年 5月 1日	~	2006(平成18)年 3月31日
加藤 容子	2005(平成17)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
山田 美代	2005(平成17)年 4月 1日	~	2010(平成22)年 1月31日
川島 弘治	2006(平成18)年 4月 1日	~	2010(平成22)年 3月31日
渡瀬 達郎	2006(平成18)年 4月 1日	~	2006(平成18)年12月31日
大脇 敬太	2007(平成19)年 3月 1日	~	2011(平成23)年 3月31日
梅原 慶子	2007(平成19)年 4月 1日	~	
杉島 茂樹	2007(平成19)年 4月 1日	~	2007(平成19)年 6月30日
渡邊 舞	2007(平成19)年 4月 1日	~	2011(平成23)年 3月31日
岡崎 久	2008(平成20)年 4月15日	~	2010(平成22)年 3月31日
佐々木喜一郎	2008(平成20)年10月 1日	~	2016(平成28)年 3月31日
富士 真弓	2008(平成20)年10月 1日	~	
高橋 清生	2009(平成21)年 4月 1日	~	2012(平成24)年12月31日
小木曾隆臣	2010(平成22)年 4月 1日	~	2014(平成26)年 3月31日
川崎 千明	2010(平成22)年 4月 1日	~	2011(平成23)年 3月31日
清水 桂子	2010(平成22)年 7月 1日	~	
勝俣 康之	2011(平成23)年 4月 1日	~	2012(平成24)年 3月31日
岡部 泰典	2011(平成23)年 4月22日	~	2011(平成23)年 6月30日
熊沢 一朋	2011(平成23)年 4月22日	~	2012(平成24)年 3月21日
小松 守夫	2011(平成23)年 4月22日	~	2012(平成24)年 3月21日
近藤 孝夫	2011(平成23)年 4月22日	~	2012(平成24)年 3月21日
橋本 資治	2011(平成23)年 4月22日	~	2012(平成24)年 3月21日
杉本 俊	2011(平成23)年 8月 1日	~	2012(平成24)年 3月21日
小川 尚紀	2011(平成23)年10月 1日	~	
小林 武司	2012(平成24)年 4月 1日	~	
酒井 則雄	2012(平成24)年 4月16日	~	2013(平成25)年 3月31日
後藤真紗子	2012(平成24)年 4月26日	~	2012(平成24)年 7月31日
吉田 政司	2012(平成24)年 5月17日	~	2013(平成25)年 1月24日
岩田 啓幸	2012(平成24)年 7月17日	~	2013(平成25)年 3月31日
河村 愛子	2012(平成24)年 9月11日	~	2013(平成25)年 3月31日
井上 香	2013(平成25)年 4月 1日	~	
寺田 亮太	2014(平成26)年 5月 1日	~	2015(平成27)年 3月31日

嘱託・専門員

小浦 光代	2014(平成26)年10月 1日	~	
荒木 優治	2015(平成27)年 4月 1日	~	2016(平成28)年 3月31日
臼井 洋介	2016(平成28)年 4月 1日	~	
木庭 啓	2016(平成28)年12月 1日	~	

用務員

石川 一夫	1967(昭和42)年 6月 1日	~	1967(昭和42)年 8月31日
寺岡利三郎	1967(昭和42)年 6月 1日	~	1967(昭和42)年 8月31日
湊谷繁治郎	1967(昭和42)年 6月 1日	~	1974(昭和49)年 9月19日
湊谷 富子	1967(昭和42)年 9月 1日	~	1983(昭和58)年12月 5日
富田 秀吉	1968(昭和43)年 4月 1日	~	1984(昭和59)年 3月31日
上林 保	1968(昭和43)年 6月 1日	~	1969(昭和44)年 3月31日
山田 武男	1972(昭和47)年 4月 1日	~	1979(昭和54)年12月15日
古川 登	1974(昭和49)年 9月 1日	~	1981(昭和56)年 3月31日

歴代役職者

(敬称略)

年 度	副学長(学生募集)	副学長(地域連携)	経済学部長	大学院 経営学研究科長	経営学部長	留学生別科長
1967(昭和42)			伊奈 重誠			
1968(昭和43)			伊奈 重誠			
1969(昭和44)			城宝 正治			
1970(昭和45)			城宝 正治 / 名和 統一			
1971(昭和46)			花井 益一 / 米田 清治			
1972(昭和47)			米田 清治			
1973(昭和48)			米田 清治			
1974(昭和49)			大迫 輝通			
1975(昭和50)			大迫 輝通			
1976(昭和51)			大迫 輝通			
1977(昭和52)			大迫 輝通			
1978(昭和53)			大迫 輝通			
1979(昭和54)			浅井 幸男			
1980(昭和55)			浅井 幸男			
1981(昭和56)			浅井 幸男			
1982(昭和57)			浅井 幸男			
1983(昭和58)			浅井 幸男			
1984(昭和59)			浅井 幸男 / 小澤 治郎			
1985(昭和60)			小澤 治郎			
1986(昭和61)			小澤 治郎			
1987(昭和62)			小澤 治郎			
1988(昭和63)			小澤 治郎			
1989(平成元)			小澤 治郎 / 藪内 武司			
1990(平成 2)			藪内 武司			
1991(平成 3)			藪内 武司			
1992(平成 4)			藪内 武司 / 池永 輝之			
1993(平成 5)			池永 輝之			
1994(平成 6)			池永 輝之		飯島 孝	
1995(平成 7)			池永 輝之		飯島 孝 / 酒井 博世	
1996(平成 8)			池永 輝之		酒井 博世	
1997(平成 9)			池永 輝之		酒井 博世	
1998(平成10)			池永 輝之 / 谷江 幸雄		酒井 博世	
1999(平成11)			谷江 幸雄		酒井 博世	
2000(平成12)			谷江 幸雄		酒井 博世	
2001(平成13)			谷江 幸雄	酒井 博世 / 黒川 博	酒井 博世 / 黒川 博	石原 健一 / 成田 幸範
2002(平成14)			谷江 幸雄	黒川 博 / 成田 幸範	黒川 博 / 成田 幸範	成田 幸範 / 高橋 勉
2003(平成15)			谷江 幸雄 / 石原 健一	成田 幸範	成田 幸範	高橋 勉
2004(平成16)			石原 健一	成田 幸範	成田 幸範	高橋 勉
2005(平成17)			石原 健一	成田 幸範	成田 幸範	高橋 勉 / 岩坂 和幸
2006(平成18)			石原 健一	成田 幸範	成田 幸範	岩坂 和幸
2007(平成19)			石原 健一 / 木村 隆之	成田 幸範 / 野松 敏雄	成田 幸範 / 野松 敏雄	岩坂 和幸 / 宇佐見 正史
2008(平成20)			木村 隆之	野松 敏雄	野松 敏雄	宇佐見 正史
2009(平成21)			木村 隆之	野松 敏雄	野松 敏雄	宇佐見 正史 / 小倉 幸雄
2010(平成22)			木村 隆之	野松 敏雄	野松 敏雄	小倉 幸雄
2011(平成23)			木村 隆之 / 高橋 勉	野松 敏雄	野松 敏雄	小倉 幸雄 / 古口 博之
2012(平成24)	中村 共一	竹内 治彦	高橋 勉	野松 敏雄	野松 敏雄	古口 博之
2013(平成25)	中村 共一	竹内 治彦	高橋 勉	野松 敏雄 / 小倉 幸雄	野松 敏雄 / 小倉 幸雄	古口 博之
2014(平成26)	中村 共一	竹内 治彦	高橋 勉	小倉 幸雄	小倉 幸雄	古口 博之
2015(平成27)	中村 共一 / 古口 博之	竹内 治彦	高橋 勉	小倉 幸雄	小倉 幸雄	古口 博之 / 大野 貴司
2016(平成28)	古口 博之	竹内 治彦	宇佐見 正史	小倉 幸雄	小倉 幸雄	安田 晶彦
2017(平成29)	高橋 正紀	高橋 利行	宇佐見 正史	高橋 信一	高橋 信一	安田 晶彦

※ 1 経営学部長は、2001(平成13)年4月1日より大学院経営学研究科長を兼務
 ※ 2 教務部長は、2001(平成13)年4月1日より留学生別科長を兼務
 ※ 3 学生部長は、2005(平成17)年11月30日まで就職委員長を兼務。2005(平成17)年12月1日よりキャリア支援部長新設
 ※ 4 図書館長は、2013(平成25)年12月1日より副学長(地域連携担当)が兼務

教務部長	学生部長	キャリア支援部長	図書館長	事務局長
牧 倫	伊奈 重誠		城宝 正治	野村 正三 (事務局長事務取扱)
牧 倫 (代理 鷺見等曜)	矢野 建治 (代理 丹羽弘)		城宝 正治 / 米田 清治	野村 春二 (事務局長心得)
鷺見 等曜	佐藤 昇		米田 清治	野村 春二 (事務局長心得)
鷺見 等曜 / 大迫 輝通	佐藤 昇 / 丹羽 弘		米田 清治 / 飯田 繁	野村 春二 (事務局長心得)
大迫 輝通	丹羽 弘		飯田 繁 / 佐藤 昇	野村 春二 (事務局長心得)
大迫 輝通 / 山本 厚男	丹羽 弘 / 浅井 幸男		佐藤 昇 / 白柳 夏男	野村 春二 (事務局長心得) / 長宗我部 蓬城
山本 厚男	浅井 幸男		白柳 夏男	長宗我部 蓬城
山本 厚男 / 小澤 治郎	浅井 幸男		白柳 夏男 / 金子 守	長宗我部 蓬城
小澤 治郎	浅井 幸男		金子 守	長宗我部 蓬城
小澤 治郎 / 白井 瑛一	浅井 幸男 / 安部 大成		金子 守	長宗我部 蓬城
勝野 尚行	安部 大成		金子 守	長宗我部 蓬城
勝野 尚行 / 内田 忠男	安部 大成 / 武井 勇四郎		金子 守 / 丹羽 弘	長宗我部 蓬城
内田 忠男	武井 勇四郎		丹羽 弘	長宗我部 蓬城
内田 忠男 / 藪内 武司	武井 勇四郎 / 山田 勲		丹羽 弘 / 松下 博	長宗我部 蓬城
藪内 武司	山田 勲		松下 博	長宗我部 蓬城
藪内 武司 / 池永 輝之	山田 勲 / 佐野 健治		松下 博 / 中川 温生	長宗我部 蓬城
池永 輝之	佐野 健治		中川 温生	長宗我部 蓬城
池永 輝之 / 山田 健治	佐野 健治 / 西沢 孝		中川 温生 / 武井 勇四郎	長宗我部 蓬城
山田 健治	西沢 孝		武井 勇四郎	向井 恵昌 (事務局長心得)
山田 健治 / 但馬 末雄	西沢 孝 / 小野 勝敏		武井 勇四郎 / 村田 富二郎	向井 恵昌 (事務局長心得)
但馬 末雄	小野 勝敏		村田 富二郎	向井 恵昌
但馬 末雄 / 酒井 博世	小野 勝敏 / 鈴木 忠士		村田 富二郎 / 和田 一雄	向井 恵昌
酒井 博世	鈴木 忠士		和田 一雄 / 山田 恒彦	向井 恵昌
酒井 博世 / 谷江 幸雄	鈴木 忠士 / 福地 和夫		山田 恒彦	向井 恵昌
谷江 幸雄	福地 和夫		山田 恒彦	向井 恵昌
谷江 幸雄 / 黒川 博	福地 和夫 / 梅山 秀幸		山田 恒彦 / 内田 忠男	向井 恵昌
黒川 博	梅山 秀幸		内田 忠男	向井 恵昌
黒川 博	梅山 秀幸		内田 忠男	向井 恵昌
黒川 博 / 木村 隆之	梅山 秀幸 / 山田 富貴		内田 忠男 / 平井 東幸	原 邦雄
木村 隆之	山田 富貴		平井 東幸	原 邦雄
木村 隆之 / 野松 敏雄	山田 富貴 / 高橋 正紀		平井 東幸 / 河合 恒生	原 邦雄
野松 敏雄	高橋 正紀		河合 恒生	原 邦雄
野松 敏雄 / 石原 健一	高橋 正紀 / 古口 博之		河合 恒生 / 山田 勲	原 邦雄
石原 健一	古口 博之		山田 勲	原 邦雄
石原 健一 / 成田 幸範	古口 博之 / 国分 幸		山田 勲 / 新家 茂	原 邦雄
成田 幸範 / 高橋 勉	国分 幸		新家 茂	原 邦雄
高橋 勉	国分 幸 / 西沢 孝		新家 茂 / 猪平 進	原 邦雄
高橋 勉	西沢 孝		猪平 進	浅野 照章
高橋 勉 / 岩坂 和幸	西沢 孝 / 岸 順治	竹内 治彦	猪平 進 / 三羽 光彦	浅野 照章
岩坂 和幸	岸 順治	竹内 治彦	三羽 光彦 / 柿本 国弘	浅野 照章
岩坂 和幸 / 宇佐見 正史	岸 順治 / 福地 和夫	竹内 治彦	柿本 国弘 / 中村 共一	浅野 照章
宇佐見 正史	福地 和夫	竹内 治彦	中村 共一	浅野 照章
宇佐見 正史 / 小倉 幸雄	福地 和夫 / 高橋 正紀	竹内 治彦	中村 共一 / 斎藤 悦子	浅野 照章
小倉 幸雄	高橋 正紀	竹内 治彦	斎藤 悦子 / 新家 茂	松井 典子
小倉 幸雄 / 古口 博之	高橋 正紀 / 山田 武司	竹内 治彦	新家 茂 / 佐藤 俊幸	松井 典子
古口 博之	山田 武司	竹内 治彦	佐藤 俊幸	松井 典子
古口 博之	山田 武司 / 杉山 一也	竹内 治彦 / 岩坂 和幸	佐藤 俊幸 / 竹内 治彦	松井 典子
古口 博之	杉山 一也	岩坂 和幸	竹内 治彦	渡辺 正典
古口 博之 / 大野 貴司	杉山 一也	岩坂 和幸	竹内 治彦	渡辺 正典
安田 晶彦	森 誠一	中川 裕司	竹内 治彦	渡辺 正典
安田 晶彦	森 誠一	中川 裕司	高橋 利行	渡辺 正典

歴代親和会・歴代校友会 会長

■ 歴代親和会会長

(敬称略)

初代	小川 正二	1967 (昭和 42) 年 4 月	～	1971 (昭和 46) 年 3 月
第 2 代	内藤 芳雄	1971 (昭和 46) 年 4 月	～	1972 (昭和 47) 年 3 月
第 3 代	杉原房次郎	1972 (昭和 47) 年 4 月	～	1973 (昭和 48) 年 3 月
第 4 代	広瀬 定義	1973 (昭和 48) 年 4 月	～	1975 (昭和 50) 年 3 月
第 5 代	松浦 宗一	1975 (昭和 50) 年 4 月	～	1977 (昭和 52) 年 3 月
第 6 代	岩井 義男	1977 (昭和 52) 年 4 月	～	1978 (昭和 53) 年 3 月
第 7 代	伊藤房次郎	1978 (昭和 53) 年 4 月	～	1980 (昭和 55) 年 3 月
第 8 代	高岡 義正	1980 (昭和 55) 年 4 月	～	1982 (昭和 57) 年 3 月
第 9 代	松下 裕幸	1982 (昭和 57) 年 4 月	～	1984 (昭和 59) 年 3 月
第 10 代	山岡 泰利	1984 (昭和 59) 年 4 月	～	1987 (昭和 62) 年 3 月
第 11 代	杉野 茂時	1987 (昭和 62) 年 4 月	～	1988 (昭和 63) 年 3 月
第 12 代	牧田 茂	1988 (昭和 63) 年 4 月	～	1989 (平成 元) 年 3 月
第 13 代	北 量一	1989 (平成 元) 年 4 月	～	1990 (平成 2) 年 3 月
第 14 代	祖父江正義	1990 (平成 2) 年 4 月	～	1991 (平成 3) 年 3 月
第 15 代	近藤 明夫	1991 (平成 3) 年 4 月	～	1992 (平成 4) 年 3 月
第 16 代	中島 正俊	1992 (平成 4) 年 4 月	～	1993 (平成 5) 年 3 月
第 17 代	田中 正雄	1993 (平成 5) 年 4 月	～	1994 (平成 6) 年 3 月
第 18 代	中島 彪	1994 (平成 6) 年 4 月	～	1996 (平成 8) 年 3 月
第 19 代	今津 和宏	1996 (平成 8) 年 4 月	～	1997 (平成 9) 年 3 月
第 20 代	小門 弘勝	1997 (平成 9) 年 4 月	～	1998 (平成 10) 年 3 月
第 21 代	光門 洋和	1998 (平成 10) 年 4 月	～	1999 (平成 11) 年 3 月
第 22 代	山中 均	1999 (平成 11) 年 4 月	～	2000 (平成 12) 年 3 月
第 23 代	河村 武男	2000 (平成 12) 年 4 月	～	2001 (平成 13) 年 3 月
第 24 代	勝野 勲	2001 (平成 13) 年 4 月	～	2002 (平成 14) 年 3 月
第 25 代	井上 隆治	2002 (平成 14) 年 4 月	～	2004 (平成 16) 年 3 月
第 26 代	畑中 孝夫	2004 (平成 16) 年 4 月	～	2005 (平成 17) 年 3 月
第 27 代	飯田 操	2005 (平成 17) 年 4 月	～	2006 (平成 18) 年 3 月
第 28 代	鈴木 貴宣	2006 (平成 18) 年 4 月	～	2008 (平成 20) 年 3 月
第 29 代	遠藤邦比古	2008 (平成 20) 年 4 月	～	2009 (平成 21) 年 3 月
第 30 代	堀田 浩一	2009 (平成 21) 年 4 月	～	2010 (平成 22) 年 3 月
第 31 代	佐藤 雄一	2010 (平成 22) 年 4 月	～	2011 (平成 23) 年 3 月
第 32 代	土井田直也	2011 (平成 23) 年 4 月	～	2013 (平成 25) 年 3 月
第 33 代	伊藤 大治	2013 (平成 25) 年 4 月	～	2014 (平成 26) 年 3 月
第 34 代	高橋 幸雄	2014 (平成 26) 年 4 月	～	2015 (平成 27) 年 3 月
第 35 代	中村謙一郎	2015 (平成 27) 年 4 月	～	2017 (平成 29) 年 3 月

■ 歴代校友会会長

(敬称略)

初代	名和 統一	1971 (昭和 46) 年 4 月	～	1972 (昭和 47) 年 1 月
第 2 代	飯田 繁	1972 (昭和 47) 年 2 月	～	1979 (昭和 54) 年 11 月
第 3 代	竹本 憲司	1979 (昭和 54) 年 12 月	～	1991 (平成 3) 年 11 月
第 4 代	堀 富士夫	1991 (平成 3) 年 12 月	～	2003 (平成 15) 年 10 月
第 5 代	恩田秀比良	2003 (平成 15) 年 11 月	～	2009 (平成 21) 年 10 月
第 6 代	安田 良邦	2009 (平成 21) 年 11 月	～	現在

協定締結先

■ 自治体等との地域連携協定

締結日	締結先	協定名
2003 (平成 15) 年 4 月 1 日	岐阜県	地域貢献協力協定書
2003 (平成 15) 年 4 月 1 日	大垣市	協定書
2003 (平成 15) 年 4 月 1 日	揖斐川町	協定書
2004 (平成 16) 年 4 月 1 日	高山市	協定書
2006 (平成 18) 年 4 月 7 日	下呂市、益田地区商工会連絡協議会、下呂建設業協会	下呂市における地域連携協定書
2006 (平成 18) 年 5 月 22 日	美濃加茂市	地域連携協定書
2006 (平成 18) 年 5 月 22 日	坂祝町	まちづくり連携協定書
2008 (平成 20) 年 7 月 28 日	郡上市	郡上市と岐阜経済大学との連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 2 月 20 日	海津市	海津市と岐阜経済大学との連携に関する協定書
2016 (平成 28) 年 8 月 10 日	山県市	山県市と岐阜経済大学との連携に関する協定書
2016 (平成 28) 年 10 月 1 日	岐阜県	岐阜県と岐阜経済大学との就職支援に関する協定書

■ 高校との連携協定一覧

締結日	締結先	協定名
2009 (平成 21) 年 3 月 5 日	岐阜県立大垣桜高等学校	岐阜県立大垣桜高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 3 月 5 日	岐阜県立揖斐高等学校	岐阜県立揖斐高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 3 月 5 日	岐阜県立大垣商業高等学校	岐阜県立大垣商業高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 3 月 5 日	岐阜県立大垣養老高等学校	岐阜県立大垣養老高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 3 月 5 日	岐阜県立海津明誠高等学校	岐阜県立海津明誠高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2012 (平成 24) 年 2 月 7 日	岐阜県立岐南工業高等学校	岐阜県立岐南工業高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2012 (平成 24) 年 5 月 7 日	岐阜県立飛騨高山高等学校	岐阜県立飛騨高山高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2012 (平成 24) 年 10 月 18 日	彦根総合高等学校	彦根総合高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書
2013 (平成 25) 年 4 月 23 日	岐阜県立不破高等学校	岐阜県立不破高等学校及び岐阜経済大学の教育連携に関する協定書

■ 大学との連携協定一覧

締結日	締結先	協定名
1999 (平成 11) 年 7 月 7 日	上海財経大学 (中国)	教育学術協定
1999 (平成 11) 年 8 月 6 日	ブルゴーニュ大学 (仏)	学生交換協定
1999 (平成 11) 年 8 月 18 日	沖縄大学	学生の交流に関する協定
2000 (平成 12) 年 3 月 8 日	ハワイ大学マノア校アウトリージカレッジ (米)	学生交換協定
2000 (平成 12) 年 11 月 2 日	酪農学園大学	学生交換協定 2012 (平成 24) 年 3 月まで
2003 (平成 15) 年 8 月 20 日	岐阜市および県内の 11 大学	学官連携協定書
2008 (平成 20) 年 4 月 1 日	江西師範大学 (中国)	教育学術協定
2010 (平成 22) 年 11 月 30 日	国立大学法人岐阜大学地域科学部、岐阜市立女子短期大学	岐阜経済大学、国立大学法人岐阜大学地域科学部、岐阜市立女子短期大学の連携に関する協定書
2015 (平成 27) 年 8 月 19 日	岐阜聖徳学園大学、岐阜聖徳学園大学短期大学部	岐阜聖徳学園大学・岐阜聖徳学園大学短期大学部及び岐阜経済大学の共同SDに関する協定書
2016 (平成 28) 年 4 月 1 日	南昌航空大学 (中国)	学生交流協定
2016 (平成 28) 年 7 月	江西財経大学 (中国)	学生交流協定
2016 (平成 28) 年 11 月 25 日	ダナン大学 (ベトナム)	教育交流及び東南アジア特別奨学生に関する協定

■ その他の機関との協定一覧

締結日	締結先	協定名
2005 (平成 17) 年 3 月 1 日	株式会社大垣共立銀行、株式会社共立総合研究所	産学連携に関する協定書
2006 (平成 18) 年 2 月 23 日	大垣市、大垣商工会議所、大垣市商店街振興組合連合会	協定書
2006 (平成 18) 年 5 月 24 日	大垣地域産業振興センター	大垣地域産業振興センターと岐阜経済大学との連携に関する協定書*
2008 (平成 20) 年 5 月 25 日	(株)岐阜フットボールクラブ	(株)岐阜フットボールクラブ及び岐阜経済大学の連携に関する協定書
2009 (平成 21) 年 1 月 29 日	(社)大垣市社会福祉協議会	社会福祉法人大垣市社会福祉協議会及び岐阜経済大学の連携協力に関する協定書
2009 (平成 21) 年 4 月 24 日	(財)岐阜県イベント・スポーツ振興事業団	岐阜経済大学と(財)岐阜県イベント・スポーツ振興事業団との協定書
2009 (平成 21) 年 7 月 8 日	岐阜県世界淡水魚園水族館「アクア・トトぎふ」	岐阜県世界淡水魚園水族館と岐阜経済大学の連携に関する協定書
2010 (平成 22) 年 4 月 1 日	大垣商工会議所	大垣商工会議所と岐阜経済大学との連携に関する協定書
2010 (平成 22) 年 5 月 13 日	(財)大垣市体育連盟	岐阜経済大学と(財)大垣市体育連盟との連携に関する協定書
2010 (平成 22) 年 6 月 23 日	大垣商工会議所 (産学等連携懇談会)	連携協定
2011 (平成 23) 年 3 月 23 日	岐阜県商工会連合会	岐阜経済大学と岐阜県商工会連合会との連携に関する協定書
2013 (平成 25) 年 5 月 17 日	東京都知事、(特非)東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会	協定書 (2013 (平成 25) 年 9 月 8 日まで)
2014 (平成 26) 年 6 月 23 日	一般財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会	協定書 (2020 (平成 32) 年 12 月 31 日まで)
2014 (平成 26) 年 9 月 30 日	(株)岐阜新聞社	岐阜経済大学と(株)岐阜新聞社との連携に関する協定書

*大垣地域産業振興センターの大垣商工会議所への吸収により解消

強化指定・準強化指定クラブ

ボート部	
●創部年度/2000年 ●強化指定年度/2001年	
現指導体制	名誉監督：岩崎洋三 部長：野松敏雄(～2017.3.31)、岩坂和幸 副部長：濱崎正人、大音浩一 監督：武良 誠
主な競技実績	2004年 全日本大学選手権大会 男子舵手つきペア 3位(磯部竜佑、天野拓郎、早川慎二) 2005年 全日本大学選手権大会 男子ダブルスカル 準優勝(丸濱由太郎、山本亮太) 2005年 全日本大学選手権大会 男子舵手つきペア 3位(鷗瀬正太、森田良平、磯部竜佑) 2005年 全日本軽量級選手権大会 男子舵手なしクォドルプル 3位(鈴木之広、西川公基、山本亮太、天野拓郎) 2006年 全日本選手権大会 男子ダブルスカル 優勝(山本亮太、嶋田盛一) 2007年 U-23世界ボート選手権大会 男子ダブルスカル出場(山本亮太) 2007年 全日本大学選手権大会 男子舵手つきペア 優勝(仲矢俊之、久司和矢、富田龍平) 2009年 全日本大学選手権大会 男子シングルスカル 準優勝 今井祐樹 2009年 全日本軽量級選手権大会 男子シングルスカル 3位 今井祐樹 2012年 全日本軽量級選手権大会 女子舵手なしクォドルプル 準優勝(信里英梨香、新里杏菜、植松詩織、加納貴子) 2012年 全日本新人選手権大会 女子ダブルスカル 準優勝(新里杏菜、植松詩織) 2013年 全日本大学選手権大会 男子シングルスカル 準優勝(田中敏彦) 2013年 アジア選手権大会 男子シングルスカル出場(田中敏彦) 2015年 全日本選手権大会 女子舵手なしペア 3位(福井美紀、長谷川楓) 2015年 全日本軽量級選手権大会 男子ダブルスカル 準優勝(川村 岳、伊藤淳平)
主な栄賞	2006年～岐阜県競技力向上事業 強化指定団体 2006年 岐阜県民栄誉賞 2007年 岐阜県民栄誉賞

陸上競技部	
●創部年度/1967年,1985年 ●強化指定年度/2001年	
現指導体制	名誉監督：小倉新司 部長：岸 順治 ゼネラルマネージャー：河村道彦 監督：品田直宏 ヘッドコーチ：田中 透 コーチ：久我アレキサンデル、松原瑞貴
主な競技実績	2008年 日本学生陸上競技個人選手権大会 100m 準優勝(小山真輝) 2010年 日本学生個人選手権 800m 3位(久我アレキサンデル) 2014年 日本学生個人選手権 走幅跳 優勝(松原瑞貴) 2015年 日本学生個人選手権 400m 優勝(東 魁輝) 2015年 日本学生個人選手権 走幅跳 優勝(外川天寿) 2016年 日本学生対校選手権 800m 2位(市野泰地)
主な栄賞	2016年 岐阜県競技力向上事業 強化指定団体

硬式野球部	
●創部年度/1967年 ●強化指定年度/2001年	
現指導体制	名誉監督：塚田 勝 部長：谷江幸雄(～2017.3.31)、竹内治彦 監督：小森 茂 コーチ：上田和宏、白井洋介、中ノ瀬幸泰、森井徳次
主な競技実績	1970年 中部地区大学野球連盟 春季大会 準優勝 2012年 岐阜県大学野球リーグ 春季リーグ 優勝 2012年 東海王座決定戦 準優勝 2015年 岐阜県大学野球リーグ 秋季リーグ 優勝

サッカー部	
●創部年度/1967年 ●強化指定年度/[準強化]2004年 [強化]2009年	
現指導体制	部長：ボーク・ポール ゼネラルマネージャー：吉田大介 監督：寺田亮太 コーチ：水谷允俊、知花賢汰郎
主な競技実績	2012年 総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント 出場 2014年 天皇杯全日本サッカー選手権大会 出場(岐阜県代表) 2017年 天皇杯全日本サッカー選手権大会 出場

男子バレーボール部	
●創部年度/1967年 ●強化指定年度/[準強化]2007年 [強化]2011年	
現指導体制	部長：高橋 勉 副部長：大橋雄一 監督：平田勝彦 コーチ：若園幸平
主な競技実績	2010年 東海学生秋季リーグ2部 1部入れ替え戦勝利により1部昇格 2014年 全日本大学バレーボール選手権 出場 2015年 東海学生春季リーグ1部 3位 2016年 東海学生秋季リーグ1部 3位 2016年 全日本大学バレーボール選手権 出場 ※全日本大学バレーボール選手権は2014年よりオープン参加から秋季リーグの結果により代表が決定されるようになる

女子バレーボール部	
●創部年度/2006年 ●強化指定年度/[準強化]2009年	
現指導体制	部長：篠田知之 監督：杉本孝行 コーチ：中村有壮
主な競技実績	2011年 岐阜県リーグ1部秋季リーグ 優勝 2012年 岐阜県大学1部リーグ 春季・秋季 優勝 ※2014年まで連続優勝 2016年 東海学生リーグ2部 1部入れ替え戦勝利により1部昇格

女子ソフトボール部	
●創部年度/2010年 ●強化指定年度/[準強化]2010年	
現指導体制	部長：伊藤嘉人 監督：川崎千明 コーチ：深田里江子
主な競技実績	2012年 東海地区大学ソフトボールリーグ 1部昇格 2014年 全日本大学選手権大会 出場 2016年 全日本大学選手権大会 出場

駅伝部	
●創部年度/2013年 ●強化指定年度/[準強化]2013年	
現指導体制	ゼネラルマネージャー：吉田大介 監督：揖斐祐治 ヘッドコーチ：木庭 啓
主な競技実績	2013年 全日本大学駅伝対校選手権大会 出場(23位) 2014年 全日本大学駅伝対校選手権大会 東海学連選抜出場(安田翔一・小藤友裕) 2015年 全日本大学駅伝対校選手権大会 出場(20位) 2016年 全日本大学駅伝対校選手権大会 出場(18位) 2016年 東海学生駅伝対校選手権大会 優勝 ※優勝により2017年に行われる出雲全日本大学選抜駅伝出場権獲得
主な栄賞	2015年～岐阜県競技力向上事業 強化指定団体

各地から集い、各地で活躍する経大生

2017(平成29)年4月1日現在

都道府県名	在学生		校友会	
	人数	%	人数	%
北海道	9	0.67%	15	0.06%
青森県	1	0.07%	7	0.03%
岩手県	1	0.07%	3	0.01%
宮城県	3	0.22%	7	0.03%
秋田県	1	0.07%	1	0.00%
山形県	3	0.22%	4	0.02%
福島県	0	0.00%	12	0.05%
茨城県	9	0.67%	20	0.08%
栃木県	1	0.07%	30	0.12%
群馬県	1	0.07%	26	0.11%
埼玉県	3	0.22%	37	0.15%
千葉県	3	0.22%	36	0.15%
東京都	5	0.37%	74	0.31%
神奈川県	4	0.30%	57	0.24%
新潟県	7	0.52%	81	0.33%
富山県	47	3.48%	633	2.61%
石川県	19	1.41%	236	0.97%
福井県	42	3.11%	702	2.89%
山梨県	1	0.07%	16	0.07%
長野県	31	2.29%	452	1.86%
岐阜県	456	33.73%	5,162	21.28%
静岡県	47	3.48%	1,480	6.10%
愛知県	175	12.94%	6,414	26.45%
三重県	60	4.44%	1,139	4.70%
滋賀県	107	7.91%	1,976	8.15%
京都府	16	1.18%	272	1.12%
大阪府	31	2.29%	164	0.68%
兵庫県	12	0.89%	299	1.23%
奈良県	2	0.15%	41	0.17%
和歌山県	14	1.04%	105	0.43%
鳥取県	4	0.30%	35	0.14%
島根県	6	0.44%	48	0.20%
岡山県	4	0.30%	181	0.75%
広島県	1	0.07%	110	0.45%
山口県	2	0.15%	42	0.17%
徳島県	0	0.00%	62	0.26%
香川県	14	1.04%	91	0.38%
愛媛県	5	0.37%	72	0.30%
高知県	15	1.11%	42	0.17%
福岡県	2	0.15%	20	0.08%
佐賀県	1	0.07%	5	0.02%
長崎県	5	0.37%	24	0.10%
熊本県	3	0.22%	19	0.08%
大分県	2	0.15%	8	0.03%
宮崎県	5	0.37%	18	0.07%
鹿児島県	7	0.52%	22	0.09%
沖縄県	140	10.36%	133	0.55%
外国	6	0.44%	52	0.21%
その他	19	1.41%	3,769	15.54%
合計	1,352	100.0%	24,254	100.0%

在学生：出身高校等の所在地別人数
校友会(学部卒業生)：県別在住者人数

図書館蔵書数の推移

年度	蔵書数(冊)		
	和書	洋書	総計
1967(昭和42)	9,333	5,021	14,354
1968(昭和43)	15,895	7,440	23,335
1969(昭和44)	17,155	7,665	24,820
1970(昭和45)	18,252	8,280	26,532
1971(昭和46)	20,028	8,450	28,478
1972(昭和47)	23,331	10,873	34,204
1973(昭和48)	25,742	11,041	36,783
1974(昭和49)	29,400	11,600	41,000
1975(昭和50)	33,280	12,130	45,410
1976(昭和51)	37,118	13,166	50,284
1977(昭和52)	41,489	14,331	55,820
1978(昭和53)	46,096	15,668	61,764
1979(昭和54)	51,550	17,051	68,601
1980(昭和55)	58,223	19,465	77,688
1981(昭和56)	63,204	20,660	83,864
1982(昭和57)	68,174	22,880	91,054
1983(昭和58)	73,774	24,405	98,179
1984(昭和59)	79,549	26,349	105,898
1985(昭和60)	85,842	28,743	114,585
1986(昭和61)	89,738	31,370	121,108
1987(昭和62)	97,684	33,410	131,094
1988(昭和63)	105,102	35,431	140,533
1989(平成元)	111,852	37,594	149,446
1990(平成2)	118,352	39,745	158,097
1991(平成3)	124,809	41,424	166,233
1992(平成4)	130,399	42,861	173,260
1993(平成5)	137,137	45,143	182,280
1994(平成6)	145,480	47,580	193,060
1995(平成7)	153,279	50,091	203,370
1996(平成8)	161,812	52,386	214,198
1997(平成9)	171,090	54,432	225,522
1998(平成10)	183,687	56,706	240,393
1999(平成11)	194,265	59,128	253,393
2000(平成12)	204,953	61,206	266,159
2001(平成13)	213,813	63,005	276,818
2002(平成14)	221,224	64,696	285,920
2003(平成15)	225,276	65,918	291,194
2004(平成16)	225,059	65,261	290,320
2005(平成17)	229,272	66,042	295,314
2006(平成18)	233,425	66,672	300,097
2007(平成19)	237,241	66,999	304,240
2008(平成20)	246,887	68,903	315,790
2009(平成21)	247,446	68,524	315,970
2010(平成22)	247,109	68,371	315,480
2011(平成23)	250,510	68,541	319,051
2012(平成24)	253,740	68,765	322,505
2013(平成25)	257,127	68,906	326,033
2014(平成26)	258,282	69,177	327,459
2015(平成27)	259,553	69,340	328,893

編集後記

岐阜経済大学創立50周年にあたり、「50周年記念誌」を刊行することは、大変な喜びであり、「地域に貢献し有為な人材を育成する」という大学の教育の実績を俯瞰するには大変重要な役割を果たすものであります。50年というのは、人について言えば成熟の年であります。『論語』には「五十にして天命を知る」とありますように、天の定めごとを知る時であります。岐阜経済大学の過ぎ来し年月をつぶさに振り返り、大学のさらなる未来の発展を深く考える時期でもあると言ってよいでしょう。

さて、年誌作成にあたり、2015(平成27)年6月に岐阜経済大学50周年記念事業実行委員会が組織され、その一組織として「50年誌編纂委員会」が立ち上がりました。この委員会では編纂の目的、想定する読者、発刊時期等を決め、どのような年誌にするのかの方針を立て、業者の方々との数々の打ち合わせを行い、全体会議を招集し、編纂に努めてまいりました。

年誌作成にはこれまで蓄積された膨大な資料を渉猟し、分類、抽出、そして執筆するという気の遠くなるような作業があります。お忙しいなか通年史、トピック、コラム等で30名以上の方々から貴重な原稿をいただきました。ここに、あらためまして御礼申し上げます。また、幾度も編集のために労を取っていただいた編集局の皆様にも御礼申し上げます。編集・印刷等に関しまして、幾度もサンメッセ株式会社様から多大なご支援を受けました。末筆ながら、ここに心よりの感謝を申し上げます。

50年誌編纂委員会 委員長

古口 博之

50年誌 編纂委員会

委員長	古口 博之		
副委員長	浅野 照章		
委員(教員)	宇佐見 正史	高橋 勉	菅谷 広宣
	森 誠一	杉山 一也	稲垣 慶成
	福地 和夫	山田 善久	加藤 由紀子(～2016.7.21) ^{**}
	安田 晶彦		
委員(事務職員)	渡辺 正典	塚原 康之	安田 天
	釣餌 丈志	坂 覚則	大音 和泉
	宮川 祐志	小森 茂	田中 俊彦
	大音 浩一		
事務局	安村 千春		
執筆協力	高橋 哲朗		

(順不同)

^{**}加藤由紀子委員は、2016(平成28)年7月21日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

創立50周年記念誌



発行日／2017(平成29)年6月
発行／岐阜経済大学
〒503-8550 岐阜県大垣市北方町5-50
TEL 0584-77-3511 FAX 0584-81-7807
編集／50年誌 編纂委員会
制作・印刷／サンメッセ株式会社

※本書の内容を無断で転記・転載することを禁じます。